
来須兄妹の自虐推理

キョウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来須兄妹の自虐推理

【Nコード】

N7149G

【作者名】

キヨウジ

【あらすじ】

春の事件をきっかけにして和泉真悟と恋仲になった藤森保奈美は、新しく加わった部員と共に、夏の合宿という名目で有名避暑地へと向う。そこで、出会う来須兄妹。彼らは、和泉真悟の過去をさぐっているのだという。そして、またもや事件に巻き込まれてしまうのだった。

序章 数珠状に連なる不安因子（前書き）

この作品は『緋色のオルタナティブ』の続編です。本作のみでも成立していると思いますが、前作を読んでいただけると、より深く理解していただけるのではないかと思います。

また、本作には怨讐に狂った殺人犯が登場する為、残酷で暴力的な表現が用いられます。15歳未満の方には推奨できません。

それでも読む、読む覚悟があるという方は序章へと進んで下さい。楽しんでいただけると幸いです。

序章 数珠状に連なる不安因子

人生の中で青春と呼ばれる時期はごく短く、ぼんやり流れに身を任せているとアツという間に過ぎ去ってしまうものだから、ある程度恋愛などに時間を割り振って有効に活用しなければ、年を取った時に酷く後悔するはめになる、と母親が言っていた。

その意見は理解できる。

だけど、ちよつと大袈裟だ。

それに、親の台詞としてはどこか間違っているような気がする。計画的に青春を謳歌する意味はあるのだろうか？ 恋愛感情は学校生活の中で自然に発露して然るべきものであり、無理に盛り上げるものじゃないと思うのだ。

母親は何かにつけて、わたしを特定の男の子とくっつけようとする。火に油を注ぐというか、ガソリンをぶちまけて火のついたマッチを落とすというか、タバコを吸う人に消臭スプレーを噴射するような迷惑行為をしておいて満足そうにしている。そのお陰（？）もあって、生まれて初めて恋人ができた。つまり、わたしも人並みに青春しているわけであり、結果的に母親が言うところの有効な時間活用を行っているのだ。しかし、重要なのは、一般常識に流されることではなく、わたし自身が幸せであり、日々の生活が充実しているかどうかだ。他者の定義した幸福は意味を成さない。母親の望む理想的青春像も無関係だ。まして、将来の自分が過去を振り返ってどう思つかを考慮する必要はないだろう。今現在のわたしが楽めない青春など無意味だと思うのだ……。

などと言っているが、わたしは現在幸せな高校生活を満喫している。毎日が楽しいし、一分一秒が充実感を伴って心を満たしてくれている。内向的性格も徐々に改善され、今まで胸の内に秘めてきた感情を包み隠さず表現できるようになってきた。これもひとえに、恋人と家族と親友のお陰である。みんなに感謝だ。

だけど、いくら今が幸せであっても、全く不満がないわけではない。わたしの彼は、ストイックな性格の中に毒針のごとき鋭い情熱とシルクの肌着で心を包み込むような優しさを同時に宿しているが、残念ながら野獸的な積極性は持ち合わせていないようだ。優しい言葉と柔らかな表情に合わせてさり気ないスキンシップは図ってくるけど、肉体を用いて愛を育む行為にまでは至らない。キスは頻繁にしてくれるし、何気ないボディタッチも悪い気はしない。でも、それ以上の行為を求めてくれないのだ……。女のわたしからアプローチするのは憚られるし、淫乱女と誤解されて彼にドン引きされては敵わない。

どう対処すれば関係をより深められるのだろうか……。

わたしも思春期を迎えた女の子として様々な行為に興味を持っているし、色々と体験したいと思っている。高校生になるまで異性関係に無縁だったので、好奇心は人並み以上かもしれない。今のわたしは淫らがましい妄想で頭の中を膨らませて、心身共にパンク寸前になっている。これはもう欲求不満と言えるだろう。だから、内心に愚痴を零してしまうのだ。

考えずにはられない。

思わずにはられない。

悩むまでには至っていないけど、このまま彼が一線を越えずに距離を保ち続けたとしたら、悩むどころか女として落ち込んでしまいそうである。

わたしの身体に魅力がないの？ わたしの身体に興味がないの？
はしたない思いが心の中で反響する。

恥ずかしすぎる……。

まあいい。

彼について悩んでも仕方がない。それこそ時の流れに身を任せ、状況に身を任せ、彼の衝動に身を任せていれば、いつかは結ばれるだろう。それは間違いない。わたしのことを彼が本当に大切に思ってくれているのは痛いほど伝わってくるし、わたしも彼のことが大

好きなのだ。お互いに一步步でもいいから着実に歩み寄ってけば、その時は必ず来るだろう。

しかし、その全ては、一切の邪魔が入らない、と仮定した場合の展望である。

わたしと彼の間に割り込もうとする強力なライバルが出現した場合は、話の展開が大きく歪んでくるだろう。

どうしよう……。

心の中央で警鐘が鳴っている。危険因子の到来を警告している。幸せな青春を謳歌するぞ、とか言って浮かれている余裕などない。彼の性欲が臨界点を突破する時をのんびり待ってられない。緊急事態だ。未来が混沌としてきた。飲めよ唄えよ酔いどれ天使たち。助けて下さい神様。

敵です！

強敵の出現です！

恐るべきライバルが来襲しました。どう闘えばいいのでしょうか？わたしは回想する……。

それは、今から二ヶ月前、ゴールデンウィークが明けてすぐの出来事だった。

—— 以下回想 ——

朝のホームルームが終わり、わたしが一時限目の準備をしようとし机の中から教科書を取り出していたところ、まるで相撲で言うところのぶつかり稽古のような激しさで何者かが背後から抱きついてきた。

「きゃう！」

思わず悲鳴を上げてしまった。

誰だろう？

首を捻って背後を睨む。

「保奈美、ほなみいー」

敬礼するみたいに額に手を軽く翳し、戯けた調子で笑顔を作る女の子。わたしの幼なじみで大親友の和久井弘美だった。彼女は天然色剥き出しのお転婆娘であり、自他共に認める騒動屋だけど、わたしにとって掛け替えのない存在である。

「数学の宿題、やってきた？」

弘美は肩越しにわたしの手元を覗き込んで訊いてきた。

宿題を見せて欲しいのだろうか？ いや、こういう時の親友は大抵の場合、内心に良からぬ企みを潜ませているのが常である。実際には宿題など重要ではなく、言にくい話題を振るクッションとして用いているだけだろう。だいたい彼女は、宿題を忘れる子ではないし、元々理数系に強いので、数学の宿題を出汁にしている時点で怪しいと言える。

「勿論、やってきたわよ」

どれくらいのレベルの難題を切り出されるのだろうか、と内心で身構えながら、わたしは当然とばかりに頷いた。

「ふーん」

弘美は気のない返事をして、わたしの背後から机の前に移動してきた。そして、机にへばりつくようにしゃがみ込み、正面から見つめてきた。何か重要な話があるようだ。目が明後日の方向へ泳いでいる。その表情から想像するに、わたしにとって非常に都合の悪い話に違いない。

弘美が話を一向に切り出さないの、こっちから引き出すことにした。

「どうしたの、弘美？ 数学の宿題を見せて欲しいわけじゃないんでしょう？ わたしに関係したことで悪い話でもあるの？」

「うーん。実は……そうなんだよねー」

弘美は痛みを堪えるみたいに顔をしかめた。そして、いきなり両手を合わせて拝んだ。

「ごめん、保奈美っ！」

突然の謝罪。

「な、なに？」

「ごめん！」

わざとらしいくらい大袈裟な身振りで何かを詫げる弘美。

話を聞くのが怖くなってきた。

「何を謝っているの？　ちゃんと説明してくれないと何もわからないわよ」

「んーっ、そうだねー……。んじゃあ、ちゃーんと説明するよ。実は……夏休みに保奈美たちと一緒に参加する予定だった《避暑地を楽しむ会》っていうサークル活動、あたし、参加できなくなっちゃったんだよー。ごめんねー。おとーさんが何の前触れもなく家族旅行するって言い出すから、家族全員大騒ぎなの。でも、いつも通り拒否できない感じだから、今回も仕方ないかなーって。だから、今年の合宿、あたしはパスするね。保奈美たちだけで行ってきてよ」
可愛らしい笑顔を作って、大親友は無茶を言った。

弘美の言っているサークル活動とは、毎年夏になると《合宿》と称して美術部の部員が参加しているというイベントのことである。そして、その情報を先輩部員から聞いた彼女が、わたしたちに参加意志の有無を確認しないまま勝手に申し込み手続きをしてしまったのである。迷惑な厚意としか言いようがないが、彼女らしい行動ではある……。

しかし、行ってきたよ、とか言われても困惑するしかない。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ、弘美。突然そんなこと言われても困るわよ。どんなイベントに参加するのかわっているのは、幽霊部員の先輩と弘美だけなんだよ。勧誘した張本人に抜けられたら、わたしたちはどうすればいいのかわからないじゃないの」

わたしは不安感を表情にして文句を言った。

「それなら大丈夫っ！　だーいじょーぶ！」

にやははは、とお気楽に笑って、弘美は手の平で机をぺちぺちと叩いた。

「謎のサークル活動に参加するって言っても、危ないイベントとか

えっちな企みが隠されてるわけじゃないと思うから、全く心配ご無用って感じだよ。近場の学校の生徒が集まって騒ぐだけの面白可笑しいイベントだよ、きつと。去年参加した幽霊先輩が、すつごく楽しかった、って言うてたから間違いないっすよー。綺麗な空気も美味しいらしいし、今年の夏は死ぬほどの猛暑っていう噂だから、涼しい山荘でのんびりのびのび楽しんできなよ」

「……………」

弘美の話を聞いて益々不安になってきた。大丈夫とは到底思えない。その怪しげなサークル活動の具体的な情報が何一つ示されてない上に、彼女の説明がいい加減なので、不安を払拭できないのだ。大親友様は何を根拠にして安全の太鼓判を押しているのやら……。だいたい謎のサークル活動などと言っていること自体おかしいと思う。彼女自身がどんな意図を持って参加しようと思ったのかはわからないけど、活動内容が判然としない怪しげなイベントにわたしたちを引っ張り込まないで欲しい。

「保奈美さんたら、ほんとーに心配性なんだから！」

わたしの陰鬱な表情を見て、弘美は脳天気な調子で肩を小突いてきた。

そのお気楽さをほんの少しだけでもいいから分けて欲しい。

わたしは不安どころか危機感さえ覚え始めている。

そのサークル活動にのこのこと参加しようものなら、たちどころに悲惨な目に遭ってしまいそんな予感が天こ盛りだ。それこそ、先日！の殺人事件のように……。

「あつ、真悟君もこつち来て！　そんで一緒に話を聞いといてよー！」

教室の後ろ側のドアから入ってきた丈高い男子生徒を見て、弘美は大声で呼ばわった。

和泉真悟。

わたしの恋人である。

真悟君はいつもながらの穏やかな笑みを口許に湛え、首を僅かに

傾げた。でも、わたしの机にゆつくりと歩み寄ってくる。彼の席はすぐ隣なので、いちいち呼ばなくても近づいてきてくれるのだ。

彼は荷物を自分の机に降ろすと、椅子を引き寄せて、わたしと肩をくつつけるように並んで座った。

そんな些細な身体の接触が嬉しい。小さな幸せを感じる。だけど、弘美が真悟君を馴れ馴れしく名前で呼ぶことには若干の苛立ちを覚えざるを得ない。それは、恋人であるわたしの特権だろう。言葉にして咎める予定はないけど、わたしの気持ちを察して自主的に改めて欲しかった。

「どうしたのかな、弘美ちゃん」

真悟君も弘美を名前で呼ぶ。でも、その点は大して問題にしていない。なにせ、弘美ちゃん、だから。彼女を《ちゃん》付けで呼んでいる間は、二人の関係を邪推して、浅ましい嫉妬心で身を焦がさなくて済む。

「夏休みの合宿の件でちょっとなー」

「合宿の件で？ 美術部で参加する《避暑地を楽しむ会》の話かな？」

「うん、それぞれ！」

「何かトラブルでも起こったの？」

真悟君は眼鏡の奥に輝く切れ長の目を微妙に細めて訊いた。

彼の目つきは、優しさに欠けるくらい鋭い。わたしでさえ、時折その視線にビクツとしてしまう。でも、今は眼鏡を掛けているので、鋭い眼光は緩和されている。それに、わたしを見る目は常に柔和だ。真悟君にじっと見つめられると、弘美は例のごとく両手を合わせて拝むように頭を下げた。

「ごめん！」

「何についての謝罪かな？」

「あたし、家族と旅行に出かける予定を強制的に組まれちゃって、部の合宿に参加できなくなっちゃったんだよー。おとーさんが無理矢理にーって感じで！ ごめんね？」

「へえ、弘美ちゃんは参加不可能になったのか。それは残念だね。でも、家庭の事情であれば仕方がないよ」

真悟君は彼らしく、あっさりと納得し、不安も不満もない様子で簡単に頷いた。

「あたしがイベント参加の言い出しっぺなのに……ごめんね？」

可愛い子ぶって最後の駄目押しをする弘美。

真悟君は他愛なく微笑んだ。

「ボクに謝る必要などないけど、キミが参加できないとなると様々な不具合が生じてくるね。合宿予定地である長野県までの道案内はともかく、目的地までの移動手段や宿泊場所の環境、現地での活動予定など不明確な点が多々あるんだ。それについての説明はなされるのかな？」

「あ、それならだいじょーぶい！ みんなの引率役は中嶋君にバトンタッチしたから心配ご無用だよ。昨日の夜、彼ん家にイベント参加要項の書いてある紙をファックスしましたあ！」

中嶋君か……。

中嶋剛志は、お茶らけた軽薄男に見えるけど、意外に責任感の強い男の子だから、弘美よりは頼りになりそうだ。でも、合宿を恙なく終える為の最善の方法は、引率役を真悟君に押しつけることである。なぜ彼にバトンタッチしたのやら……。たぶん、彼が美術部の部長だからだろう。

先日の事件後、中嶋君は、それまで所属していたバスケットボール部を強引に退部し、美術部の新顧問に就任したばかりの塚荒桃子に無理矢理頼み込んで美術部に入部した挙げ句、わたしたちの知らぬ間に幽霊部員の先輩全員に働きかけて裏工作をし、自分を新部長に任命させたのだ。ちよつと無茶苦茶な気もするけど、新副部長が真悟君なので、美術部の行く末は明るいと思う。

「あ、でも、弘美、中嶋君は今日、学校をお休みしているみたいだよ」

「サボりだって言ってたよー。今日は風邪をひく予定なんだってさ。

変だよねー。もしかして恋人さんとデートな感じ？ にやははは。

中嶋君も隅に置けないねえ」

弘美は勝手な想像をして、にーっといやらしく笑った。

中嶋君はデートか……。

ちなみに、美術部の合宿に参加する部員は、わたしと真悟君と中嶋君、そして今回参加を断念した弘美を会わせた四人だけである。

他の部員は純粹に夏休みを楽しみたいそうだ。新顧問の塚荒先生も諸事情により不参加。だから、弘美が抜けると参加者は三名。つまり、女性はわたし一人なわけである。それが少々不安な材料になりつつある……。

「んーまあ、中嶋君がアレでも、真悟君はしっかり者だから大丈夫だよな？ 保奈美と中嶋君のこと任せたよー」

弘美は真悟君の肩をポンと叩いて言った。責任の丸投げである。でも、押しつける相手は間違っていない。彼は責任を不法投棄しないし、責任感を苦にしない人間なのだ。

真悟君は穏やかな微笑みで頷いた。

「その点は安心して欲しい。中嶋君はともかくとして、保奈美の身の安全は保障するよ。長野の山荘で何が起こったとしても、無事に連れて戻ると誓おう」

真悟君が恥ずかしげもなく断言した。

そっという台詞を照れずに言える性格なのだ。

「ナイトだねっ！ お姫様を守る勇者だね！ ひゅーひゅー！ 真

悟君てば素敵い！」

弘美がからかってても真悟君は表情をピクツとも変化させず、普段通りの穏やかな微笑み顔を保っていた。

「あのー……真悟君、わたし……」

男の子二人の中に女の子一人だと色々不安だよ、と言おうとして、言葉を飲み込んだ。

変な圧迫感が会話を阻んだのだ。

教室内の空気が一瞬にして凝固した。

不思議な緊張感に縛られる。

真悟君が教室の後ろのドアを見た。

弘美も見た。

教室内に存在する全ての生徒が、そこに視線を集中させた。

例外はいない。

わたしも釣られてドアの方を見た。

そこには、一人の女生徒が立っていた。昨日まで我が詩海高校に在学していなかった生徒だ。なぜ断言できるかと言うと、その女生徒があまりに印象的すぎるからである。これほど強烈なインパクトを持つ女性であれば、学年が違っても知り得ないはずがない。絶対に男子生徒の間で噂になっっているはずなのだ。それほどの頭抜けた容姿。簡単に表現するなら《絶世の美少女》だ。日頃、男子生徒から美少女と持てはやされているわたしの目から見ても、文句の付け所が全くない。現役アイドル顔負けの美少女である。それに、二次元の世界から抜け出てきたような、どこか現実味のない雰囲気醸し出している。生命を宿らせた人間大の美少女フィギュアと言いつけるだろう。特に目を引くのが、真っ白い長髪だ。艶やかに輝いているので、白銀色にも見える。両眉毛も白いので、髪を脱色しているわけではなさそうだ。通常、白髪と言えば、欠点になりこそすれ、長所にはならないはずなのに、彼女の場合は、類い希なる容姿と神秘的雰囲気相俟って、独特の可憐さと優美さを強調する要素になっている。意志の強そうな切れ長の吊り目は、哀愁を漂わせて程良く潤い、冷厳に見えてしまう目元を物悲しげに彩っていた。背はわたしよりも頭半分以上高い。目測で百六十五センチくらいだろうか。手足が長くて胴が引き締まっているので、詩海高校の制服がまるで彼女の為にあつらえられたかのように、冗談みたいに似合っている。認めざるを得ない完成度。完璧なモデル体型。非を打つ部分は、胸のサイズくらいである。

そこかはとない敗北感……。

白髪の美少女は、一年A組の教室内に存在する全ての生徒に注目されても一切怯まず、ただ一点のみを見つめていた。それ以外の人間を認識してはいくらしいの凝視。その対象人物は、間違えようもなく、わたしの恋人である和泉真悟であった。

「真悟君！」

白髪の美少女は、殆ど聞こえないくらいの囁き声で名前を呼んだ。自然な口調で《真悟君》と呼んだ。

そう呼び慣れているのだとわかった。

「つばさ……」

真悟君が呟いた。

殆ど表情を変化させていない。いや、いつもの優しい微笑みがないかった。

完全な無表情。

彼は、ずっと椅子から腰を上げ、彼女の顔を真っ直ぐに見た。

「真悟君！」

今度は明確な叫び声となった。それと同時に、彼女は真悟君に駆け寄り、身体をぶつける勢いで抱きついた。

受け止めた側はびくともしない。

「困ったものだ……」

真悟君はほんの微かに唇を綻ばせ、苦笑気味に呟いた。

白髪の美少女はびくつと身体を震わせた。美貌を上げて、至近距離から真悟君を見つめる。小刻みに肩が震えているのは、泣きそうになっているのを必死に押し留めているからだろ。しかし、我慢しきれなかったようだ。小さな頭を彼の肩に擦りつけるようにしながら、ひっそりと嗚咽し始める。

絵になる光景だ。

美男美女の取り合わせ。

まるで映画のワンシーンのような。

悔しいけど、お似合いの恋人同士という感じだった。

教室にいた生徒は、誰も二人の熱い抱擁を邪魔しようとはせず、

でも目を逸らせず、息を止められてしまったかのように静かに見守っている。あの面白がり屋の弘美でさえ、身体を呪縛され、身動き一つできず、からかいの言葉も発しなかった。

真悟君は、白髪の美少女を宥めるように背中を撫でている。優しい感じに、背中からお尻にかけて手を滑らせている。

それを見て、わたしの頭の中が力チンと音を立てた。嫉妬しているのだ。相手の美少女に怒りすら覚えた。

鳴き声が止んだ。

「ボクを追ってきたのかな？」

真悟君が口を開いた。

白髪の美少女は抱きついたまま首肯した。

「ボクの引越先は、秘密にされていたはずだ。完全に行方をくらます為に随分と手間を掛けたつもりだったけど……。特に、おまえには内緒にしていたのだが……。やはり名前も変えておくべきだったかな。おまえが追いかけてくることは予想できていたからね」

真悟君は周囲の耳を憚らず、普通の声で言った。

白髪の美少女が涙で潤んだ瞳を向ける。許しを乞うような、憐れみを誘っているような、誰しもが心揺さぶられる表情だった。

「恭子さんに無理を言って、転校先の学校と自宅の住所を教えるもらったの」

その声は透明感があり、溪谷の清水みたいに澄み切っていて落ち着きがあった。ハイトーンではないが、耳障りが良い。

「恭子さんか……」

真悟君は苦い笑みを口許に刻んだ。

「困ったお人だ。堅く口止めしておいたのに……。あの人の不用意な優しさには、皮肉を込めた感謝と心からの苦情を申し立てなければならぬな」

「真悟君……」

「それに、おまえは本当のお馬鹿さんだよ。ボクの世界で生活する

ことが何を意味しているのか、それを理解していないわけではないだろう？ それでもボクを追いかけくるとは……度し難い愚か者と罵らなければならないね」

「罵られてもいいもの」

「……以前のボクであれば、おまえを許さなかったよ、つばさ。大きなペナルティを与えているところだ」

「ごめんなさい」

「……まあ、来てしまったのだから仕方がない」

穏やかに言い、真悟君は薄く微笑んだ。そして、抱きついている美少女を押し離した。

白髪の美少女は、もうしばらく抱き締めていて欲しい様子だったが、不満を表情にしたりせず、黙ったまま立っている。

なんだか……この人、命令を待つ従順な飼犬みたいだ。

そんなことを思っていると突然、真悟君がわたしの肩に手を掛けた。

「つばさ、この女の子がボクの恋人だ」

唐突に紹介された。

白髪の美少女は、伏し目がちだった眼を僅かに見開き、わたしを真っ直ぐに見据えた。その視線には殆ど感情が含まれていなかった。友好的ではないにしても、敵意も感じられなかった。

「二年A組に転校してきた鷹峰つばさです」

白髪の美少女は、礼儀正しく名乗って一礼した。素晴らしく綺麗な立ち振る舞いだった。

慌ててわたしも名乗る。

「藤森保奈美です」

鷹峰さんはうつすらと微笑んだ。

「宜しくね、藤森さん」

「こちらこそ、宜しく願います」

真悟君の過去を知る二人目の登場人物。

わたしよりも長い時間を彼と共に過ごした女の子。

でも、不思議と嫉妬を覚えなかった。きっと、彼がわたしのことを、何の躊躇いもなく《恋人》と紹介してくれたからだろう。

「さあ、つばさ、自分の教室に戻りなさい。再会の抱擁は放課後でもできる。なにも、短い休み時間を消費する意味はない。それに、もうすぐ一時限目のチャイムが鳴る」

「はい」

親に諭された幼児のように、鷹峰さんはこくつと頷いた。

「素直な良い子だ」

真悟君は子供を褒めるように鷹峰さんの頭を撫でた。

彼女は物凄く嬉しそうに微笑んだ。幼女のごとき純粋な満面の笑みだった。

わたしの胸の内がずきんと痛んだ。

真悟君に背中を押されると、鷹峰さんは、昼休みのチャイムを聞いた時の弘美みたいにスカートを翻して、教室から駆け出していった。

これが、わたしと鷹峰つばさの出会い。

—— 回想終了 ——

それから二ヶ月が経ち、夏休み期間に突入したが、わたしと鷹峰さんの間に軋轢は生じていない。真悟君は素っ気ないほど彼女を相手にしなかったし、彼女も恋人扱いされないことに不満を持っていないようだ。

でも、わたしは不安になる。強力なライバルと認識してしまったがゆえに、神経質なほど会話が気になってしまう。ちょっとした二人の会話が気になってしまうのだ。

わたしって心が狭い？ 自分の恋人が元彼女と親しげにお話している様子を温かく見守れないのは、度量がない女である証拠なのだろうか？

しかし、夏休み中は鷹峰つばさのことで悩む必要はなさそうであ

る。なにせ、わたしと真悟君はずっと一緒に過ごす計画なのだから。
手始めの合宿に、彼女は参加しないし……。

ちよつとだけ「ざまーみる」とか思っている自分を嫌悪しつつ、
わたしは合宿の準備に取り掛かるのであった。

第一章 避暑地を楽しむ会 【1・藤森保奈美】

七月二十一日、月曜日。

わたしたちは電車とバスを乗り継いで、長野県の中でも避暑地として全国的に名高い某高原の奥地へとやって来た。

美術部の参加メンバーは三名。わたしと真悟君、そして中嶋君……という面子である。弘美は予定通りに家族旅行なので不参加だった。

案内用紙によると、バス停から目的地までの距離が徒歩で約三十分かかるそうだ。しかも、舗装された道路ではない。心臓破りの坂も真つ青の完全なる山歩きである。人並みの体力しか持っていないわたしにはちよつと辛い道程だった。

歩くだけなら問題ないのだけど、美術部の合宿を兼ねた五泊六日のイベント参加なので、着替えや日用品などの荷物がかさばり、大きなカバンを背負つての山歩きになってしまった為、十分ほど歩いただけで息を切らせてしまう状態だ。もし二人の男の子が荷物を少しずつ肩代わりしてくれなければ、道半ばでへたり込んでいただろう。

「しかし、天気良いよなあ！ 快晴にも程があるぞ。カンカン照りじゃねえかよ。もうちつと陽射しを和らげて欲しいぜ。気象庁は太陽のスイッチ切つとけよな、全く！」

中嶋君が大きな声で文句を吐きながら坂道を登っていく。拾った木の枝を杖代わりに使用しているが、体重をかけたらポキッと折れてしまいそんな痩せ枝なので無意味だ。

「東京都内よりは涼しいと思うよ」

真悟君は強烈な陽射しを苦にする様子もなく、涼しげな顔で答えた。わたしの荷物を半分以上持ちながらの山登りなのに、全く汗を掻いていない。服の中に冷房装置を組み込んでいるのではないかと疑いたくなるポーカージェイスだ。

「東京は地獄日和かもしれんけど、クーラーがあるから快適に過ごせるだろ。室内温度をガンガンに下げて北極くらい寒くしておいて、おでんを頬張りながらよく冷えたビールを流し込むってのが風流な夏休みの過ごし方だろーがよ。こんなクソ暑い山奥で登山するんなら馬鹿のすることだぞ！」

わたしたちは三人とも馬鹿つてわけだ。

確かにそう思わないでもない。真悟君と一緒になければ、わたしも愚痴を零していただろう。

「夜になれば気温も下がるよ。それに、台風が接近しているという情報もある」

中嶋君の下らない戯言にも、真悟君は律儀に返答をする。彼が転校してきてから約二ヶ月半、わたしの気付かぬ間に、二人はかなり仲良くなっていた。親友に近い関係を築いているのかもしれない。

「じゃあ、今すぐ夜にしろよ。消灯時間だ。鬱陶しい光を放つでかいのを消してくれ」

「日没までは六時間以上待たなければならぬね」

「んああ！ やってらんねー」

中嶋君は髪の毛を掻きむしって喚いた。

真悟君は可笑しそうに鼻を鳴らした。

「きつと、山荘には冷暖房が完備されていると思うよ」

「んー、そうか。そんじゃあ、少し歩くペースを上げるか？」

「急ぐと余計に汗を掻くよ」

「もう服ん中はグツチヨグチヨだぜ！」

中嶋君は服の胸元を摘んで引っ張った。

わたしも服の中は汗まみれだ。不快指数上昇中。山荘に着いたら、即座にシャワーを浴びて汗を流し、新しい下着に着替えたいと思っている。いや、更衣室さえあれば、この場で着替えたいくらいだった。

「山荘まで、あとどれくらいかな？」

ハンドタオルで額の汗を拭いながら、どちらにともなく訊いてみ

た。

「俺たち、もう三十分以上歩いてるだろ。とっくに到着してなきゃおかしい時間だと思うぜ。もしかして道に迷ったんじゃないか？」

中嶋君がダラダラ歩きながら応じた。

その意見には共感できる。

わたしも山道の不当な距離に文句を言いたかったけど、「声を出すと余計に疲労するよ」と真悟君に忠告されていたし、弱音を吐く姿や愚痴を零す姿を見せるわけにはいかなかったので、ぐっと堪えて歩き続ける。でも、中嶋君の意見を放ったらかしにしては可哀想なので、「もうすぐ着くんじゃないかな」と、着いて欲しいという自分の願望を込めて答えた。

真悟君は歩みを止めて、山荘までの道を記してある地図をポケットから取り出し、一瞬だけ確認した。

「地図にはバス停から山荘まで徒歩で三十分と記載されているけれど、およそ登山経験者を対象とした目安だよ。だから、一般的女子高生の運動能力しか持っていない保奈美のペースに合わせているボクたちの場合は、その二倍から三倍の時間を要すると覚悟するべきだね」

二倍から三倍……。一時間以上かかるってことですか？　もしかして、わたしって二人の足手まといになっている？　ううん、完全に足を引っ張っている。二人に荷物を持ってもらっている時点で足枷になっているし、今も真悟君に手を引いてもらっているし、元氣付けられているし、氣遣われているし、何より手が汗でベタベタだ。彼は酷く不快な思いをしているに違いない。

「ごめんね、真悟君、中嶋君。わたしって体力ないから……」
自虐口調で詫びた。

「気にすんなよ、藤森。女がのろまなのは仕方がねえこつた。そこに文句を吐けるほど俺は馬鹿じゃねえ。悪いのは馬鹿みたく燦々と輝いてる太陽の糞っ垂れさ」

中嶋君は空を見上げて吐き捨てた。

彼は最近、わたしを呼び捨てにする。以前は《さん》を付けてくれていたのに、今は苗字を呼び捨てなのだ。でも、それが嫌なわけではない。ちょっとした違和感があるだけ。他の子のことも彼は分け隔てなく呼び捨てにしているので、それについて不満はない。もしも《保奈美》と名前を呼び捨てられたら、たちどころに怒っただろうけど……。

「のろま、という表現は適切ではないね。速やかなる訂正を求めたい」

地図をポケットにしまっていた真悟君が、穏やかな口調で要求した。

中嶋君は僅かに怯んだ。

「お、おう、悪かった。藤森はのろまじゃなくて、お淑やかなんだよな？」

「お淑やか……。保奈美が？」

真悟君がわたしの顔を見て意味深な笑みを浮かべた。

ビンタした件をいまだに根に持っているのだろうか。あれは二ヶ月も前の出来事なのに……。それとも先日、鷹峰つばさの件で口論したことを指しての表情だろうか。あれは、真悟君が鷹峰さんと学校帰りにイチヤイチヤしてたから……。ついつい怒鳴ってしまったのだ。わたしの一方的な誤解だったけど……。

まあ何にしても、からかわれているのは確かなので、頬を膨らせて無言の抗議。

「ん？ 藤森がお淑やかっというクラスメイト全員の共通認識に誤りでもあるのか？」

「キミたちの人間鑑定眼は曇っている」

「それって、藤森がお転婆娘だっって言ってるのと同じだぞ。そんなわけがあるのか？」

「良質の色眼鏡を掛けるべきだね」

色眼鏡を掛けちゃ駄目でしょう！

わたしは声なき突っ込みを入れ、手を繋いでいる方の真悟君の手

の甲を抓った。

「わたしはお淑やかです！ 少なくとも弘美よりは、だけど……」
自分で言ってちゃ世話ない。叫ぶのも逆効果である。だけど、真悟君の言葉は説得力があるので、はつきりと否定しておかなければ、お転婆娘のレッテルを貼られてしまいかねない。夏休み明けに、弘美を超えるお転婆キャラが定着しては困るのだ。

「和久井か……」

わたしが口を開けてがーっと叫ぶ様を見て、中嶋君は面食らったように目を見開いた。でも、わたしに対しての感想は述べず、ひょろ長い杖を放り捨てて皮肉っぽく笑った。

「和久井が一緒だったら、何度か休憩を挟まなきゃなんなかっただろうからな。それに比べりゃ数段マシさ」

中嶋君はそう言って、さっさと坂登を再開した。

お喋りしている間に体力を回復したようだ。

わたしも少し休めたので、残りの距離を歩ききる程度には元気になれた気がした。

数分ほど山道を進むと、若干、道がなだらかになってきた。

大人が二人並んで歩けないくらい細かった道が大きく開け、木々に覆い隠されていた視界が広がる。

「おおっ！ もうすぐ目的の山荘に着くみたいだぜ！」

疲れが吹き飛びました、という顔で中嶋君が歓声を上げた。

落石注意の標識と一緒に、《ホテル美岳、スグソコ》と書かれた看板が立てられていたのだ。

スグソコが何を基準にしての時間的距離なのかは不明だ。たぶん、徒歩で数分かからないだろう、とホテルの経営者が独自の基準で判断したのだろう。いや、わたしたちをぬか喜びさせる姑息なトラップかもしれない。でも、つつい釣り釣られて歓声を上げてしまった。「これで涼しい建物の中に入れるんだね」

安堵のあまり、わたしらしくもなく、つい甘ったれた声音を用い

てしまった。

「疲れたかい？」

真悟君が涼やかな顔で訊いていた。その表情や仕種からは、一切の疲労を感じさせない。いつでもどこでも爽やかさを失わない格好良すぎる男の子である。

彼が荷物から取り出してくれたタオルを受け取って顔の汗を拭い、現在のわたしが作り得る最上の笑みを浮かべてみせた。

「ちょっとだけ疲れちゃった……」

「日頃運動をしていない女の子には辛い道程だったからね。肉体が悲鳴を上げて当然だよ。途中で弱音を吐かなかったキミの我慢強さを褒めてあげたいな」

「ありがとう」

真悟君に褒められて、純粹な喜びを得た。疲れも半減したような気がする。

「都会っ子には厳しい環境だよな」

野生児のような顔をしている中嶋君が舌を出した。

彼の場合は口だけであり、実際にはさしたる疲労も感じていないのだろう。なにせ、現在は美術部に所属しているが、元々はバスケットボール部のレギュラーだったのだから。

「都市圏に住む人間が軟弱者とは限らないよ。まして……」

不意に、真悟君が背後を振り返った。そして呟く。

「ボクたち以外のイベント参加者が接近してくるようだ」

「ん？ 参加者だって？」

中嶋君が後ろを向いて目を細める。

「本当だ。誰かが登ってきやがる」

後方から人が近づいてきているらしい。

わたしも背後を振り返り、目を凝らした。

まだギリギリ目視できるくらいの遠距離にいるけど、間違いなく人間が山道を登ってきている。かなり歩くテンポが速いようだ。

「おまえ、よく気付いたな。あんな遠くにいる奴のことなんか普通

気付かねえだろ」

中嶋君が呆れ口調で言った。

わたしも同意見だ。

「ボクは、人間の気配に敏感なんだよ」

「野生動物みたいにか？」

真悟君はそれに答えず、くすつと小さな笑いを漏らし、眼鏡をずり上げた。

「後ろの奴、待っててやろうぜ」

中嶋君が提案した。

真悟君は、キミに判断を委ねるよ、という表情でわたしを見た。

「そうね。気付いたんだから待っていてあげましようよ。無視するのは酷いと思うな」

「おっしや！ んじゃあ、小休止だな」

中嶋君はそう言つと、地面にどかつとお尻を落とし、だらしない感じに胡座を掻いた。

わたしも足の疲れを多少なりとも緩和するべく、それに倣つてしやがんで待つことにした。勿論、お尻を地面につけるような真似はしない。

真悟君だけは立つたままである。

「俺、藤森を上回る絶世の美少女であることを期待しちゃってるぜ」
男の子らしい願望の込められた中嶋君の声を聞いて、ちよつとムツとしてしまったかもしれない。

でも、彼の不埒な願望は真悟君によつて一瞬で打ち砕かれた。

「およそ男性だね。外見から判断するに、ボクたちと同年代かな」

「こらこら、そういう情報はもっと相手が近づいてきてから教えるよな……。そんな素っ気なく言われちゃ、夢も希望もあつたもんじやねえぞ」

嘆く中嶋剛志。

ちよつと可哀想だった。

下から登ってくる男の子がスピードを上げた。待っているわたし

たちの存在に気付いたのだろう。

「なんだよ、あいつ……急に早歩きしやがって。もつとゆっくり登ってこれば、こっちもゆっくり休んでられるのによ」

中嶋君が不満そうに愚痴った。

その男の子の容貌を視認できるまでに要した時間は、たったの二分だった。そして、最後の数十メートルは手を振りながら駆け寄ってきた。相当の強者だ。

「おーい！」

可愛らしい声。

女の子みtainな顔立ち。

童顔で茶髪、背の低い男の子だった。

きつとモテるだろう。

彼は額に汗を貼り付けているけど、あれだけのハイペースで坂道を登ってきたのに全く息が上がっていなかった。驚愕すべきタフぶりだ。陸上部か登山部に所属しているのかもしれない。

中嶋君が拍手をして迎えた。

「おーう、いい登りっぷりだな。ワンダーフォーゲル部のエースか？ でも、坂道は駆け登っちゃ駄目だぜ。そう学校で習っただろ」

それは勿論、中嶋君流の冗談である。

でも、相手はきょんととして首を傾げた。

「えつと……うちの学校にそんな校則はありませんよ」

しごく堅苦しい返事だった。冗談として受け取らなかったようだ。それだけ真面目な性格なのだろう。

中嶋君は膝を叩いて大笑い。

「冗談だ。マジに取るなって！」

「そ、そつですよね……。えーつと、僕は宮古川高校一年の本山純太です」

「俺は中嶋剛志。こっちの色男が和泉真悟。そんで、紅一点の美人さんが藤森保奈美だ。俺たち三人とも詩海高校の一年生だから、敬語は必要ないぜ。つてことで宜しくな」

中嶋君が三人分を纏めて名乗ってしまったので、わたしと真悟君は「よろしく」という挨拶と笑顔だけで済んでしまった。

「そんじゃ、ガンガンに冷房が利いてるであろう山荘目指して出発しようじゃねえか」

中嶋君の号令と共に、わたしたちは山歩き再開した。

いよいよ天気には磨きがかかり、頭上には雲一つ見当たらない全面の青空。乙女の柔肌に牙を剥く凶悪な陽射し。避暑地なのに茹だるような暑さ。平坦な道でなければ、わたしは五分も持たずにギブアップしていただろう。のろまなわたしの所為で相変わらずのドン亀ペースなので、《スグソコ》であるはずの山荘になかなか到着しない。

「うちの学校は校則が厳しいんだよ。特に、男女交際についての禁止事項が事細かに記されてる。県外に出る際には学校の許可が必要とか、裸の異性に二十秒以上身体を接触させてはいけないとか」

「二十秒？ 何だそりゃ。冗談じゃなくてマジ話か？ それ、誰が決めたんだ？ 脳天パーな校長か？ それって、女を裸にひん剥くのは構わないってことだよな？ それに、二十秒以内なら何をしてモオツケーってことだろ？ いいんか、それで？ それとも、他校向けのウケ狙いの校則か？ 文末に《なーんちゃって》とか書かれてねえか？ 何にしても、宮古川ってところはアホな学校みたいだな。俺たちの学校には、そんな馬鹿げた校則なんてねえぞ」

「詩海高校は何でもあり？」

「まあ、何でもあるだな。いわゆる自己責任ってやつだ。でも、問題を起こしたら即座に自主退学だぜ」

中嶋君が苦い口調を用いて言った。

「身近な人間が処分されたの？」

「いや、俺たちの学校は結構有名な進学校だから、入学早々に無茶やらかしてクビになる馬鹿はいねえよ。でも、何人か大馬鹿な奴がいたな……」

「過去形？」

「……………」

「どうしたの？」

「いや……それよりも、宮古川高校ってどこにあるんだ？ 東京都内じゃねえだろ？」

「うん。千葉の田舎にある学校だよ」

「おまえ、千葉から参加してんのか？」

「えっと……一人じゃないよ。部の先輩が一人参加する予定だよ。僕はその先輩に誘われて今回初めて参加したんだ」

「へえ。それで、その先輩はどうした？ 一緒じゃねえのかよ？」

「うん、諸事情があつてね」

「ふーん、諸事情か……。その辺は深く詮索しねえよ。それで、おまえ、部活は何をやってるんだ？」

「陸上部だよ。中嶋君は？」

「俺はバスケツ……じゃねえや、俺たち三人とも美術部だ」

「美術部？ へえ、意外だなあ……」

中嶋君と本山君は会話をするだけの余裕があるようだ。お互いの学校の校則を検証し合い、それぞれが所属する部の先輩について批判し合っている。

しかし、そんな二人の会話はわたしの耳には殆ど入らなかった。聞こえてくるのは真悟君の激励だけだ。それを糧にして、左右の足を交互に動かして前進する。一心不乱に歩く。ただそれだけの口ボツトと化する。

「しっかし……暑いよなあ」

「これってやつぱり、近頃耳にする地球温暖化現象の影響かな？」

「温暖化現象？ なんだそりゃ？ 俺は聞いたことねえぞ。でも、もし冷房完備の山荘じゃなかったら、温暖化じゃなくて暴徒化しまうかもしれないぞ」

「そうだね」

頷き合う二人。

わたしも心の中で賛成を表明。でも、無言で額の汗を拭い、ひたすらに歩行する。

数分後、中嶋君が突然奇声を発して、前方を指差した。

「お、あれが《ホテル美岳》とかいう山荘なんじゃねえの？」

わたしは指し示された位置に視線を移した。

確かに山荘らしき建物が見える。

瞬間、わたしの手足を縛っていた無形の鎖が消失し、身体が綿毛のように軽くなった。服の下を濡らす汗の気持ち悪さが気にならなくなり、暑さすら忘却した。思わず駆け出しそうになる。

「保奈美、山荘はどこにも逃げないから、走っていく必要はないよ。最後までペースを乱さない方がいい」

「うん……」

あくまでも冷静な真悟君。心持ち強く手を握って、ベテラン騎手のように、逸るわたしを宥める。一秒でも早く涼しい山荘内に入ってくつろぎたい、と思わないのだろうか？ きつと思わないのだから。彼は、拙速さとは無縁の人間なのだから。

中嶋君と本山君は嬉々として山荘を目指し、猛ダッシュで先に行ってしまった。

わたしは逸る心を抑え、ゆっくりとした歩調で進んでいく。

しかし、建物は視界に入っているのに、一向に近づいてこない。

真悟君の忠告は正しかった。山荘を発見してから到着するまで、十五分近くかかったのだ。もし中嶋君たちと一緒に走っていったら、途中でへばっていたと思う。

それでも、ようやく目的地に到着した。

「はあ……」

安堵の溜め息。

「よく頑張ったね、保奈美」

「うん。でも……もう限界ギリギリだよ」

「筋肉痛になるだろうから、今日はお風呂で念入りにマッサージす

るといいよ」

「うん、そうする」

「それとも、ボクがマッサージしようか？」

「……………」

「おや、顔を紅潮させているね。マッサージと聞いて何を想像したのかな？」

からかいの声。

血圧が急上昇した所為で軽い立ち眩みを覚えた。

「さあ、山荘に入ろう」

「うん」

先に着いていた二人が山荘の玄関口で待っていたので、わたしは笑顔で手を振った。

中嶋君は大きなジェスチャーで手招きをし、「おせーぞー」と叫んだ。

本山君は手を振り返してくれた。

どうやら二人とも山荘には入らず、ずっと外で待っていてくれたらしい。

それでも、わたしたちはマイペースを保った。

「思いの外、綺麗な山荘だね」

「あ、うん」

疲労の所為で建物の外観を気にする余裕はなかった。

でも、言われて見上げてみた。

新築ではないけど、確かに綺麗だ。真悟君が感想を述べた通り、鬱蒼とした木々の合間に建てられた山荘は予想外にも瀟洒な外観を誇っている。見ようによつては、いかがわしいホテルに映らなくもないが……それについては指摘しないでおく。

山荘の入り口前で二人と合流した。

時計を見ると、正午の十分前だ。

「ごめんね、二人とも。待たせちゃった？」

「いや。でも、とっとと中に入ろうぜ」

「うん」

中嶋君がドアノブに手を掛けようと手を伸ばす。すると、ドアが内側から開いた。

「おう、外が騒がしいと思って出てきてみりゃ、案の定、お客さんか。おめーらもサークルイベントの参加者だろ？ 遅かったじゃないか。今日来る奴らの中じゃ、おめーらが一番ぶりっケツだぜ」

体格の良いトゲ頭の男子が姿を現し、乱暴な口調で言っつて、いやらしい笑みを見せた。

見た目からして年上だろう。ちょっと印象の悪い人である。話し掛けられたら嫌だな、と思った。

トゲ頭の男に應對したのは、どんな相手にも物怖じしない性格の中嶋君だ。彼は軽薄な笑みを浮かべて、気さくな感じに手を翳した。「いやあ、すまんね。途中、休憩を何度か挟んでの行軍だったからさ。まあ、仕方ねえんだよ。でも、決められた集合時間とかはなかったから、日暮れまでに着けば良かったんじゃないのか？」

「そりゃそうだ」

がはは、と大口を開けて笑うトゲ頭。そして、わたしたちの顔を認めるように視線を動かした。でも、わたしに向けられたところで、ぴたっと固定された。嫌な感じに目が輝く。美味しそうな蛙を見つけた蛇みたいな、物凄く気持ちの悪い眼光だった。

「おめーら、詩海高校の生徒だろ？ 到着すんのを今や遅しと待ってたぜ。俺は梅本春樹。柳川高校の三年生だ」

梅本春樹は筋肉隆々のダルマみたいな男だ。長身で肩幅が広いのに手足が短いので、身体全体のバランスが悪く、格好も悪い。もし柔道部の部員であれば、超高校級の重量級選手として活躍できそうな体格である。

相手が年上と知り、中嶋君は碎け調子を改めた。

「三年生ですか。俺たちは――」

今回も中嶋君が四人を代表して名乗ってくれたので、わたしたちは頭を下げるだけで済んだ。

「一年生の団体さんか」

梅本は品定めするような視線で、わたしの頭から足下までを何度も舐め回してきた。

「いい女だ」

思わずという感じで零れ出た評価。

不快感のあまり肌が粟立った。咄嗟に真悟君が体で視界を遮ってくれなければ、踵を返して逃げ出していたかもしれない。

梅本は苦笑した。

「おめーら、できてんのか？」

「できてる、という表現は品性に欠けると思います。しかし、間違いではありませんね。ゆえに、彼女には言い寄らないで下さい」

真悟君が微かな迫力を込めて要求した。

「けっ！ 俺は他人の女にちよっかいをかけるほど勤勉じゃねーんだよ。いい女は他にも何人か参加してるしな。ふん。じゃあ、中に入って部屋の鍵を貰えよ。それで、適当にくつろいでろ。四時になったら集合を掛けるからな」

梅本は若干気分を害したような口調で言い捨て、山荘に入っていた。

【2・藤森保奈美】

下駄箱で靴を脱ぎ、管理人室へ向かった。

わたしたちが宿泊する《ホテル美岳》の従業員は、西脇園子という名前の女性だった。年齢は三十代後半くらい。ぽっちゃり体型で温厚そうな顔立ち。某有名ハンバーガーチェーン店の店員さんみたいな笑顔は、お客様を安心させる要素しかない。

でも、ちよっとおっちょこちょいな人だった。

部屋の鍵を二つ手渡し際に、丁度部屋割りについて話し合ってたわたしと中嶋君を見て恋人同士と勘違いし、「お似合いよ」と言っただけを叩いてきたのだ。真悟君が即座に訂正しなければ、誤解されたままイベントに参加しなければならなかったかもしれない。

「お客様のお部屋は全て二階だから、玄関前の螺旋階段を上がってね。非常階段は修復中だから絶対に使用しないこと。一応、ドアに鍵が掛けられてるけど、簡単に開いちゃうみたいだから、気を付けるように。間違って飛び出すと、地面まで真っ逆さまだから。いいわね？」

そんな注意を受けた。

本山君は物凄くトイレに行きたかったそうで、先に鍵を受け取ると、一目散に螺旋階段を駆け上がった。いった。

わたしたちは急がずに二階へと向かう。

「はあ、吃驚……。危うく中嶋君の恋人にされちゃうところだったよ……。すぐに真悟君が勘違いを正してくれたけど、あのまま誤解されてたら中嶋君と同じ部屋に押し込まれていたかもしれないね」
ゆつくりと螺旋階段を上がりながら、ついつい不満を漏らしてしまった。

「なんだよ、そんなちよっとした誤解が嫌なのか？ 傷ついちゃうなー、俺」

顔をしかめて抗議する中嶋君。

「ごめんなさい。でも、誤解されたままだと、ちょっとね……」
わたしは真悟君の顔を見た。

彼は建物の内部を見渡していたが、わたしの視線に気付き、こつちを見て微笑んだ。その慈愛に満ちた笑みは、申し訳ないけど、中嶋君のあらゆる要素に勝っている。比較は不可能。愛情の天秤にかけるまでもなく、わたしの心が傾く側は明確だ。

「そりゃ、和泉の手前、誤解されっぱなしはマズイだろうけどな。ちよつと心外だぞ」

中嶋君はぶつぶつ文句を呟きつつも、螺旋階段を上がっていった。

各宿泊部屋は、廊下を挟んで、四部屋ずつ並んでいた。

そして、北側の突き当たりにはトイレが、南側の突き当たりには非常階段のドアが見える。

もし寝惚けていたら、トイレと間違えて非常階段のドアを開けてしまいそうだ。

「さーて、部屋割りはどうする？」

中嶋君が二つの鍵を顔の前でぶらぶらさせながら訊いた。

当初の予定では、わたしと弘美、真悟君と中嶋君、という部屋割りだったのだ。でも、弘美が不参加である以上、わたしは一人で泊まるしかない。それがちよつと不安だったりする。

その想いが伝わったのか、真悟君はわたしの背中に手を添え、「中嶋君は一人で泊まって欲しい」と言った。

「俺との相部屋は嫌なのか？」

「いいや、キミに問題があるわけではないよ。ただ、保奈美を一人にはさせられない」

「そうか。なら、こつちの鍵を受け取れ！」

中嶋君は、その提案にケチをつけず、鍵の片方を真悟君に向けて放り投げた。

「ボクたちは《107号室》だね」

「俺は《106号室》だ」

え？ わたしと真悟君、同じ部屋なの？ それって……もう決定しちゃったこと？ わたしは気持ちの整理がまだ……。

思わず彼の顔を見上げた。

いつも通りの優しい笑みがあつた。

戸惑っている間に話が纏まり、中嶋君は廊下を行き来して自分の部屋を探し始めた。

「お、ここか」

中嶋君は、トイレから二番目に位置する西側の部屋だった。

「そんじゃ、恋人同士で仲良くやれよ」

彼は、そう言い残して部屋の中に入って行ってしまった。

「それでは、ボクたちも部屋に入ろう」

「う、うん」

真悟君と同じ部屋で過ごすことについては、基本的に何の問題もない。既に、何度か彼の自宅マンションにお泊まりした経験がある。その際に、肉体的接触はなかった。きっと今回もないのだろう。

わたしたちは《107号室》の前に移動した。

部屋の位置は、中嶋君の部屋の左隣である。

鍵を解除してドアを押し開けると、畳の匂いと共に生温い空気がむわっと押し寄せてきた。ホテルの廊下は快適な温度に調節されていたのに、室内は蒸し風呂状態だ。一度止まった汗が一気に噴き出してくる。身体の疲れも思い出してしまった。

「うわあ……」

一瞬、入室を躊躇。

「さあ、入って」

真悟君に腰を押され、わたしは室内に足を踏み入れた。

部屋は十畳ほどの和室だった。

ベッドはなく、中央に卓袱台が設置され、急須と湯飲みがお茶菓子と共に用意されている。

「トイレはないけど、シャワー室はあるね」

真悟君は室内を見渡して言い、冷房のリモコンを手にとってスイッチを入れた。

トイレは共同で、お風呂は個別？ 変なホテルである。

「先にシャワーを浴びてきなよ。出てくる頃には冷房が効いているだろうからね」

「うん、そうする。お先にごめんね？」

「構わないよ」

余程の理由がない限り、真悟君はレディファーストを重んじてくれる。自己を犠牲にした気遣いではなく、おかしな下心もない。彼にとっては自然な行為なのだろう。

わたしは持つてもらっていた荷物を受け取り、中から着替え一式とお風呂セットを取り出してシャワー室に入った。

シャワー室は、綺麗だけど、一畳程の広さしかなかった。

当然、脱衣所などないし、バスタブもない。まるで、海水浴場に設置されている個室シャワーみたいだ。でも、文句は言えない。ここはホテルと銘打っているけど、山奥に建てられている山荘なのだ。バスタブに身を沈めてのんびりと半身浴をしたい、とか贅沢は言ってられない。愚かしい我が儘は、最低女への第一歩である。そんな女は、真悟君に嫌われてしまうだろう。

まさか真悟君が中を覗くわけないとは思ったけど、何が起るかわからないので、フック状の内鍵をしっかりと掛けておいた。

わたしは手早く服を脱ぎ、汗で肌にへばりついている下着も脱ぎ捨て、ぬるめのお湯でひとまずざっと汗を流した。そして、持参したスポンジにボディソープを塗り、きめ細かい泡を作って、左腕から順を追って体を磨いていった。時間はかけない。軽く全身を洗いきれ、手早く洗髪し、最後にざっと冷水を浴びて身を引き締める。本格的なボディメンテナンスは夜でいいだろう。今は汗を流す程度で十分だ。でも、せめて腰掛けが用意されていたら、腰を落ち着け

てぼんやりと温かいお湯を浴びるのになあ、と思った。

わたしは体を拭いて下着を身に着け、長い髪の毛の水気を切ってバスタオルで包み、ブラウスに袖を通し、スカートを穿いた。

着替えて腰を屈めた際、脹ら脛の裏側と太股に張りを覚えた。それに、足の裏が浮腫んだようにジンジンする。明日は筋肉痛に苦しめられそうだ。真悟君の忠告通り、丹念なマッサージが必要である。とりあえず、涼しい部屋でストレッチをしよう。

内鍵を解除してドアを開けると、火照った肌を安らげる心地よい冷気が流れ込んできた。避暑地であつても夏場の冷房は生活必需品なのだ。特に、現代っ子には欠かせない文明の利器である。それを、身をもつて知った。

「お待たせー」

軽快な声音を意識して用い、濡れた髪の毛をバスタオルで掻き回しながら、シャワー室を出た。そして、湯上がりで色づくなっているであろう自分をさり気なくアピールする。

わたしは真悟君の姿を探した。

あれ？

室内に知らない人間が二人いた。

真悟君とテーブルを囲み、楽しげに会話している。

一人は、紅白のストライプ地が派手なＴシャツに真っ白いジーンズ姿の男の子。

もう一人は、男物と思われる黒い半袖シャツをワンピースのように身に纏った可愛らしい女の子だった。

「保奈美、さっぱりした？」

真悟君は一度会話を中断して、こっちを向いた。

自然とお客様の視線も向けられる。

「あ、うん。お先にお湯、いただきました。でも、あの……その人たちは……？」

「湯上がりに冷たい飲み物が欲しいだろうと思って下の食堂までジ

ユースを貰いに行ったら、螺旋階段の下でこの二人に声を掛けられたんだよ」

二人が、それぞれ独特な表情を作って会釈した。

わたしも会釈を返す。

「では、ボクもシャワーを浴びてくるよ。その間に自己紹介を済ませておいて」

「うん」

真悟君は荷物から小さなポーチを取り出し、わたしに軽く手を振っておいて、着替えを抱えてシャワー室に入ってしまった。

すぐにシャワーを浴びる音が聞こえ始める。

わたしは突っ立ったまま、その姿を想像して、意味なくドキドキしてしまった。

いけないいけない。

わたしはさっきまで真悟君が座っていた位置に腰を降ろし、まだ濡れている髪の毛をドライヤーで乾かしながら、同じイベント参加者である二人に意識を集中した。

【3・藤森保奈美】

紅白柄のＴシャツを着た男の人が、組んでいた足の左右を組み換え、腕組みを解いてわたしを指差した。

「さてさて綺麗なお嬢さん、まずはお互いに名乗り合おう。相手の名前がわからないと、会話がスムーズに進められない。そう思わないか？」

「あ、はい。思います」

わたしが頷くと、彼は端正な顔にニヒルな笑みを刻んで自分から名乗った。

「俺の名前は来須十路。年齢は十八歳。朝日ヶ丘高等学校の三年生だ。現在、剣道部とミステリ研究部に在籍している。このイベントは今回が初参加だ。宜しくな」

来須十路は、万人が認める格好良い男の子だった。長身で手足が長く、肩幅が広い。無造作に纏め上げられた短髪。手入れは行き届いていないけど、形良く整った太めの眉毛。すっと通った鼻筋。ちよつとかさついている肉厚の唇。そのどれもが、彼を格好良く飾り立てている。何よりも、全身から発散されている傲慢一歩手前のオーラが女心を惹きつけて止まないのだ。もしも真悟君の存在がなければ、一目で虜になっていただろう。それほど魅力的な人間だった。続けて女の子が名乗った。

「私は来須美架だよ。来須十路は、私のお兄ちゃん。つまり私たちは、兄妹ってわけだね。年齢は十五歳で、朝日ヶ丘中学校の三年生かな。現在はミス研の部長なのです。凄いでしょ？」

しかも、それと同時に、朝日ヶ丘高校のミス研にも所属してるんだよ！ 中学生なのに天才だから、先行ドラフト一位で高校の部活に勧誘されちゃったんだよ！ 凄すぎるでしょ？ んー、あとは……可愛さ勝負では、僅差で私の勝ちだね。あれ、不満なのか？ そんじゃあ、ここは公平に勝負しとく？ 私と勝負しちゃ

う？ どっちがモテるか正々堂々すぱーんと勝負しちゃうのか？」

「……………」

えっと、この子のテンションはいったい何？ 勝負しちゃうのか、とか言われても……。

わたしは引きつった笑みで戸惑いを表現するしかない。

しかし、来須美架は、本人が主張した通り、他に類を見ない抜群の美少女だった。身体は中学生ということもあり、まだまだ華奢で肉感に乏しい。健康的な小麦色の肌を持ち、指輪やピアスなどのアクセサリー類は着けていない。ただ、綺麗な栗毛をツインテールに括り、先っぽに小さな鈴が着けられていた。これだけの容姿を持っていたら、自惚れたくもなる。しかも、中学生と言えば、怖いもの知らずの年代だろうし……。全体的な雰囲気は親友の和久井弘美に似ていると感じるのは、わたしの気の所為だろうか？ 心なしか声も似ているような……。あと、気になる点と言うと、破廉恥極まりない彼女の服装である。それ、見た目にヤバくない？ だぼだぼのシャツしか来ていないみたいだから、ちょっとした高低差や階段で下から見上げられると、中身が丸見えなんじゃないの？ それを気にしない子なのかな？ まあ、わたしが心配する必要はないか……。

「こら、美架」

「あうっ、痛いんだよっ！ 暴力反対っ！」

こっん、と兄に頭を叩かれ、美架はいけなないとばかりに舌を出した。

その仕種が反則的に可愛い。禁断の裏技だ。萌えキャラ限定の秘奥義だ。でも、それをわたしに見せてどうするの？ 無意味でしょ？ それとも、格の差（何の？）を見せつけて、敗北感を味わわせようという魂胆なのだろうか。彼女の意図が全く読めない。

まあいい。相手にすると心に大怪我を負いそうなので、放っておくことにしよう。

「にへへ、相手に受け容れられるまで、《勝負》は自重する約束だったかなっ。ここはぐっと堪えなきゃねっ」

頭を撫でながら自戒する美少女。

そのままずーっと堪え続けて欲しいものである。わけのわからない勝負など遠慮させてもらいたい。

真悟君……早くシャワー室から出てきてこの二人の応対をして頂戴、と内心で助けを求めつつ、わたしも名乗る。

「わたしは――」

わたしのことはあらかじめ真悟君から聞いていたらしく、来須兄はこめかみを指先で突つつく仕種をして頷いただけだった。

でも、美術部という部分に来須妹が反応した。

「へえ、美術部の部員かあ。それって美少女ポイント高いよねっ。

新体操部とか水泳部が最上位で、次に音楽系の部、それで美術部や茶道部が続くんだよなっ。あっ、テニス部も忘れちゃ駄目かなっ。

何気に見える美少女のアンスコは萌え萌えだよなっ。チラリズムってやつかなっ。でもでも、ミステリ研究部も馬鹿にしちゃ駄目だぞっ！

警察も認めざるを得ない天才美少女探偵って言ったら、古今東西、男の子が垂涎しちゃうし、女の子の憧れの対象で、オメガ級のポイント加算要素だもんねっ。要するに、私が、天才美少女探偵ってわけだよーっ。そこんこ、宜しくっ」

「……………」

くらつと眩暈を覚えた。このテンションの高さ、弘美の一・五倍……いや、二倍以上の弾けっぷりだ。到底ついていけない。目線を合わせて付き合えば、三日で過労死してしまうだろう。

「美架、どちらが可愛いかなど重要ではないぞ。どちらも可愛いし、俺の独断で判定すると、藤森さんの方が落ち着いている分だけ魅力的に映る。おっと、藤森さん、誤解しないで欲しい。別に口説いているわけではないから、軽く聞き流してくれ」

容姿を褒められて嫌な気はしなかったが、気障ったらしい口調が心持ち耳に触った。

でも、わたしは微笑みを絶やさない。真悟君が出てくるまでの辛抱である。だけど、受け身になるとペースを狂わされそうなので、

自分から率先して会話を展開させることにした。

「朝日ヶ丘……って聞かない名前の学校ですね。東京の学校ではないんでしょう？ どこから来たんですか？」

「ああ、朝日ヶ丘は名古屋市内にある。俺たち兄妹は、愛知県民なのさ」

「愛知県からの参加ですか。凄いですね」

「いや、凄くはない。ちよつと面白い話を耳にしたから、朝日ヶ丘高校のミス研を代表して俺たち兄妹が遠征してきたっただけさ」

「面白い話？」

興味を引かれたので訊いてみると、来須兄は渋い表情を作った。

その反対に、妹の方は満面の笑みを浮かべて卓袱台をトンと叩いた。

「そうそう、面白い話っ！ 愛知県警も吃驚魂消た大事件だねっ！

心躍らされるミステリな難事件なんだよっ！ つまり、天才美少女探偵の出番なんだよねっ。その情報収集を兼ねて……」

「美架、口を噤みなさい。すまないな、藤森さん、来須兄妹にイベント参加を決意させたソースは明かせないんだ。それを知りたければ、過去の怪事件を自分で探ってくれ」

来須兄に厳しい口調で窘められ、一瞬しよげる来須妹。でも、三秒で笑顔を取り戻した。翼が折れても空を飛べる天使なのだろう。もしかしたら、翼がもげて飛べるのかもしれない。

「この山荘で事件……が遭ったんですか？」

わたしは益々興味を引かれたので、少し前のめりになって質問した。

「この山荘で？ ふつ、それは勘違いだ。しかし、何も話すことはできない。今回のイベント参加者のプライベートが大きく関わってくるからな。だから、あまり突っ込まないで欲しい。俺たちの戯言など軽く聞き流してくれ」

来須兄はそう言って、にっと笑った。

わたしとしては来須妹の話をこそ聞き流したい。

そう思ったのだけど、新しい話題を振ったのは彼女だった。

「保奈美ちゃんは真悟君の恋人なの？」

わたしを《ちゃん》付けして呼ばないで欲しいし、真悟君を名前で呼ぶのも止めて欲しかったけど、奇天烈な反応が怖いので注意できなかった。不愉快さに苛まれて、つい頬の辺りを引きつらせてしまうが、それでもわたしは真面目に答える。

「ええ」

「美男美女の組み合わせだねっ！二人はお似合いな恋人なんだよっ。でも、真悟君には、もっとお似合いな女の子がいるんじゃないかなっ？」

「どこに？」

適当に聞き流しておけばいいのに、ついつい気の強さを発揮して応えてしまった。

「ちゃん」と目の前にいるよっ。もしかして私が見えないのかなっ？保奈美ちゃんは目が悪いんだねっ。即刻、眼鏡っ娘になることをお奨めするんだよっ！」

「……………」

その挑戦的表情と挑発的口調に、わたしは返す言葉もない。ただ心の中で、「この娘、まさか真悟君に好意をいだいてるんじゃないでしょうね。身の程を知りなさい」と叫んだだけである。勿論、口には出さない。年下の女の子を相手に口喧嘩しても虚しいだけだ。でも、この子の自信満々な表情は気に入らないなあ……。ぽきっと鼻っ柱をへし折ってやりたい心境である。いや、ここは真悟君に任せるべきかな。彼なら不埒者を一言で一蹴してくれるに違いないから。

「眼鏡は遠慮するね」

来須妹の爛々とした黒瞳の輝きに圧倒されつつも、わたしは毅然と睨み返した。

「美架、失礼な言動を慎め」
「ぱちん。」

「きゃうっ！」

後頭部をはたかれ、来須妹は頭を抱えて大袈裟に悲鳴を上げた。

「酷いんだよっ、お兄ちゃん！ 家庭外暴力は断固として大反対っ！」

「美架……いい加減にしろ」

口調に僅かな怒りを孕ませる来須兄。

来須妹はびくつと肩を震わせた。でも、二秒で笑顔を回復。反省の色は皆無だった。

「しゅーん……」

美架は自ら効果音をつけてわざとらしく項垂れ、左右の人差し指を突つつき合わせた。

完全にふざけている。許し難いレベルの馬鹿だ。わたしに代わって誰か彼女をぶん殴って下さい、とさえ願った。

そんな妹を一瞥し、十路は苦い笑みを浮かべてわたしに頭を下げて詫びた。

「妹の失礼な態度が気に障ったのであれば、それは兄である俺の責任だ。許して欲しい」

「いえ……それほど気にしてません」

わたしは慌てて手を振り、十路に頭を上げてもらった。

彼を責めるつもりはない。少なくとも妹ほど兄は変じゃない。

来須兄は苦笑に情けなさを加えて嘆息した。

「美架に悪気はないんだ。君に敵意をいだいているわけでもない。攻撃意思など毛頭ない。こいつにとっては単なるありふれた日常会話なのさ。お友達としての会話を成立したくて、不快感を催させるほどに馴れ馴れしく、敵意を生み出すほどにふてぶてしく、害意を発露させるほどに憎々しく、殺意を芽生えさせるほどに攻撃的な言葉を故意に選んでしまうんだ。その所為で昔から美架には友達がない。無論、恋人などいなかったし、これからもできないだろう。君から彼氏を略奪しようとも思っていないはずだ」

「そうなんですか……？」

疑惑の視線を来須美架に向ける。

「べーっと下を出してやがりますよ、お兄さん。ぶっ飛ばしていいですか？ あ、来須兄が目を向けたら、途端に神妙な顔つきになってぺこぺこし始めましたよ。さっき、妹には攻撃意思がない、って言ってましたよね？ それ、完全に見誤ってますよ。天然ぶった妹に騙されています。百歩譲って攻撃意思はないとしても、彼女は悪意の塊です。わたしを小馬鹿にしてほくそえんでいます。どうか今すぐに、彼女に鉄拳制裁を加えて下さい。」

頭に血が昇りすぎて、危うく気を失いそうになった。煮える心を何とか静めようと、わたしは戦慄く唇を噛み締める。ゆっくりと深呼吸して、心の正常化を図る。

こんな醜い感情に心を奮わされたのは久しぶりである。春の事件以来だ。

いや、鷹峰つばさが真悟君と抱き合っている場面に出くわして以来か……。

あの時は、彼女と取っ組み合いの喧嘩になって、肘打ちを食らって、おでこに大きなたんこぶを作ったんだっけ。

嗚呼、思い出したら余計に苛々してきた。

わたしって自分が思っている以上に気が短いの？ そんなことないよね？

「できれば、妹と仲良くして欲しい」

十路が達成不可能なミッションを提示した。

全裸で渋谷を闊歩するよりも困難な願いである。友達関係を築く前に、つい弾みでハンマーを振り下ろし、来須妹の脳天をかち割ってしまいそうだ。わたしの対変人許容量は、自分の家族と弘美で限界ギリギリなのだ。

そんなわたしの思いを読み取ったのか、来須兄が微かに皮肉っぽく笑った。

「美架の発言が基で不快な気分になったなら、君は感情を殺さず、

素直に対処してくれればいい。もし怒りを覚えたのなら、怒鳴りつけてくれていい。いや、殴っても構わない。妹には、駄よりも調教が必要だろうからな」

「調教ですか……」

ちよつと魅力的提案かもしれない、と一瞬思ってしまった。

「友達になるくらいなら、わたしは構いませんよ。真悟君の意見も聞いてみないといけないけど……」

わたしの性格上、拒絶はできそうにないので、一応承諾したけど、到底わたしの手に負える人間ではないだろう。

来須兄妹……。わたしが単独で相手をするにはキワモノすぎる。

真悟君、まだシャワー中ですか？ 早く助けて下さい。

そう、後方のシャワー室に願った。

すると、美架が卓袱台に両手を着いて、わたしに顔を近づけてきた。

「保奈美ちゃんてば、逃げたそうだねっ。わたしとお喋りするのが嫌になっちゃったのかなっ？」

心を読まれた？

「そ、そんなわけないよ」

すぐに否定しておいてけど、同様は隠せなかった。

十路は、そんなわたしを真っ直ぐに見据え、可笑しそうに唇を歪めた。

「恋人の助けが必要かい？」

「いえ、あの……」

「内心の思いを誤魔化す意味はない。確かに俺たちは奇矯だし、君の恋人は頼りになる男だ。助けを求めるに足る能力の持ち主と言えるだろう」

まるで真悟君の人間性を見切っているような口振りで、十路は断言した。

「しかし、君の恋人も変わり者だぞ」

来須兄は、ぱちんと指を鳴らして、シャワー室を指し示した。

「真悟君が、ですか？」

カチンと来て、聞き返した。

真悟君を理想の恋人像と信じているわたしには、あまりにも賛成しかねる意見だった。

「ああ、和泉真悟だよ。彼は素晴らしい変わり者だ。彼が初対面の俺たちに何て言ったか想像がつくかい？」

「いえ……」

「貴方たち兄妹には死相が現れています、だ。おかしいだろ？」

「しそう？」

わたしは頭の中で《しそう》を漢字変換してみた。

思想、試走、齒槽、死相、師走（誤変換）。

どれが正しいのだろうか。やっぱり、オーソドックスに《死相》か？ でも、死相だと、意味合いとして、初対面の人間に用いて良い単語ではないと思う……。

「死の相ですか？」

「それ以外の意味なら、俺は問題にしない」

嘲笑を含んだ声。

馬鹿にされた感じ。

またちよつとカチンと来た。

「真悟君は、どっかの誰かじゃあるまいし、理由なく相手を罵るほど失礼な男の子じゃありません！」

思わず声を荒らげてしまった。

「どっかの誰かでえーすう」

横合いから口を挟んで、ふざけ調子で万歳をする来須妹。

口を閉じてなさい、と言いたい。そして、わたしの心をチクチク攻撃するのは、もういい加減、本当に、勘弁して欲しい。できることなら、この部屋から出て行って下さい。お願いします。

「怒らないでくれ。俺は事実を述べただけだ。君の恋人を非難しているわけではない。妹には……こうしてペナルティを与えておく」
すばーん。

十路が美架の側頭部を強打した。

愛の調教である。

ちよつとだけ気が晴れた。

「つい痛ああい！ もう、お兄ちゃんはっ！ もっと手加減してよっ！ 天才美少女探偵が馬鹿になったらどうすんだっ！」

ぎゃいぎゃいと喚く美少女。

どうやら調教失敗ですね。

「君も一発殴っておくかい？」

「いえ……」

初対面の相手に暴力を振るう蛮勇など持ち合わせていない。それに、何発殴ったところで、来須妹は堪えないに違いない。現に、けろつとしている。でも、その余裕も、真悟君が出てくるまでである。彼の責めは過酷なので、彼女もわたしに対する態度を改めずにはいられないだろう。

今まで聞こえていたシャワーの音が止んだ。

形勢逆転の時は間近である。

来須兄妹も気付いたようだ。

「恋人のご帰還だな」

「よし、真悟君が出てきたら勝負しよっ！ 保奈美ちゃんもそろそろ私の性格に馴染んでくれたと思うから、今度こそどっちがモテモテか勝負だよっ！ イベントに参加する男の子たちに、よりたくさん言い寄られた方が勝ち、ってルールでいいよねっ？ そんなで、審判は真悟君で決まりっ！」

美架が自分勝手にルールを定めて、「勝負しろ」を連呼し始めた。そんな変な勝負を受ける趣味はない。断固拒否したい。いや、その前に、わたしを勝手に馴染ませないで欲しい、と文句を吐きたかった。

「勝負って言われても……わたしは特定の男の子とお付き合いしている身だから……」

「そんじゃあ、今まで何人の男の子に告白されたかを勝負だっ！」
「……………」

告白してきた男の子の人数ならきつと負けないだろう。でも、そんな勝負で勝ちたくない。それに、告白された数を競ってはいしゃぐ姿を真悟君に見られでもしたら、白眼視されること請け合いである。

シャワー室のドアが開き、真悟君が姿を現した。

熱いシャワーを浴びたらしく、身体からもわもわと湯気が立ち上っている。

その姿がなんと格好良い。

水気を拭くんだ髪の毛がオールバックに撫でつけられ、淡い茜色の半袖シャツは胸元がはだけられている。そこには、きらつと輝く十字架の首飾り。更に、ベージュのスラックスが爽やかさを演出し、鋭い眼光が色を添えていた。

眼鏡は胸のポケットに収められている。

わたしは、惚れ惚れと湯上がりの美少年を眺め、やっと来須兄妹の応対から解放される、という安堵の吐息を漏らした。

【4・中嶋剛志】

なんだよ、和室か。

俺は部屋に入るなり、内心で愚痴を零し、荷物を窓際に向けて放り出した。

和室を毛嫌いしているわけじゃないが、《和室＝敷き布団》であり、この室内にベッドが見当たらないところから察するに、寝床はクッションに乏しい畳の上に敷かれた布団なのだろう。ってことは、よくあるパターンとして、枕はそば殻なのか？俺は弾力性に欠ける布団と同じくらい、そば殻の枕が嫌いである。なぜかと言えば、あの独特な匂いが田舎を連想させるからだ。でも、まあいい。その程度なら我慢の範疇だし、宿泊施設が共同トイレだと聞いた時点で不自由な生活を覚悟していた。冷暖房完備だっただけマシというものである。

俺は冷房のスイッチを入れ、座椅子に勢い良く尻を落とした。

汗は掻いたが、身体はさほど疲れていない。数分休憩すれば、体力は回復するだろう。喉が渴いたからジュースでも飲もうかと室内を見渡すが、冷蔵庫らしき物体は発見できなかった。

卓袱台の上には、パックで淹れるお茶とシケたお茶菓子しか用意されていない。

冷蔵庫どこるかテレビも備わっていないときてる。

おいおい、娯楽アイテムはなしかよ。マジか？

テレビくらい設置しとけよな、と小声で愚痴る。ここは一人で泊まるところじゃねえよ。もし俺がウサギだったら、一日と経たずに死んでしまうぞ。

仕方がねえから、パックのお茶を湯飲みに放り込んでポットの湯を注ぎ、ずずーっと一口啜った。

やっぱり日本人は緑茶だな、とか思って、ほっと一息吐いてる自分にうんざりする。なんだか老人になった気分だ。今頃、藤森と和

泉は仲睦まじくイチヤついてやがるのだろうか？

そう思ったら、急に隣の部屋の様子が気になり始めた。

盗聴などという悪趣味はないが、俺は壁に耳を当てて隣室の会話が聞こえるかどうか確認してみることにした。

「……聞こえるわきゃねえよな」

一切会話を交わしてないってことは、二人の親密度から言ってい得ない。きっと防音効果が高い壁なのだろう。同級生の秘め事を盗み聞きしようと思っっているわけじゃねえが、あいつらの情事に興味がないかと問われれば、興味津々だと素直に答えるしかない。こんな戯言を吐き散らかしている軟弱者の俺でも、冗談ばくではあるが、藤森に一度告白しているのだ。結果は惨敗。冗談で紛らわされる始末。俺は恋愛対象じゃねえんだとさ。

それに、転校してきた和泉にあっさりとかっさらわれてしまつちやあ何も言えないし、あいつに「後出しジャンケンは卑怯だ」と抗議しても、藤森の恋心は消し去れない。何よりも、和泉真悟は魅力的な男なのだ。完璧な高校一年生と言っても過言じゃねえ。それは否定し得ない事実である。否定した瞬間、あいつに男として敗北を喫した俺の立場は、他の馬鹿男どもと同レベルまでランクダウンしちまうだろう。そんな惨めつたらしい自分を受け容れる度量はない。自己崩壊への道を一直線だ。

俺は和泉真悟を同性として尊敬している。

第一に、その徹底した女性第一主義ぶりは、自分本意な俺にとって見習うべき点が多い。特に、あいつの藤森に対する接し方は異常だ。溺愛している自分を隠そうとしない。徐に抱き寄せたり何気なく尻を触るえろいスキンシップは日常茶飯事だし、必要に駆られればクラスメイトの前でも平気でキスする。もし誰かが藤森の悪口を言おうものなら、死にたくなるほど酷い責め苦を優しい顔で囁きかける。その点では、男女の区別を一切しない。元彼女であっても手加減なし。それ程に藤森保奈美という女に執着している。いや、執

着じゃなくて愛着か。それだけ好かれれば藤森も本望だろう。けど、それは、病的レベルの愛情である。一種の妄執に近い。一步踏み外せば、単なる変質的乱暴者だ。いや、既に何人かと校内で乱闘騒ぎを起こしているから、あいつは度し難い乱暴者だ。拳で殴ったり、蹴っ飛ばしたり、武器を使って相手に怪我を負わせたりはしないし、自分から先に暴力を振るうわけじゃないけど、断じて平和主義者じゃねえ。売られた喧嘩を回避しない血の気の多さは、外見から窺い知れない部分である。俺自身、うっかり藤森の悪口を吐いてあの鬼のような鋭い目で睨まれたことが何回かあるのだ。マジでしょんべんちびりそうだったぞ。でも、三年の江尻先輩みたく、首根っこを掴まれて吊し上げられてないだけマシか？ まあ、そういうわけで、あいつは好きな女の為に誠心誠意努力できる男なのだ。

第二に、あいつの頭抜けた頭の良さは特筆に値する。これは到底真似できない能力だが、状況に応じた機転の利かせ方や相手を立てて実を得る生き方は、俺が今後の人生において大いに見習っていくべき点だろう。しかし、あいつの頭の良さは何なんだろう？ お勉強ができるとか、一般的高校生が知るはずのない情報をたくさん持っているとか、そういう次元の話じゃねえ。一を聞いて百を察する能力が、他者と比較して格段に秀でているのだ。つまり、想像力（洞察力？）の差ってことだろう。春先の連続殺人事件の際には、警視庁の刑事を差し置いて事件を推理し、犯人を特定して解決に導いたらしい。俺も少々関わりを持った事件だ。ほんの一部分ではあるが、あいつの活躍が鮮烈な絵となって、今も脳裏に焼き付いている。いわゆる名探偵。記憶している呪文を唱えるみたいにつらつらと犯罪のトリックを暴いていく姿は、見応え十分であると同時に何とも言えない違和感を覚えたものである。そう、まるで自分が仕掛けたトリックの解説をしているみたい……。まあ、そんなわけねえよな。

春先の事件以外にも、ミス研の部長に挑戦状を叩きつけられた時の鮮やかな推理も見物だった。《わくい》と縦に書かれた紙切れを

示され、「これは誰でしょう?」と問題を出された時、あいつは一瞬で正解を導き出してみせたのだ。

俺は「わくい、って書いてあるんだから、和久井弘美だろ」と答えて不正解。

藤森は初手から和泉頼み。

和久井は頭を抱えて唸るだけで何の答えも導き出せない始末。

唯一、あいつの元彼女が、三分ほど考えて正解を言い当てていたっけ……。

結局、「漢字変換してから、『わく』と『い』を切り離して考えてみるといいよ」というヒントを与えられても正解がわからず、「和久(湧、湧、泉などでも可)」と井の位置関係が答えを導き出す要素だよ」と教えられてやっとこさ理解するに至る、頭の悪い俺……。

答えは、井上和久(井上湧、井上湧、井上泉などでも可)だ。

例として、わくい……つまり和久井は、『井』の上に『和久』がある。

だから、『井の上、和久』となり、それを平仮名に変換して読むと『いのうえかずひさ』になるわけだ。

こんなもの、何てことのない文字遊び。子供騙しレベルのクイズでも、あいつは一瞬で答え、俺はヒントを貰ってギリギリ制限時間外で答えている有様。

その推理力の差はいったい何なんだ? 単に俺が馬鹿なだけか? それとも、あいつが群を抜いた天才なのか? わからない。俺が理解できるのは、あいつが凡庸な人間じゃねえってことだけだ……。

第三に、運動能力である。あいつは運動部の誰よりも運動神経が良い。それは、スポーツ万能という意味であり、間違っても各分野の全種目に長けているわけではない。あいつは、相手の技術を瞬時に学び取り、独自の解釈で表現できる能力の持ち主なのだ。つまり、才能の塊ってこと。俺が直接見た中で一番印象深かったのは、体育の授業で柔道をやった時である。日頃からすかした態度を全く崩さない和泉をギャフンと言わせようと結束した柔道部員が、全員赤子

のようにバツバツと薙ぎ倒されていく光景は壮絶だった。見ていて鳥肌が立ったほどである。あいつ、きっと何か格闘技を身につけているに違いない。およそ、合気道とか柔術の類だろう。

和泉の長所を挙げると切りがないので、この辺で止めておこう。まあ、何にしても、あいつは面白い人間ってことだけは確かだ。

次に、藤森保奈美について考えてみるか。

藤森は万人が認める美少女だ。それは、容姿や物腰、仕種に限った視覚的要素だけではなくて、性格や口調、雰囲気などの内面的要素を合わせた総合力が他者の追隨を許さないくらいずば抜けていることから断言できる。入学式当日から交際希望の男子生徒が一年A組の教室前に行列を成したほどのものだ。アイドルを目指せば、きっと売れっ子になれるに違いない。もしかしたら、あの今世紀最後のスーパーアイドルと呼ばれる東条玉稀を凌駕するトップアイドルになれるかもしれない。それぐらいのクオリティの高さ。もしかすると、俺たちの知らないところで芸能事務所と交渉している可能性もあり得るだろう。この意見を否定する奴は、不美人嗜好の男か、彼女に振られて憤っている身の程知らずな男か、美少女に嫉妬して心が歪んだ女か、和泉に恋心をいだいている女だ。そういう輩は問題外なので、あえて触れずに思考を進めていこう。

藤森は優等生的外見を裏切らず頭が良い。それは、和泉みたいに頭の回転が光並みに速いって意味じゃなく、文字通りお勉強ができるという意味である。成績はトップクラス。一学期の期末テストでは、学年で十九番だった。都内でも名うての進学校として知られる詩海高校で十番代なのだから、全国的に見ても相当な学力だろう。噂によると、彼女は和泉に家庭教師をしてもらっているらしい。その成果が如実に表れているわけだ。和久井も時折一緒になって勉強を教わっているという噂だが、彼女の成績には反映されていない。ちなみに、和泉の成績は、ぶっちぎりの学年一番だ。期末テストの平均点が九十八点なんて普通じゃ考えられねえよな。学年の総合平

均点が五十八点だから……開いた口が塞がらないってやつだ。俺の総合平均点は……まあいいじゃねえか。お勉強ができなくても人間は生きていける。名の知れた大学に現役で入れりゃ、親も喜んでくれるってもんだ。

思考を一旦停止させてお茶を一口。
ふう。

藤森は誰に対しても分け隔てなく接する優しさを持った女である。好き嫌いがはつきりしているくせに八方美人の和久井とは違い、あまり感情を表に出さず、常に微笑んでいるイメージだ。それは、表情の変化に乏しい面白みのない女と批判できなくもないが、物静かに佇む姿が画になる女なので、誰もケチをつけない。淑やかさが彼女の持ち味なので、喜怒哀楽を手放して表現する姿など見たくない。いや、はっちゃけてる藤森の姿も悪くねえかもしれない……。まあ、付き合いの短い俺には、実際の性格はわからねえ。藤森は大口を開けて爆笑する天真爛漫なお転婆娘なのかもしれないし、和久井も本質的には臆病で泣き虫なのかもしれない。人間は内面の弱さを補う為に何重もの防御壁で表層を取り繕っている場合が多いのだ。かくいう俺は、ありのままの自分自身を恥ずかしげもなく表現できる人間だ。でも、そういう開けっ広げな性格の持ち主はめったにいないようだ。和久井が見た目通りの女なら、同類と言えるだろう。あいつのことは嫌いじゃない。誰にでも物怖じせずに話し掛けられる度胸といい、内面をストレートに表現する素直さといい、どんな時でも悲観的にならない明るさといい、惹かれる要素が多い女である。

おっと、話が藤森から和久井にズレ始めた……。
いかんいかん。

まあ、俺が言えるのは、能動的な和久井と受動的な藤森は絶妙なコンビってことだ。

俺は、茶菓子（醤油煎餅）の包みを開けた。程良い大きさに砕いて一欠片を摘み、口内に放り込んで、がりがりと咀嚼する。そして、お茶を啜った。

不味くはない。

美味くもない。

でも、口寂しさは紛らわせられた。

「暇だ……」

現在、午後十二時二十二分。

時計の針が正午を回ったばかりだ。

午後四時までは三時間以上ある。

この無駄な時間を有効活用するには、部屋で燻っではいけないだろう。

でも、和泉たちの部屋を訪れるのも気が引ける。もし真っ昼間からえろいことをしてやがったらマズイ。クラスメイトの恋路を邪魔する者は、馬に蹴られて脳挫傷である。

じゃあ、俺は何をして時間を潰せばいいんだ？ イベントの参加者に俺好みの美少女がいないかどうか探しに出てみるか？ いや、それは拙速に過ぎる。女にがつつく軟派男と誤認されちゃ敵わねえ。そもそも、さっきの話じゃないが、和久井が急な用事で参加を断念しなきゃ、こんな馬鹿げた時間の使い方をしなくて済んだんだ。和泉と藤森がイチヤつくなら、俺と和久井がペアになって仲良くやれたはずなのだ。それなのに……この様は何なんだ？ 全くの構想外だぞ。ちくしょう。

あー、やめだやめだ！ 不毛な考察に時間を割くのは馬鹿らしい。「ちよつくら山荘内をぶらぶらしてみるか……」

俺は食べかけの煎餅を卓袱台の上に放り出し、座椅子から尻を持ち上げ、姿見で身嗜みをチェックしてから、ルームキーを持って部屋を出た。

【5・中嶋剛志】

ドアを閉めて鍵を掛けていると、背後でがたと物音がした。振り返ってみると、向かい側のトイレの隣に位置する部屋から女が出てくるではないか。

しかも、結構可愛い。

鼈甲縁の眼鏡を掛け、肩くらいの黒髪をカチューシャで止め、手には辞書並みに分厚い本。すらっとした細身の体型で、空色のワンピースを着ている。図書館で読書してそうな女だ。でも、つつんしていない。このイベントに参加するくらいだから、積極性と社交性は持つてるんだろう。

こりや暇潰しには恰好の相手だ。早速、声を掛けなきゃなるまい。そう思ったのだけど、相手に先を越された。

「あら、君、お昼の集まりで見なかった顔ね。もしかして、詩海高校の生徒さん？」

しっとりとした落ち着きのある声音が耳に心地いい。しかも、好意的口調。

俺はがつつかないように不可視の手綱を引き、はやる心に制動をかけた。

不埒な戯言で心象を悪くしてしまうのが俺の悪い癖である。闇雲なアプローチはマイナスの結果しか導き出さない。

ここは、和泉から学び取った恋愛テクをいかに発揮するチャンスだ。

「ん？ ああ。俺は詩海高校の生徒さんだよ。あんたは？」

ルームキーをポケットに落とし込みながら、さり気ない調子で訊き返した。

相手側から声を掛けてきたんだから、これは決してナンパ行為ではない。自然な流れでの会話ってやつだ。ここから恋愛に発展するかどうかは、俺の応対次第である。

「私、設楽松美。宮古川高校の三年生よ」

宮古川高校？ 聞いた名前の学校だ。

ちよつと脳味噌を作動させ、それが本山純太の通う学校のことだ
と思い出した。

「あんた、もしかして、本山の先輩？」

「あら、君、本山君と知り合いなの？」

「ああ。来がけに出会ったんだ」

「ふうん……」

設楽は眼鏡を外し、顔を近づけて目を細め、穴を穿つ真剣さで覗き込んできた。

「な、なんだよ……。俺の顔に何かついてるのか？」

「君、なかなかの男前だね。名前は？ 私には名乗らせておいて、
自分はダンマリ？」

「あ、そつか。悪い。あんたが可愛いから、ついつい見とれて、名
前を言うのを忘れちゃってたぜ」

「それ、お世辞？」

「マジ褒め」

「ありがとう」

自然な笑顔を浮かべさせることに成功した。これで俺と設楽の関
係は一步前進だ。この勢いに任せて土俵際まで追い詰めて……って
いういつもの強引な手法が駄目なのだから、今回は和泉っぽくすか
してみせようじゃねえの。

「俺は、詩海高校一年の中嶋剛志」

「中嶋君ね。覚えてたわ。でも……年下なのね。ふふっ」

「あ、悪い、タメ口が気に障ったのか？」

「いえ。それが君の普段通りの喋り方なら、無理に改める必要はな
いわ。人間、自然が一番だもの。変に敬語を使われるよりもタメ口
の方がマシよ」

設楽は笑顔で言い、眼鏡を装着した。

「私には堅苦しい上下関係はなしでいいよ。でも、他の参加者に対

しては、言葉遣いに気を付けてね。全員が寛容な人間ではないと思うから」

設楽がお姉さんぶって忠告してきた。

言われなくても臨機応変に対処するさ、と思ったが、聞き分けよく首肯しておいた。

「設楽さんは、今、暇？」

「ええ、まあ……暇ね。夕食の時間まで、どこか適当な木陰でゆっくりと読書をしようかと思っていたところよ」

「じゃ、俺と散歩でもしない？」

「あら、それって、デートの誘い？」

「まあ、そう取ってくれると嬉しいな」

「ふふっ、正直なのね。こういう時、男の子って、女の子に警戒心をいだかせないように上手く誤魔化すものでしょう？」

昨日までの俺がまさにそれ。誤魔化すけど上手くいかず、邪な思惑を見透かされて逃げられる。そんなパターンの繰り返し。

でも、今の俺は一味も二味も違うぜ。

「俺は自分にも相手にも正直なんだ」

上品な笑み（自分なりの）を浮かべて、爽やかさをアピールする。

「そういう性格、嫌いじゃないわよ」

期待通りの笑みが返ってきた。

特筆すべきは、目に軽蔑や侮蔑が宿っていない点である。

今までにない展開だ。

うおお！ もしかして、今、俺、好印象を与えてる？

だが、ここでも、浮かれて飛んでいきそうな心に重石を乗せて芯を通す。過度の自制心が女心攻略の鍵なのだ。

「この本を部屋に置いてくるから、少し待っていて」

そう言って設楽は一度自室に戻り、一分ほどで出てきた。

「お待たせ」

彼女は分厚い本の代わりに麦藁帽子を持っていた。日焼けが気になるお年頃ってわけだ。それでフリスビーでもして遊ぶのか、と冗

談を飛ばしたかったが、場が白けそうなので自重。良い流れを壊してはいけない。

俺たちは螺旋階段を下りて玄関に向かった。

「それで、どこに行く？」

俺が下駄箱から自分の靴を取り出して足をつ込みながら訊いてみると、設楽は斜め上方を見上げて顎先を摘んだ。私は今考え事をしています、というポーズである。理知的風貌の持ち主だから、そんな仕種が妙に様になっていた。

「初心者用の散策コースを歩きましょう。二時間くらいで山荘に戻ってこれるから」

「詳しいね。設楽さんはこのイベントに何回も参加してるのか？」

「今年で三回目よ。だから、この《ホテル美岳》周辺の地理には詳しいわね。ふふつ、地理っていうのは大袈裟かな。軽い運動を兼ねて、友達と散策コースを何回か歩いたことがあるのよ」

設楽は右の頬にえくぼを作って笑いを零し、麦藁帽子を頭に乘せた。

「中嶋君は初心者なのかしら？」

「ああ、初心者だよ。中学生の時はこのイベント自体を知らなかったからな」

「誰に誘われたの？」

「誰かに誘われたってわけじゃないんだ。このイベントに参加するのが、うちの学校の美術部の恒例行事らしい」

俺が美術部に所属していると聞いて、設楽は可笑しそうに表情を和ませた。

「でも、今年は一年生だけしか参加してねえんだ。しかも、言い出しっぺが不参加」

「あら、どうして？」

「家庭の事情ってやつらしい」

「それでは仕方がないわね」

彼女は刹那、表情を曇らせたように見えた。

山荘の外に一步出ると、途端に陽光の猛撃に晒された。容赦なしの直射日光。

思わず回れ右をして山荘の中に避難したくなった。でも、日除けよりもデートを優先するべきだろう。男は忍耐、である。しかし……麦藁帽子の効果は靦面なんだろうな、と設楽の涼しげな様子を見て思った。

「設楽さんは、後輩の本山と二人で参加してるんだろ？」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、去年一緒に参加したっていう友達はどうしたんだ？」

俺がそう訊くと、設楽の微笑み顔に影が差した。わざとらしいくらい思わせぶりに視線を逃がし、乱れてもいない髪の毛を撫でつける。明らかに返答を拒否していた。

そこは踏み越えちゃいけない線だったか？

俺は慌てて話題を変えた。

「えっと……、そうそう。どうして本山と一緒に来なかったんだ？」

「どうしてだと思う？」

疑問をそのまま問題に変えて返し、設楽は微笑で口許を飾った。どうやら気を取り直してくれたようだ。デートがおじゃんにならずに済んで、ほっと一安心である。

「そうだな……。んー……男と二人きりで行動するのが恥ずかしかったとか？」

俺が適当に答えると、設楽は眼鏡の奥で目を真ん丸く見開いた。

「あらら、正解よ。どうしてわかったのかしら？」

「え、マジで？」

初心な小娘じゃねえんだから……、と突っ込みを入れちまいそうになり、俺は普段めつたに使用しない声帯のストッパーを強制作動させた。相手を馬鹿にするような台詞は極力控えるべきであり、もし用いるにしても慎重を期さなければならぬだろう。

「私、極度の恥ずかしがり屋だから……、やましい関係でなくても、他人の目が気になってしまふのよ。たとえ目を掛けている後輩とでも、関係を誤解されたくないのよね」

「潔癖性つてやつ？」

「そうかもしれないわ」

設楽は若干自嘲気味に微笑んだ。

「そう言う君はどうなの？ パートナーは連れてきていないのかしら？ 今、私と一緒に行動しているところから察するに、一人での参加みたいね」

「あ、いや、俺は美術部の仲間二人と参加してるんだ。でも、あつちが熱々の恋人同士だからな……。部屋でイチャついてるのを邪魔しちゃう悪いだろ？」

「そうね。ふふっ」

俺たちは並んで歩き始めた。

木陰の下を歩けば暑さと陽射しを同時に凌げるので、散策コースに入るまでの我慢である。

そう思ったのだが……。

背後から聞き覚えのある声が飛んできた。

「設楽先輩、待って下さいーい！」

振り返りなくなかったし、待ちたくもなかったが、設楽が足を止めて振り返ったので、俺も同じ動作をした。

「あ、中嶋君！」

案の定、俺たちを呼び止めた無粋者は、本山純太だった。手を振りながら小走りに駆け寄ってくる。何の用だよ、俺の恋路を邪魔すんなよ、気を利かせて放っておいてくれよ、今からでも遅くないから山荘に引き返しゃがれ、という心の嘆きを読み取る察しの良さは持っていないようだ。

「中嶋君と一緒になんて、どうしたんですか、先輩？ 男と一緒にいる場面を他人に見られたくないんでしょ？ だから、僕と別々に山

荘まで移動したっていうのに……」

口調に大いなる不満が練り込まれていた。

こいつ、どうやら設楽に恋心をいだいているらしい。俺と彼女が肩を並べて山荘を出る様子を見て、そうはさせじと追いかけてきたのだろう。

「ここは山の中よ。他人の目なんて気にする必要はないでしょう？」

「……………」

「あら、怒っているのかしら？　だったら、本山君も一緒に散策する？」

その、相手を気遣う態度からして、設楽は後輩の想いに気付いているようだ。

「は、はい！」

本山は嬉しそうに返事をした。

わかりやすい奴である。

仕方がないのでデートは終了。

まあ、いつものことだ。

さて、気持ちを切り替えて再出発するか。

【6・藤森保奈美】

午後四時になった。

予告通り梅本が部屋を訪れて一階の食堂に集合するようになったので、わたしと真悟君は来須兄妹と一緒に場所を移動した。

一階に下りる前に、中嶋君の部屋をノックしてみたけど返事はなかった。先に行ってしまったか、あるいは元々部屋に留まっていなかったのだろう。もしかしたら、お昼からこっち、本山君と一緒に行動していたのかもしれない。

食堂は、山荘の玄関を入って左の奥に位置している。

広さは客室の三倍程度だ。二十畳はあるだろうか。でも、内部に窓がない所為か、空気が嫌な感じに籠もっていて、肌触りが悪かった。なんだか場末のスナックを彷彿とさせる雰囲気を感じ出して、いるような……。できれば、ドアを全開にして換気して欲しいな、と思った。

わたしたちが姿を見せると、あちこちの席に散らばって話をしていた数名の男女が一斉にこっちを見た。

「おう、おめーら、適当な所に座れよ」

カウンターテーブルの上にお尻を乗せてキッチンの様子を窺っていた梅本が、こっちを向いて大声で言った。

わたしと真悟君は、中央のテーブルに陣取る中嶋君に手招きされたので、誘われるままに席に着いた。同じテーブルには、本山君と年上らしき女の子が着席していた。

来須兄妹は、入り口の左側に位置するトイレに近い長椅子に並んで座った。

他には、山荘の従業員である西脇さんが、キッチンから顔を出してニコニコしている。キッチンの方から美味しそうな匂いが漂ってきているので、彼女が夕食を作ってくれたのだろう。

その真ん前のカウンターテーブルにお行儀悪く腰掛けているのが梅本で、その横の席に髪の長いキツネ顔の男の人が座っていた。

あと、食堂の左奥に設置されているカラオケ機材のすぐ前の席に二人の女の子が座り、わたしたちの方を見て何やらこそこそと囁いていた。

今、食堂内には、男女合わせて十二名が存在している。

「おーっし、これで今日来るメンバーは全員揃ったな？　まだ来てねー奴はいるか？　一緒に来たはずなのに姿が見えねーって奴はいねえか？　どうだ、上妻？」

梅本が大きな声で、長髪の男の人に確認を取った。

長髪の人は、上妻という名前らしい。

「問題ない。本日到着予定の人間は全員揃ったようだ」

「よしよし。んじゃあ、さっさと飯を食うぞ。それで、その後、恒例の肝試しだ」

梅本は有無を言わさぬ身勝手さで夕食後の予定を組み、西脇さんに配膳を頼んだ。

「えーっ、肝試し、今年もやるの？　怖いし、虫に刺されるから、私、嫌だなあ」

カラオケの前に座っている女の子二人の片方が悲鳴じみた声を上げた。

きつと、去年もこのイベントに参加して肝試しを強制させられたのだろう。わたしもお化けが怖いので、彼女の気持ちは痛いほど良くわかる。でも、もう一人の女の子は満更でもなさそうな顔をしていた。

「肝試しは親交を深める為の恒例行事だから、不参加は認められない。そう去年も説明したはずだろう、緒方さん？　ほら、隅っこで文句を言っでないで、一緒に飯を食べよう」

上妻がパンパンと手を叩いて、不平を口にする女の子を急かした。緒方と呼ばれた女の子は、もう一人の子に促されると、盛大な溜め息を吐いて席を立った。憂鬱な想いが表情から滲み出ている。

「さあ、俺たちも早く飯を食おうぜ。今日はたつぷりと運動したから、すんげー腹減ってるんだ。テーブルどころか床板まで囓っちまう勢いだぞ」

中嶋君が椅子を蹴る勢いで席を立った。

わたしたちも、カウンターでお料理の載ったお盆を受け取って、席に戻った。

夕食のメニューは、純和風だ。白米にお味噌汁。醤油だれのハンバーグと鳥胸肉の照り焼きにきんぴらごぼうが添えられている。見た目、香り、量、実に申し分ない料理だった。女のわたしには、ちよつと量が多いくらいである。

全員揃つての「いただきます」はしないようで、それぞれが勝手に食べ始めた。

わたしは早速、きんぴらごぼうに箸を伸ばした。一口ぱくり。うん、美味しい。味と歯ごたえが素晴らしく絶妙だ。

中嶋君はご飯を食べながら、同席している女の子を紹介し、わたしたちを彼女に紹介した。

彼女の名前は、設楽松美。本山君と同じ宮古川高校の生徒で、現在三年生。陸上部の部長だそうだ。でも、運動部に在籍しているようには見えない華奢な体つきをしている。全体的雰囲気は、放課後に図書館で勉強していそうな優等生っぽい美少女である。礼儀正しくて物腰が柔らかく、女性のわたしにも笑みを出し惜しみしない。まさに、理想的先輩像だった。

「意外と言ったら西脇さんに失礼だけど、こんな山荘で出されるお食事にしては美味しいでしょう？　どうかしら？」

設楽さんが口許を手で押さえ、囁くような小声で訊いてきた。西脇さんの耳に届かないよう憚ったようだ。

「はい。凄く美味しいです」

わたしは正直に答えた。

「西脇さんはお料理上手なのよ。でも、お料理のレパートリーには乏しいわね。なにせ和食オンリーなもの。中華料理やフランス料理

は元より、ジャンクフード的な食べ物もからつきし駄目みたい。だから、ここにいる間は和食だけで我慢しなければならぬわ」

「わたしは和食大好きですから、一週間くらい続いても平気ですよ。設楽さんは和食が苦手な人ですか？」

「いえ、好きよ。私は毎日和食でもいいくらいね。ふふっ」

「それにしても箸の動きが鈍いようですね」

真悟君が指摘した。

設楽さんは自嘲とも苦笑ともつかない微妙な笑みを浮かべ、眼鏡のフレームに指を当てて、くいつと持ち上げた。

「肝試しの後、みんなでお酒を飲むから、食べる量を制限しているのよ。私、太りやすい体質だから、カロリーの過剰摂取を控えないと大変なことになってしまうの。ふふっ」

「酒？ 合コンするってわけだな？」

中嶋君がにやりと笑った。

彼はクラスでも名の知れた合コン王である。放課後、駅前のカラオケ店で他校の女生徒と一緒にいる姿を何度か見かけたことがある。悪い噂は聞かないけど、今回のイベントに参加した女の子は綺麗な子ばかりなので、ゲームにかこつけてえっちなことをしよう、とか強制猥褻ギリギリの欲望をいだいているのかもしれない。

「お酒ですか……。楽しみですな」

真悟君が僅かに顔を綻ばせた。

「和泉君はお酒が好きなのかしら？」

設楽さんは鶏肉の照り焼きを突つつきながら訊いた。

「心の友です」

「ふふっ。未成年者の台詞としては甚だ不適切ね」

設楽さんは口許を押さえて笑う。

「だけど、気を付けた方がいいわよ。女の子を限界以上に酔わせて、自分の部屋に連れ込んで淫らなことをしようというお馬鹿さんもあるみたいだから、藤森さんから目を離さないことね」

「その点は、ご心配には及びませんよ」

真悟君は穏やかに微笑んだ。そして、話題をお酒からイベント参加者へと変更した。

「設楽さんは一昨年からこのイベントに参加しているそうですが、今回のメンバーに顔見知りの人はいますか？」

「それは当然いるわよ。カウンター席で食べている四人の中で、男の子二人、梅本君と上妻君は中学時代から参加しているそうよ。現在高校三年生らしいから、もう四年以上連続で参加しているベテランさんね。この周辺の地理にも詳しいみたい。でも、毎年女の子を酔わせて淫らな行為に及ぼうとするから、ターゲットになった女の子は嫌な思い出しが残せずに、翌年の参加を拒否してしまうそうよ。そして、女の子二人、おかつぱ頭で背が高い方の子が五十嵐さんで、くせ毛のロングで緑のパーカーを着ている可愛い方の子が緒方さんよ。二人とも去年からの参加だと思うわ。それに、有名な女子校に通う良家のお嬢様らしいわよ。あとは……知らない顔ね」

「その中に要注意人物は存在しますか？」

「上妻君は相当に手が早いわよ。去年、一緒に参加した私の友達も迷惑していたから」

「それって、江藤先輩のことですよな？」

本山君が確かめるように訊いた。

設楽さんは小さく頷いた。

「俺は、あの梅本って人がヤバそうに見えるな。嫌がってる女を強引に自分の部屋に引っ張り込みそんな悪者っぽい顔してるだろ？」

横目でカウンター席を見て、中嶋君が言った。

人を外見で判断するのは良くないが、梅本は確かに危ない雰囲気のある男の子だ。あの人にしつこく言い寄られたら、わたしも来年の参加を拒絶するだろう。

「そうでもないわよ。梅本君は態度こそ横柄だけど、一人で暴走する度胸は持っていないと思う。危ないのは上妻君よ」

「実際に何らかの被害を受けましたか？」

真悟君が訊くと、設楽さんは手にしていた箸を置き、きつく眉根

を寄せた。

「彼は何気なく女の子の体に触るのが上手いのよ。肩に手を回したり、手を握ったり、頬を擦り寄せたり……。しかも、お酒が進むにつれて行為がエスカレートしていくの。私は抱き寄せられる程度で済んだけど……」

「江藤さんはそれ以上の被害を？」

「ええ、そうね……。でも、あの子以外にも悲惨な目に遭っていた子もいたわよ。五十嵐さんはキスされていたみたい。よくも、ああして仲良く談笑してられるなあ、って感心してしまうわね」

設楽さんは、カウンター席で楽しげに夕食を摂っている四人に、嫌悪に近い視線を向け、明確な皮肉を込めて言った。

「キス？ そりやまたすげーな。ジャンケンキスゲームとかするの
か？」

前のめりになる中嶋君。

そういうところは好きじゃない。キスを強制させられる女の子の
気持ちを感じて欲しい。

本山君も顔を輝かせないでよ。

「本山君、中嶋君、顔が緩んでいるわよ。そんなにキスしたいのか
しら？」

微笑んだまま刺々しい口調で言い、一転して怖い顔で二人を睨み
付ける設楽さん。邪な期待に心弾ませる年下の男の子に対して、若
干の憤りを覚えたようだ。

「そりや、したいに決まってる」

「好きでもない女の子と？」

「おかしいか？ 良い女とキスできるんだから、普通は喜ぶだろ？
それに、王様ゲームとかジャンケンキスゲームは合コンの定番だ
ぜ。それが嫌なら参加しなきゃいいんだよ」

「そうそう。僕も中嶋君と同意見だよ」

「二人とも最低ね」

設楽さんの吐き捨てるような言葉。

非難を受けた二人の男の子は慌てた。

「い、いや、今のは一般論だ。俺の意見じゃねえ。誤解しないでくれ」

「そ、そうそう。僕だって……本心からの同意じゃなくて、もっと全体的な……あーうー……えーつと……」

しどろもどろ。

そんな二人の弁解を無視して、設楽さんは視線を真悟君に向けた。「和泉君はそういうゲームに興味ないのかしら？ 恋人同伴だから嫌でしょう？」

「そうですね。保奈美と二人だけでいかがわしいゲームを楽しむ分には構いませんが、他者を交えてのゲームは我慢できません。まして、彼女がボク以外の男性とキスもしくはそれ以上の行為に及ぶなど言語道断です。今、少し想像しただけで、ボクは言い知れない苛立ちを覚えています」

嬉しい台詞だった。できれば、目を見ていつて欲しいところだ。

でも、贅沢は言わない。

設楽さんはくすつと笑った。

「和泉君は、飲み会には参加しないつもりなのかしら？」

「無論、参加しますよ。ですが、下らないゲームに加わる意思はありません。しかし、保奈美が望むのであれば、ボクに否やはありません。ただ全知全能を駆使して、彼女を邪な企みから守るだけです」

「独占欲が強いよね」

「こいつの独占欲は異常だ。病的なんだ。藤森をちょこつとえろい冗談でからかっただけで、殺意の込められた視線で斬りつけてくるんだぜ。マジで」

中嶋君が、箸先で真悟君を指して言った。

言われた側は淡い笑みを見せただけで、ハンバーグに箸を入れている。

「私がお付き合いしている恋人だったなら、彼の独占欲は嬉しいものよ。そうでしょう、藤森さん？」

「はい」

わたしは明快に返事をした。

真悟君に独占されたいし、して欲しい。それを重荷に感じない。苦痛にならない。窮屈さも覚えない。あるのは喜びだけ。独り占めされて大満足である。

「そういう相手がいる君が羨ましいわ」
わたしは照れのため顔を俯けた。

しばらく黙ったまま夕食を味わった。

「そんじゃ、設楽さんは？　今、付き合ってる男とかいねえの？」
中嶋君がお味噌汁の中身を浚いながら、さり気ない感じに訊いた。その姿を見て、あれっと思った。

設楽さんに好意をいだいているのは間違いないけど、不思議といつものギラギラ感がない。当たって砕ける的な強引手法が失敗してばかりなので、方針を百八十度転換したのだろうか。

「さあ、どうかしら……」

設楽さんは曖昧に微笑んだ。

「まさか、意中の男とかいるのか？」

「ふふっ、どうかしらね」

思わせぶりの笑みを浮かべる設楽さん。

それはつまり、恋人はいないけど好きな男の人はいる、と言っているも同然だった。

中嶋君は小さくない衝撃を受けた様子で、頬を引きつらせた。でも、それ以上に、本山君がショックを受けていた。そんな話は聞いていませんよ、という顔で先輩を見ている。

そんな二人の男子に救いの言葉を掛けず、設楽さんは「ごちそうさまでした」と呟いて箸を置いた。

料理には殆ど手をつけていない。

本山君も白米とハンバーグを残している。

二人はいつたいどれほどお酒を飲むつもりなのだろうか。

高校生の飲酒は色々な意味で危険が伴うので、程々にするべきだ
と思う。

お料理を作ってくれた西脇さんに申し訳ないので、わたしはお盆
に乗っている品を完食するつもりである。真悟君も同じ思いで、米
粒一つ残さずに食べたに違いない。

全員が食事を終えた。

【7・藤森保奈美】

食後、梅本の指示に従って食器をカウンターに運び、中央のテーブルに集合した。

「そんじゃ、肝試しの説明をするぞ」

「いきなり？　ちよつとインターバルを置きましょうよ」

「そつだそつだー！」

五十嵐さんが食後の休憩を提案をし、緒方さんが万歳をして甲高い声で同調した。

でも、即座に却下された。

「組み合わせの籤引きをする時間があるから、十分に休憩できるだろ。早めに肝試しをこなして、じつくりと酒を飲もうじゃねーかよ」
手酌のジェスチャーをしながら梅本が言った。

「いくら恒例行事だからと言って、無理に肝試しをする必要があるのかしら？　女の子の大半が嫌がっているのだから、今年は中止もしくは全員が揃う明日に延期するべきではないかしら」

設楽さんが手を挙げて素晴らしい意見を述べた。

個人的には大賛成である。でも、真悟君との肝試しはちよつとそられる。きゃーとか可愛く叫んで、思いつき抱きついたりしてみたい気持ちもあるのだ。だけど、彼以外の男の子とペアになった場合、ただ怖いだけ、という最悪の肝試しになること請け合いである。その可能性の高さを考慮すると、肝試しを中止するべきだ。

梅本は腰に手を当て、にやつと笑った。

「俺たちも別に嬉々として肝試しをやるわけじゃねーけど、これはいわゆる慣習つてやつだからな。やらねーと味気ない」

中止案はあえなく却下された。

「それで、どうやってペアを決めるの？　去年みたく籤引き？　それとも、ジャンケンでもする？　私としては、せつかくイベントに参加しているのだから、男女ペアになるような組み合わせにして欲

しいわね」

「そう言えば、五十嵐さんは去年の肝試しで西脇さんと組んだんだっけ？」

上妻が可笑しそうに言った。

五十嵐さんは、つんと顎をもたげる。

「日頃抑圧された学園生活を送ってる私たちが、こんなイベントに参加してまで同性と仲良くするなんて馬鹿馬鹿しいのよ。そんなイベントなんか参加する意味ないでしょ。だから、絶対に男女のペアになるような抽選方法にして欲しいわけよ。上妻君、おわかり？」

「承知していますとも、お嬢様」

上妻はそう言って、馬鹿丁寧にお辞儀をしてみせた。そして、梅本に顎をしゃくって合図を送った。

梅本はカウンターの隅に置いてあったハーフサイズの段ボール箱を引き寄せ、テーブルの上に置いた。

「この段ボール箱を見る。五十嵐さんに言われるまでもなく、今年の肝試しは男女ペアを前提とした抽選を行うつもりだ。西脇さんを含めると、男六人、女六人で丁度いい。ってことで、この段ボール箱に《1》から《6》までの数字を記した紙を入れて、先に女が引き、自分の番号を決める。それで、もう一度紙を段ボール箱に戻して、次に男が引き、番号が合った者同士がペアを組むってわけだ。これなら絶対に男女のペアになるだろ。どうだ、五十嵐さんよ、文句あるか？」

「ないわ」

「他に文句のある奴はいるか？」

梅本は一同を見回して訊いた。

誰からも文句は出なかった。

上妻は、あらかじめ用意してあった《1》から《6》までの数字が書いてある紙を一度みんなに見せ、それから一つずつ四つ折りにして段ボール箱の中に放り込んだ。

「よし、そんじゃあ、まず女が籤を引いてくれ。ああ、前もって言うておくが、引いた数字が肝試しに行く順番だ。それについて、後で文句言つなよ」

「一回きりのぶつつけ本番勝負ね？」

五十嵐さんが確認した。

上妻は頷いた。

「その通りだよ」

「よし、頑張るぞおっ！」

何を頑張るのかは不明だけど、来須妹は両手を握り締めて気合いを入れた。

一番目に引いたのは、緒方さんだった。左手の袖を肘まで捲り、丸く口を切り開けられた段ボール箱に差し込む。そして、ごそごそと中を掻き混ぜて、小さく唸った。

「うーん、最初なのに《1》を引いちゃったら最悪だよねえ。みやびとしては、《5》辺りを引きたいなあ。うーん、でも、《3》も捨てがたいかな……」

「おいおい、緒方さんよ、中は見えねーんだ。迷っててもしかたないぞ。ちゃっちゃんと引いてくれよ」

「しーっ。梅本君は黙っててよ！」

「へいへい」

「そんじゃあ、改めてー……」

緒方さんは目を瞑り、細く息を吐きながら、中身を探った。

なんか物凄く意識を集中してますけど……心眼を開くつもりですか？

「これだあ！」

緒方さんは気合いと共に紙を引いて、みんなに見せた。

四つ折りの紙を開くと、そこには《1》の数字が記されていた。

ナイス、緒方さん、と他の女の子全員が内心で拍手しただろう。

「ひーっ、本日のラッキーカラーは緑って書いてあったのにー。それに合わせて緑のパーカー着て来たのにー。どうして、よりもよ

つて《1》を引いちゃうわけえ?」

頭を抱えて半泣き顔を作る緒方さんの肩を、五十嵐さんは慰めるようにぼんぼんと叩いた。

「ほらほら、みやび。嘆いてないで、次、私が引くから、そこをどきなさい」

「ひゅん。由利っちの冷酷魔女! もうちよつと優しくしてちょーだいよお!」

「はいはい、可哀想でちゅねー。あとで頭を撫で撫でしてあげまぢゅよー」

「うわああん、ひどいよお。全然心が込められてないじゃんかあ! 目が笑ってるしい! 同情するなら順番代われえー」

「文句なしの一発勝負だから駄目よ。運のない自分の星を恨むのね」
「ひゅん!」

二人の掛け合いはともかく……、五十嵐さんは淡泊な性格らしく、緒方さんのように時間をかけずに、ぱつと手を差し込み、ぱつと紙を引いた。

「……《5》ね。まあ、順当な番号だわ」

「悪運だあ! 魔女だあ! 火炙りだあ!」

「一番目に《1》を引く方が悪運の持ち主だと思うわよ、魔女っ子みやびちゃん」

「むづ……」

「さあ、次は誰が引くの?」

緒方さんを閉口させておいて、五十嵐さんは残った女の子を順に見ていった。

来須妹に目を向けるが、固定せずにすぐ逸らし、わたしと設楽さんを見比べるように視線を左右させる。そして、設楽さんを見据え、薄く微笑んだ。

「えー……、確か貴女、設楽さん……でしたよね? 次は貴女が引きなさいな」

「わかりました」

設楽さんは段ボール箱の前に移動して、徐に眼鏡を外した。そして、目を細めて手を差し込んだ。がさがさと中身を掻き混ぜて、さっと引く。五十嵐さんほどではないが、思いきりの良い人である。彼女は紙を開いて、まず自分だけ番号を確認し、うんと頷いてからみんなに見せた。

「私は《4》です」

設楽さんは静かに告げて席に着いた。

次は、わたしの番である……。

そう思ったら、横合いから来須美架が割り込んできた。

「保奈美ちゃん、タンマで待ったあつ！ 私が先だよっ！　それで、どっちが大きな数字を引くか勝負だあつ！」

鼻先に人差し指を突きつけられ、不適な感じに挑まれた。

突然、超ハイテンションで騒ぎ始めた女の子を見て啞然とするみんな。美架はそれが全く気にならないらしい。緒方さんも結構なテンションの持ち主だけど、彼女には到底敵わないだろう。

しかし、また《勝負》ですか……。

「美架、さっさと引きなさい」

来須兄が急かした。

「了解しましたあつ！」

美架は満面の笑みで敬礼し、「すたこらさっさーっ」とか言いながら段ボール箱の前へ走っていった。勿論、今もぶかぶかの黒い半袖シャツ一枚という破廉恥極まりない姿なので、スカート(?)の裾部分がひらひらして太股の全容が露わになってしまっている。あえて下着が見えないギリギリを意識して太股を見せているのだろうか？　その服装が故意か否かは不明である。

「じゃあ、引くよあつ！」

美架は一度拳を天井に向かって突き上げてから、勢い良く段ボール箱に手をつっ込んだ。そして、大声で叫ぶ。

「ろおくうばあん……来いっ！」

彼女は気合い十分に手を引き抜き、高々と紙を掲げてみせた。

「さあ勝負だよっ、保奈美ちゃん！これに《6》って記されてたら私の勝ちっ！それ以外なら保奈美ちゃんにも勝つチャンスがあるんだよっ。いいねっ？」

「……………」

好きにして下さい。

「んーと…………。ああ、なあんだ、《3》だよっ！残念無念だなあっ！これで保奈美ちゃんが負ける確率は五割だねっ！つまり五分五分の勝負だよっ！」

紙を広げてみて、美架は酷くガツカリした表情を浮かべたが、それも一瞬のこと、すぐに笑顔を取り戻して、わたしを手招きした。
「んじゃあ、保奈美ちゃん、最後の紙を引いちゃってよっ。そんで、どっちが幸運の持ち主か決着をつけよっ！」

「……………」

わたしは頷いて席を立った。

美架が勝負などと言って騒ぐので、変な風に注目を集めている。恥ずかしい。きっと、わたしはこの子の友達とされているのだろう。それはまだ我慢できる。でも、同類と思われるいたら悲しいなあ…………。

まあ、彼女との勝負はどうでもいい。

重要なのは、誰がペアの男の子か、である。この際、真悟君しか嫌だ、と鷺沢は言わない。評判の悪い梅本と上妻の両名以外であれば誰でもいい。中嶋君なら安心だし、本山君でもいいだろう。来須兄はちよつと嫌。だから、神様、お願いします。どうか、彼らだけは…………。

わたしは心の中で祈りを捧げつつ、段ボール箱に手を入れた。

箱の中には、当然と言えば当然だが、二枚の紙が入っていた。手触りの感じだと、今触っている紙が《2》で、残りが《6》だ。うーん…………。違うかな？わたしって、そっち方面の才能ないし…………。まあ、どっちでもいいか。どうせ、この引きで即ペアが決まるわけじゃないから。

わたしは最初に手にした紙を放して、掻き混ぜ直し、心を無にして、適当に紙を選んで引き出した。

これだっ！ えいっ！

手にした紙を広げる。

数字を確認。

ハズレでした。

「……《2》です」

「いえいつ！ 私の勝ちいつ！」

勝ち名乗りを上げる美架。

彼女との勝負なんてどうでもいいと思っていたのに、なぜか口惜しかった。

最後は西脇さんの番だけど、残りの紙は《6》しかないので自動的に決定。

でも、一応、梅本が紙を引いてみんなに見せた。

「そんじゃ、次は男の番だ。同じ要領でちゃっちゃと引いていくぞ。まずは……中嶋だったか？ おまえが引け」

「おうっす！」

梅本に促された中嶋君は、意気揚々と段ボール箱に歩み寄り、右手を数度開閉させてから穴の中に差し込んだ。

「この面子なら《6》以外の全てが当たり籤だよな。六分の五つてわけだ。俺が引けないわけねえよ」

西脇さんの耳がないのをいいことに、中嶋君が酷い台詞を零した。彼の気持ちもわかるけど、口に出すと女の子に対する印象が悪くなると思う。それを理解して自己改善しなければ、我が世の春は訪れないだろう。

中嶋君は手を引き抜き、紙を開いてみんなに見せた。

その紙には《3》と記されていた。

「俺、《3》だぜ。誰が俺のパートナーだ？ 藤森じゃねえよな？もしかして、設楽さんじゃねえか？」

会心の笑みを見せる中嶋君。

しかし、その顔は一秒で引きつった。

「はいはーいっ！ 中嶋君のパートナーはここでーすっ！ 来須美架がペアの女の子だよっ！ 宜しくう！」

今にも抱きつかん勢いで手を挙げて、中嶋君の前に駆け寄る美架。

「え？ あ、お……おう、宜しくな」

絶句する軽薄男。

まさか、この総天然色のハイテンション娘とペアを組まされることになるとは予想だにしていなかったようだ。でも、決して嫌がっていない。無闇にはっちゃけているけど可愛い女の子だから忌諱するまでもない、とたかを括っている。きっと痛い目に遭って帰ってくるだろう。来須美架を甘く見てはいけないのだ。

次に籤を引いたのは本山君だ。彼は先輩の設楽さん同様、さつと手を差し込んで、すぐに紙を掴み出した。そして、みんなに見せた。

「えっと……僕は《5》です」

「おう、五十嵐さんとペアかよ。おめーは可愛い面してっから氣い付けろよ。隙を見せると食われるぜ。ぐははは！」

本山君の肩をバンバン叩いて笑う梅本に、五十嵐さんが一言、「下品だわ」と呟いて鼻面に皺を寄せた。

更に大笑いする梅本。

それを無視して、五十嵐さんは問い掛ける。

「私、五十嵐由利よ。君は？」

優しさの中に淫靡さを塗した口調で訊かれ、本山君は顔をさーつと紅潮させて、直立不動で名乗った。

「ぼ、僕は本山純太です」

「純太君ね……。ふうん、名前通りに純情そうな子ね。今年は当たりかしら。楽しい肝試しになりそうね」

火を噴きそうなくらい顔を真っ赤に染めて、純情少年は頷いた。

本山君が着席すると、入れ替わりで来須十路が席を立った。

「それでは、俺が次に引かせてもらおう。構わないか？」

「おう、構わないぜ。っていうより、おめーが先に引け。次が上妻だ。それで、その次が眼鏡の色男……和泉とかいう名前だったか？ おめーだ。それで最後が俺って順番で行くぞ。いいな？」

梅本と上妻が順番を指定した。

なぜだろう？ 籤を引く順番に意味はないような気がするけど……。

真悟君は僅かに微笑んでみせ、了解の意思を示した。

来須十路は、手を段ボール箱に入れ、何度か中身を掻き回したが、そこで一旦手を止め、厳しく眉をひそめた。ちらつと梅本たちに視線をやり、続けて真悟君を見る。そして、小さく溜め息を吐き、「なるほど……」と何かを納得して紙を引いた。

「番号は……《4》だ」

そう言ってみんなに見せる。

来須十路は設楽さんとのペアだ。

わたしの相手は、まだ決まっていない。

あと残っている男の子は真悟君と……梅本と上妻のコンビだけ。

うわあ、これって天国と地獄の自動三択だよ。心の中で頭を抱えて嘆く。しかも、三分の二がハズレ。

非常にマズイ展開である。

「よし、次は俺だね」

上妻が段ボール箱を引き寄せ、ずぼつと勢い良く手を突っ込んだ。目を閉ざして慎重な様子で中を探り、勢い良く手を抜く。そして、先にこっそりと自分だけ数字を確認しておいてから、みんなに紙を見せた。

「俺は《1》だ」

すると、緒方さんが席から飛び跳ねて奇声を発した。

「わあ！ 上妻君も運ないねー。でも、みやびとペアだよ。嬉しい？」

「ああ。最上級に可愛い女の子と組めて嬉しいよ。俺、きつと運が

いいんだな」

「えへへ。そ、そうかな？ でも、一番目に出発なんだよ？」

「俺が一緒なら怖くないよ」

「ま、まあ、そうかな」

緒方さんは後頭部に手を当てて照れを表現した。

なんか、既に、この時点で上妻の術中にはまってしまっている。
いいのだろうか？

そう心配していると、横で真悟君が呟いた。

「これは意外な展開だな。あの引きに何の意味があるのだろうか……」
最良の展開になりつつあるのに、真悟君は怪訝な表情を作っている。

何それ、わたしとペアを組みたくないって言うの？ それとも、
緒方さんと組みたかったとか？ そんなわけないよね？ そう心
中で問い質す。

でも、次の彼の台詞で、わたしの疑惑は綺麗サッパリ消滅した。
「理由が何であれ、彼らが馬鹿で助かった。保奈美、ボクは《2》
を引いてくるよ」

真悟君はそう宣言して席を立ち、一度カウンター越しにキッチン
を覗いて、西脇さんに短く声を掛けた。そして、振り向いて、段ボ
ール箱に左手を伸ばす。

彼は中身を探りつつ、右手で眼鏡を外した。

それを見て梅本が鼻を鳴らした。

「何だ、急に眼鏡を取りやがって。何かのおまじないか？」

「はい。ボクは眼鏡を外すと神通力が使えるのですよ。この程度の
段ボール箱であれば、十秒ほどで透視できます」

真悟君は唇の片側を微かに吊り上げて淡く笑んだ。

その顔は、彼が相手をからかう際に意識して作る表情である。

でも、わたしだけしか気付かない小さな変化だった。

中嶋君も、「おい、和泉、カッコつけてんじゃねえよ！」と野次
を飛ばしている。

梅本は嘲笑った。

「はっ！ 神通力だと？ 笑わせるぜ！ そんなあ、おめーは確実に《2》を引くことができるわけか？」

「はい」

「ぐははは！ 面白れえ、引いてみせろよ」

「そのつもりです」

真悟君は段ボール箱の穴から左手を抜いた。そして、もったいつけるように右手だけで眼鏡を装着し、髪を整える。

「おい、とつとと見せやがれ！」

急かす梅本。

真悟君は大きな掌の中で四つ折りの紙を開き、みんなに数字を見せた。

「おいおい、マジかよ……」

中嶋君の呻き声。

その紙には《2》と記されていた。

わたしの恋人は、わたしを喜ばせる為の魔法が使えるのだ。
本気でそう思った。

第二章 肝試し 【1・中嶋剛志】

午後六時、肝試しがスタートした。

ルールは単純明快だ。それぞれのペアが定められた場所に向かい、蛍光塗料が塗られている《ビール瓶》を見つけて持ち帰る、というものがある。

梅本と上妻が昼間のうちに各場所を回り、ビール瓶を設置しておいたらしい。

ご苦労なこった。そうまでして肝試しがしたいのか、と言いたくなるぞ。それに、各ペアが別々の場所に向かうなら、出発する順番を決める意味はないんじゃないかねえのか？

俺と来須美架のペアは、三番目に出発することになっている。

目的地は、山を少し登ったところにある《石碑》だ。

日没後に山登りをするはめになるのは予想外だが、デートと思えばかったるさも吹き飛ぶってものだ。俺としては、藤森が設楽のどっちかとペアを組む予定（願望）だったけど、手が勝手に《3》を引いちまったんだからしょうがない。小太りのオバチャンと組まされなかっただけマシだし、年下とは言え、ブッチギリの美少女とペアを組めたから、まあ結果オーライだろう。文句を言うとはチが当たっちゃう。

来須美架は、どこかしら和久井弘美に似た要素を持つ、天然系の美少女だ。つまり、根っからの騒動屋ってこと。自分が楽しむ為なら他人の迷惑を省みず、周囲の人間を強制的に大騒ぎさせて、結果として全員を楽しませちゃうという存在なのだ。そういう女は嫌いじゃねえ。でも、何事も緩急が大切だ。騒ぎっぱなしは、祭好きの俺でもキツイ。まだスタートも切ってねえのに、いやーな疲労感を覚えているのだ。

この女、五秒として口を閉じていられない性分なのか？

五分でいいから黙っていてくれ、と強く言えない自分が情けない。
いや、それは問題じゃねえか……。

今問題にすべきは、内面じゃなくて外見だ。

無論、容姿のことじゃねえ。

言語道断レベルの、着衣のこと。

全く……、こいつのえろっちい服装は何なんだ？ ぱんつの見えないギリギリを保って男心を撥ってやろう、という小悪魔的悪乗りなのか？ まさか、露出狂ってやつか？ そういうわけじゃなさそうだが、避暑地に来て抑圧されてた乙女の純粋な心が解放された結果の服装ってわけでもねえだろう。まあ、一応、ワンピースと言ってもおかしくない程度にはデカイサイズのシャツだし、目の保養にはもってこいだから、注意しないでおくが……。

今、俺は、玄関前の石段に腰を降ろして、スタートの合図を待っている。傍らには、同じく石段に座り、足をバタバタさせて無意味に騒ぎ立てている美架。たぶん、真正面から見ると、彼女のぱんつは丸見えだろう。でも、それを全然気にしていない。注意を喚起する為にも、真ん前にしゃがみ込んで股間を凝視してやろうか、とも思ったが、変態扱いされちゃ敵ねえから止めておいた。

一組目の上妻と緒方は、二分前に山荘を出ていた。

三分後には和泉と藤森のペアが発射し、その五分後に俺たちのペアが発射するんだそうだ。

どうせ目的地がバラバラなんだから、全ペア同時に出発しても良さそうなんだが、恐怖に震えるペア同士が結託して一緒に行動する、という不正を犯させない為の配慮らしい。

がきんちよじゃあるまいし、そんな不正を犯す臆病者なんかいねえよ、と思ったが、藤森と緒方はマジでびびってるみたいだ。

おいおい、高校生にもなって夜道が怖いってのか？ 夜一人でトイレに行けねえってのか？ それとも、何かトラウマを抱えてるっていうのか？ その調子で大人になって大丈夫なのか？

「ねえっ、中嶋君。山道の途中でお化けとか出るかなっ？　こういういとこだと、山姥とか化け猫とかが定番だよなっ。あつ、あと、宇宙人とかも出ちゃうかなっ。山と言えばUFO、湖はネッシー、川はドザエモン、海は人魚だよなっ？」

美架が戯言をほざいた。

そんな定説は聞いたことがねえ。それに、ネス湖のネッシーは有名だが、湖に出る化け物の代名詞じゃねえだろ。

「俺はお化けを見たためしがねえから、何とも答えらんねえよ」

「えっ、うそっ！　UFOは？　謎の地底人は？　ぼくドザエモンは？　さすがに水死体は見たことあるでしょっ？」

「ねえよ。一般市民がそうそう水難事件の現場に居合わせるかよ。

おまえはUFOとか人魚を見たことあるって言うのか？」

「ないよーっ」

「おいおい……」

「んーでも、水死体はよく見るよっ」

「おいおい、マジで？」

「天才美少女探偵は、警察の要請を受けて難解な殺人事件に立ち会うから、死体を見る機会が多いんだよっ」

おまえ、いったい何者だよ……。

っていうか、天才美少女探偵って何？　夏の暑さで脳味噌をやられちまったか？　それとも、学校生活に深刻な悩みを抱えてて、銀河の彼方に現実逃避してるのか？　探偵もののドラマを見過ぎて自己暗示にかかっちゃまったのか？　それに、それって自称だろ？　和泉みたいな警察公認の探偵ってわけじゃねえよな？

「おまえ、警察沙汰を頻繁に起こしてるっていうのか？　そんな格好だから、公道を歩く度に補導されちまうんだろ？」

「ぶーっ！　違うよーっ！　中嶋君は何を聞いてたのかなっ！　私は警察に協力して犯人を捕まえる側だよっ！　頭の固い県警のおじさんたちが解決できないで悩んでる事件を、天才美少女探偵の私が颯爽と登場して、速やかに解決するのですう。来須兄妹は、中部地

方じゃ物凄く有名なんだよっ。すごいでしょっ？」

「……まあ、色んな意味ですぎえな」

「あれれーっ！ それ、信じてない顔だぞっ。私の天才ぶりは理解できるけど、お兄ちゃんの超天才ぶりは理解したくないってことかなっ？ それって、妹としてすっごく不本意なんだよっ！」

可愛らしく頬を膨らせる美架。

「おまえの兄貴について、俺は一言も述べちゃいねえだろ……」

「あつ、もしかしてえ！」

美架は小さな顔を急接近させて、にーっとな性悪な天使の笑みを浮かべた。

「天才美少女探偵に一目惚れしちゃって、もじもじしてる？」

「んなわけねえよ」

俺の表情から何をどう解釈したのか知れないが、誤解もいいところである。

「あつ、それじゃあ、二人きりになったところで押し倒そうとか計画してるんだねっ？」

「阿呆う！」

無性にこいつの後頭部をひっぱたきたくなったが、可愛いから許そう……。

「おーう、おめーら、出発しろ！」

腕時計を睨んでいた梅本が叫んだ。

いつの間にか和泉たちは出発してしまったらしい。

イチヤイチヤするなよ、と一声掛けておこうと思ってたのに……。

「よーっし、頑張るぞおっ！」

美架は俊敏な動作で立ち上がり、尻についた砂をぱんぱんと手で払いながら、威勢良く気合いを入れた。

ただ夜道を歩いていってビール瓶を拾ってくるだけのイベントなんだから、そんなに意気込む必要はねえぞ、と思ったが、言葉にはしない。こういう場合は、一緒になって馬鹿をやるべきだろう。そ

れが楽しむ為のコツだ。

「さあ、中嶋君、冒険の旅に出発であつ！」

「よっしゃ！」

俺たちは夕暮れの山道を登り始めた。

目的地に行つてビール瓶を拾い、山荘に戻つてくるまでの所要時間は約一時間だそうだ。

しかし、実際には足の遅い女を連れての行軍なので、二時間近くかかちまうんじゃないかと俺は踏んでいる。

これじゃ、肝試しというより、夜のトレーニングだ、と文句は言わない。飲酒前の腹ごなしにはもってこいだし、可愛い女とイチヤつくチャンスだ。わざと怖がらせて抱きつかせるのも一興である。

それとも、さつき美架が言つてたみたく、マジで押し倒しちまうか？ 彼女の格好が格好だけに、襲つても罪に問われねえかもしれない。いや、そんなわけねえか……。

「ねえねえ、中嶋君、真悟君でどんな男の子なのかな？」

山荘を出て一分も経たず美架が質問を吐いた。

興味の対象が俺じゃなくて和泉であることに若干の不満を感じるが、その辺は俺の会話テクで話題の対象者をさり気なく変更すりゃいいだけである。

「あいつは見た目通りの色男だ。女に優しくて、腕っ節も強いし、度胸もある。あと、頭も良いな。学年でぶつちぎりの一番だ。男の俺から見ても、欠点なんて見当たらねえよ。だから、女にモテモテさ。でも、あいつ、藤森にベタ惚れだぞ。和泉を狙つてんなら止めとけ」

「そんなこと百も承知だよ！ 私が聞きたいのは、真悟君の人間性なんだよっ」

「人間性？」

俺は首を傾げた。

そして、内心で眉をひそめた。なぜなら、その質問が、以前あい

つの元親友からされたのと酷く似ていたからだ。その時は、あいつが転校してきて間もなかったから、答えられなかったが……。

「あいつが偽善者じゃねえことは確かだな。和泉は誰にでも分け隔てなく優しく接する変わり者なんだ。ブスな女にも親切だし、むかつく男を相手にしても嫌味なしで礼儀正しい奴だ」

「ふーむふむ。つまり良い人かなっ？」

「まあな。女の目には理想の恋人像として映るみてえだぜ」

「あのルックスで芯から優しかったら、女の子はイチコロだねっ！」

「おまえの目に、あいつはどう映った？」

「にへへっ、内緒だよーっ」

でれーっと顔全体をとろけさせる美架。

答えなど、聞くまでもなく明解だった。

「あ、でも、保奈美ちゃんに想いを寄せてる男の子には憎まれちゃってるでしょっ？　そういうことで喧嘩になっちゃったりしないのかなっ？」

「そりゃ、まあ、藤森関係のいざこざを含めて、あいつが転入した頃は色々と揉め事が起こったけど……。今じゃ静かなもんさ」

「どうして？　真悟君て学校の悪者を退治して、自分が番長さんになっちゃったの？」

「番長って……おいおい、それはいつの時代の話だ？　それ、半世紀前に各学校で非公認ながらに支配権を確立してた非行少年の名称だろ？」

「にやはは。噂じゃ北関東には今でも番長制度が残ってるらしいから、確認の為に訊いてみたんだよっ」

「まあ、群馬、栃木、茨城の田舎には、現存してる可能性もあるけどな……」

「ほへー」

「でも、和泉はそんな変なもんじゃねえよ。良くも悪くも完璧な優等生さ」

「中嶋君は？」

おつ、ようやく俺に興味を持ってくれたか。

「俺は、明るくて真面目な普通の高校生さ」

「んーにや、そうじゃなくてっ！ 中嶋君は保奈美ちゃんのこと好きじゃないのかなっ、って訊いてるんだよっ！」

「……ああ、そりゃまあ、好きか嫌いかで言ったら、好きに決まってる」

「そんじゃあ、真悟君と《勝負》だねっ！」

「勝負か……。以前はそういう気持ちもあったけどな。藤森自身があいつにベタ惚れしてるのを知ってて挑むのは馬鹿馬鹿しいだろ。下手に勝負を仕掛けたら、逆に嫌われちまう危険性がある。俺はそんな無意味なこととはしねえ主義なんだ」

「中嶋君は根性なしだねっ！」

ひでえことを笑顔で言われた。

でも、怒りは湧かない。苦笑を催す程度のダメージだ。

「根性は人並み以上に持つてるさ。けどな、俺があいつに優る部分なんてあると思うか？ あらゆる面で敗北宣言必至だぞ。唯一、目つきの穏やかさでは勝ってるってくらいだ」

「泣き言だねっ？」

「そうじゃねえ！ 現実を弁えてるだけだ」

「遠吠えだねっ？」

「違う！ 俺は断じて負け犬じゃねえぞ」

「認識の相違だねっ！」

「……………」

ちよつくらムカツと来たが、美架の口調に悪意を感じなかったから、不愉快な表情を作っちまいそんな顔を意識して取り繕った。喧嘩を吹っ掛けられてるわけじゃねえのに怒鳴り返すのは、男として最低だ。俺はそこまで狭量じゃねえ。

でも、つい苦笑しちまう。

天然系は対処しづらいよな、全く……。

陽が落ちた所為で周囲が暗くなり、道が見えにくくなってきた。

「ねえねえ、中嶋君。手、繋いでよっ」

急に美架が不安そうな声を出し、体を擦り寄せてきた。

媚びを含んだ哀願に、くらっと心が持っていかれそうになる。生まれて初めての展開に、俺ともあるう男が動揺してしまった。ドキドキしちまつてる。もしかして、こいつ、俺に気がある？ 肉体の接触を求めてる？ 手を繋いだら、次は唇を合わせるのか？ 思う存分に美少女の唇を貪っていい場面か？ いや、そんなわけねえ。

いかんいかん。

妄想が暴走して理性を失い、鬼畜ちつくな蛮行に身を任せちゃうところだったぞ。肝試しって誘惑の多いイベントなんだな……。っというか、こいつ、すんごく良い匂いにするぞ。中坊の分際で香水をつけてやがるのか？ それとも、これがいわゆる、年頃の乙女が醸し出す体臭か？ 魅惑のフェロモンってやつか？ うおっ、意識すると脳味噌にかなり来るな……。ふらふらと抱きついちまいそうだぞ。

そんな思考をおくびにも出さず、俺は何でもない風を装って言葉を返す。

「なんだ、おまえ、お化けが怖いのか？」

「違うよーっ。そんな存在自体があやふやなモノなんか怖いわけないよっ！ そうじゃなくて、足下がおぼつかなくて怖いんだよっ！ 転んじやいそうなんだよっ！」

「ああ、そっか……」

俺は、盛り上がっていた男本意な妄想を沈静化させ、差し出された左手を握った。

しっとりとして柔らかい小さな手だった。

俺たちは緩やかな登り坂を歩いていく。

美架はとても楽しそうだ。スキップを踏むテンションの高さである。全然人気のない山道を歩いているのだから、ちょっとは恐怖に

怯えても良さそうなもんだが、この年齢の女にしては肝っ玉が据わっているのか、手を繋いでからはマイナスの感情を一切示さなかった。きつと会話に夢中だったからだろう。なので、俺も不安を覚えなかった。

左右からせり出す木々が風に吹かれてザワザワ鳴る。

あちこちから聞こえてくるセミの鳴き声。

ここは、静寂とは無縁の世界だ。

「ねえねえ、中嶋君、一つだけ質問してもいいかな？」

美架が手をくいくいつと引っ張ってきた。

「一つだけ？ もう幾つも質問してるだろ。んで、何が聞きたいんだ？」

「真悟君で、何度も何度も殺人事件に遭遇してるんだよね？」

美架が笑顔のまま、おかしなことを訊いてきた。

こいつ、春先に起こった猟奇殺人事件のことを知ってるのか？

愛知県から来るとか言ってたが、なんでこっちの事件を知ってるんだ？ あの事件の情報は、未成年者が多く関わってたから、殆ど公にならなかったはずだぞ。それなのに……。

俺は眉をひそめた。

「春の事件のことか？」

「うんっ、そう、それも含めて、過去の記録に残ってるだけでも、七件の殺人事件に関わってるんだよね？」

「そうなのか？ 俺は、あいつの転校してくる前のことなんか、何も知んねえぞ」

「そっかー……。んー、それは残念なんだよ。せつかくだから、この機会に真悟君についての情報を集めようと思ってたのに」

「あいつの情報って……何の話だ？ なんで情報を集めてるんだ？ あいつ、そんなに多くの事件に関わってるのか？」

「関わってまーすっ。私たち来須兄妹よりも高い頻度で殺人事件に遭遇して、しかも毎回の事件においても容疑者の筆頭に名を連ねちゃってるんだよ。すごいよねっ！」

「すごいっていうか……。それって、驚天動地なくらいヤバイぞ。あいつの赴く所で絶えず殺人事件が発生してるってことだろ」

「うんうん、カッコイーよねっ！」

「はあ？ 格好良いわけねえぞ。あいつが事件を呼び起こしてる超悪運の持ち主かもしれないだろ」

「あーっと、それは誤解なんだよ。真悟君は事件を解決する側の人間なのっ！ 警察の人に要請されて難解な殺人事件に挑んで、その都度、見事に解決しちゃってるんだよ。いわゆる名探偵だねっ！」

「ああ……なるほど。それなら納得だ。確かに、あいつは名探偵だよ。しかし、おまえ、和泉についてよく知ってるな。もしかして、同郷者とかか？」

「にやーっ！ そんなわけないよーっ。愛知県警の親しい刑事さんに、各事件の資料を少しだけ読ませてもらったんだよっ」

「捜査資料を見せてもらったって言うのか？ おいおい、それって違法行為なんじゃねえのか？ 愛知県警の情報管理はいつたいうふうなってる？」

「にへへっ。私たちは特別なんでーす。なにせ、天才美少女探偵来須美架と超天才名探偵来須十路の最強兄妹コンビだからねーっ。どんな難事件でも私たちに任せっ！」

「信頼と実績ってやつか？ しかし、和泉のやつ、他県にまで名前が知れ渡ってやがるのか……。あいつ、何やったんだよ？」

「連続猟奇殺人を犯した知能犯の逮捕に協力したんだよーっ。それも立て続けにっ！」

「冗談みてえな話だな」

「事実でえーすっ！ 春に起こった殺人事件のことは中嶋君も知ってるんでしょっ？」

「ああ、勿論、知ってるさ。っていうか、あいつ、俺たちの前で事件のトリックをすかーっと暴きやがったからな」

「目の前で？ うーん、羨ましいなあっ！」

美架が興奮気味にくねくと身を擦らせ、いきなり腕に抱きついてきた。そして、爪先立ちになって顔を近づけてきた。その動作で、ツインテールの髪についている鈴が揺れて、ちりんと澄んだ音を響かせた。

「その時の真悟君、格好良かったっ？」

「ああ、まあな」

そう平静を装って答えたが、年下美少女の貧弱だけど柔らかな身体凹凸が薄い生地を通して生々しく腕に伝わってきており、俺の心は大パニックに陥っていた。

「いいなあっ！ 私もその現場に立ち会いたかったなあっ！ ねえ、中嶋君、その事件の詳細について教えてよ」

好奇心の塊だ。

こいつ、和泉に対する興味から、好意を超える恋心をいだいているようだ。

でも、あの事件は、和泉のいない場で気軽に喋っていい内容じゃねえ。

「駄目だ。俺の口からは何も紡ぎ出せねえよ。知りたきゃ和泉から直接聞くんだな」

「ちえーっ、つまらないなあっ！」

美架は、しがみついていた俺の腕を突き飛ばすように押し離し、ちっちゃく舌打ちをして足下の小石を蹴飛ばした。けれど、しつこく聞き出そうとはしなかった。

一見、能天気な馬鹿女に見えるが、他人の心情に配慮する繊細さは持ち合わせているらしい。

ちよっと意外だった。

【2・中嶋剛志】

俺たちは時間にして四十分ほど山道を登った。

既に視界は真っ暗な闇と化し、セミの鳴き声も聞こえなくなっていた。夜空は雲に覆われているらしく、月明かりもない。そんな中を懐中電灯の明かり一つで歩いていると、眼前に大きな黒い塊が見えてきた。

懐中電灯で照らして確認すると、それはまさしく《石碑》だった。「うわあいつ！ 目的地に到着うつ！」

美架は甲高い歓声を上げ、ぱちんと指を鳴らして跳ね上がり、一目散に石碑を目指して駆け出した。

俺も慌てて後を追う。

石碑には、ちゃんと蛍光塗料を塗りたくったビール瓶が置いてあった。

懐中電灯の明かりを当てると、キラキラと光って綺麗だった。

「現在の時刻は、午後七時二分。容疑者を確保しましたあつ！」

美架がビール瓶を拾い上げて敬礼した。

それ、警察ごっこか？

そのノリに合わせて俺も返礼する。

「ご苦労、来須刑事！」

「ありがとうございますっ、中嶋警部っ！ にやははははっ！」

「ミッシヨンコンプリートだな」

「だねっ！」

ビール瓶の確保に成功したので、俺たちはとっとと元来た道を引き返した。

帰りの道すがら、俺は今更ながらに和泉の強運を話題にした。

「しかし、和泉のやつ、なんつう運の良さだ。普通、あそこで《2》を引くか？ 常人なら《6》を引いちまう場面だぞ」

「そうだねっ」

美架は可笑しそうに含み笑いを漏らす。

「強運は美少年の特権なんだよっ」

「美少年？ あいつの目つきの悪さは折り紙付きだぞ。おまえ、気付かなかったのか？」

「あーっ、それはそうだよねっ。あの目で睨まれたら、恐怖で身体が竦んじゃうよねっ」

美架は心持ちテンションを下げて言った。

もしかしたら、藤森に暴言を吐いて、和泉の冷酷な視線を突き刺されたのかもしれない。ペア分けの際にも、《勝負》とか言って彼女を困惑させていたみてえだし……。

「でもでも、中嶋君、あれは運じゃないんだよっ。真悟君は偶然じやなくて、ちよっとしたトリックを用いて《2》を引き当てたんだよっ。いわばズルしたんだよねーっ」

美架がとんでもないことを言った。

俺は驚愕するしかない。

「え、おい、それって……マジか？」

「本当だよっ。簡単なトリックなんだよっ」

「……どうやったんだ？」

「教えて欲しいのかなっ？」

美架は、にたーっと小悪魔ちつくな可愛らしい笑顔を作った。

「教えて欲しいなら、真悟君が解決したっていう春に起こった殺人事件の話を聞かせてよっ。いわゆる交換条件だねっ！」

「……………」

俺は二分ほど逡巡したが、和泉が用いたトリックとやらをどうしても知リたかったので、渋々ながら……という体を装って承諾した。

美架は満面の笑みで俺に抱きつき、すぐに解説をし始めた。

「ほんとに簡単なトリックなんだよっ。でも、そのトリックは真悟君だけが仕掛けたものじゃないんだよねーっ。彼は、いわば他者の仕掛けた罠に細工を施して、恋人さんを守りつつ自分の利に仕立て

上げたわけなんだよっ」

「どういうことだ？」

「最初は、梅本君が保奈美ちゃんとペアを組む為に仕組まれたトリックだったんだよっ」

「へ？ マジで？ あいつら、藤森におかしなことをしようとしてやがったのか？」

「そうかもねっ」

美架はにこつと笑って頷いた。完全に他人事という表情である。

藤森の身に危険が及んだかもしれないねえのに、同性として憤りを覚えないようだ。明日は我が身、って言うだろうに……。

こいつは、和泉が《2》を引いたトリックの方にしか興味がないらしい。

しかし、梅本と上妻って……とんでもない悪者なんじゃねえのか？ このまま野放しにしていいていいのか？ でも、俺が心配するまでもないか。

藤森に手を出すなど、和泉に喧嘩を売るようなもんだ。あいつは、攻撃されそうになったら、受けるであろうダメージを百倍にして返す（先制攻撃とも言おう）奴なのだ。

こりゃ……今夜か明日の朝に血の雨が降るかもしれねえぞ。

「あいつら、どうやって《2》を引こうとしてやがったんだ？」

「きつと、彼らは最初から《2》の紙を入れてなかったんだよっ」

「入れてなかった？ そんなの、段ボール箱に手を入れたらバレちまうだろ」

「そうでもないよーっ。段ボール箱の中に何枚の紙が入ってるかなんて、誰もいちいち確認しないもん。中嶋君、確認したのっ？」

「いや……」

確かに俺は、段ボール箱の中に紙が何枚入っているか、など気にもしなかった。

「残り三枚くらいになるまで、入ってる紙が一枚少なくて、大抵の場合は気付かれないもんなんだよっ」

「ああ、そうかもな。それで？」

「上妻君は、自分の順番になるまでは普通に紙を引かせといて、その様子を見ながら自分が引きたくない数字を記した紙……つまり《6》の紙を二枚用意しておいて、自分の順番になったら手の平にその二枚の紙を握り込んで段ボール箱に手を差し込んで、箱の中に残ってた三枚の紙と入れ換えたんだよ。極悪非道な総取り換えだよな。それで、引いた三枚の紙の中なら《6》じゃないのを選んでみんなに見せたわけだよ。上妻君が選んだのは《1》だったよね。ってことで、次に引く人は必ず《6》を選ばされるわけで、最後に引く梅本君は、紙を引かなくても自動的に保奈美ちゃんとのペアに決定ってことになるわけなんだよ。もし最後に残った紙を確認しろって言われても、上妻君が同じ方法で《2》の紙を引いてみせれば問題なしなんだよ。」

「それを和泉が邪魔したわけか……」

「そうでーっす。真悟君は、マジックペンを隠し持って段ボール箱に手を差し込んで、中に入ってる紙の一枚を選んで両面に《2》と書き込んだんだよ。それで、それを引いて見せたってわけだね。」

「なんで両面に書いたんだ？」

「だって、紙が四つ折りにされてるっていつても、本当に折り畳まれた面に数字が書かれてるとは限らないでしょ？ 万が一、小細工防止の為に、わざと折り返された面に数字が書かれてたら、《6》と《2》の数字が重なっちゃうもん。トリックがバレて非難されちゃうよ。だから、両面に数字を書いたんだよ。」

なるほど、そういうわけか。

よくもまあ、そんな手品じみたトリックを見破ったもんだ。

俺は、和泉と上妻の動きに怪しさを一切感じなかったつてのによ。

「おまえ、頭良いな」

俺は率直に称賛した。

「にへへへっ、天才美少女探偵なのですっ」

嬉しそくに頬を緩める美架。

自称天才か……。面白いじゃねえか。
ならば、俺から問題を出してみよう。

「じゃあ、この問題、わかるか？ 俺から天才美少女探偵にクエス
ションだ」

「なになにつ？ どんな問題かなっ？」

思い通りのリアクションをする美少女。

将来は、クイズ女王かクイズ作家か？

「ダイイングメッセージってやつだ」

「うほほーっ！ それ最高っ！」

「では、問題だ。被害者が死に際に、『わくい』と縦書きで書き残
した。さて、犯人の名前は？」

「わくい、かあ……」

美架は眉を寄せ、二分ほど腕組みをして、考えるように首を左右
に揺すった。そして、何かに気付いたように俺の顔を見上げた。

「……前もって言うつくけど、答えが和久井っていう苗字の人って
のはナシだよ。あと、普通じゃあり得ない名前の人も駄目だから
ね。いいかなっ？」

「ああ、当然だ。おまえ、わかったのか？」

「楽勝でえーすう！」

美架は会心の笑みを浮かべ、親指を上立ててみせた。

「順当な答えだと、『井上和久』だよ。他にも、『井上湧』と
か『井上湧』があるよね。それ以外は普通の名前にならないから
駄目ってことで、どう？ 正解かなっ？」

「正解だ」

「にははっ！ 私の勝ちいっ！」

「……………」

この世の中は、俺よりも頭の良い人間で満ち溢れているらしい。
やれやれだぜ。

【3・藤森保奈美】

わたしと真悟君が目的地の《吊り橋の下》に到着したのは、山荘を出発してから約五十分後だった。

そこまでの道程は、肉体的にはそこそこ厳しかったけど、素晴らしく充実した時間を過ごすことができた。なぜかと言えば、好きな男の子と二人きりで涼しい川原を散歩できたからであり、わたしが足下の不安定な砂利場で転倒しないようにずっと手を繋いでくれていたからである。更に、星空に銀色のお月様が輝いていれば言うことなしなのだけど、残念ながら今夜は曇り空らしく、星も月も闇のカーテンに閉ざされて全く見えなかった。

回収物である《ビール瓶》を発見するのは容易だった。吊り橋の真下に鎮座する大きな岩の上で、ぴかぴかと輝いていたからだ。

「みーつけたっ！」

わたしは叫んで、繋いでいた手を離し、ビール瓶の所までダッシュした。そして、真悟君の名前を大声で呼び、大袈裟なジェスチャーで手招きをした。

真悟君は苦笑して追いかけてきた。

過度にはしゃいでしまったようだ……。

「少し休憩しようか？」

肩で息をしながら呼吸を整えているわたしの様子を見て、真悟君が提案した。

「うん、そうする」

足がちよつと痛い。

足の裏が浮腫み、脹ら脛が突っ張っている感じがする。

彼が二人並んで座るのに丁度良い大きさの岩を見つけてくれたので、わたしは勧められるままに腰を降ろした。その際に、わたしのスカートのお尻が汚れないように、さり気なくハンカチを敷いてく

れる優しい配慮、ちよつとした気遣いがすごく嬉しい。

「疲れたようだね」

「うん。ちよつとだけ」

わたしは、自分のハンカチを取り出して額の汗を拭った。

できれば、靴と靴下を脱ぎ捨てて、熱を持った両足を川の水に浸して冷やしたいところだ。きつと、物凄く気持ち良いだろう。でも、そういう姿を恋人に見られるのは恥ずかしい。

「今日はたくさん運動したから身体が悲鳴を上げているみたい。体力的にはまだまだ余裕があるけど、足の筋肉は限界を訴えてる感じかな」

「辛いのか？」

「うん。足全体がジンジンしてる。でも、もう歩きたくない、なんて弘美みたいな我が儘は言わないから安心して」

「キミは、我が儘とは無縁の女の子だからね。それなら、マッサージを希望する？」

「え、えーっと……」

靴と靴下を脱ぐことができて、尚かつ真悟君にマッサージしてもらえるのは非常に魅力的だけど、汗で蒸れた素足を触られるのは少し恥ずかしい。

「筋肉の張りを適切にほぐせば、帰りは多少楽になると思うよ」

「でも、ちよつと恥ずかしいかな……」

「なぜ？」

真悟君は不思議そうに首を傾げた。

「なにも、全身に淫らなマッサージを施すと言っているわけではないんだよ」

その点は心配していない。

彼はちよくちよくえつちなお触りをするけど、わたしが不快に感じるような無茶はしない。まして、こんな野外で変態的なプレイに興じる男の子ではないのだ。

わたしが躊躇する理由は……。

「汗で足が臭くなつてないかなつて……」

おずおずと告げると、真悟君は他愛ない感じに笑い、サイドポーチから小さなハンドタオルを取り出し、すっと立ち上がった。そして、川辺に移動してタオルを水に浸し、軽く絞ってから戻ってきた。「さあ、両足を前に投げ出して」

「うん」

わたしは言われるままに両足を伸ばして楽な格好をした。

自分で靴と靴下を脱ごうとしたら、それを真悟君が手振りで遮って、手ずから脱がしてくれた。すると靴ひもが解かれ、片方ずつ靴が脱がされていき、靴下が引き下げられる。

彼は非常に手早い。

女の子の服を脱がし慣れている。

彼は、それを否定しない。

わたしと付き合うまでに、何人もの女の子を裸にしてきたそうだ。あの鷹峰つばさも例外ではない。それについて嫉妬してしまっても、心の狭い女とは言われないだろう。

真悟君は、わたしの素足を晒すと、濡れタオルで足の指の間まで丹念に拭いてくれた。冷たいタオルで濡らされた部分が、夜風に吹かれてひんやりと気持ち良い。彼のマッサージは本格的だ。手つきが職人みたいに滑らかなのだ。わたしの反応を見ながら、右足の土踏まずから足の裏の側面に向かってゆっくりと揉みほぐしていく。痛み持ち良い。

「山荘に戻ったら、みんなでお酒を飲むんでしょう？　わたし、少しだけ不安だな」

わたしは後ろに手をついて楽な姿勢を保ちながら、マッサージをしてきている真悟君に話し掛けた。無言は苦にならないし、一緒にいるだけで充実した時間を過ごせるのだけど、せっかく二人きりになったのだからお喋りしたいのだ。

勿論、真悟君は煩わしく感じたりせず、せっせと両手を動かしつつ話に応じてくれる。

「不安材料は何かな？」

「わたしってお酒、そんなに強くないでしょう？ それに、上妻さんのことかも気になるし……」

わたしは一瞬、口ごもってから言葉を続ける。

「あと、美架ちゃんのこともあるし……」

「なるほど、その不安は理解できるよ。しかし、心配には及ばない」「どうして？」

「第一の不安材料、キミの酔いやすい体質については、さして問題にしくてもいい。キミが飲酒の許容量を超えたとボクが判断した時点で部屋に連れ帰ってあげるよ。それに、もしキミ自身が体調的なトラブルを感じて飲酒を控えたいのであれば、ボクたちは飲み会自体に参加しないでおけばいいだけだ」

「え？ 参加しなくてもいいの？ 真悟君、お酒が物凄く好きなのに」

「それは問題にならない。大切なのはキミがイベントを楽しんでいるかどうかだ」

真悟君は顔を上げて微笑んだ。

「わたしを気遣ってくれるんだ？」

「キミ以外の人間を気遣う意味はない。それに、お酒は自室でも飲むことができるよ」

「みんなと、わいわい騒ぎたくないの？」

「お酒は静かに飲むものだよ。でも、酔っ払ってはっちゃけているキミの陽気な姿を酒の肴にするのは悪くないかもね」

くすつと笑いを零す真悟君。

わたしは赤面するしかない。

「第二の不安材料、上妻及び梅本両名の邪な行為については、ボクが常と同席し、彼らの言動に気を配ってさえいれば、何の問題も発生しないだろう。キミは心置きなくお酒と会話を楽しめばいい」

「やらしいゲームが始まったら？」

「参加を拒否すればいい」

「そんなことしたら雰囲気を壊しちゃうよ」

「壊されるような雰囲気を作る方にこそ問題がある。ボクが守りたいのはキミの心だ。彼らの低俗な目論みになど配慮しない」

「わたしのことは置いておいて、真悟君自身はどうなの？　可愛い女の子とえっちなゲームをしたくないの？」

「夕食時にも言ったけど、ボクはキミ以外の女の子に性的刺激を求めようとは思わない。無論、肉体的快楽を含めてだ」

「その割には、わたしにキス以上のことを求めないじゃないの……」
「つい、不満が口について出てしまった。」

真悟君は透明感のある笑みを浮かべた。

「今は、楔ぎの真っ最中なんだよ」

「みそぎ……って何？」

「穢れた身体を浄化させる行為だよ。主に、神職に携わる者が行うんだ。神様に身を捧げる巫女が良い例だね」

穢れた身体……。

とてもじゃないけど、そうは見えない。

きっと、それは、真悟君の潔癖な性格が自分自身に強いているのだろう。

「そんなことをする必要なんてないよ」

「いや、そうは思えない。ボクの身体には死人の体臭が染みついているからね……。キミも少しだけボクの過去について聞いているんだろ？　ボクの恋人になった女の子は、一人の例外を除いて全員死んでしまった。きっと、彼女たちは死後、ボクを酷く恨んでいることだろう。奇跡的生還を果たした鷹峰つばさを含めてね。その怨念と死臭を洗い流す為の楔ぎなんだよ」

「……………」

和泉真悟の過去は血塗れだ。肉体的関係を結んだ女の子は、鷹峰つばさを除いて全員死んでしまったそうだ。でも、彼はそれを殆ど気にしていない。恋人の死を受け容れ、自分の内で消化している。心の強さが尋常ではないのだ。だから、たぶん、わたしが過去の事

件について質問したら、隠し事なしで話してくれるだろう。しかし、それを聞く勇氣なんか持っていない。

わたしは、あえて笑顔を作った。

「……そういう言い方は好きじゃないよ」

「ああ、そうだね。気を付けるよ」

真悟君も笑みを返してくれた。

マッサージは左足に移行した。

「キミは欲求不満なの？」

唐突に訊かれた。しかも、物凄くストレートな質問である。

そりゃ若干の不満を感じる時もあるけど、「はい、欲求不満です」とは答えられない。

真悟君が積極的行動を起こさない理由を聞いてしまった今となつては尚更だ。

「えーっと……」

返事に窮していると、真悟君はくすくすと笑った。

「それは肯定と受け取っていい反応だね。自慰で欲求不満は解消されないのかな？ キミは、自分で自分を性的に慰める行為が自虐に通じる、と思うタイプの女の子ではないだろう？ それとも、自慰はしない主義なの？」

真悟君は、とんでもない質問を、微笑み顔でさらっと口にした。微かに面白がつているけど、照れや恥じらいはない。

でも、わたしは自慰という単語を耳にただけで狼狽した。そんな話題を振られたことなど、今日まで一度もなかったのだ。ゆえに、答えられるわけがない。

「そ、それは……その……な、な、何を言ってるのかな、真悟君は！」

「自慰行為の俗称について訊いているの？」

これは完全なからかい口調だった。

血液が顔面に集中するのを感じた。溶け落ちそうなくらい顔が熱

い。懐中電灯の淡い光でも確認できるくらい真っ赤になっているだろう。

「そ、そうじゃなくて！ わた、わたしは……そんなはしたないことは……」

「はしたない？ 健康な人間ならば誰でもすると思うよ。ボクも例外ではない」

「そ、そんなの恥ずかしすぎて答えられないよ……」

「ボクと二人きりなの？」

「余計に恥ずかしいよ……」

「余計に？ 可笑いね」

珍しくも、真悟君は声を上げて笑った。

「東京に戻ったら一度試してみる？」

「えっと……え？ 試すって……どういうこと？ それって……その……あの……」

「直接的表現を用いると、セックスをしよう、と提案しているんだ」

「あ、う……」

「嫌なの？」

「そんなわけないよ……」

「では、なぜ答えられないの？」

「恥ずかしいからだよ」

「二人きりなの？ いや、二人きりだから、恥ずかしいのかな？」

「……意地悪だよ、真悟君は」

「ボクが？ 可笑しなことを言うね」

真悟君はふつと鼻を鳴らし、しばらくマッサージだけに集中した。

わたしは頭を仰向けに反らせ、夜空を見上げた。

真っ暗だ。

星一つ見えない闇。

目を閉ざし、耳を澄ませる。

川のせせらぎ。

虫の鳴き声。

風の音。

いつの間にか、羞恥で焦っていた身体から熱が抜けて、平常心を取り戻していた。

夜風が気持ち良い。

「東京に戻るまでお預け？」

今度はこっちから挑発してみた。

真悟君は顔を上げて、僅かに目を見開いた。

「おや、意外な台詞だね。恥ずかしさは克服したのかな？」

「わたし、真悟君のこと好きだよ」

「それが答え？」

「おかしいかな？」

「いや」

真悟君は一瞬マッサージの手を止めて、わたしの上半身を抱き寄せるようにして軽くくちづけした。

「楔ぎは今をもって終了としよう」

「真悟君……」

またもや胸の内がドキドキと高鳴ってきた。でも、今度のドキドキは、羞恥だけではなく、期待や不安、希望、恐怖、緊張などの色々な感情が混ざり合ったものだった。小学校の学芸会でヒロインを演じた時のドキドキ感に似ているな、と思った。

「しかし、あの山荘では駄目だ」

真悟君は唇を離すと、耳元で囁いた。

「どうして？」

「部屋に盗聴器の類が仕掛けられている危険性がある。それに、最初に結ばれた場所が《ホテル美岳》では、思い出として好ましくないだろう？ キミはそれでもいい？」

「それは……嫌かも」

高級ホテルとか外国のお城とかで結ばりたい、などという贅沢は望まないし、実際にはいかがわしいホテルでも構わないかな、とか

思っている。特別記憶に残る場所で結ばれる意味などないのだ。でも、初めての場所があこの山荘では、後々に哀しい思いをする気がした。

「ボクも嫌だ」

「それなら、真悟君のお家で？」

「そうだね。ボクの自宅であれば、誰にも邪魔されず、じっくりと時間をかけて楽しむことができる。キミも、妹さんの耳を憚る必要がない」

「じっくり？ それはちょっと怖いかも。わたし、初心者だから……」

「優しく、と付け加えるべきかな？」

「特別に優しく、って付け加えて欲しいよ」

「覚えておこう」

真悟君はマッサージを再開した。

そして、話を元に戻す。

「第三の不安材料、来須美架についても心配は無用だ」

「どうして？ あの子、真悟君のこと好きみたいだよ。気付いているでしょう？」

「無論。気付かないほどボクは鈍感ではないよ。来須美架は、ボクに対して異常なまでの興味をいだいている。しかし、それは恋愛対象としてではないよ」

「どうして断言できるの？」

つい苛立つて声を荒げてしまった。

真悟君は微妙に目を細めた。

「彼女は、なぜかボクの経歴を知っている」

「経歴って……転校してくる前の？」

苛立ちが消滅した。

代わりに、うそ寒さが背筋を這い上がってくる。

「そう。ボクが過去に関わった殺人事件について調べ上げたようだ。昼間、キミがシャワーを浴びている間に色々と確認されたよ。およ

そ、親しい人間に、警察関係の仕事に携わっている者がいるのだろうね。彼らの持っている情報は正確だ」

「なぜそんなことを調べたのかな？」

「さて……どうしてだろうね。彼女曰く、和泉真悟はお兄ちゃんに匹敵する超天才名探偵だから、すんごく興味が湧いちゃうんだよっ、本人に会って益々興味が深まっちゃったかなっ、だそうだ」

来須妹の口真似をして言う真悟君。

それが物凄く可笑しかったので、ぷつと吹き出してしまった。

「おかしいかな？」

「可笑しいよ。真悟君が物真似するなんて思わなかったもの」

「い、いや、そうではなくて……」

刹那、真悟君は自嘲を頬の辺りにたゆわせた。物真似はやりすぎた、と思っただろう。

彼は溜め息を吐いた。

「どれほど来須美架に好意を寄せられても、その気持ちにボクが応えることはない。それは、弘美ちゃんで実証されているだろう？」

「テンションの高さで？」

「それも含めた総合評価だね。しかし、それ以上に問題なのは、彼女の勝負癖だ。あのテンションでひっきりなしに《勝負》を挑まれるのは迷惑でしかない」

「そう、それ！」

わたしは腰を浮かせて、真悟君の肩をがしつと掴んだ。

「わたし、あの子に勝負ばかり挑まれてすごーく迷惑してるんだよ。真悟君の威光でどうにかならないかな？」

ことある毎にあの調子で勝負を挑まれたら、いつかきつと堪忍袋の緒が切れて、彼女の延髄を切ってしまいそうだ。

そんな状況で楽しい思い出など作れるわけがない。

「あの子、真悟君の警告なら聞くとするよ。だから、きつーく言い含めてよ。お願い！」

半泣きで哀願。

「それは構わないよ」

簡単に承諾してくれた。

すると、どうだろう。わたしの体内に燻っていた疲労と両足全体を蝕んでいた筋肉痛が一気に消し飛んでしまったではないか。

これって奇蹟？ はたまた魔法？ それとも愛？

何にしても、厄介ごとを丸投げできて良かった。

「真悟君、ありがとう。だいぶ楽になったから、もうマッサージはいいよ」

真悟君は頷いて、足から手を離れた。そして、濡れタオルとハンカチをしまった。

「それでは山荘に戻るとしよう」

「うん」

わたしは靴下と靴を履き、蛍光塗料の効果で鈍い光を放つビール瓶を拾い上げた。

帰り道はペースを上げざるを得なかった。

雨がぽつぽつと降ってきたのだ。

土砂降りになっていたら川辺という場所もあつて相当に難儀しただろうけど、幸いにも雨足は弱いままで本降りにならず、わたしたちは山の中で足止めされずに済んだ。

真悟君はさすがというか用意周到というか、降雨を予知していたかのように折り畳み傘を持参していた。

雨が降ってきたと見るや、傘を取り出し、わたしの頭上に差し掛けてくれる。小さな傘だけど、二人肩を寄せ合って入れば、十分に雨を凌げる大きさだ。しかも、異性との相合い傘は初めてだったので、山荘までの道程がやたらと短く感じた。

わたしたちが山荘に到着したのは、午後七時半だった。

山荘には既に全員が戻っていて、わたしたちの到着を玄関で待っていてくれた。

「遅かったな。でも、ちゃんと戻ってこれで良かったぜ。あと一時間姿を見せなかったら、全員で捜しにいくところだったぞ。まあ、玄関先で話すのも何だから中に入れよ。それで、熱いコーヒーでも啜るんだな」

そう言ったのは強面の梅本である。

口調は乱暴だったけど、仄かな労りを感じた。想像していたほど悪い人間でもなさそうだ。

「そうだな。遭難者など出せば、来年のイベントは中止せざるを得ないだろう。まして、死人なんか出した日には、来年どころか、二度とイベントを開催させてもらえなかっただろうからな。無事に帰還した二人に祝福の言葉を贈るよ」

この上妻の発言には多少引掛かる部分があったけど、無事を喜んでくれていることに間違いはないようだ。

他のみんなも口々に労りの声を掛けてくれた。

特に、中嶋君は相当心配していたようで、半分愚痴混じり、半分からかい混じりに真悟君の肩をどやしつけた。

「お二人さん、肝試しはどうだったよ。恐怖体験によって二人の絆をより確かなものにできたか？」

わたしたちが大幅に遅れた理由を、中嶋君は変な風に想像しているようだ。

「さあ、どうかな。恐怖は体験しなかったけど、絆は強まったのではないかな」

真悟君は邪推されても微笑みを絶やさず、穏やかに答えた。

「そう言う中嶋君はどうだったの？ 美架ちゃんと組んだのでしょう？ 仲良くなれた？ 楽しかったけど疲れたんじゃない？」

わたしが訊くと、中嶋君は親指の先を来須妹に向けて面白くなさそうな苦み走った笑みを浮かべた。

美架は、小さな子供が飛行機の真似をする時のように両手を広げ、「ぶーん」と可愛い叫び声を響かせながら、螺旋階段を駆け上がった。いく。当然のことながら、一階からは下着が丸見えだった。

「見るよ、あれ。ぱんつ丸出しの美少女だぞ。なのに全然興奮しねえと来てる。そんな色気ゼロの女と組まされてたんだぜ。疲れないわけがねえ。っていうか、とっ憑かれた感じだぞ。和久井に輪を掛けたハイテンションだから、この俺でさえ調子を合わせるのが大変だ。しかも、ふざけたことばかりほざくしよ。危うくぶん殴っちゃうところだったぜ」

美架に遊ばれると誰だって害意を覚えるのだ。

その気持ち、わたしには痛いほどわかるよ、中嶋君。

そう心の中で共感した。

「疲労困憊かな？」

真悟君が可笑しそうに訊いた。

「今の俺の状態は、半死半生だ」

中嶋君はそう言ってよろめき、真悟君の肩に寄りかかった。

「とつとと美味しい酒をかつ食らわねえと、心が干涸らびちまうぞ。

さあ早く、ヒーローに乾杯させろ」

「疲労困憊でヒーロー乾杯？」

「……ちよつとした駄洒落だぞ、いちいち確認しねえで、すらつと聞き流せよ。それよりも酒だ。さつとシャワーを浴びて、酒をがぶ飲みすんぞ。いいな？」

「ああ、構わないよ。キミと杯を酌み交わすのは初めてだから楽しみだ」

「おーっ、おまえも未成年飲酒の常習犯か？　もしかして……藤森も？　そりやすげえ。優等生が二人揃って飲酒仲間とはね……。よっしゃ！　さつさとシャワーを浴びてくる。食堂で会おうぜ！」

そう言い残して、中嶋君は螺旋階段を上がっていった。

上妻と梅本は酒盛りの準備があるとか言っただけで部屋に戻らず、そのまま食堂に入っていた。シャワーを浴びるのは寝る前なのだろう。まさか、汗を流さない、などということはあり得ない……と思っていた。

「おめーら、飲み会の集合時間は午後八時だぞ。いいな？」

梅本がドアの閉まりざまに叫んで寄越した。

来須十路は、本山君と設楽さんの二人と下駄箱前で談笑していたが、梅本の叫びを聞くと会話を打ち切って二階へと上がっていった。

わたしたちと同じく階段前に残っていた五十嵐さんと緒方さんは、玄関前の壁時計を見て何かを囁き合い、こつちに歩み寄ってきた。

「君、確か和泉君だったわよね？」

五十嵐さんは真っ直ぐに真悟君を見つめて訊いた。わたしの存在など眼中にない。

「はい。和泉真悟です」

名乗って一礼。

真悟君はいつでも、どこでも、誰に対しても、不必要なまでに礼儀正しい。それが嫌味にならない男の子である。

五十嵐さんは女王様然として満足げに頷き、緒方さんは目をハート型にして魅入った。

「君たちも勿論、八時から飲み会に参加するわよね？」

「はい」

「それなら一緒に飲みましょうよ。勿論、構わないわよね？」

イエスを前提とした確認。

「梅本さんと上妻さんの二人を放っておいて大丈夫なのですか？」

「さあ、どうかしらね。あの二人が何を考えているのかは知らないし、そんなの考慮する必要ないわ。みやびは上妻君と飲みたいでしょうけど、私は梅本君の相手をするのは嫌なのよね。それに、いかさま王様ゲームで無理矢理にキスさせられるのも真っ平よ。だから、こうして前もって多数派工作を企てるわけよ」

「なるほど。本山君や設楽さんにも既に話を通してあるわけですか」

「来須兄妹もだよー」

緒方さんは真悟君の肩に掴まり、顔を近づけるように伸び上がって言う。

「最悪の場合は、十路君と純太君が二人掛かりで梅本君を酔い潰し

てくれるってさー。それって結束だよなー！ 友情の合体パワーだよなー！」

「そして、上妻君の相手はみやびが独占的に引き受けて、最悪の場合は部屋に引きずり込んでくれるそうよ。ねえ、みやび？」

「えっへん！ みんなの為なら、みやびは一肌脱ぐ覚悟です！」

「脱がされたい、の間違いでしょう？」

「えへへ、照れちゃうねー」

緒方さんは顔をでれでれと緩ませた。肝試しで上妻との関係に進展があったのだろう。でも、そんな簡単に体を許していいのだろうか。厳しい校則の学校に通っているそうだが……。

まあ、わたしが心配してあげる筋合いの問題でもないか。

「それでは、ボクたちは部屋に戻ります」

「そうね。私たちも戻ってシャワーを浴びるわ。今夜、何が遭ってもいいように。ねえ、みやび？」

「そのとおり！ ぴっかぴかの新品同然に磨いとかなきゃね！」

そう言うからには、自分のことを中古品と認めているわけだね、と心の中で下品な思考を働かせてしまった。即刻、猛反省して品性ゼロの思考回路を遮断する。

わたしたちは一緒に螺旋階段を上がり、部屋の前で別れた。

「では、八時に食堂で」

「じゃあ、まったねー」

そう言って二人の美少女は真向かいの部屋に入っていた。

【4・藤森保奈美】

わたしと真悟君は午後八時ジャストに食堂を訪れたが、それでも遅かったようだ。

ざっと見回して顔ぶれを確認すると、設楽さん以外の全員が集まっ
ていて、既にお酒を飲み始めていた。みんな未成年者なのに、飲
む気満々酔う気万端なんだな、と自分の年齢を棚に上げて内心で皮
肉る。

どの席に腰を据えるかは各自の自由。勿論、一ヶ所に留まらなく
てもいい。気の合った者同士で好きな場所を陣取り、各々好き勝手
に飲んでもいいし、部屋の隅でしつぱりと孤独なお酒を楽しんでも
構わない。でも、一人でお酒を飲むくらいなら、自室で飲むのと変
わらないだろう。

食堂内は理性を放棄した男女の楽園と化していた。

今は、梅本を中心にしてカラオケ機材の前に陣取って馬鹿騒ぎを
しているグループと、上妻を中心にして部屋の中央で談笑しながら
お酒を楽しんでいるグループに分かれているようだ。

梅本のグループは、マイクを持って一昔前のアニメソングを絶唱
する彼を筆頭にして、西脇さん、本山君、来須兄妹、中嶋君の五人
で形成されており、陽気にお酒をがぶ飲みしていた。自分の身体な
ど気遣わず、歌って笑って叫んで喚き、学生によく見られる暴走ス
タイルで、全身全霊をかけて限界まで突っ走る心積もりらしい。滑
稽なダンスと下手な歌で場を盛り上げている梅本は、まだ八時を過
ぎたばかりだというのに、べろべろに酔っ払っている様子だった。

上妻のグループは、談笑しながらゆっくりとお酒を楽しんでいる
様子だ。彼は尊大な姿勢で椅子にふんぞり返り、その左右に五十嵐
さんと緒方さんをはべらせている。

さて、どちらに加われば、楽しくお酒が飲めるだろうか？
カラオケは嫌いじゃないけど、来須妹みたいに梅本と肩を組んで

デュエットソングを熱唱する我慢強さはないし、西脇さんに煽られてお酒の一気飲みを強制されるのも嫌だ。本山君と中嶋君のテンションも異常だし……。時間に追われるように選曲している来須兄も変だ。できれば、梅本のグループには加わりたくない。かと言って上妻が支配しているテーブルに着くのも考え物である。五十嵐さんは見るからに楽しんでいない。上妻の強制猥褻的セクハラ攻撃を、緒方さんのように笑顔で突っ込むだけの寛容さが示せないようだ。わたしも示せないだろう。スカートの中に手を差し込まれた瞬間、箸で彼の太股を突き刺してしまいそうだ。

どっちもどっち、である。

それでも、あえて選ぶとするなら、上妻の方だろうか。

あくまでも、あえて、だ。

そう苦悩していると、真悟君がカウンターテーブルに山積みになっているお酒の中から三本のボトルを選び、二つのグループから離れている入口に近い位置のテーブルへと移動して、わたしを呼び寄せた。

そうか、別に無理をして彼らと席を共にする必要なんてないし、部屋の隅で真悟君と二人きりのお酒を楽しんでも構わないのだ。そう気付かされ、わたしは小走りで彼の向かいの席に移動した。すると、梅本のグループから中嶋君が、上妻のグループから五十嵐さんが抜け出して、わたしたちのテーブルに移ってきた。

「おう、待ってたぜ、和泉！」

中嶋君は向こうの席から持参してきた焼酎らしきボトルをどーんとテーブルに乗せ、陽気な声を張り上げて真悟君の肩を叩いた。そして、わたしの隣に座った。

「カラオケはもういいのかな？」

「おまえと飲む約束だったろ」

「そうだね」

真悟君は来る者を拒まない。五十嵐さんが隣の席に座っても微笑みをもって迎える。

「そうやくあのスケベ男から逃げ出す口実ができたわ。約束通り一緒に飲みましょう。お隣、いいわよね、和泉君？」

「構いませんよ、五十嵐さん」

今更だけど、真悟君の隣に座れば良かった、と後悔した。

真悟君がブランデーのボトルに手を伸ばそうとすると、五十嵐さんはそれを制し、腰を浮かせかけたわたしを横目で牽制してから、彼の為にお酒を作り始めた。

この人、真悟君を狙ってる？ あれこれと世話を焼いて、甲斐甲斐しさをアピールするつもり？ そんな仄かな苛立ちが心の襞に発生したが、表情にはせずにくつと堪える。

「和泉君は洋酒派なの？」

「主にスコッチを好んで飲みます」

「洋酒はお金がかかるでしょ？」

「金額についてはあまり気にしませんね」

「裕福なお家なのかしら？」

「はい」

「……正直なのね」

「嘘を吐く意味はありません」

「そうね」

五十嵐さんは口許を押さえてくすぐすと笑い、琥珀色の液体で満たされたグラスを差し出した。

真悟君は淡い笑みを向けて受け取り、お礼を述べる。

「ありがとう」

「おいおい、俺には作ってくれねえのか？」

中嶋君が抗議の声を上げた。

五十嵐さんはふんと鼻で笑う。

「誰にお酒を作るかは私の自由だわ。勿論、君には私にお酒を作れと要求する権利があるわよ。それは否定しないわ。でも、私には応える義務なんてないし、君の要求を拒否する権利を持っているのよ。」

わかる？ 私は和泉君だけにお酒を作つてあげたいの。他の男性に興味はないし、女性に奉仕する趣味もないわ。この心理、わかるでしょ、藤森さん？」

同意を求められ、わたしは戸惑った。

「えつと……」

「私の意見には賛成できないかしら？ 貴女、興味のない男性に世話を焼いて奉仕欲を満足させる頭の悪い女ではないでしょ？」

「……………」

返答できなかった。どう答えても頭の悪い女にされてしまいそうな気がしたからだ。

五十嵐さんは一瞬悪意に満ちた笑みを浮かべたが、一転して上品な笑みに切り替えた。

「藤森さんは私と違って優しいのね」

「いえ……」

「中嶋君にお酒を作つてあげたら？」

「わたし、お酒作つたことないから……」

「なんだ、そうなの……。なら、仕方がないわね。いいわ。藤森さんの分も含めて、私が作つてあげるわね」

五十嵐さんはわざとらしく溜め息を吐き、わたしと中嶋君のグラスを引き寄せて氷を放り込み、ブランデーと冷水を注いでマドラーを差した。

少し……ではなく、かなり濃そうな水割り。それを手渡される。

「ありがとうございます」

一応お礼を述べたけど、素直な言葉にはなり得ない。

わたしの心に靄を発生させる微細な違和感、怒りになりきれない不愉快さ、文句を言えないもどかしさ。

どうも調子が狂う。

五十嵐由利という女性は、来須美架とは違う意味で相手にしにくい人間だ、と思った。

中嶋君は焼酎がお気に入りらしく、差し出されたブランデーを見

て僅かな抵抗を示したけど、口の中でぶつぶつと文句を言いながらも、グラスを受け取ってがぶりと一口飲んだ。そして、ふーっと酒気を吐き、五十嵐さんに視線を据えて質問した。

「五十嵐さんはどこから来たんだ？」

「私？ 私は東京都民よ。見てわからない？ 白岐学園高等部の三年生なの」

「ああ、あの白岐か……」

中嶋君はさもあらんという顔で頷いた。

白岐学園は都内でも有名な中高一貫制の女子学園である。世界的総合企業である《姫城グループ》が経営していることで名高い学校だけど、厳格な校則と美少女揃いという巷の評価でも名が知れ渡っていた。わたしのようない一般庶民がお気楽に通える学校ではない。

五十嵐さんの家はかなりのお金持ちなのだろう。

設楽さんが彼女をお嬢様と呼んでいた理由が何となく納得できた。

「緒方さんもか？」

「そうよ。みやびも白岐学園の高等部よ。でも、二年生だけだね」

「あんたの後輩なのか？ なんか、すっげーマブダチ感覚で接してるじゃんよ」

「みやびは幼なじみなのよ。それに、可愛い子は何をしても許されるものでしょ？」

「許してるのか？」

「許すわよ。妹みたいなものだもの」

緒方さんについて話をする時の五十嵐さんは素晴らしく穏やかだ。言葉がマイナスの意思を宿してねっとり絡みついてこない。きつと、彼女を本当の妹のように可愛がっているのだろう。ゆえに、彼女の動向が気になるようだ。横目でじゃれ合っている男女を一瞥し、気がかりそうな表情を浮かべた。

中嶋君も釣られて視線を移動させ、にやつと笑って上妻を指差した。

「幼なじみを放っておいていいのかよ。あの調子だと、もう間もな

くお持ち帰りされちまうぜ」

「それがあの子の望みなら、そつと見守ってあげるべきでしょ？」
そう言つて五十嵐さんは肩を竦めた。

「おいおい、白岐は男女交際厳禁の校則で有名な学校だろ。合コンしたことがバレただけで退学処分になるって話だぜ。違うのか？」

「違わないわよ。男子と仲良く会話しているところを生徒指導の先生に目撃されるだけで停学になりかねないわ」

「じゃあ、ヤバイだろ」

「どうして？　ここは教師の目が届かない都心から遠く離れた山の中だわ。後腐れなしに遊べる解放区なのよ。夏休み明けに、私たちが咎められる心配なんてないわよ」

そつだろつか、と疑問に思った。このイベント参加者の誰かが情報を漏らせば、退学処分になってしまうのではないだろうか。それに、梅本と上妻がお嬢様の火遊びを利用してお小遣い稼ぎをしようとする目論み、金を渡さないと山荘での出来事をバラすぞ、と脅迫してくる危険性もないとは言えない。そう考えると、後腐れありだ。

わたしは無言でグラスを口につけ、唇を少しだけ湿らせた。高いアルコール濃度の所為で喉が焼ける。これ、わたしには濃すぎる。氷が溶けて丁度酔い薄さになるまで待った方が賢明だろう。

「君たちは三人とも同じ学校からの参加だったわよね？」

五十嵐さんが訊いてきた。

中嶋君が代表して答える。

「ああ、そつだぜ。同じ学校で、同じ学年で、同じクラスで、同じ美術部の部員だ」

「それだけ親密なお友達というわけね。確か……詩海高校だったかしら？」

「ああ、そつだ」

「あそこ、かなり有名な進学校よね」

「まあ、世間的には偏差値の高い高校生の集まりだと思われてるよな。でも、実際はピンからキリまで勢揃いさ。馬鹿やアホが大手を

振って校舎内を闊歩してる」

「キリの筆頭が君？」

「……俺はともかくとして、ピンの筆頭が和泉ってことは周知の事実だ」

「そうなの？」

五十嵐さんはテーブルに肘をつけ、上半身を迫り出し、殆ど姿勢を変えない真悟君の顔を前から覗き込むようにして訊いた。

真悟君は照れを覚えたのか、鼻の上に手を添え、眼鏡をずり上げる仕種をした。グラス内のお酒は半分減っていた。

「たまたま一学期の期末テストの成績が最上位であっただけです。一度の幸運を過剰に評価されても困ります。それに、学力だけで人間の価値が決まる世ではありません」

そうは言うけど、真悟君の成績は二位以下を大きく離しての一番なので、思いつきり自慢してもいいと思う。それに、彼は普段、わたしや弘美と戯れている時間が殆どであり、隠れて勉強している様子は無い。いつ勉強しているのやら……。真夜中、がり勉強しているのだろうか。彼を見ていると、塾に行ったり家庭教師を雇ったりしている生徒の立場がないような気がする。

「君は優秀なのに謙虚なのね。私の周囲にはいない珍しいタイプの人間だわ」

五十嵐さんは姿勢を戻し、椅子の背にもたれかかった。そして、グラス内の氷を溶かすようにマドラーで攪拌した。

「学校の成績ではなく、人間として優秀でありたいものです」

真悟君は敵かな口調で言った。

「人間として？ 面白いことを言うわね」

五十嵐さんは口を手で覆ってところどころと笑い、お酒を少し飲んだ。
「五十嵐さんはどうなんだよ？」

中嶋君が訊いた。

このまま真悟君の話題が続くと、彼の優秀さばかりが際立ち、五十嵐さんに自分のことをアピールできずに終わってしまう、と危機

感を覚えたのかもしれない。

しかし、訊かれた側は気分を害した。細い眉をきつく寄せ、目尻を吊り上げて質問者を睨み付ける。

「私の成績なんてどうでもいいでしょ！」

「あ、いや……そりやそうだけど……」

狼狽する中嶋君。

普段なら軽口を叩いて場を和ませ、相手の怒気を逸らせて失言を誤魔化してしまうのだけど、相手が美少女であるばかりかとびつきのお嬢様なので、いつもとは勝手が違うらしく、彼の口から小気味良い戯言は紡ぎ出されなかった。

すかさずフォローしたのは真悟君である。

「五十嵐さん、お酒を作っていただけませんか？　できることなら先程よりも心持ち濃いめをお願いします」

「いいわよ。でも、この私に注文をつけるとは、年下のくせに良い度胸してるわね。君のお願いでなければ、グラスをぶつけているところよ。私の寛容さに感謝なさい」

その台詞と口調ほど五十嵐さんは怒っていなかった。差し出された空のグラスを受け取ると、むしろお酒を作るのが楽しくて仕方がない様子で作業を始める。

「不愉快にさせてしまったのであれば謝罪します」

「不愉快ではないわよ。はい、出来上がり」

「ありがとう」

真悟君は受け取ったグラスをそのまま口に運び、くーっと三分の一くらいの量を喉に流し込んだ。

「いい飲みっぷりね」

「貴女の作ったお酒が口に合ったからだと思います。もしこのお酒が胃を絶叫させるくらいに不味くとも、貴女のお酌であれば美味しくいただけるでしょう。美少女は大抵の場合、男性の味覚を狂わせる魔法を無意識のうちに使用することができるのです」

「君は口が上手いわね」

「きつと、お酒で舌の回りが滑らかになっている所為でしょう。しかし、嘘は吐いていません。貴女は優れた容姿の持ち主です。それを誰に憚ることなく断言できます」

手放しの褒め言葉に、五十嵐さんは顔を真っ赤に染めた。

普段から容姿を高く評価されることが多いだろうに……。やはり、真悟君並みの美少年に褒められると、傲慢なお嬢様でも格別の喜びを感じるものらしい。

当然のことながら、わたしの頭の中でカチンという音がした。むくむくと対抗意識が芽生える。わたしもお酒を作って真悟君に飲んでもらい、彼女の作った物とどっちが美味しいかを比較してもらおう、とさえ思った。

美架ばりの《勝負》である。

もし真悟君が視線で制止しなければ、迷わずに思いを実行していただろう。

真悟君の発言は、機嫌を損ねさせてしまった中嶋君へのフオローと、お嬢様な五十嵐さんへのリップサービスなのだ。それを口説き文句と勘違いして、腹を立ててはいけない。

でも、それなら、わたしのこの不愉快な気持ちも安らわせて欲しいな、と思った。

その心の声を通じたようだ。

「保奈美」

その柔らかな呼び掛け一つで、すーっと不満が解消された。

「恋人さんに焼き餅を焼かしてしまったみたいね。慰めてあげたらどうかしら？」

五十嵐さんが半笑いで言ったが、もうその必要はない。

真悟君もわたしの気持ちを察しているようで、静かにグラスを傾けている。

「人間は誰でもその餅が好物だろ。焼き餅を焼かせるってことは、それだけモテるってことだもんな。俺も誰かにじゃんじゃん焼き餅を焼いて欲しいところだぞ」

中嶋君が下らない冗談を言った。

「たくさんたくさん妬かせたいわね」

五十嵐さんは笑って同調した。

わたしはお義理で笑ったが、同調はしない。

「わたしは妬かせたくないし、妬きたくないな……。きつと、そのうち、妬きすぎで心が焦げついちゃうから」

「焦げた餅は食いたくねえよな。お焦げは癌の素って言うだろ？」

「嫉妬で心が癌に侵されるわけ？ それ、面白いわね。それが恋愛の縛れによる殺人事件を生み出しているのかもね」

五十嵐さんが可笑しそうに言った。

わたしは笑えなかった。

真悟君も笑わなかった。

春の事件がまさしく恋愛の縛れによって起こったからだ。

中嶋君は直接事件に巻き込まれていないから笑っていられるのだろうけど……。でも、それを咎めて場の空気を悪くしようとは思わなかった。

その後、わたしは一杯のお酒をちびちびと飲みながら、中嶋君と五十嵐さんの恋愛論を聞いていた。

中嶋君は論理的ではない男本意の暴論を立て板に水のごとく捲し立てた。その内容が数百年前の封建制度復活的な思想だったので、当然のように五十嵐さんの猛反発を受け、たじたじとなって沈黙を余儀なくされていた。

五十嵐さんの恋愛観は単純明快だった。頭が良くて格好良い男の子に好かれない。告白して振られるのは嫌だから告白されたい。騙したいけど騙されたくない。大学生になったら軽っちい男を玩んで小馬鹿にしたい。男の子は女の子の子に尽くして当然だ。奉仕欲のない男は最悪だ、……というものだ。

傲慢で世間知らずなお嬢様である。

かく言うわたしも、みんなから世間知らずのお嬢様だと誤解され

ている。

他人から見ると、彼女と同レベルってわけだ。

実に不本意だが……。

わたしとしては真悟君の恋愛論をこそ拝聴したかったが、彼は聞き手に徹して持論を披露しようとはしなかった。

しばらく和やかな会話が続いた。

わたしが二杯目のお酒を真悟君に作ってもらって五十嵐さんに嫌味を言われていると、中嶋君が壁の時計を見上げて不審そうな声を上げた。

「まだ設楽さんの姿が見えないけど、どうしたんだろうな。まさか、部屋で倒れてるってわけじゃねえよな？」

そう言われ、わたしたちは食堂内を見回した。

確かに、設楽さんの姿はない。

「飲み会に参加しないつもりはないかしら。設楽さん、去年の飲み会の後、大失敗をやらかしたって嘆いてたもの」

五十嵐さんは両手で頬杖をつき、人の悪そうな笑みを浮かべた。

「大失敗？ 上妻さんにゲームでキスされたっていう？」

「そうじゃないわ。設楽さんの受けた被害は胸を触られた程度よ。

キスをされたのは私。しかも、ファーストキスだったのよ。相手は梅本君……。あれは人生最悪の汚点ね」

「そりゃ……最悪だな。でも、それって、あんたが自主的に参加したんだろ？」

「まあそうね。王様ゲームに参加した私の自業自得でしょうね」

自嘲の苦い笑みがお嬢様の美貌を彩った。

「みやびはへっちゃらな顔をしていたし、設楽さんも酔っ払っていたから気にならなかったみたいね」

「じゃあ、何が失敗なんだ？」

「彼女のお友達が酷い目に遭ったらしいわ」

「お友達って、江藤っていう名前の女の子のことだろ？ 酷い目って何

だ？」

「……さあ、私たち全員が完全に酔っ払っていて、その時の記憶を失っているから……。でも、翌日の朝、泣きながら山を下りていったから、余程の目に遭ったと思うわよ」

「泣きながら？ そりゃ酷えな。もしかして、奴らにレイプされたんじゃないの？」

「どうかしらね。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないわ。もしレイプされたとしても自業自得よ。餓えた狼の前でだらしく酔い潰れて、無防備な姿を晒した結果だものね。それに、お酒を飲んでいいる間は設楽さんも江藤さんも物凄く楽しそうだったから、同情はするけど同席していた者としての責任は取れないわよ。まあ、彼女たちもそれを理解していたのね。二人とも泣いていたけど、私たちを責めなかったわ」

五十嵐さんは、毒混じりに去年の出来事を打ち明けた。

「でも、実際はレイプされたわけじゃないと思うわよ。もし梅本君と上妻君の二人にレイプされたとしたら、今年は江藤さんと同様に設楽さんも参加しないはずだものね」

「復讐しに来たのかもしれないじゃん」

中嶋君が物騒な予想をした。

五十嵐さんは鼻で笑った。

「復讐するつもりなら、昨年、山を下りた時点で警察に被害届を出しているわよ」

「そりゃそうだ」

中嶋君は簡単に納得したけど、わたしは疑問を覚えた。

繊細な女の子であれば、性的暴力を受けたと警察に訴え出る勇気が湧かないのではないだろうか。強姦の被害者が泣き寝入りをする例は漫画やドラマでも多く語られている。わたしの周囲に被害者はいないけど、全国的な統計では女性を狙った暴行事件が年々増えているそう。それを踏まえると、昨年のイベントで江藤さんがレイプされ、その復讐を担って設楽さんが今年のイベントに参加した、

と考えることもできる。

いや、考え過ぎかな……。

五十嵐さんは片目を眇めるようにして中嶋君を見据えた。

「このイベントに参加する男子の殆どが邪な意図を持って女子にお酒を勧めるのよ。その悪意を理解した上で参加しなけりゃ、結果として大泣きするはめになるわ。和泉君は恋人同伴だから邪心なんてないでしょうけど、中嶋君からは、あわよくば女の子を部屋に連れ帰ってやるぞ、っていう邪な意思が見え隠れしてるわよ。そうじゃなくって？」

「そりゃ、俺も一人の男子としてだな……」

「あ、別に咎めているわけじゃなわ。男の子として当然の欲望だもの。でも、同席している私ではなくて、この場にいない設楽さんを狙ってる感じが若干気に障るわね」

そう指摘された中嶋君は、困惑したように頭を掻いた。

自覚していなかったようだ。

「俺って、そんなに設楽さんにがつついてる風に見えるか？」

「見えるわ。肝試しの籤引きで、設楽さんと同じペアになれなかった時の君の顔は見物だったわよ。それに、君は純太君をライバル視しているでしょ？」

「顔に出ないように注意してたつもりだったのにな。マジでバレバレだったのか？」

「うん」

確認するように訊かれ、わたしは頷いた。

「キミは、隠し事には向かない性格だ」

「ああ、まあ……そうかもしれないねえな」

真悟君の指摘を認めたくないらしく、中嶋君は渋い顔で曖昧に頷いた。

「純太君のこと、私が惹きつけてあげましょうか？　そうすれば、今夜だけは存分に彼女を口説けるでしょ？」

五十嵐さんが不埒な提案をした。

「おっ、いいのか？」

願ってもない申し出だ、と前のめりになる中嶋君。

「構わないわよ。私の狙いは、恋人のいる和泉君ではなくて、可愛いのにフリーな純太君だもの。利害が一致するなら、お互いが協力するのは必然でしょ？」

「そりや必然だわな」

二人はがっちり握手して頷き合った。

悪巧み……ではないけど、姑息な協力関係を結ぶ様子は見えていて面白くない。

恋愛にはルールなんてない。でも、もつと正々堂々と闘った方が勝っても負けてもスッキリするのではないだろうか。恋の駆け引きは、基本的に恋愛対象者に用いるべきであり、ライバルを追い落とす為に用いるのは良くないと思うのだ。

わたしの考えって変かな？

わたしはちよつと気分を害し、お酒をがぶりと多めに飲み込んだ。五十嵐さんは横目で、カラオケに興じている本山君を見た。

「でも、肝心の設楽さんが現れなければ何も始まらないわね。これでは、私たちの協力関係も無意味だわ。この際だから、中嶋君が彼女の部屋まで行って呼んできたらどう？」

「眠っちゃってるのかもしれないえよ。飯食った後、結構いい運動したしな」

「それなら、尚更でしょ。今すぐ呼びに行つて、起こしてあげなければ可哀想だわ」

「そうだね。少なくとも、飲み会に参加するかどうか、部屋を訪れて彼女の意思を確認するべきだと思う。その結果としてキミと彼女の距離が縮まる可能性もあるよ。何よりも、本山君に先を越されて後悔しない選択肢を選ぶことが肝要だ」

真悟君が意見を述べると、やおら中嶋君は椅子を蹴って立ち上がった。

「全くおまえの言うとおりだぞ。本山がカラオケでノリノリになっ

てる時間は、俺にとってのアタックチャンスだ。これを有効活用しない手はねえ！ そんじゃ、ちよっくら行ってくるぞ。戻らなかつたら、気を利かせて放っておいてくれよな」

「キミの武運を祈っているよ」

真悟君はそう言って、三分の一に減ったお酒のグラスを左手で目の高さまで持ち上げて、カランと氷を鳴らした。

「おう！」

中嶋君は勇んで食堂を出ていこうとした。

だけど、その行動はあえなく阻まれてしまった。

ドアが開き、設楽さんが姿を現したのだ。

「……………」

無言の中嶋君。

その悲しそうな表情が可笑しくもあり、哀れでもあった。

【5・中嶋剛志】

ドアのノブを握ろうとしたら、それが独りでに回転してドアが勝手に開いた。

マジック？

そんなわけねえ。誰かが外からドアを開けただけだ。そして、その人物が誰であるかは明々白々としていた。考えるまでもなく設楽松美。つまり、この瞬間、俺の目論みは見事についえたわけだ。

「中嶋君、どこへ行くの？ もう部屋に戻るつもり？ 眠るには早くないかしら？」

ドアの前に立っている俺を見て、早々に飲み会から離脱すると誤解したらしい。

そんなわけねえよ、と突っ込みたいが、穏やかな笑みを浮かべて慌てずに間違いを正す。

「俺はまだ部屋に戻ったりしねえよ。そうじゃなくて、設楽さんを呼びに行こうとしてたんだ。全然来ないから心配したんだぜ」

「あ、そうなの？ ごめんなさい。私、シャワーを浴びた後、お布団の上で本を読んでたら、ウトウトしてそのまま眠ってしまったみたいなの。でも、ほんの少しだけよ」

少しじゃねえよ、五十分以上の大遅刻だ、と文句を言いたかったが、ぐっと我慢して設楽を食堂内に迎え入れる。

「さ、ここに座ってくれ」

俺は元の椅子に戻り、自分の隣を手で示して、多少強引な感じに椅子を勧めた。

設楽は邪心を疑うことなく俺の隣に腰を降ろし、おしぼりで手を拭った。

左に藤森、右に設楽。すなわち、理想的フォーメーションである。両手に綺麗な花が咲いている状態だ。正面には五十嵐のお嬢様顔。左右からは美少女の芳しい香りと耳障りの良いステレオサウンド。

美味しい酒。視覚、聴覚、味覚、嗅覚の四感が心地よく刺激される。あと触覚さえ満足させてもらえば、ここは天国と言えるだろう。でも、浮かれて設楽にお触りしたら、ビンタされる前に軽蔑されるだろうし、藤森にお触りしようものなら、この場合は瞬時にして地獄へと早変わりだ。脳味噌が緩まないように、心の中に鋼の束を一本差し込んでおかなきゃなんねえな。

設楽が来た時の為にあらかじめ用意しておいたグラスを取り、俺は二欠片の氷を入れた。

そして訊く。

「設楽さんは何を飲んだ？」

「そうね……。私はジンフィズが好き」

おっと、こりやまいった。カクテルですか……。そんなもん、俺は作れねえよ。っていうか、こんな山荘で小洒落た飲み物を注文する設楽に問題があるんじゃないか、とねえか、と思うぞ。

咄嗟に対応できず、俺が硬直していると見るや、和泉がすつと席を立った。

「ジンフィズですね？ 用意しますよ」

「あ、少し濃いめに作ってね」

和泉は承知したと言うように会釈をしてカウンターへと赴き、何やらバーテンダーみたいな作業をし始めた。

「あいつ、カクテルも作れるのかよ」

もう和泉の万能ぶりには嫉妬しないと心に誓ったはずなのに、つい悔し紛れの舌打ちを奏でてしまった。

いかんいかん。

対抗する意味のない相手に敵対して自滅していくのが一番みっともない墓穴の掘り方だ。

酒作りは、あいつに任せておけばいい。

「真悟君は中学生の頃にカクテルを飲んだそうよ。だから、バーテンダーみたいな真似もできるみたい」

俺が不愉快になっていると察して、藤森が弁解っぽく言った。

実際はどこかで水商売のアルバイトでもしてたんじゃねえのか、と口走りそうになったが、設楽の前で口汚い悪罵を吐いてみつもない姿を晒すわけにはいかねえから、衝動を堪えて話題を変更する。「このイベントって何をするんだ？」

根本的な質問を試みた。

「飯食って、肝試しをして、酒を飲んで、歌って騒いで、それで？」
「それで、って……君は何も知らずに参加してるの？ まさか冗談でしょ？」

五十嵐が啞然として俺を睨んだ。

設楽にも呆れ顔を向けられた。

話題の選択をしくじったらしい。

「冗談じゃねえよ。俺は何も知らねえ。藤森は知ってんのか？」

「ううん、知らないわよ。どうして中嶋君が知らないの？ 弘美からイベントの資料がファックスで送られてきたんでしょ？」

「あ、そうだったな……。和久井がファックスで送ってきた紙に何かごちゃごちゃと書き込んであったっけ。あれがイベントの情報だったのか……」

俺はしかめっ面で舌打ちしてみせた。頭を搔いて誤魔化そうとしたが、藤森に怖い顔で睨まれて失敗を悟った。綺麗なお顔が台無しだぜ、学年一の美少女さんよ、と胸中に呟く。

「まあ、知らねえもんは仕方ねえよ。俺の失敗はすらっと水に流してくれや」

俺が持ち前の軟弱さを發揮して適当に詫びると、藤森は小さく溜め息を吐いてからしょうがなさそうに微笑んだ。

「中嶋君は本当にいい加減なんだから……」
やべえ。

俺の化けの皮がべろべろと剥がれ始めちまってる。この調子でいくと、設楽に軟弱者という正体がバレちまうぞ。上手いこと誤解させておかねえと……。

なんだか女三人の視線が痛い。

そこに、和泉がタイミング良く、ビールの大ジョッキを銀色のトレイに乗せて、設楽さんの前まで運んできた。

「ビールジョッキ一杯に作ってきたのですが構いませんか？」

「あ、勿論よ。和泉君に何度もお酒を作ってもらうわけにはいいものね」

設楽はビールジョッキを受け取ると、透明なカクテルで満たされたジョッキの縁に唇をつけ、ぐいっと傾けた。

いい飲みっぷりである。優等生っぽく見えるが、合コンとかでこつそりと酒を嗜んでるのかもしれない。和泉といい、藤森といい、真面目そうな奴に限って裏で悪いことをしてやがるんだ。

和泉は席に戻ってグラスを手に取り、溶けた氷で薄まった酒にブランデーを注ぎ足した。

そして、会話に参加する。

「さて、何について話をしていたのかな？」

「明日のイベントで何をするのか、って質問したら、藪の蛇を突つつき出しちまって往生してたんだ。そんな俺に助け船を出せ」

「イベントに関する情報を連絡し忘れていたから、保奈美に責められたのかな？」

「無言で睨まれたぞ。おまえ、俺がすっかり忘れてること、気付いてたのか？」

「勿論」

「おいおい……和泉、気付いてたんならさり気なく忠告してくれよ。友達甲斐のない奴だな！」

「いや、イベントをより楽しむ為に、必要最低限の情報以外を故意に隠しているのではないか、と思っただけ」

「そんなわけねえって……」

俺は鼻から息を吹き、グラス内の焼酎を一気に呷った。

「イベントの日程を知らずにいると何かしらの問題でも発生するのですか？」

和泉が五十嵐に訊いた。

「しないしない。それに、明日全員揃っても、どうせ大したことないわ。だから山登りしたり、川原で花火して騒いだり、最終日にもう一度肝試ししたり、その程度よ」

五十嵐は可笑しそうに言っ、和泉の肩をぽんと気さくな感じで叩いた。

こいつ、本山狙いとか言ってるが、あわよくば和泉を……と考えてるのかもしれない。

「和泉君はこのイベントで新しい出会……」

がたん。

がしゃーん。

カラオケで盛り上がっているグループの方から、五十嵐の声を掻き消すくらいの物凄い破壊音が聞こえてきた。

思わずそっちに目を向ける。

「どうしました？」

和泉は驚いた様子もなく、一切慌てることもなく、濃いブランデーに満たされたグラスを持ったまま近づいていって、穏やかに声を掛けた。

「あー、へーきへーき。梅本君が酔い潰れただけよ。そっちは気にせずに続けて頂戴な」

西脇がテーブルの横に片膝をついた姿勢で和泉を見て、能天気に応じた。

その傍らには、日向ぼっこするセイウチみたいにどてーっと横たわる梅本の姿。

倒れる際に複数のコップや皿を巻き込んだらしく、カラオケ機材の周辺は惨憺たる有様だった。

美架は、そんな中でもマイクを手放さず、ケツを振り振り懐かしのポップソングを歌っている。梅本の状態など全く気にならないらしい。

歌に集中しすぎて周りの惨状が見えてないのか？　ちょっと薄情だぞ。あ、そう言えば、今の彼女は、黒い半袖シャツ一枚という破

廉恥な格好じゃなく、ファンシーなウサギ柄のパジャマを着ている。ちゃんとした服を持ってやがるんだな……。

十路は、飛散したガラスの破片を足で払い除け、腰に手を当てて中腰の姿勢になり、梅本の顔を覗き込んでいる。

本山はちよつとパニックに陥っているらしく、酸欠の錦鯉みたいに口をぱくぱくさせ、中途半端な万歳をしながら右往左往していた。「急性アルコール中毒の場合、早急に最寄りの病院まで連れていかなければなりません、大丈夫なのですか？」

和泉が心配している風には到底聞こえない落ち着き払った口調で気遣った。

「大丈夫大丈夫！ 気にしないで」

お気楽顔で手をひらひらと振る西脇。

確かに梅本の口からは、あり得ないくらいの大酪が漏れ出している。酔いで顔を真っ赤にして眠る様は、まさにダルマだ。

「さ、梅本君を部屋まで運ぶわよ。十路君は頭の方を持って、本山君は足の方を持ってね。いい？ あ、ガラスで手とか切らないように注意して！ こんな作業で怪我したら馬鹿みたいだからね。いい？」

西脇はテキパキと指示を出しつつ、梅本の腰下に両手を差し込んだ。

「はい」

来須十路と本山純太が指定の場所について、ダルマを持ち上げる態勢に入る。

「いい？ 持ち上げるわよ！」

「せーの！」

「よいしょーっ！」

美架がマイクで掛け声を張り上げた。

その甲斐あってか、梅本の体が無事に持ち上がる。

「西脇さんは食堂に残って後片付けをして下さい。こいつは俺と本山君で運びます」

十路は重量挙げの選手みたいにダルマ男の体を背負った。

相当の力持ちである。外見はすらりとしているが、服を脱ぐとマツチヨなのかもしれねえな。でも、こいつ、一人で運搬できるんじゃないのか？ 本山は背後から支えてるだけに過ぎないし……。いや、まあ、螺旋階段を上がるには彼の協力が必要不可欠だから、一緒に連れていくのだろう。

二人が梅本を担いで食堂を出ていくと、西脇は割れ物を片付け始めた。

でも、美架は手伝う素振りを見せず、ノリノリで歌っていた。

掃除は従業員の仕事だと思ってやがるのか？ これだから今時の小娘は……。

俺は適当量の氷と水をグラスにぶち込み、これまた適当に焼酎を注いで一口飲んだ。

ふーっと熱い息を吐く。

ちよつと酔っている。だけど、自覚できるレベルなのでまだまだ序の口だ。

俺も今夜は倒れるまで飲みまくってやるぞ。そして、酔った勢いで藤森を……じゃねえ、設楽をゲットだぜ。

おっと、ちーとばかり下品な言い種だったか？ でも、良い女を抱きたいってのは男の本心だろ。それに、今は欲望の赴くままに行動して良い状況だ。

「初日は泥酔した梅本君に誰も絡まれずに済んでラッキーだったわね。やっぱり飲み会は馬鹿騒ぎするよりも、こうして静かにお酒を飲みながら語りたいものよ」

五十嵐が晴れやかな表情で、未成年として不適切な台詞を述べた。昨年の飲み会で余程の嫌な思いをしたらしい。それなら参加しなけりゃいいと思うが、喉元過ぎれば熱さ忘れる、という例え通り、つつい毎年参加してしまうのだろう。振られても、無視されても、ビンタされても、しつこく女の尻を追いかけて回しちまう俺と同じだ。

「あの子がカラオケを止めてくれれば言うことなしだわ」

あの子、とは説明するまでもなく、歌って踊れる自称《天才美少女探偵》来須美架その人である。

「あのまま歌わしときゃいいんじゃないの？ あいつ、和泉に興味津々だから、マイクを手放した途端にこっちに来るぞ」

俺は声を潜めて警告した。厄介者とはなるべく接触を持たないに限る。

すると、五十嵐がグラス内を攪拌していたマドラーの先で俺の顔を差し、唇の両端を下げ、口許にへの字を描いた。

「ちよつと変わった子だけど、邪魔者扱いするのは可哀想だわ」

「そうよ。どうして彼女を嫌うの？」

設楽も同意し、俺を責めた。

二人とも何もわかってねえな。あいつの小悪魔っぷりを実体験してねえから可哀想などと言えるのだ。でも、反論はしねえよ。俺のイメージが雪崩をうって、どん底まで落ちちまう危険性が高いからな。

設楽、五十嵐とは逆に、藤森はいつに何度も《勝負》を挑まれて迷惑を被っているから、今は黙ったままで助け船を出してくれねえが、心の中では俺の意見に賛成してくれているだろう。

「和泉はどう思う？」

この場で最も大きな影響力を持っているであろう男に意見を訊いてみた。

「曲がりなりにもキミは肝試しの時に彼女とペアを組んだ間柄だ。さり気なく間合いを測って精神的に距離を置くならまだしも、彼女の存在を拒否するように仕向ける発言はいただけないね」

意外や意外、和泉にまで咎められた。

藤森が迷惑しているもんだから、てつきり賛成してくれると思い込んでいたが……。ってことは、俺ってひとでなし男のレッテルを貼られそうな立場に追い込まれつつあるのか？ 絶体絶命の大ピンチじゃないかよ！ どうフォローすりゃ改善できるんだ？ わかんね

えぞ。

「存在を否定しちゃいねえよ。ただ、付き合つてると普通の数倍疲れる女だから、なるべくなら相手にしたくねえなあ、って思ったんだ」

一応の弁明を試みる。

「あのエベレスト級に高いテンションと神経を逆撫でするような喋り口調を改善してくれりゃ、俺はあいつと一生添い遂げてもいいと思ってるんだぜ」

勿論、冗談である。

そのままアイドルとして売り出せるほどに完成されたルックスを持ち、陰気な人間を強制的にでも陽気にしてしまう才能を合わせ持つ来須美架だが、一生涯を共に過ごす伴侶としては問題外だ。まあ、彼女と比較して俺の持つ長所がどれほどのものなのだ、と問われれば、返す言葉は全くない。だから、自己防衛の為に弁解はするけど、これ以上の批判はしないでおう。

「あの顔でお淑やかなら恋人にしたい？」

設楽に訊かれた。

俺はあんたを恋人にしたい、と返答したかったが、声帯にストツパーを設けて発声を制御した。そして、俺らしくない台詞をつらつらと紡ぐ。

「別に、お淑やかじゃなくてもいいぞ。あいつはあれで普通なんだろうからな。人間はナチュラルが一番なんだ。変に意識して良い子ぶつても、どうせ長続きしねえよ。結局いつかは見破られちまうさ」
「そうよね。私もそう思うわ」

設楽は目元を和ませて賛同してくれた。初対面からこっち、友好的な態度を維持してくれている。悪者扱いされずに済んだようだ。助かったぜ。自分で振った話題で集中砲火を浴びて、危うく撃沈されちまうところだったぞ。

キッチンで割れ物の始末をしていた西脇が、キッチンに入っ

いでお摘みの追加注文を受け付けてくれることになった。手のかかる料理でなければ大抵の注文に応じてくれるそうなので、俺たちは遠慮せずに好きな物を頼んだ。

俺は、日本人が好む典型のお摘みとして名高い《焼きたらこ》を注文した。

こいつがありさえすれば、焼酎が進むこと間違いなしだ。
「私はフライ系が欲しいわね」

五十嵐さんの注文を耳にした設楽さんは、嫌そうに柳眉を寄せて、胸の下辺りを手で押さえた。

「お酒の当てに揚げ物を？ 胃にもたれないかしら。私はあつさりした物が欲しいな。野菜スティックなんか簡単でいいと思うわよ」

「生野菜は止めておいた方がいいわよ。お腹に虫が湧くから。私はパス。あと、和泉君たちに経験者として一言注意しておくと、明日は二日酔いで辛いと思うけど、生水は絶対に飲まないこと。お腹を下して泣きを見るはめになるわよ。面倒臭くても、この食堂まで清涼飲料水を貰いに来なさい」

「そうね。去年、緒方さんが酷い腹痛で大変だったものね」

設楽は可笑しそうに言つて、野菜スティックを改め、温野菜を注文した。

「保奈美は何を注文する？」

速いピッチで飲みまくっているくせに全く酔った素振りを見せない和泉が活舌の良い口調で訊くと、藤森は満開の桜みたいに色付いた顔を左に傾け、普段見せないとろけるようなだらしのない笑みを浮かべた。

あまり会話に参加していない分だけ酒が進んでいるので、他の女よりも酔いの回りが早いのだろう。それに、和泉がテンポ良く飲ませているから……。まさか、早々に酔い潰して、高校生にあるまじき淫戯に興じようつてわけじゃねえよな。

「真悟君と同じでいいよ」

「ボクはここに用意してあるチーズ類以外は要らないんだ」

「じゃあ、わたしも要らない」

「そうか」

和泉が注文を纏めてキッチンに伝えた。

上妻と緒方のテーブルも何かを注文したようだ。

「しっかしねー。あの子、お酒も飲まずに一人でカラオケして何が楽しいのかしらね。それに、さっきから延々歌い続けてるけど、喉とか疲れないのかしら。私なら二、三曲で声が嘎れてしまうわ」

一昔前のアニメソングを熱唱する天才美少女探偵を横目で捉えて、五十嵐が感心したように呟いた。

「自己陶醉型の性格みたいだから、きつと何曲歌っても飽きないんだろっぜ。俺だったら、早々に切り上げてこっちに来てるところだよ」

「よっぽどカラオケが好きなのよ」

設楽が弁護する。

五十嵐は鼻で笑った。

「最新のヒットチャートを賑わせてる歌ならまだしも、昔の歌ばかり聴かされちゃ迷惑だわ。しかも、アニメの主題歌ばかり」

「アニメソングは悪くねえぞ。場を盛り上げる為に、俺もよく歌うもんよ」

「一人でカラオケする場合は、アニメ主題歌を選曲しないでしょ？」

「俺は一人でカラオケするような寂しい人間じゃねえよ」

「例えば、の話よ。ムキにならないで」

ムキになどなつてない。

変に誤解されちゃ敵わねえから、はつきりと否定しただけだ。

「あの子、バラード系は歌わないのかしらね。選曲する全てがノリノリじゃ、聴かされる側が堪らないわ。鼓膜が機能不全に陥っちゃいそうよ」

「そうね。せめて演歌にして欲しいわ」

「おいおい、設楽さんよ。いい若者が演歌って……。ちーと婆臭くねえか？」

「あー、それ、悪くないわね。雰囲気は落ち着くもの。演歌はいいわよ」

設楽と五十嵐は頷き合った。

コテコテの中華料理やフランス料理よりもサッパリとした日本食が好きってことだろうが、どの曲も代わり映えのしない演歌よりはバラエティに富んだアニメソングの方がマシだ、と俺は思う。でも、それは、マイクを手放さない美架を擁護しての思いじゃねえぞ。

「みやびは、ああ見えてバラード専門なのよね。煩い歌は嫌いみたい。藤森さんはどう？ やっぱバラード系を好んで歌うの？」

「わたしですか？ わたしは……そうですね、流行の曲をよく歌います。まあ、ノリのいい曲は元気のいい友達に任せて、わたしは落ち着いた曲を選ぶのが常ですね」

「なら、和泉君は主に何を歌うの？」

「ボクに得意な曲目はありません。好きなアーティストも存在しません。音楽自体に感心がありません」

「そう！ 真悟君は歌をあまり知らないんですよ。一緒にカラオケに行っても、お酒ばかり飲んでマイクを握らないんです」

藤森が責めなじるような口調を用いた。

五十嵐は納得顔で頷く。

「あー、君はそういう感じよね。周囲の人間がノリノリになっても、一人だけシラツツと澄ましてそくだものね」

そう決めつけられても和泉は否定も肯定もせず、穏やかな笑みだけを返した。

その対処の仕方がスカしてるんだぞ、おい。感受性の強い男からすると、ムカムカーツと頭に来るんだ。それを自覚しやがれ。

「そうでもないんですよ。真悟君は理由もなく故意に雰囲気を悪くしたりしないんです」

すかさずフォローする藤森。

和泉は放課後に、和久井を筆頭とする詩海高校一年A組の女どもと遊び歩いているそうだ。男は奴一人。いわゆるハーレム状態だ。

まあ、奴が強引に誘ってるわけじゃねえし、そこには藤森や鷹峰つばさも参加してるらしいから、クラスの綺麗所を全裸に引ん剥いて、えろいことしてるわけでもねえ。でも、羨ましいよな。たまには俺も誘ってくれ、と言いたいぞ。

「あら、それは意外ね。和泉君くらいの容姿を持っていたら、大概は自己中心的な行動に出そうなものよ」

「そうそう。和泉君てアイドル並みのクオリティだから、可愛い女の子にチャホヤされて有頂天になってもおかしくないわ。君、学校じゃモテモテでしょ？ 女の子を取っ替え引っ替えして泣かせてない？ 一晚だけの関係を結んだ女の子、何人くらいいるの？」

「真悟君はそういうタイプの男の子とは正反対なんです！」

下司の勘ぐりにも一切反論しない和泉に代わって、藤森が静かな憤りを込めて答えた。

俺も同意する。

「そうだな。和泉はそういう馬鹿男とは違って他の女に見向きもしないよな。徹頭徹尾に藤森一筋だ。それをわかってるから、他の女も和泉には言い寄らねえんだよ」

「へえ……そうなの。今時珍しいわね」

五十嵐は若干の不満を言葉に宿らせた。

藤森しか眼中にないと聞かされ、一人の女として癪に障ったのだろつ。

でも、すぐに気を取り直したようだ。

「東京に戻ったら、一度一緒に遊びましょよ」

「おう、そりゃ、ナイスなアイデアだぜ。白岐のお嬢様とお近づきになれるチャンスなんてそうそうないもんな。是非とも遊ぼうぜ」

「設楽さんはどう？ 千葉からなら電車ですぐでしょ？」

「ええ、そうね。このイベントだけのお付き合いでは寂しいものね。でも、梅本君や上妻君を抜きにするなら、という条件付きよ」

「それは勿論そうよ。あんなデリカシー欠乏症丸出しの男どもと、こつという特殊なイベント以外でも仲良くできるほど私は寛容な人間

じゃないわ。真つ平ごめんよ」

「来須兄妹は？」

冗談半分に俺が訊いてみると、藤森に物凄く怖い顔で睨まれた。うおお、怖え……。お淑やかな仮面の下には般若の素顔が隠されてやがるぞ。あの奇天烈な兄妹を相当嫌ってるみてえだな。アルコールの効果で内に秘めてた負の感情が零れ出ちまったか？

「あの二人は愛知県からの参加だから、そうそう東京まで遊びに来ねえと思うぞ」

自分で振っておいてなんだが、藤森の目から冷凍光線が迸る前に自分で答えた。

五十嵐は奴らの出身地を知らなかったらしく、驚きのポーズを作り、俺の言葉より自分の耳を疑うような仕種をした。

「愛知って……愛知県？ それ、嘘でしょ？ なんでそんな遠い所から来てるの？ これって、そんな有名なイベントじゃないわよ」俺に質問してどうする……。

そのもつともな疑問に答えたのは、設楽だった。どうやら、彼女も同じ疑問を持ち、肝試しで同じペアになったついでに、来須兄から参加理由を聞いたようだ。

「十路君たちは、今回のイベントに参加している誰かのことを調べているそうよ。東京で起こった殺人事件に関する情報を集めているみたい。それが誰のことで、何の事件を調べているのかは秘密だつて。殺人事件と聞かされて、私、ちよつと興味を引かれたわ」

おいおい……。それって和泉のことだろ、と俺は内心で突っ込みを入れた。そして、ちらつと奴の顔を盗み見る。でも、そこには普段と変わらない微笑み顔があった。

自分のことだとわかつているだろうに、リアクションなしってわけだ。

そんなクールな和泉とは対照的に、藤森は明らかに動揺していた。和泉と設楽の顔を交互に見て何かを言おうと口を開きかけるが、下手なことを口走って奴に迷惑をかけちゃいけないと思い直したよう

に何も言わず口を閉ざす。

「保奈美、お酒のお代わりは？」

「う、うん、貰おうかな……でも、うすーく作ってね。わたし、なんだか身体がだるくて、頭がくらくらするから……」

「過分なく要望に応じよう」

へいへい、恋人の心情を察してのさり気ない労りですか、むかつくくらい仲がよろしいですな！ けっ、一気に酔いが覚めちまったぞ。

俺は酒を豪快に呷り、空になったグラスに焼酎だけを注いだ。

不意に、カラオケの騒音が途絶えた。

「真悟くーん、一緒にお喋りしよっ！」

カラオケは一人で盛り上がってても面白くも何ともねえってことを美架はようやく理解したようだ。呼んでもいねえのに、マイクを放りだしてこっちに駆け寄ってきた。そして、背後から和泉に抱きつき、甘ったれた声を発した。同時に、この場にいる女を全員敵に回したようだ。特に、藤森を女夜叉に変化させちまったようだぞ……。

「真悟君、部屋に戻りましょうよ！」

藤森がやおら席を立ち、和泉の腕を抱えるようにして引つ張った。「あゝん、駄目だよっ！ 真悟君は今から私と仲睦まじくお喋りするんだからっ！」

美架は甘え調子で反対側から和泉の腕を抱え込み、ぶら下がって、無理にでも立ち上がるのを阻止しようとした。

「美架ちゃん、その手を離しなさい！」

「やだもーん！ 離さないもーん！」

完全な挑発口調だ。美架に悪感情をいだいていたら、どんな紳士淑女でも激怒してしまうだろう。藤森のような慎ましやかな美少女も例外じゃねえ。しかも、今現在、彼女はアルコールに侵されて感情表現のリミッターが外れている状態だ。即座にブチ切れてもおか

しくない。

「こら！ 真悟君の腕を放しなさい！」

藤森が叫んだ……、というより喚いた。

ほれ、見る。お姫様がキレた。あんな姿、学校じゃ絶対に見せねえぞ。

「べえーだつ！ 真悟君は一人占めさせないよーっ！」

美架は目の下に指を当てて舌を出した。

「このあんぱんたん！」

「私、あんぱんたんじゃないもーん。天才美少女探偵でえーすう！」

「何が美少女よ！ 胸もお尻もぺったんこのくせに！」

「保奈美ちゃんも、言うほど大きくないじゃんかつ。服を脱いだら寸胴体型かなつ？」

「！」

藤森は、アルコール以外の要因で顔を紅潮させ、髪を振り乱して美架に掴みかかろうとして、和泉に止められた。

「保奈美、少しお酒が過ぎたようだね。部屋に戻って酔いを覚ました方がいい。それとも夜風に当たりたい？」

「……………」

「ボクは、ここでそうして怒鳴る保奈美の姿を見ていたくない」

「…………ごめんなさい」

藤森は鬼のような顔で美架を睨み付けてから、半泣きの顔で和泉を見た。

和泉は腕に絡みついている美架の手をそつと引き剥がし、空のグラスを二つ藤森に持たせ、自分はまだ封が切られていない酒のボトルを三本纏めて持った。

「さあ、戻るよ」

「うん……………」

「真悟君、部屋に戻っちゃうのーっ？ そんなのつまんないよおっ！」

美架は二人の退室を阻もうとして上目遣いで抱きつこうと身を擦

り寄せたが、和泉が無言で手の平を向けると、唇の先を尖らせて大人しく引き下がった。

きつと、奴の視線が怖かったのだろう。顔は微笑んでいるのに、目が冷ややかなのだ。黙ったままだから余計に怖い。あんな目で見据えられたら、心臓に剛毛が生えている俺でも怯んじまうぞ。

「真悟君、私も行っていいかな？　三人で仲良くお喋りしようよっ」

「絶対に嫌よ！」

即答する藤森。

そりゃ拒絶するよな。

和泉と藤森は肩を寄せ合って食堂を後にした。部屋でイチャつくつもりなのだろう。奴とあまり会話できなかったけど、まだまだ合宿は続くのだから、無理に引き止める必要はない。まあ、好きにすればいいさ。

「ちえーっ。保奈美ちゃんのけちい！」

美架は音なく閉まるドアに、いーっと歯を剥き、身を翻してトイレへと向かった。

【6・来須美架】

トイレを済ませ、手を洗い、ハンカチで水気を拭い、私は薄汚れた鏡に映る自分の姿をじつと観察した。

剣呑な眼光。

嫌悪を湛えた頬。

引き結ばれた唇。

我ながら無愛想な顔だ。

しかし、これが私のノーマルな表情である。この顔で日々生活できれば楽なのだが、兄の下らない探偵ごっこに付き合わされて、脳味噌の神経が数本切れた妹を演じる必要があるので、常時能天気にあつて見せねばならない。兄や両親に対して演じてみせているのは、安楽な生活環境の保持という明確な意図があるからであり、生活範囲に存在する人間に対して演じてみせるのも対外的効果が見込める分だけ愛嬌を振り撒く意味があるからだ。

だが、このイベントに参加している人間に愛想良くしても、私にメリットは全くない。私の笑顔は、兄の馬鹿馬鹿しい探偵欲を満たす為の間接的效果しかない。私が中嶋と藤森を騙して情報を搾取し、和泉の関係した事件を兄が徹底的に調査分析する。その為の擬態。否、媚態だ。

反吐が出そうだ。

あと何日間、偽りの笑みで顔を繕えばいいのだろう。

三日？ 四日？

冗談ではない。

このまま面白くもないのに笑い続ければ、終いには顔面の筋肉が引きつりを起こして、嫌悪すべき愛想笑いの形で硬直してしまうかもしれない。それが現実となった場合、私は苛立ちのあまりに自分の顔を短冊状に切り裂いてしまっただろう。馬鹿のふりは大変である。「あんぼんたんか……。ふん、全く同感だよ、藤森保奈美。私は兄

想いの馬鹿な小娘だ」

私は鏡に映る自分に向かって唇を歪ませ、皮肉っぽく呟いた。あまりトイレに長居すると誰かが心配して様子を窺いに来るかもしれないので、一度気合いを入れ直し、満面の笑顔で表情を固定し、一応身嗜みを整えてから外に出た。

食堂には酔い潰れた梅本を部屋まで運んでいた兄と本山の姿があった。そして、飲み会のグループ構成が若干変化していた。上妻と緒方のテーブルに五十嵐が移動し、そこに兄が加わっている。

私のテーブルは、設楽を挟んで本山と中嶋が睨み合っていた。一匹の雌を巡って、二匹の雄が対立している構図である。どうやら、無様で醜悪な恋愛劇を観賞するはめになりそうだ。そのうざったい喜劇に首を突っ込んで怪我をしないように気を付けねばなるまい。下手に振る舞うと酔っ払いの巻き添えを食って泣きを見そうな予感さえ覚えている。先程、藤森をからかった時は、冷静な和泉が止めに入ってから取っ組み合いの喧嘩には発展しなかったし、それを見越しての挑発行為だった。しかし、仲裁役の存在しない場所で挑発的言動を試みるのは非常に危険である。この貧弱な肉体を用いたお色気混じりの際どいスキンシップは、自室に戻るまで堅く封印しておくべきだろう。

私は和泉の座っていた席まで軽快に駆け、椅子に勢い良く尻を落とし、本山の服の袖を掴んで引つ張りながら顔を寄せ、二人の男が醸し出す不穏な空気を吹き払うべく、得意の能天気な口調を用いて、戻りが遅かった理由を訊いた。

「お兄ちゃんと本山君、ぶっ倒れちゃった梅本君を部屋まで運ぶだけなのに、やたらと戻るのが遅かったよねっ。二人で何をしてたのかなっ？ 男同士でラブラブアタックチャンスじゃないよねっ？」
「ラブラブって……そ、そんなわけないよ！ 何を言ってるんだ、美架ちゃん！」

ちよっとした戯言で狼狽する純情な少年。

微笑ましいと言えなくもないが、今時の高校生ともなれば日常会話に下劣低劣なジョークを織り込む程度は常識の範疇だ。

「慌ててるところが何気に怪しいぞっ」

「酷い誤解だよ！」

完全な冗談とわかる口調でからかっているのに、本山は腰を浮かせて両手を上下させ、滑稽なダンスを踊った。

何をムキになっているのやら。そこまで大袈裟に否定されると、反対に疑惑を助長してしまうだろうに。まさかとは思うが、隠れ男色家？ 同性愛嗜好者？ 設楽を口説くふりをして、実際のターゲットは中嶋？ 何にしろ、私の興味対象外である。

「本山君、冗談よ。落ち着きなさい」

設楽が、上手く弁解できずに汗を掻く本山の肩に手を掛けて椅子に座らせ、優しい口調で宥めた。

その効果は覲面だった。

大抵、恋愛対象者の声は鎮静剤と同等の効力をやどしているものである。

「どうして僕がホモなんだよ……。だいたい僕を疑ったら、美架ちゃんのお兄ちゃんもホモってことになるじゃないか……」

テーブルに視線を落とし、呪詛を零す本山。

彼は不愉快にさせられても、相手に対して怒りを露わにできない性格なのだ。

純朴な少年の心に傷を付けてしまったらしい。

しかし、このタイプの男は素直に謝罪すれば容易に受け容れてくれる傾向にあるので、即座に不和の解決を図った。

「本山君、変なこと言ってごめんねっ」

私は拝むように両手を合わせ、媚びを含んだ全開の笑顔で詫びた。
「うん。別に気にしてないけどさ……」

案の定、私の無邪気さに軍配が上がった。

「許してくれるかなっ？」

上目遣いで駄目を押す。

「うん……、いいよ」

本意ではないだろうが、本山は顔に作り笑いを浮かべて頷いた。年下の馬鹿女に媚びられては、設楽の目を気にする彼には、許すという選択肢しか選べないのだろう。

「じゃあ、二人はどうして遅くなつたのかなつ？ 正しい理由を五十文字以内に纏めて述べて下さいっ！」

「五十文字？ 難しいよ……」

「要は、簡潔に説明しろってこつた」

中嶋が口を挟んだ。

この男、肝試しの時にも思ったが、決して頭は悪くない。難点は、選択肢を絞り込む際に、己の利をむやみやたらと追求するところだ。悦楽絡みの選択肢を認識するセンサーが発達している所為で、最良の選択肢を無意識に除外してしまうのだろう。その点に思い至れば、より洗練された人生を楽しむチャンスが得られるに違いない。

本山は腕組みをして数十秒間黙った。

頭の中で話す内容を整理していたのだろう。

「理由は単純だよ。梅本君が螺旋階段を上がつた所で盛大に吐いちゃつたから、後片付けに手間取つたんだ」

「きつたねーなあ、おい！ ちゃんと拭いたんか？」

「うん。そこは抜かりなく掃除しておいたよ。誰かが足を滑らせて階段から転げ落ちたら大変だもん。懐中電灯の明かりを頼りに、二人掛かりで床を磨いたよ。でも、一応、二階に上がつたら足下に気を付けてね」

「おう。十分気い付けるぜ。ゲロが原因で転倒死するなんて、漫画の世界でもあり得ねえ格好悪い死に様だもんな。そんな馬鹿やつちまつたら、親戚中の笑い者になつちまうぞ」

そう言つて中嶋は哄笑したが、注目すべき点は梅本の吐瀉物ではない。

なぜ彼らは懐中電灯を用いたのか、という点である。

「なんで懐中電灯なんて使つたのかなつ？ 廊下は蛍光灯で照らさ

れてるから、そんなのなしでも見えるでしょっ？」

不可解な点を問い質す。

答えは単純だった。

「あちこち探してみたけど、電気のスイッチがどこにあるのかわからなかったんだよ」

スイッチの在処など予想できそうなものだが、兄が同行していて発見できなかったのであれば、他の誰も発見できるわけがない。

中嶋が怪訝そうに眉をひそめた。

「普通、こういう所の蛍光灯って、決まった時間になると自動的に点灯するんじゃないのか？」

「違うみたいよ」

ビールの大ジョッキでアルコールらしき透明な液体を啜っていた設楽が、可笑しそうに肩を揺すりながら解答を発表した。

「廊下の照明のスイッチは、階段を上がってすぐ横の壁に備わっているのよ。いつもは西脇さんがスイッチを入れてくれるのだけど、今日は肝試しや飲み会の準備でバタバタしてたから忘れてしまっていたのね、きつと」

「スイッチに蛍光塗料を塗っておいて欲しかったよ。そうすれば、僕たちも簡単に見つけられただろうに……」

「そりゃ、名案だな。早速、西脇さんに提案してみたらどうだ？ 案外、採用されるかもしれねえぜ」

中嶋はそう言って膝を叩き、大口を開けて笑った。

それからしばらくの間、自己アピールを兼ねた男二人の武勇伝を拝聴するはめになった。

自分の長所を照れながらも真つ直ぐに主張する本山とは反対に、失敗談を語って自分を貶めて笑いを取る中嶋。そのコントラストは見事の一言に尽きる。二人の話はそれなりに聞き応えがあり、退屈しなかった。

どうやら設楽は、真面目でお堅い後輩よりも、お馬鹿だけど面白

い中嶋に好意をいだいたようだ。

かくいう私は、お調子者など真っ平である。

「中嶋君はふられてばっかなのかなっ？ 百戦して百敗で大惨敗っ？」

「おう！ 連戦連敗で世界記録更新中さ」

この男は格好悪い自分を堂々と晒すので、幾らマイナス要素が蓄積しても無様に映らない。ある種の爽快感すら覚えさせ、感心させられたりする。しかも、サンドバッグのように打たれ強いので、心置きなくからかえる逸材だ。

「自信満々だねっ」

「おうよ。数打っても当たらねえのが俺の自慢なんだ。すげーだろ？」

「厚顔無恥だねっ！」

「俺は紅顔の美少年だけど、無知じゃねえぞ。地元じゃ雑学王のツヨポンって呼ばれてたんだ。まあ、小学生の頃だけだよ……」

「ふふっ……、意味が通じていないわね」

設楽は口を手で隠して上品に苦笑した。自然な仕種なので嫌味がない。性格の根幹がお淑やかさで形成されているのだろう。厳格な驍の賜物である。表情から口調まで全て偽装している私とはまるで違う。

「でも、それじゃあ、中嶋君は女の子とお付き合いしたことないのかなっ？ 彼女いない歴十年以上なのっ？」

「彼女いない歴は、十五年と七ヶ月だ」

意外だが、中嶋は童貞らしい。それを恥ずかしげもなく明かすところは彼の長所だ。虚実で経歴を飾る見栄っ張り男より遥かにマシである。

しかし、十六年近くも独り身とは驚きだ。彼くらいの容姿を持っていれば、一夜の性交に応じる馬鹿な女など幾人でも見繕えそうなものだ。きつと、彼なりのポリシーがあつて、そういう部類の女を相手に選びたくないのだろう。

「うそ！ 中嶋君、今までずっと彼女いなかったの？ 信じられないよ！」

本山は素っ頓狂な声を上げ、目を見開いて驚きを表現した。

彼は童顔で儂げなので、気位の高い女に可愛がられるタイプである。純情そうできて、逆に経験値が高そうだ。

「なんだよ……。本山は彼女持ちか？」

「ううん、今はいないけど……」

「けっ！ おまえは和泉と同じでモテそうな面してっからな！」

「そ、そうでもないよ」

「あら、本山君、謙遜しなくてもいいのよ。君は宮古川高校で一番モテているでしょう？ 部活動に支障を来すくらい、毎日誰かに告白されているじゃない。ここに来て、五十嵐さんに気に入られているし」

設楽は微細な毒を声音に潜ませて本山をからかい、弁解を封じておいて中嶋を見た。

「でも、中嶋君が全くモテないという話は鵜呑みにできないわね」

「あつ、わかつたっ！ 性格に何か深刻な問題を抱えてるんじゃないっ？」

「そんなわけねえ！ 俺は健全な日本男子だ。まだ俺は運命の女神に出会えてないっただけで、決して性格の所為でモテないわけじゃねえぞ。そこそこ、間違えんなよ！」

中嶋はテーブルを叩いて主張した。そして、設楽に言い寄ろうという素振りを見せた。

それを察知した本山も対抗処置を取ろうと身構えた。

一触即発だ。

すると、タイミング良く。

「お摘みできたわよー。誰か代表して取りにいらっしやいなー」

先程注文しておいた酒の摘みが、今になって完成したようだ。

幾つもの料理を乗せた大きなお盆を持った西脇が、キッチンから顔を覗かせて、カウンター越しに料理を受け取るよう指示を出した。

「私が取ってくるから、君たちは飲んでいていいわよ」

設楽はそう言って席を立った。

熱意の凝縮された視線に当てられ、息抜きの意味もあつて席を外したようだ。

本山と中嶋がこっちを向いた。

二匹の雄が標的と定めた雌がいなくなれば、必然的に会話の対象者は私になってしまう。

「美架ちゃんはお酒飲まないの？」

「飲めないんだよっ」

「アレルギーとかで？」

「違いまーすう！ 美味しくないからでーすう！ あー、でも、オレンジジュースみたいなお酒とかコーヒー牛乳みたいなお酒はちょっとだけなら飲めるんだよっ！」

「ああ、スクリュードライバーとカルアミルクだね。確かに、あれは飲みやすいよね」

「女が好む典型的なカクテルだな。でも、断じて、男の飲み物じゃねえ！」

「そうかな。僕は嫌いじゃないよ」

「おまえは女顔だからだ」

「……………」

「本山君は文句なしで紅顔の美少年だもんねっ。この山荘にいる男の子の中でランク付けすると、第二位に選ばれちゃうかなっ！」

「俺は？」

「第四位でーすう！」

「六人中四位か？ 下から数えた方が早いじゃねえかよ……………」

中嶋は不服そうに顔をしかめ、グラス内の酒を喉に流し込んだ。実に不健康である。そんな飲み方を続けていけば、いずれ内蔵を壊してしまうに違いない。彼は二十代にしてインシュリンを常用する覚悟ができているのだろうか？

「あれれっ、中嶋君、私の評価に不満でもあるのかなっ？ それなら、《勝負》するっ？ 女の子全員の評価を聞いて、明確な結果を知りたいのかなっ？」

「いや、止めとく。おまえの評価はともかく、どうせ和泉がダントツで一番人気だからな」

「自虐回避だねっ」

「避けてねえよ。ただ思い知ってるだけだ。見てくれの序列ってやつは、個人の妄想や願望で変えられるもんじゃねえだろ。あ、ちなみに訊くけど、設楽さんの評価は？」

中嶋が、お摘みを持ってきた設楽に訊いた。

「……………」

設楽は曖昧な微笑みだけで答えた。言葉で答えれば中嶋と本山のどちらか一方もしくは両者を同時に傷つけてしまうので、二人の心情に配慮して明確な順位付けを柔らかく拒否したのだろう。

中嶋は察しの悪い男ではない。無理に評価を求めて自爆する愚を犯さず、話題を変更するという安直な選択肢を選んだ。

それは、私にとって迷惑な話題だったが……。

「なあ、美架、おまえっていつもそのテンションなのか？ ふと素に戻る瞬間ってないのかよ？」

私は、実家の自室に一人で籠もっている時と本性を知られても実生活に害を及ぼさない人間の前にいる時のみ、《天才美少女探偵》の偽装を脱ぎ捨てて素の来須美架を晒す。それ以外は、たとえ肉親の前でも、兄の前ですら、能天気な馬鹿女のふりをし続けている。気を抜く瞬間など一秒すらない。思わず内心の思いを吐露して、物心ついてから今現在に至るまで続けてきた擬態の苦勞を無にするのは、自殺に等しい愚拳だ。必要なのは、徹底したキャラ管理。精神回路に強烈な制約を設け、自己暗示を施して半催眠状態に至らしめることが肝要だ。いわば私は、似非の二重人格者なのである。それをこの場で明かすなど論外だ。

それよりも重要な問題が生じている。

それは、私に対する呼称だ。私を呼び捨てていい存在は、両親と兄だけである。百歩譲っても、クラスメイトと愛知県警の刑事までだ。それなのに、この男は……何の権限を所有して私を呼び捨てているのだろうか？

私は、心の深層部に設けてあるブラックボックスに負の感情を流入させて、汚れない笑顔に変換した。

「私は、いつでも、どこでも、誰にでも、こんな感じでーすう！」

「そんじゃ、昼間の素敵な格好にはどんな意味があるんだ？ 男物のシャツ一枚なんて常識じゃあり得ねえだろ」

一番痛い部分を突かれた。

その理由は絶対に説明できない。

だから、即座に拒否した。

「暗い話になっちゃうから教えられませーん。お酒は楽しく飲まなきゃねっ！」

私は最善の対処方法を用いた。

こう言うておけば、大抵の場合、突っ込んで訊かれずに済む。誰も美少女の悲しい過去を聞き出して場の空気を改悪しようとは思わないのだ。お調子者の中嶋であれば尚更だろう。

「そうか……」

思った通り、中嶋は気まずさで頬を硬直させ、私から視線を逸らし、乱暴な手つきでグラスを傾けた。

想定通り、雰囲気が悪くなった。

私は空気の改善を図る。

「ねえねえ、それよりも、真悟君のことを訊いていい？」

私は本来の目的を果たす為に話題を矯正した。

和泉真悟についての会話から少しでも多くの情報を得ねばならない。兄の病的な推理欲を満足させるには、肝試しの際に中嶋から得た情報だけでは不十分なのだ。

中嶋は、肝試し時に交わした約束を守り、春先に発生した殺人事

件の詳細な情報を聞かせてくれたが、その内容は、事件を担当した
渦海恭子警部が提出した報告書と何ら変わらぬものでしかなかった。
和泉の過去については、本当に何も知らないらしい。

本山と設楽は完全な部外者なので、直接的な情報を期待するわけ
にはいかないが、彼らの取り留めのない会話から引き出される間接
的な情報が珠玉の価値を有するかもしれない。

そう思ったのだけど、残念ながら芳しい情報は得られなかった。
きつと兄は落胆するだろう。

兄が和泉真悟という男に執着する理由を、私は正確に理解できて
いない。確かに、彼の過去には不審な死と不可解な死が多々存在し
ている。彼と肉体関係を結んだ女が一人を除いて全員殺害され、彼
の両親すらも死亡していると聞かされて、彼が犯人ではないのかと
疑わない者はいないだろう。だけど、彼の関わった事件に、もう謎
はない。それらの事件は、彼の手によって一変の曇りもなく、見事
に解決へと導かれていくのだ。そして、逮捕された人間（被疑者死
亡の場合を除く）は、一人の例外もなく罪を認め、刑に服している
のだ。それは認めざるを得ない事実である。それを否定する場合は、
彼の推理を全て覆す確固たる証拠が必要不可欠だ。兄は、警視庁の
捜査資料に残されている犠牲者の家族や交友関係から、真相に辿り
着く為の情報を得ようと画策しているらしいが……、徒勞に終わる
可能性が高いだろう。

「おまえ、和泉を狙ってんのか？」

中嶋がいやらしい笑いを口の端に貼り付けて訊いてきた。

彼の目には、私が和泉真悟に執着していると映っているはずだ。
だから、横恋慕していると勘違いされてもおかしくない。それは正
しい誤解である。ゆえに、その質問は想定済みだった。当然、返答
も用意してある。

「狙っちゃってまーすう！」

私は馬鹿丸出しで肯定してみせた。

だが、本気で狙ってなどいない。これは、次の情報収集計画を実

行に移す為の布石なのだ。

中嶋は同情と憐れみの宿した目で私を見つめ、人差し指を左右に振った。

「止めとけよ。あいつを狙っても、どうせ落とせやしねえぞ」

「どうしてかなっ？ 結果が出るまでは、残り一パーセントの可能性しかなくても、勝利を信じて戦い抜かなきゃ、真の勝利者にはなれないよっ」

「あいつの周囲には恋人志願者が行列を成してやがるんだぞ。顔ぶれはピンからキリまでバラエティに富んでるが、難攻不落の双壁がそびえ立ってるから、おまえがどう頑張ってもあいつの心を捉えることはできねえよ。完全敗北が濃厚だな」

「そんなのやってみないとわかんないじゃんかっ！ 手を変え品を変え、手練手管を用いて双壁を砕いちゃいまーすっ！ 高い山は嬉々として挑まなきゃねっ！ あっ、でも、双壁って言うからには、保奈美ちゃんの他にも真悟君が覇盾にしている女の子がいるんだねっ？」

会話から引き出した疑問点を、即座に質問に変えた。

藤森保奈美に対抗する女の存在は、有益な情報になり得る要素だ。兄も興味を示すに違いない。

「鷹峰つばさ、っていう和泉の元彼女だ」

鷹峰つばさ……？

その名前は、和泉が中学時代に関わった最悪の猟奇殺人事件に登場する女のものだ。

彼女のデータは、全て脳内にインプットされている。彼の恋人でありながら、死地からの生還を果たした唯一の存在であり、平行して発生していたバラバラ殺人事件の最中に誘拐され、後に惨殺死体となって発見された鷹峰由羽の実妹。両親は、姉妹の誘拐が発覚してから六十一日目の朝に自殺。彼女が無事に解放されたのは、行方

不明になってから百七十三日目だったという。余程の恐怖体験をして戻ったらしく、長い髪の毛が半ばから真っ白に変色していたそう
だ。

その事件の調書には、姉が切り刻まれる光景を見せられ、その死体の横で幾度も強姦された、とあった。

よくも正気を失わなかったものである。

「どんな人なのかなっ？」

「和泉にベタ惚れだ。自分を捨てた男を追って転校してくるくれえだから、よっぽどあいつのことが好きなんだろうな。見てくれは、精巧な日本人形って呼ばれるくらいのすんげー美人さんだぜ。性格は物静か……っていうより暗いかな。声を上げて笑ってる姿を見たことがねえ」

「怖い人なのっ？」

「さあな。俺はあんま喋ったことねえからよくは知らねえよ。鷹峰つばさについて知りたきゃ、和泉か藤森に訊くんだな」

それができれば苦労しない。

我々来須兄妹が過去の事件を洗い直していることを極力知られたくないのだ。

彼らに直接質問しないように、兄から言い含められているから。

「その人と保奈美ちゃんは、仲が悪いのかなっ？ 三角関係で気まずい感じっ？」

「いや、和泉と藤森は相思相愛の仲だから、鷹峰先輩は蚊帳の外さ。あの人も、無理に二人の間に割って入ろうとはしてないんじゃないかな」

「ふーん。じゃあ、その人は、私の対戦相手にならないってわけだねっ。倒すべき敵は、保奈美ちゃんだけなのですっ！」

「おっ、お得意の《勝負》か？」

「そうでーすう！ まずは保奈美ちゃんと明日の朝一番に勝負だよっ！ ーん！ にゃ、一撃必殺を狙って、真悟君と直接勝負しちゃおうかなっ。二人同時に倒しちゃう、っていう手も捨てがたいよねっ！」

「おまえ、度胸あるよな……」

呆れた様子の中嶋。

私は背筋を伸ばして胸を叩いた。

「おっぱいはぺったんこだけど、度胸は豊満でえーすう！ 触ってみたいっ？」

膨らみに乏しい胸を突き出し、中嶋を挑発した。

いくら酔いの力が勝っても、設楽の眼前で私の胸を揉む勇氣などあるまい。

「……おまえ、ぜってー泣きを見るぞ。和泉の怖さをまるでわかつちやいねえ」

中嶋は忌々しそうに言った。

「どんな勝負を挑むのかしら？」

興味を持った様子の設楽が訊いてきた。

「推理合戦だよ。架空の事件を題材にしてもいいし、もし何か事件が起こったら、それを題材にする予定だよ。それで、どっちが早く真相に辿り着くか勝負ってわけだね。明日の朝をお楽しみにっ！」

「おいおい、朝っぱらから騒動を起こされちゃ堪らねえぞ。おまえ以外は全員二日酔いでダウンしてるだろうからな。そこそこ、よく考慮しやがれよ」

「了解でありますっ、中嶋警部っ！」

戯け調子で敬礼してみせると、中嶋は面白くなさそうに鼻を鳴らし、惣菜を摘んだ。

イベント初日の収穫はゼロだな、と私は内心で愚痴を零しつつ、アルコールの入っていないジュースを飲む。しかし、清涼飲料水では、無意味な会話が生じさせる苦痛を紛らわせることはできなかった。

第三章 時間の凝縮と分断 【1・藤森保奈美】

七月二十二日、火曜日。

涼やかな風に頬をなぶられ、わたしは目覚めを余儀なくされた。半身を捻って寝返りをうち、仰向けになって顔にかかった髪の毛を払い、重い瞼を持ち上げて天井にぶら下がる蛍光灯を視界に収める。

「お目覚めかな？」

窓の方から声が聞こえてきた。

優しい響きなので、寝起きの耳にも心地いい。最高の目覚まし時計だ。けたたましいセミの鳴き声が混じって聞こえなければ、これ以上のないモーニングコールだっただろう。

わたしは手の甲で目を擦り、首だけ捻って窓の方を見た。

そこには、座椅子に腰掛けて淡い笑みを浮かべる、一人の見目麗しい少年の姿があった。

「おはよう、真悟君」

朝の挨拶をする。

「おはよう、保奈美。よく眠れたかな？」

「うん……」

そう答えたけど、実際は全然眠り足りなかった。脳味噌が鋼鉄化したように重く感じる。瞼が引力とは無関係に下がってくるようだ。夢の国へ旅立とうとする意識に鞭を打ち続けるのも億劫だった。いったい、何時間くらい眠ったのだろう。

「……今、何時？」

「午前九時十七分だよ。キミの睡眠時間は、六時間と二分だね」

歯切れの良い口調。洗い晒しのシャツに色の落ちたジーンズ姿。

真悟君は常に爽やかで格好良い。

「二日酔いは平気かな？」

「うん。そんなに気分は悪くないよ。ちょっと眠くて、少し頭がく

らくらするだけ」

昨夜は、食堂から自室に戻った後も、真悟君に付き合っ
て明け方までお酒を飲んでいたのだ。その割に、体調は悪くない。きつと、二人きりで過ごした時間が、素晴らしく楽しかったからだろう。

恋人との会話は、最高級の悪酔い防止薬に匹敵する効果を発揮するようだ。

「頭痛は、水分を多めに摂取すれば緩和されるよ。昨夜のミネラルウォーターが一本残っているから、好きなだけ飲むといい」

「あ、ううん……」

頭を左右に振った。

お水を飲みたい欲求はあるのだけど、それよりも激しい生理的欲求に苛まれていたのだ。

わたしは掛け布団を跳ね上げて寢床から飛び出した。けれど、現在身に着けている物を知り、慌てて布団の中へと逆戻りした。

半裸でした。

「今更、ボクに隠す意味はないよ」

「うん……でも……」

真悟君の言う通り、わたしはしばしば彼に下着姿を披露しているでも、それは、故意に見せているわけではない。以前、彼の家でお酒を飲んだ際に、酔い潰れたわたしが服を着たままベッドに入ってしまった、翌朝服がシワシワになってしまったことがあったのだ。だから、それ以後、わたしが酔い潰れた場合のみ、彼が親切心から服を脱がせてくれるようになったのである。しかし、そういう前例があっても、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「あの……恥ずかしいから……」

「ああ、そうだね」

真悟君は柔らかに微笑んで頷いた。

そして、窓を閉め、襖を閉ざした。

「キミの素敵な下着姿を觀賞して良い人間はボクだけだから、他者の目に晒さないように極力気を配らなければならないね」

そう言ってくれるのは嬉しいけど、できれば真悟君も見ないで欲しい。

でも、まあ、確かに今更隠す意味はないので、わたしは布団から這い出した。

とにかく、まずトイレだ。

わたしは、綺麗に折り畳まれて枕元に置いてあった昨日の服を素早く身に着け、寝癖のついた髪を撫でつつ布団を畳んだ。

それを見ていた真悟君が怪訝な表情を作った。

「なぜ昨日の服を着たんだい？ 着替えは十分に用意して来ているのだろう？ もうそろそろ朝食の時間だから、早めにシャワーを浴びて着替えておいた方がいい」

「うん、でも、その前におトイレ」

「ああ、なるほど……」

わたしは、はしたなくない程度の急ぎ足で部屋を飛び出し、廊下を突っ切って奥のトイレに駆け込んだ。

ギリギリでセーフ。

粗相をしないで済んだ。

トイレを出て廊下を歩いていると、あることに気付いた。
非常階段のドアが開いている。

それに、螺旋階段の下から話し声が響いてきている。

何やら怒鳴り合っているようだ。

声の感じからして梅本と中嶋君だろう。

女の子を巡る喧嘩だろうか？

飲み会明けの早朝から騒ぎを起こせる元気が羨ましい。

多少、下の様子が気になったものの、寝起きの姿を見られなかったたので、駆け足で自室に戻った。

「慌てて戻ってきたようだけど、どうしたのかな？ トイレに何か不備でもあった？」

「うっん、トイレは別に何も……。でも、下で中嶋君が揉めてたかも……」

真悟君は僅かに眉を寄せた。

「中嶋君が揉め事を？ 彼は軽薄な男だけど、軽率に騒ぎを起こす愚か者ではないよ」

「うん、わたしもそう思うよ。でも、凄い剣幕で怒鳴ってたもの。声しか聞いてないから確かなことは言えないけど、梅本さんと口喧嘩してたんじゃないかな」

「そうか。では、ボクが一階へ行って様子を見てこよう。キミはゆつくりとシャワーを浴びているといいよ」

「うん。そうさせてもらうね」

わたしは荷物の中から着替えを取り出し、シャワー室に入った。

室内はひんやりしていて水気を感じなかった。

新しい服を身に着けていた真悟君が朝のシャワーを浴びていないわけではないので、彼は一時間以上前に起きたのだろう。相変わらず睡眠時間が短い。その生活リズムに身体が慣れているに違いない。わたしがそんな生活をしたら、慢性の寝不足状態に陥ってしまう。

軽く全身を洗い清め、ボリウムのある髪を丁寧にすすぎ、熱めをお湯で眠気と酒気を飛ばした。そして、体を拭き、髪の水気を切っておいて、全身をチェックし、細かなボディメンテナンスを施した。

この後、誰かに裸体を見せる予定はないが、突発的なイベントを考慮して準備は怠らない。

髪の水を拭きつつシャワー室のドアを開けると、真悟君が目の前に立っていた。しかも、完全な無表情で。

シャワー室の中を覗こうとしていたわけではないと思うけど、ちょっと吃驚してしまった。

「な、なに？ どうしたの？」

無表情の真悟君を見るのは、春先に巻き込まれた殺人事件の時以来である。

たぶん、何か不測の事態が起こったのだろう。

わたしの不安な心情を察したようで、真悟君は穏やかな微笑みで表情を飾った。でも、目は笑っていない。

「保奈美、落ち着いて聞いて欲しい」

「うん……。なに？」

「上妻さんが殺害されていたんだ」

感情のない声で知らされた。

「え？」

一瞬、自分の耳を疑った。

上妻が殺害された？

殺人事件？

「梅本さんと中嶋君は言い争っていたわけではなく、混乱していて声量の調節ができていなかったただだよ。現在は、来須十路の的確な指示を受け、みんな冷静に従っている」

最悪の事態を想定して心の準備をしていたけど、ショックは殆ど軽減されなかった。

ようやく春先の凄惨な記憶を払拭できたのに、また事件に巻き込まれるなんて……。

手からタオルが滑り落ちた。

濡れ髪が頬に張り付き、顎に水が滴り落ちてくる。

「……どうして？ 誰に？」

「殺人犯、犯行動機、共に不定だね」

真悟君はにつこりと笑った。それは、掛け値なしの笑みだった。わたしを落ち着かせる為の表情。そして、足下にわだかまっていたタオルを拾い上げ、わたしの濡れ髪を纏め上げて包んでくれた。

「保奈美、まずは髪を乾かして。様子を見に行くのは、身嗜みを整えてからでも遅くない。地元の警察が到着するまでには、少なくとも一時間はかかるそうだから」

真悟君がそう言うので、わたしは急いで髪を乾かし、丹念に梳つた。

「お待たせ、真悟君」

艶々の髪を後ろで括り、靴下を穿けば準備万端である。

「それでは、様子を見に行こう」

「うん」

わたしたちは部屋を出て一階に下り、西脇さんが使用している管理入室を訪ねた。

そこにみんな集まっているらしい。

真悟君が管理入室のドアをノックすると、中から甲高い女の子の応えがあった。

「はい、ドアは開いてまーす。ここ、私の部屋じゃないけど、遠慮なく勝手に入ってきて下さいなっ！」

それは、殺人事件の発生を疑わせるほどに能天気な声だった。

このテンションの高さは、間違いようもなく来須美架だ。

不謹慎とは思わないのだろうか？ きつと思わないのだろうか。彼

女はそういう子である。

真悟君がドアを開けて中に入ったので、わたしも続いて管理入室に入った。

管理入室は、二階の客室よりも広くて天井が高く、しかも洋間だった。右隅の本棚には山に関する書物が並び、隣に革張りのソファが、左手にはデスクが置かれ、その上のコルク盤には何かのスケジュール表が止めてあり、小さなフックに空き部屋の物と思しき鍵が引っ掛けてあった。そして、奥にはダブルベッドが異彩を放っている。

室内には三人の女の子の姿があった。

ベッドには、うつ伏せになって大ぶりの枕に顔を埋め、激しく泣きじゃくる緒方みやび。好意を寄せていた男の子が死んでしまったのだから泣いて当然である。彼女は股上の浅いデニム地のハーフパ

ンツにノースリーブのシャツを着ていた。

五十嵐由利は、フリルの沢山付いているブラウスにぴっちりとしたジーンズといういでたちで、ベッドの端に腰掛けていた。異常事態の所為で顔を蒼白にしながらも、打ちひしがれている後輩をなんとか宥めようとして、彼女の頭を優しい感じに撫でている。外見通り、気丈な性格だ。

そんな二人をよそに、来須美架だけが場の雰囲気を見殺した無邪気極まる快晴顔でわたしたちを迎え、自分の腰掛けているソファの隣を叩いてそこに座るように促してきた。身に着けている物は、昨日と同様に男物のシャツ一枚だけだ。一応、下着は見えていないが、この状況では悪ふざけをしているとしか思えない。きっと後で、到着した刑事さんにお説教されるだろう。

「西脇さんは遺体発見現場かな？」

真悟君は美架の誘いを無視し、ドアの前に立つたまま訊いた。

「その通りだよ。お兄ちゃんと中嶋君の二人と一緒に、死体に付き添ってるんだよ。放つたらかしじゃ可哀想だからね。まあ、お兄ちゃん現場検証も兼ねてるんだけどね。それはつまり、超天才名探偵の来須十路が探偵活動を開始したってことかな？」

探偵活動？ 何を言っているのやら……。

推理小説の世界じゃないんだから、殺人事件に子供の出る幕はない。まして、自称《探偵》が出しゃばっても事件を混乱させるのが関の山だ。それに、もし警察が役立たずであっても、事件を読み解く代役は真悟君こそが適任であり、来須十路なんかに出番は回ってこないだろう。

真悟君は、戯言をほざく来須妹の言葉を軽く聞き流し、良識的会話を成立させられそうな五十嵐さんに目を向けた。

「梅本さんはどうしました？ 遺体発見現場に留まってはいいのでしょう？」

「かなりのショックを受けていたみたいだから、自分の部屋に戻らせて、落ち着かせているところよ」

「一人で、ですか？」

「いいえ、純太君と設楽さんが付き添っているわ。警察が到着するまでは彼らに任せておけば安心よ」

五十嵐さんは口許をハンカチで押さえながら答えた。涙目で肩を小刻みに震わせている。嫌悪の対象者とはいえ、昨夜一緒に飲んで騒いだ男の子の死は、彼女の心に相当なダメージを負わせたのだろう。それが自然な反応だと思う。あっけらかんと笑っていられる来須美架がどうかしているのだ。

「そうですね」

真悟君は小さく頷いて、わたしを見た。

「保奈美、ボクはこれから遺体発見現場へ行くけど、キミはどうする？　ここに留まって警察を待つかい？」

「ううん、真悟君と一緒に行くよ」

わたしが答えると、来須妹が勢い良くソファから跳ね起きて、学校で質問する小学生みたいに真っ直ぐ手を挙げた。

「はいはい、私も同行しまあーすう！」

その高さは、富士山すら凌駕しそうなテンションだ。周囲の人間の心情に対して一ミクロンの配慮もしていない。梅本がいたら、憤怒のあまり喧嘩沙汰になっただろう。

五十嵐さんが慥然として睨んでいた。

ついてくるな、と内心で叫んだが、声には出せなかった。ただ、控え目な白眼視で無言の警告を試みただけ。

結果は失敗。

真悟君が拒絶してくれれば美架はこの場に留まらざるを得なかっただろうが、彼は一切彼女を相手にせず踵を返して管理人室を出ていった。

【2・藤森保奈美】

わたしたちは下駄箱で靴を履いて、山荘の外に出た。そして、建物の外壁伝いに崖の方へと歩いていく。

どこに向かっているのだろうか？

そう思いながらも無言で真悟君の後を追った。

上妻博之が死んでいたのは、山荘の南側に設置されている非常階段の真下だった。

とは言っても、そこにあるはずの非常階段はない。昨日、前もって西脇さんから注意されていた通り、非常階段は現在修復中であり、足場しか組まれていない状態だった。二階から飛び出せば、その瞬間に地面目がけて落下してしまうのである。しかし、二階から落ちても、地面が軟らかい土であれば、骨折程度で済んだはずだ。けれど、その丁度真下には、思いもかけない罠が仕掛けられていた……。

山荘の南側には崖があり、その下には川が流れている。だから、当然のように、そこには落下防止用の鉄柵が張り巡らされているのだ。彼は、その柵の上部に突き出た鋭い槍部分に体を貫かれて死んでいた。

巨大なフォークで串刺しにされているような、見るに堪えない悲惨な死に様だった。

「保奈美、遺体を直視してはいけないよ。朝食が喉を通らなくなってしまうからね」

「うん……」

忠告ありがとう。でも、もう遅いよ。しっかりと見ちゃったから……朝食は遠慮するね。

そう心の中で答えた。

うつ伏せ状態で鉄柵に突き刺さった上妻からは、夥しい量の血が流れ出したらしく、鉄柵から地面にかけて赤黒く彩られていた。彼

は誤って二階から落下し、鉄柵の突起部分に突き刺さったのだろう。およそ、トイレのドアと非常階段のドアを間違えてしまったに違いない。

これは不幸な事故である。

あれ？ でも、さつき、真悟君は……上妻が殺害されたって言うてなかったっけ？

そんな疑問が湧いたので真悟君に訊いてみようと思ったのだけど、死体の傍で腕組みをしていた来須兄に声を掛けられてしまった。

「おはよう、藤森さん」

来須十路は死体を前にしても全く動揺していなかった。

白と紫のストライプ柄という趣味の悪いシャツに秘められた効果だろうか？

わたしは朝の挨拶を返した。

「おはようございます、十路さん。西脇さんもおはようございます。中嶋君もおはよう」

来須兄の隣で深刻そうに佇んでいる西脇さんと、少し離れた位置で鉄柵に寄りかかるようにしてしかめっ面を作っている中嶋君にも挨拶をした。

「おう、おはようさん」

中嶋君は軽く手を翳し、唇を斜めにした。

彼は生地が薄そうな黒いジャージの上下を身に着けていた。

「おはよう」

西脇さんは一瞬だけ微笑みらしき引きつり顔を作ったが、完全な笑顔にはならなかった。両手でエプロンを揉み絞るようにしながら、深い深い溜め息を吐き、骨組みだけの非常階段を仰ぎ見る。

「よもやこの山荘で事故が起きるなんて……。あれほど非常階段のドアには近づかないように注意しておいたのに……」

「寝惚けたんですかね？」

「酔っ払ってたんだろ」

忌々しげに吐き捨てる中嶋君。

「そうね。酔っ払ってた上に寝惚けてちゃ、トイレのドアと非常階段のドアを区別することはできないわよね。だから、あれほど非常階段の工事を早めて欲しいって要請したのに、管理組合の連中たら全く耳を貸さないんだもんなあ。嫌になっちゃうわよ、ほんと！」

西脇さんはエプロンから手を離し、腰に手を当てて愚痴を零した。それを今言っても仕方がない。

管理組合の面々は、彼女と共に何らかの責任を取らされるだろう。およそ、わたしたちも学校から自宅謹慎処分を言い渡されるに違いない。その理由は、事件に関わったからではなく、お酒を飲んだからだ。お咎めなしには済まされないと思う。

「イベントは中止ですか？」

答えは予想できたけど、一応訊いてみた。

西脇さんは苦笑いを浮かべ、親指の先で物言わぬ上妻を指し示した。

「あれを見なさいな。完全に警察沙汰だわね。だから、当然、中止よ。もう既に、本日以降のイベント参加者には伝えてあるわ。貴女たちも、警察の許可が下りたら、すぐにお家へ帰るのよ。いいわね？」

「はい」

わたしは素直に返事をした。

イベントが中止になれば、この山荘に留まる理由などない。美術部の合宿も兼ねていた為、画板や水彩絵の具などの写生道具一式を持ち込んでいたけど、それも無駄になってしまったようだ。

「イベントの参加費用はどうなるんですか？ 幾らか返却してもらえるんですか？」

「ああ、そうだね……。イベント参加費の問題が生じるか……。それは、一日分の宿泊費を差し引いた額が返却されると思うわよ。後で組合に問い合わせるけど、一円も返ってこないってことはならないはずだわ」

「そう願いたいもんだぜ。うちの美術部は、新しい白衣とお絵描き

セツト一式を三人分買った所為で、すんげー金欠だもんな。幾らか部費が足りや、文化祭に向けての活動費に足せる。それとも、新しい合宿と称して別の場所に出かけるか？ 山は止めて海にでもよ」

中嶋君が部長としての意見を述べた。でも、軽薄である。とてもじゃないけど、賛同なんてできない。もつと状況に応じた真つ当な意見を述べて欲しい。

「それにしても、上妻の死体をこんな風に放つたらかしといていいのか？ なんか、見てて痛々しいぞ」

この中嶋君の意見には、西脇さんも賛意を示した。

「確かにそうだね」

「そうですね。上妻さんを降ろしてあげた方がいいですよ。鉄柵に刺さったままじゃ可哀想ですもの。ね、真悟君？」

わたしも賛成し、真悟君に同意を求めた。

しかし、わたしたちなど問題にしないくらい大きな発言権を持っている二人の男の子が、即座に、同時に却下した。

「それはできない」

素っ気ないくらい短い真悟君の返答。

来須十路も反対の意思を表明した。

「そうだな。彼が生きている場合は救助を優先しなければならぬが、彼は完全に死んでいて手の施しようがない。俺たちにできるのは、事故現場の保存をして、警察の到着を大人しく待つことだけだ。死体に触れるなど、言語道断の愚行と言わねばならない」

「あはっ！ 保奈美ちゃんてば、お馬鹿さんなんだーっ。事件現場の保存は、第一発見者の義務だよ。真悟君の恋人さんなのに、そんな初歩の中の初歩的な常識も知らなかったのかな？ 探偵の助手としてだけじゃなくて、探偵の恋人としても失格だねっ！」

背後から聞こえてくる小娘の囁き声。

こめかみに激しい血流を感じた。能天気なからかい口調だから許せるものの、他の人間が言ったなら嘲笑含みの嫌味にしか聞こえなかっただろう。

「わたしは探偵の助手じゃないし、探偵の恋人でもありません！」
心持ち意識して声量を抑え、わたしは背後のお茶づけ娘に言い返した。

美架はくすくすと笑う。

「保奈美ちゃんて真悟君の恋人じゃないのかなっ？ 昨日の恋人です発言は嘘なのっ？」

「それは…… 本当よ」

「じゃあ、否定しちゃ駄目じゃん。堂々とおっきな胸を張って名乗らなきゃっ！」

「真悟君はわたしの恋人だけど、探偵なんかじゃないわよ」

「幾つもの殺人事件を警察に代わって解決してるのにつ？」

「それは……」

真悟君が警視庁のエリート刑事にも一目置かれている存在であることは承知している。春先の事件は、確かに彼の力で解決したようなものだ。でも、それ以外、彼が転校してくる前に関わった事件については何も知らない。彼が何も語ろうとしないし、わたしも聞くとしなないからだ。なぜなら、彼自身が華々しい探偵活動を自慢しておらず、むしろその行為を忌み嫌っているからである。なので、わたしも彼を探偵とは認識していないのだ。

「保奈美ちゃんて真悟君のこと、あんまし知らないよねっ。ほんとーに恋人さんなのかなっ？ 実は、自称じゃないのかなっ？ ちゃんと相思相愛な間柄かなっ？」

「！」

思わず清楚な乙女にあるまじき罵声を口走ってしまうところだった。

怒りのあまり立ち眩みを覚える。きつと顔が真っ赤に染まっているに違いない。年下の小娘に対する害意。それを自覚した瞬間、今度は羞恥心で全身を焼かれた。もうこうなったら、このふざけた小娘を道連れにして崖下の川に身投げしてやろうか、とさえ思った。

「あれれーっ、保奈美ちゃんてばお顔が赤いよっ。もしかして、私

のお茶目な戯言に憤慨しちゃってるのっ？ 純情でお淑やかな美少女の仮面を脱ぎ捨てて、二、三発ぶん殴りたくなっちゃったのかなっ？」

本当に、美架の顔面に拳を五発くらい叩き込んでやりたい。

ここに真悟君の目がなければ、拳ではないにしろ、ビンタの一発も浴びせていただろう。実は、わたしは相当に手が早いのだ。その事実を知っているのは、家族だけだが……。でも、ここは我慢の子。この状況で暴れては、患者のレッテルを貼られるだけでなく、真悟君の軽蔑を買う結果となってしまう。

「わたしは怒ってないもの……」

「そーかなっ？ ほんとーは爆発寸前なんでしょっ？ 無理しちゃ身体に毒だよっ」

「無理してません！」

とうとう叫んでしまった。ちょっとでもガス抜きをしなければ、負の感情で満たされた心が内圧の急上昇でパンクしてしまいそうだった。

なぜこうも来須美架に小馬鹿にされなければならないのか理由がわからない。しかも、死体の前で。反撃できず、堪忍袋の緒を繋ぎ止めようと頑張るしか対処できない自分自身に、怒りよりも情けなさを覚えて涙が溢れてきた。

「保奈美、こっちへおいで」

真悟君が手を差し伸ばし、優しい口調と微笑み顔でわたしを呼んだ。

無言で歩み寄ると、そっと抱き寄せられ、額に口づけされた。そして、高ぶった気持ちを落ち着かせるような手つきで背中とお尻を撫でられた。

「……………」

憤激のあまり灼熱の業火で煮やされていた身体が、すーっと冷めていった。

「ムキになってはいけないよ、保奈美。彼女への憤懣と今自分が置

かれている状況への不満を混同しては駄目だ。いいね？」

愛撫する手を止め、真悟君は間近から見つめながら言った。

「うん」

自然な微笑み顔を浮かべることができた。

もう美架に対する憤懣もない。下らない感情に支配されていたと反省している。今後、どれだけ彼女にこつ酷くからかわれても、彼のサポートがある限り、平常心を保っていられる自信が湧いた。

「そうだな。美架に対してムキになると、益々性質の悪いからかいを受けるはめになる。気を付けることだ。だが、美架もいい加減にしないさ」

来須兄は大腿に近づき、大きな拳で妹の頭をぽかっと殴った。

「あ痛っ！ 酷いよっ、お兄ちゃん！ 叩くの反対っ！ 暴力追放運動にご協力をお願いしますっ！」

頭頂部を両手で押さえてふくれっ面を作り、ぎゃいぎゃい抗議する美架。

そんな彼女が微笑ましくて可笑しい。

「美架、罰として、しばらく己が口を押さえて自らに沈黙を強いなさい」

「はあーいつ……」

美架は言われた通りに両手で口を押さえた。

兄の命令は絶対らしい。

それなら、わたしを二度とからかわないように言い聞かせて欲しいなあ、と思った。

「なあ、そろそろ山荘の中に戻ろうぜ」

来須妹が黙ると、中嶋君は我関せずの態度を改め、真悟君と十路のどっちにでもなく訊いた。

美術部新部長の意見に大賛成である。わたしも、死体と並んで夏の厳しい陽射しを浴びて忍耐力の限界を試すほど酔狂な人間ではない。

その発言をどう解釈したのか、西脇さんがぱんと手を叩いて言っ

た。

「あ、もしかして朝ご飯を食べたいの？ 一応、食堂に用意してあるわよ。おにぎりとお味噌汁だけだけど」

「んーなわけねえって！ 何考えてんだ、おばちゃん！ こんなもん見せられちゃ、飯なんか喉を通らねえってばよ！」

中嶋君は不快げに叫んだ。

「じゃなくて、俺ら、いつまでここにいなきゃなんねえんだ？ 警察が到着するまでここで待ってるのかよ？ そりゃ、ちーっとキツイぞ。上妻の死体なんか誰も好き好んで触らねえと思うから、山荘に入っちまっててもいいんじゃないのか？」

「それはできない」

またもや真悟君が却下した。

十路も、頷いて同じ意見であることを示した。

「不確定因子の介入が何万分の一の可能性でもある以上、誰かがここを監視していなければなるまい」

不確定因子……って何？

「しかし、確かに、これだけの人数は不必要だな。よかろう。監視役は俺と和泉君の二人で十分だ。他は山荘内で地元警察の到着を待つていればいい」

「そうだね」

十路の提案に真悟君が同意した。

「よっしゃ！ そんなじゃ、美架、藤森、とつとと涼しい屋内に戻るうぜ」

「おーっ！」

中嶋君の号令に、美架が威勢良く拳を突き上げて応じた。ここに留まっている限りお茶だけ発言は咎められてしまうので、この機に乗じて兄の目の届かない場所へ移動するつもりなのかもしれない。

「……………」

わたしはノーリアクション。この二人と一緒に行動すると山荘内で再び嫌な思いをさせられかねない。死体さえ存在しなければこの

場に残るのだけど、さすがに数十分間ずっと死体を視界に収め続ける精神力はない。部屋に戻って布団を被り、現実逃避……否、美架の攻撃から身を守るという案もあるが……。

「ほらほら、保奈美ちゃん！ 早く来ないと置いて行っちゃようっ！」

放っておいてくれないようだ。

仕方がないな……。

わたしは悲観と諦観で胸を満たしつつ、山荘の中に戻った。

【3・藤森保奈美】

地元警察が《ホテル美岳》に到着したのは、午前十時過ぎだった。わたしの予想では、目つきが鋭くて筋骨逞しい捜査員が群を成して駆けつけてくれるはずだった。春先の事件の際には、何十名もの捜査員が詩海高校の中を行き来していたからだ。こんな寂しい僻地で事件なので何十名というわけにもいかないだろうけど、十名を下回ることはないと思っていた。だが、実際に山を登ってきた警察官はたったの二人。しかも、どちらも頼りなさげ。一人は年かさのおじさんで、もう一人は大学生と言っても過言じゃない新人丸出しの若者だった。

二人は麓の交番の駐在員だそうだ。後で応援の警官が到着する予定らしい。

もう死体なんか見たくないのに、緒方さんと彼女の付き添いを申し出た五十嵐さん以外の全員が非常階段の下に呼び集められ、死体の前で整列させられた。

西脇さんは死体の前で仁王立ちしている。

梅本は今朝、相当錯乱していたらしいけど、今は多少落ち着いている様子で、螺旋階段の足場に蹲っている。もう親友の死体を前にしても全く取り乱さなかった。

設楽さんは顔を蒼白にしていたが、中嶋君の腕に縋り付くことで心の安定を図っているようだ。死体を直視しない工夫なのか、眼鏡を掛けていない。視力の弱い人間限定の裏ワザである。

中嶋君は、心の拠り所を求めるように身を寄せる設楽さんを意識してか、心ここにあらずという様子だ。彼女を抱き寄せたり、抱き締めたりせず、両手をだらりと下げて、ただ棒立ちになっている。他校の女生徒と頻繁に合コンをしている割には、女の子との接触にあまり免疫がないようだ。

本山君は本山君で、死体よりも設楽さんが気になる様子である。

なぜ自分ではなく中嶋君に抱きついていいるのだろっ、という不満顔で二人を見ていた。

来須十路は、年かさの警察官のすぐ前に立って腕組みをし、感情のない薄笑いを浮かべている。目を閉ざしてはいるが、眠っているわけではなく、警察の事情聴取が開始されるのを今や遅しと待っているのだろっ。

来須美架は少し離れた位置に立っている。落下事故とは言っても一人が死んでいるのだから、《天才美少女探偵》の名の下に騒ぎ立て、捜査に口出しをして警察官に大目玉を食らうだろうと予想していたのに、彼女は別人になってしまったかのように一言も喋らず、足下に視線を落として退屈そうに片足をぶらぶらさせていた。

真悟君はわたしの傍らに立ち、穏やかな笑みを警察官二人に向けている。でも、目は一切笑っていないかった。

「こりゃ……また見事に突き刺さったもんだで。とち狂って、自身を串刺しの刑に処したんかの？ どう思う？」

年かさの警察官は、死体を見せられると、開口一番そう言って笑った。

映画か漫画のような死に様に呆れたようだ。

「二階からダイブしたみたいっすね。非常階段が修復中だったのを忘れちまって、ピョーンってな具合にっす」

若い方は無惨な死体を目の当たりにして吐き気を催したらしい。口を押さえて、嘔吐を堪えながら答えている。

二人の警察官は、山荘の従業員であり、一番の年長者であり、死体の第一発見者でもある西脇さんから状況説明を受けた。

「なるほどのっ。昨夜のドンチャン騒ぎで酔い潰れて部屋に運ばれた後……。こりゃもう、鑑識班の到着を待つまでもなく、事故死で決まりかのっ？」

「そりゃそっすよ。こいつは、どう見ても自殺じゃないっす。完全な事故っすね」

「非常階段のドアは施錠されてたんだでよ」

「でも、鍵は壊れてて、誰にでも簡単に外せたそうっすよ」

「ふむむ。じゃあ、何故に非常階段のドアを開けたんかのう？」

「きつと、死ぬほどうんべんがしたくて慌てたんすよ。それで酔っ払ってたもんだから、方向を間違えて、便所じゃなくて非常階段のドアをこじ開けちまつたんすよ」

「ふむむっ。ドアをぶち壊す勢いで便所に駆け込んだら、外に飛び出したってわけだで」

「それとも、べろんべろんに酔っ払ってた所為で理性を失ってたんかもしんないっすね。最近は馬鹿なガキが増えてるっすから、脳味噌を酒に侵されて、鳥にでも変身したつもりで飛んだんじゃないっすか？」

「ふーむ。未成年者が酒を飲むとろくな結果にならんという悪例だわな」

「自業自得っすね」

二人の会話から、上妻の死は、どうやら本人の不注意による事故として処理されるようだ。わたしたちへの事情聴取を取り止め、涼しい山荘でのんびりと応援部隊の到着を待とう、という話で纏まりそうな感じた。

なんだか雑な捜査である……。

すると、徐に、来須十路が口を開いた。

「しばしお待ちを。山荘内に移動するのは構いませんが、その前に一つ確認させていただきたい」

十路は腕組みを解き、傲慢一歩手前の堂々とした口調で声を掛けた。

二人の警察官は眉をひそめる。

「なんだ、貴様は？」

若い方が声を荒げた。

それを年配の警察官が制した。

「おぬし、名は何という？」

「朝日ヶ丘高校三年の来須十路です」

十路は、自分の胸に手を当てて名乗った。

「くるすじゅーじ？ けつたいな名前だの。その来須君が何の用かいな？ わしらに何か意見でもあるんかのう？」

「はい、ありますね。上妻博之の死が事故と断定できぬ以上、遺体を放置しておくなど言語道断。お二人のうち、どちらかが監視せねばなりません。それに、我々の記憶が確かなうちに事情聴取を行っておくべきです。ゆえに、貴方たちには、のんびりと後陣の到着を待つ暇などないでしょう」

「賢しいことを言う若者だのう。事故死と断定できない？ 何故にそんなことが言えるんかいのう？ どう見ても、これは事故でしかなからうもん」

年配の方の警察官が額のしわを深めて言った。

来須兄は微妙に唇を歪めた。気障ったらしい表情だが、嘲りのスパスが塗されている。

「イベント参加メンバーの誰かに殺害された可能性も考えられるでしょう？」

「おぬし、殺人事件だと言うんかの？」

「その可能性があると云っているのです」

「ガキが捜査に口を出すな！」

若い方の警察官が威圧するように吠えたが、年配の方は軽妙な笑い声を響かせ、物怖じせずに意見した十路の勇気を称えるように肩を二度叩いた。

「怒鳴ってはいかんでよ、三田村。来須君の意見は間違つとらんでな。正しい意見には耳を貸さんといかんわい」

「……………」

いくら正しくても年下の子供には意見されたくない、という内心の思いが顔に表れている若い警察官。

「よし。わしが全員の事情聴取をするで、三田村はここに残りんさい」

「俺が一人で死体の監視つすか……。嫌な役割つすね」

「これも立派な新人警官の仕事だな」

「新米の哀しいサガつすね……」

そんなこんなで、わたしたちは山荘内へと移動して事情聴取を受ける運びとなり、夏の陽射しに照らされて悪臭を放ち始めた死体から解放された。

事情聴取は個別に行われるそうなので、わたしと真悟君は自室に戻って他愛ない会話を交わしながら順番を待った。

「保奈美、お茶を淹れるけど、キミも飲むかい？」

「あ、うん、いただく」

わたしは座椅子の上で正座して、慣れた手つきでお茶を淹れている真悟君の作業を見守る。

とは言っても、ティーパックのお茶である。こんな山奥の山荘で質の良いお茶が飲めるわけがない。ポットが各部屋に用意されていただけでも御の字であろう。

「熱いから気を付けて」

「ありがとう」

差し出された湯飲みを受け取り、唇を火傷しないよう気を付けつつ一啜りした。そして、ほーっと一息吐く。人死に遭遇しながらも、一杯のお茶で和めてしまうのは、わたしが日本人だからだろうか。それとも、春先の事件で多少なりとも精神が鍛えられたからだろうか。いや、信頼できる男の子の淹れてくれた飲み物だから和めるのだ、と思う。

「なんとも味気ない緑茶だ。ボクの嗜好には合わないな……」

一口啜るなり、珍しくも真悟君が不満を漏らした。

彼はコーヒーや紅茶にこだわっている。特別贔屓にしているブランドがあるのだ。それと同様に、お茶にもこだわっているのかもしれない。ティーパックのお茶では和めず、逆に不快感を増大させてしまったようだ。

「あーあ、夏山合宿が台無しだね。せつかく写生道具を持ってきた

のに、何も描かずに終わりだなんて……」

「今のうちに山の景色でも写生しておく？」

「うん、止めておく。今筆を持ったら、山を真っ赤に塗り込めてしまいたいものだもの」

「血の赤かな？」

「うん……」

真悟君は柔らかな笑みを見せ、湯飲みを置いてミネラルウォーターのペットボトルを取った。それを一口飲む。ごくつという音と共に喉仏が上下した。

格好良い男の子は、水を飲む仕種すら見応えがある。ビデオに撮って何度も繰り返し再生したい画だった。

「保奈美、朝食は要らない？」

「うん。あれを見た後だからね……。ご飯を用意してくれた西脇さんには申し訳ないけど、とてもじゃないけど喉を通らないよ。真悟君は食べるの？」

真悟君は死体を見たショックで食欲をなくすほどヤワな神経の持ち主ではないので、朝ご飯を食べたいのかもしれない。

その際は、みんなの目もあることだし、一人じゃ味気ないだろうから、同席してあげようかなと思ったのだけど……。

「そうだな……。空腹ではないから、ボクも食べないでおこう」
意外な返答に、わたしは驚いた。

「真悟君でも、ああいうのを見てしまうと食欲がなくなるんだね」

真悟君は透明感のある笑みだけを浮かべ、返事をしなかった。

ふと窓の外を見やると、空が黒雲に覆い尽くされ、大粒の雨が降り出していた。

さっきまでの青空が嘘のようだ。いつの間に変化したのだろう。土砂降りではないが、雨足が強く、窓を叩く雨音も少しずつ大きくなっている気がした。

帰りは泥濘に足を滑らせながらの下山を余儀なくされそうだ。

コンコン。

ドアがノックされた。

「はい。入って下さい」

わたしが応えると、ドアが開いて年配の警察官が入ってきた。

「ほうほう、ここは男女のペアかの。結構なことだで」

室内の様子をじろじろと見回しながら卓袱台の前に歩み寄り、わたしたちを頭上から好奇の眼で見えておいて、座椅子に胡座を掻いた。

「わしは春日野英二っちゅーもんだでよ」

年かさの警察官はそう名乗った。

若い警官の方は、三田村拓磨という名前だそうだ。

わたしたちも名乗った。

「早速だけど、昨晚から今朝にかけてのおぬしたちの行動を詳しく語ってくれんな。思い出せる範囲で結構だでよ」

「承知しました」

本来なら真悟君とは別々に事情を訊かれるのだそうだが、わたしたちが別行動をとったのはシャワーを浴びている短時間だけだったので、特別に二人一緒の事情聴取となった。

真悟君は昨日の夕食から今朝上妻の死を知らされるまでの出来事をつぶさに語って聞かせた。わたしの出る幕はない。

肝試しでの会話を再現されたら羞恥のあまり気死してしまっただろうけど、個人的な会話や上妻とは無関係な話を省いてくれたので、わたしは恥ずかしい思いをしないで済んだ。

それにしても、相変わらず彼の記憶力は凄まじい。お酒を飲んでいたのに、みんなのちょっとした発言や何気ない行動を覚えているのだから。

「ふむむ……。証言に食い違いは見られないのう。八時に飲み会が始まって設楽松美は姿を見せず、ようやく現れたのが九時になる頃だった、と。その後、すぐに梅本春樹が酔い潰れ、本山純太と来須十路の二人で《104号室》に運び込んだ、と。その二人は梅本の粗相を処理していたから戻りが遅くなり、その間におぬしたち二

人はこの部屋に戻ってきた、ということかいな」

「ボクたちは、螺旋階段の下で、吐瀉物の掃除を終えた二人と出会っています」

「うむ。本山と来須兄の両者が同じ証言をしておるでよ。それで……部屋に戻って以後は何をしていたんかのう？　すぐに眠ったわけではあるまい。そこんところを包み隠さず話してくれんかの」

「他愛ない会話をしながら、ゆっくりとお酒を飲んでいました。途中、三度トイレに立ちましたが、常に二人揃ったの行動でした。保奈美の就寝時刻は、午前三時十五分。ボクの就寝時刻は、午前四時丁度です。しかし、アリの証明にはなりませんね」

「ふーむ。アリバイかいな……。来須兄もイベント参加者のアリバイがどうこう言ったでな。それと、宿泊部屋交換のトリックがどうか……。おぬしも彼と同じで殺人事件と思っているわけかの？」

春日野は卓袱台に頬杖をつき、やる気のない声で訊ねた。

殺人とか事故とかいう以前に、捜査自体を面倒臭がっているようだ。

この人、大丈夫なのだろうか。

「さて、ボクには何とも答えられません」

「意見がない、ということかのう？」

「そう認識していただいて構いません」

「ふむ……」

さつき、わたしには殺人事件と断言していたのに、真悟君は口を濁して答えなかった。

死体を再度確認してみても、事故だ、と判断を改めたのだろうか。でも、それならそうと自分の意見を述べるに違いない。答えはないなんて、彼らしくない。

「死亡推定時刻はまだ不明だけど、夜中、人の言い争う声や悲鳴などを聞かなかったかのう？」

「いいえ、何も。この山荘は意外にも防音がしっかりなされている

ので、廊下で誰かが言い争っていたとしても、余程の大声でない限り、室内には届きませんよ。無論、その逆も然りです。その上、アルコールの効果によって聴覚に若干の支障を来している状態だったので、室外の異変を察知するのは非常に困難だったと思います」

「ふーむ。もつともな答えだでよ。ならば、便所に赴いた際、何か不審な点に気付かなかったかな？ 三回とも全く誰とも会わなかったわけではあるまい？」

「一度目は午前零時を過ぎた頃ですが、まだ食堂で飲み会が続いているようでしたね。誰とも顔を合わせませんでした。二度目は……正確な時刻はわかりませんが、午前一時二十分から午前二時の間だと思います。その際は、保奈美がトイレに入っている間、廊下で五十嵐さんと少し言葉を交わしました。そして、最後に部屋を出た午前三時三分には誰とも会わず、不審な点も見当たりませんでしたね。非常階段のドアも開いていませんでした」

「ふむ。有益な情報はなし……か」

「お役に立てず申し訳なく思います」

そこで真悟君は少し首を捻り、眼鏡を外して裸眼で春日野を見据えた。

「状況を整理したいので、幾つか質問しても宜しいでしょうか？」

「うむ、構わんでよ」

鋭すぎる眼光を射込まれ、春日野は表情こそ変えなかったが、僅かながらに怯んだ。それを誤魔化す為か、頬杖をつくのを止めて座椅子の背もたれに身を預けた。

「上妻博之の宿泊部屋は《104号室》だったのですか？」

「うむ。梅本と一緒に泊まっとったそうだと。それに、毎年同じ部屋だったようだの」

「しかし、彼は自分にあてがわれた部屋では眠らなかったのでしょうか？ 彼はどの部屋で眠ったのですか？」

「……ほうほう、面白い質問だの。どうして別の部屋で眠ったとわかったんかのう？」

春日野は、白髪混じりの眉毛を上げて額のしわを深め、驚きも露わに聞き返した。

真悟君は穏やかに微笑んだ。

「上妻博之が泥酔状態であると同時に尿意に脅かされている状態であつたとしても、『104号室』の真ん前に位置する非常階段のドアを誤って開く可能性は極めて低いでしょう。それに、彼は毎年この山荘を訪れていたそうです。トイレと非常階段の位置関係は把握できていたと思います。それを踏まえると、彼は『104号室』以外の部屋で眠つたと考えざるを得ません」

「うむ、論理的な考えだの。確かに、上妻博之は『104号室』では眠っておらんですよ。彼が眠らされた部屋は、『105号室』だで」
真悟君は頷いた。

確か、『105号室』は女子トイレのすぐ横に位置している。そして、『104号室』は非常階段のすぐ隣だ。もし部屋が入れ替わっていたら、その位置関係からトイレと非常階段のドアを間違えてしまつてもおかしくはない。その上、昨夜は雨が降つていたので、廊下の雨戸は全部閉められていたし、蛍光灯の明かりも薄暗くてあまり役立っていなかったから、泥酔状態であれば尚更である。

「『105王室』は誰の部屋ですか？」

「本山純太だで」

春日野は、警察手帳を制服のポケットから取り出して答えた。

「どうして上妻博之が本山君の部屋で眠つたのか、理由はわかりますか？」

「うむ」

春日野は警察手帳を数ページ分ばらばらと捲り返し、人差し指でなぞって確認した。

「飲み会終了後……その時刻は午前二時過ぎだでな……に酔い潰れた上妻を『104号室』に運ばうとしたけど、なぜか部屋に鍵が掛かつていて運び込めなかったらしいですよ。だもんで、本山の部屋で眠らせてやったそうだで」

「施錠されていたのですか？ 泥酔状態の梅本さんが自ら内鍵を掛けたとは考えにくいのですが、その辺りの見解は？」

「うーむ……。梅本が便所に行った後、ついつい内鍵を掛けてしまったんじゃないかろうかのう」

「そもそも、『104号室』は施錠されていたのでしょうか？ 施錠されていたのであれば、最初に酔い潰れた梅本さんを運んだ後、誰が鍵を保管していたのでしょうか？」

「ふむむ……。それは聞いとらんでよ」

「それでは、誰が上妻博之を『105号室』へと運んだのですか？」
「設楽と緒方と本山だでよ。上妻は図体のデカイ男だったでな、三人掛かりでないと螺旋階段を上げられなかったみたいだの」

「どうして本山君の部屋で寝かせてあげようという運びになったのですか？」

「それは聞いとらんでよ。知りたきゃ、本人に直接訊くが良からうもん」

わたしたちを事情聴取しているはずが、反対に質問されてしまっている現状に苛立ちを覚えたようで、春日野は不愉快さを表情にした。

それに気付かない真悟君ではないのに、相手の心情に配慮せず、更に次の質問をぶつけた。

「それでは、なぜ腕力のない三人で運んだのでしょうか？ 運動に所属している本山君はともかく、設楽さんと緒方さんは大柄の十八歳男子を担いで運ぶ作業には不適任です。常識的に考えると、来須十路か中嶋君の協力を得るべきでしょう？」

「……来須兄は宴会終了の一時間に妹を連れて自室に引き上げてしまったそうだと。中嶋剛志は、眠ってしまった五十嵐由利を負っていたから、上妻を運ぶのを手伝えんかったんだらうもん」

「西脇さんは？」

「来須兄妹が引き上げた少し後に管理人室へ戻って眠ったそうだよ」

「そうですか」

真悟君は感情のない笑みを浮かべて頷き、外していた眼鏡を装着した。

「同室で眠っていた本山君は、上妻の転落死に気付かなかったのですね？」

「完全に熟睡してて、彼が部屋を出ていったことも気付かなかったそうだよ」

みんな、昨夜は羽目を外して相当量のお酒を飲んだだろう。

きつと、わたしと同じで、死んだように眠り、夢すらも見なかったに違いない。

そんな状態では、たとえ耳のすぐ傍で警報が鳴っても気付かなかったと思う。

「飲み会の終了後、何かしらの用事で部屋を出た者はいますか？」

「五十嵐由利と設楽松美が一度便所に行ったそうだよ。あと、中嶋剛志は午前五時頃に食堂へと赴いて、飲み物を漁ったそうだよ」

今のわたしも軽い二日酔いで身体が水分を欲している状態だから、ぬるめのお茶をひっきりなしに飲んで身体を潤している。

「この参加者の中に、上妻博之に恨みをいだいていた人物はいますか？」

「それはわからんですよ。もし殺人と断定できれば、改めて全員から事情を聴取するでな」

それを聞いて、真悟君は小さく吐息した。

春日野の悠長さに呆れたのかもしれない。

仕方なさそうに、彼は次の質問をした。

「イベントに関係しない外部の人間が山荘内に侵入した形跡はありませんか？」

「それはないのう。わしらが山を登ってくる際、駐車場からこつち登山客が通った形跡は皆無だっただよ。それに、一階の雨戸は完全に閉まっちゃったそうだし、玄関のドアもしっかり施錠されちゃったそうだよ。外から来た人間が上妻博之を二階から突き落とすん

は不可能だろうもん」

「そうですね」

真悟君は何かを思案するように一秒半ほど目の焦点をぼかした。そして、更なる質問を切り出そうと口を開きかけた。

「質問タイムは終了だでな」

質問攻めに嫌気が差したのか、春日野は眉間を狭めて警察手帳を閉じてしまった。

「おぬしは、意見がないと言いながら、殺人を前提とした質問ばかり投げ掛けてくるでいかんわ」

「春日野さんは、上妻の不注意による不慮の事故とお考えなのですね？ 事故を装った殺人事件とは考えられませんか？」

「来須兄と同じようなことを言いよるの」

春日野は警察手帳をポケットにしまいながら、ちよつと可笑しそうに鼻を鳴らした。

「わしらの役割は事件とか事故とか断定することじゃないでよ。現場を保存して捜査班に引き継いでもらうただけで」

そう言つて座椅子から立ち上がり、窓に近寄つて外の様子を眺める。

「やたら雨足が激しくなつてきおつたの。台風は北陸地方を通つて日本海側へと抜けるつて言うちよつたのに、気象庁もいい加減だな。昨夜の雨で道がぬかるんでおるに、これ以上降つたら道を歩けなくなつてまうでいかんわ。応援の到着が遅れねばいいがの……」

「万が一、何かしらのアクシデントで応援の到着が明日以降にズレ込んだ場合、どうなさいますか？」

不吉な可能性である。

この山荘からバス停に通じる道は一本だけなのだ。豪雨で土砂崩れが発生して山道が埋まつたら、わたしたちは死体もろともここに足止めされてしまう。そんなの嫌だ。

「そりゃ、あり得る可能性だでな。まあ、そんなときゃ、のんびりと待つただけだよ。最悪の場合は、県警がへりを出すだろうもん」

「あの……。そのヘリコプターでわたしたちも連れ出してもらえ
んですか？」

不安に駆られたので訊いてみた。

春日野は、山の上空を見上げた。

「天候にもよるでよ。ことに風が強い時には、ヘリは飛ばせん
でな。そりゃ、何か逼迫した事情があれば別だけど……。あんま期待
せん方が良かるもん」

「そうですか……」

不安は払拭されず、逆に増大した。

でも、真悟君さえ一緒なら、どんなに過酷な状況に陥っても耐
え抜く自信はある。

「死体の保存は万全なのですか？ 雨ざらしでは腐敗の進行が早
まってしまうと思いますが」

「三田村が倉庫に運んだそうだと、余計な心配は無用だよ」

「そうですか。それでは最後に一つ」
「いかにいかに。おぬしは来須兄と同様に要らんことを訊きすぎ
だよ」

春日野は激しくバイバイするみたいに手を振って、真悟君の質
問を遮り、窓から離れてドアに向かった。

「この殺人事件を速やかに解決へと導く為には必要な質問な
のですよ、春日野さん」

呟くような声が真悟君の口から零れ落ちるが、隣に座るわたしの
耳に届く程度の大きさであり、部屋から出ていく年配の警官が聞き
取るには小さすぎた。

ぱたんとドアが閉まる。

すぐさま、わたしは訊いた。

「また殺人事件なの？」

「さて、どうだろうね」

真悟君はまたしても答えをはぐらかすように、優しくも曖昧な笑
みで口許を飾った。

【4・中嶋剛志】

短い事情聴取を終えて廊下に出ると、あのはっちゃけ能天気娘が開け放たれている非常階段のドアの前で騒いでいた。

そこには来須兄も一緒に、尚かつ和泉と藤森の姿もあった。

四人が並んで何をしてやがる？ 骨組みしかない非常階段を観賞しているわけじゃねえよな。下の血溜まりが雨で洗い流されていく様子を観察しているわけでもねえ。およそ、事故現場を検証して意見を交換しているに違いない。よっしゃ、俺もその立ち話に混ぜてもらおう。

俺は部屋の鍵を掛け、廊下を駆けて四人に近寄っていった。

「あつ、中嶋君、事情聴取は無事に終わったのかな？ 無罪放免な感じ？」

美架がぴょんぴょん飛び跳ねて俺を迎え、腕を抱えて顔を近づけてきた。

おいおい、ぱんつ見えてたぞ。この程度のスキンシップは昨夜の合コンで慣れたが、問答無用のパンチラだけはドギマギしちまう。事情聴取の際に警察の二人から「破廉恥だからスカートかズボンを穿け」というお達しを受けなかったのだろうか？ きっと、受けなかったのだろう。いや、受けていたとしても素直に耳を貸す性格じゃねえよな。逆に、面白がってシャツすら脱ぎ捨てかねない。

俺は破廉恥娘を引き剥がし、廊下の壁にもたれかかった。

「無罪放免で何だよ……。俺は殺人犯じゃねえし、これは殺人事件じゃなくて事故だろ」

「ぶつぶーっ、ハズレえっ！ 上妻君の死は殺人事件かもしれないんだよっ！ ねっ、お兄ちゃん？」

「ああ、その通りだ」

来須兄は簡単に頷き、下に見える血みどろの鉄柵を指差した。

「上妻博之の死には不自然な点が多々ある」

「不自然な点だと？　どんなだ？」

「彼が本来眠るはずだった《104号室》に鍵が掛けられていたこと。螺旋階段を軸にして対称位置にある《105号室》に運び込まれたこと。彼が落下した後、今のように非常階段のドアは開け放たれていなければならぬはずなのに、西脇さんが死体を発見するまで誰も気付かなかったこと。このように、不審点を挙げれば切りがない」

「そんなの単なる偶然だろ」

俺は笑い飛ばした。

単純な事故つてやつは、疑えば疑うだけ不審点が増えてくる。どんな物でも怪しく見えてきてしまう。どうしても殺人事件に思えてくる。

そんなもんだ。

来須兄は薄く笑み、顎の下を撫でた。

「ああ、偶然かもしれない。しかし、逆に故意とも取れる。だろう？」

「まあな。でも、そんなの警察が判断することだろ。俺らが知恵を絞ってどうこう言う問題じゃねえぞ」

「うわあつ、中嶋君で面白みのない男の子だよねつ。こんな怪しげな事故を前にして放つたらかしにできちゃうんだっ？」

「普通は放つとくだろ。それに、いたずらに首を突っ込んで警察のオッサンたちに怒られるよかマシだぞ」

「そんなの気にしてちゃあ、天才美少女探偵の名が泣いちゃうんだよっ」

「そんなもん泣かせとけ。おまえは、馬鹿みたく騒いで、真っ先に怒鳴り散らされる可能性大だな。間違っても俺を巻き込むなよ」

「巻き込んだじゃうもーん」

「そんなときや、部屋に閉じこもるしかねえな」

「やーい、中嶋君の意気地なし！」

美架は中腰になって俺の顔を見上げ、馬鹿にする口調でほざきや

がった。

「それは違う！ 俺は、脳天パーなおまえと違って、真つ当な神経の持ち主なんだ！」

「私、のーてんパーじゃないもんっ！ 天才美少女探偵だもんっ！」
脳天パーという悪罵が堪えたのか、美架は膨れっ面で拳を腰に当て、「ぶんぶん」と憤ってみせた。怒りの表現すら派手なジェスチャーと効果音付きである。ある意味、凄い女だ。馬鹿もここまで極まると感心するしかねえ。芸能人になれば、きっと一部のマニアには絶大な支持を受けるだろう。まあ、十五歳未満は視聴厳禁の限定アイドルだろうが……。

「むうつ、そんじゃあ、中嶋君だけ仲間外れだねっ！ 捜査の邪魔だからあっち行っててよっ！ しっしっ！」

「なんだよ、怒ったのか？ 悪かったよ。おい、こら、俺は犬じゃねえんだから、そんな風に邪険に扱うな！ 天才美少女探偵は男に優しくなきゃ駄目だぞ」

俺は手を合わせて拝み倒し、大袈裟に許しを乞うてみせた。

勿論、美架の怒りは瞬時に霧散し、満面の笑みが戻る。しかも、子犬みたくなりゃれついてきやがった。

すんごく鬱陶しいが、まあ我慢するしかねえ。その特典として、貧弱だけど柔らかな胸の感触も味わえることだし。

「んーで、こいつの話からすると、和泉も殺人事件と踏んで、藤森を助手に据えて探偵活動を開始するってわけか？」

「その通りでーすっ！」

拳を突き上げてジャンプする美少女。

ぱんっ丸見えだ。それに、おまえには訊いてねえ。

俺は返事を求めて和泉を見た。

彼は苦笑していた。無理矢理に付き合わされているようだ。でも、けして探偵行為を拒んではいないのだろう。こいつは、誰に対してでも参加拒否を冷然と伝えられる男なのだ。

藤森は不機嫌だ。和泉に寄り添って俺たちの会話を聞いてはいる

が、そつぽを向いている。たぶん、美架のはしやぎっぷりに不快感を覚えているのだろう。二人は水と油の関係だ。

「そんじゃあ、お兄ちゃんは一人、私と中嶋君、真悟君と保奈美ちゃんの三チームに分かれて《勝負》だよっ！　それで、いち早く真相に辿り着いたチームの勝ちだからねっ。いいかなっ！」

おいおい、俺は美架とチームを組まされるのかよ。どういう基準でチーム分けがなされたんだ？　理由を聞かせてくれ。

「あれれ、中嶋君、チーム分けに不満でもあるのかなっ？　私と一緒じゃ嫌なのっ？」

「そんなわけねえっ。天才美少女探偵とチームを組ませていただけるんならあ光荣の極みですぜ。嬉しさのあまり、俺まで脳味噌が茹だっちまいそうだ」

「それ、喜んでるのかなっ？」

「おうよ。心が歓喜の雄叫びを上げてらあ」

俺はやケケソ気味に吠えた。

美架は可笑しそうにけらけら笑う。

すると、いきなり、来須十路がぱんと手を叩き合わせて、俺を含めた全員の視線を集めた。

そして、一言。

「この《勝負》は俺の勝ちだな」

「んによっ？」

天才美少女探偵が変な声を発した。

「もう？　嘘でしょっ？」

美架は兄に駆け寄って、首にぶら下がるようにしがみつき、駄々を捏ねるようにぐりぐりと揺さぶった。

来須十路は妹の頭に手を乗せて微笑んだ。

「いや、有力な仮説は立った」

「あゝん、お兄ちゃんてば早すぎだよっ。私たちに考える猶予を少し頂戴よっ！」

確かに早い。

あらかじめ仮説を用意していたにしても、朝起きて上妻の死を知らされてからこつち、思考する時間など殆どなかった。あの和泉ですら微笑んでいるだけで微動だにしないのだ。

こいつ、美架が《超天才名探偵》と称えるだけのことはあるな。

「駄目だ。これは厳然たる《勝負》なのだ。手加減をしては意味がない」

「むーっ、しょーがないなあっ！　そんなじゃあ、お兄ちゃんの仮説を聞かせてよっ！」

「いいだろう」

来須兄は静かに頷いた。

来須十路は、抱きついている妹を離れさせ、こともあろうに俺の方へと押しやり、両腕を束ねて仮説を話し始めた。

「上妻博之の死は、本人の不注意による不慮の事故死と、部屋位置の錯覚を用いた殺人トラップによる墜落死、その二つの説に分けることができる。だが、事故死という見解は即座に却下されるだろう。なぜならば、上妻が墜落死した後、この非常階段のドアが閉められ、尚かつ鍵が掛けられていたからだ。墜落死した者は鍵を掛けることなどできないゆえ、誰かが彼の死後にドアの鍵を掛けたと考えるしかない」

「それは聞き捨てならない話ですね。ボクたちが部屋を出た時には、非常階段のドアは開いていましたよ」

話の途中で和泉が静かに口を挟んだ。

来須兄は頷いた。

「俺がトイレを使う為に部屋を出た時には、非常階段のドアはしっかりと閉まり、壊れているとはいえ鍵もきちんと掛けられていた。それを断言できる。俺には危険を及ぼす可能性のある物の状態を常に確認してしまう癖があるからな。そして、その後、死体の第一発見者である西脇さんの悲鳴を聞きつけて、俺と美架はすぐさま部屋を出て現場へと急行したのだ。その時、ドアは開いていた。ちなみ

に、なぜ防音効果の高い室内で外部からの悲鳴を聞くことができたのかと言えば、中嶋君と同様に、室内の換気を目的として窓を開けていたからだ」

「トイレに行った時刻はわかりますか？」

「正確ではないが、午前六時から七時の間だろう。それより前に上妻は死んでいたはずだ。死体の状態からわかる」

「中嶋君は午前五時頃に食堂で飲み物を物色していたらしいけど、その際にこのドアは開いていたかな？」

和泉がこつちを見て訊いてきた。

俺はちよつと考え、明快に答えた。

「いや。ドアは閉まっていたと思うぜ。確実には言い切れねえけど、このドアが開いてりゃ廊下を歩いてて気付かないわけがねえもん」
「そうだね」

和泉は笑みを残して、視線を来須兄へと向けた。解説を再開しろってことだろう。

それを受け、彼は話し始めた。

「話を集約すると、上妻が墜落死した後、ドアを閉めて鍵を掛け、他のメンバーが起き出す頃を見計らってドアを開け放った人間が存在するのだ。そして、それを行えた人物は限られてくる」

来須十路は伏し目がちになって、にやつと二ヒルに口を歪め、三本指を突き立てた。

気障っぽい仕種だ。

くそつ、格好つけてんじゃねえよ。まあ、確かに名探偵って感じで格好良いけどな……。

「犯行動機を抜きにして考えると、最も疑わしい人物は本山純太だ。上妻と同じ部屋で一夜を明かし、尚かつ二人きりの状態だったから、他者に邪魔されず犯行に及ぶことのできた唯一の人間と言える」

本山か……。あいつは殺人を犯すような性格じゃねえよ。もし上妻を殺したと思っていても、その思いを行動に移す勇氣はねえ。

「次に疑わしい人物は、一人で一部屋をシェアしていた者だ。つま

り、設楽松美、中嶋剛志、梅本春樹、西脇園子の四名だな。しかし、この中から梅本と西脇さんは除外される。理由は単純だ。この二人は、上妻がどの部屋で眠っているかを知らなかった」

「おいおい、来須の兄ちゃんよ……」

俺は思わず礼を失する発言をしてしまった。

だが、口を挟みなくなるってもんだぜ。論理的に疑われちゃ敵わねえ。そのまま殺人犯にされちまう危険性が三割以上あるのだ。

来須兄は架空の銃で撃つみたく、俺を指鉄砲でばーんと弾いた。

「そう。容疑者に選考される条件は二つ。その一つは、昨夜から今朝にかけて一人で過ごし、行動の自由を得られたこと。もう一つは、昨夜の宴会に最後まで参加し、上妻博之が《105号室》へと運び込まれた事実を知り得ていることだ。君はその条件を二つ共にクリアしている。見事なものだ」

「冗談じゃねえぞ、おい！ 無実の俺が、なんで疑われなきゃなんねえんだ？」

俺が喚くと、意外や意外、美架が加勢してくれた。

「そうそう。酷いんだよつ、お兄ちゃん。中嶋君には彼を殺害する動機が微塵もないじゃんかつ！ これじゃあ、お兄ちゃんの勝ちは認められないねっ！」

「おう！ 頼もしいこと言ってくれるぜ！」

「にへへ。パートナーを守るのも天才美少女探偵の使命だよっ」

だけど、すぐに抱きつく悪い癖は天才美少女探偵の大いなる欠点だな、と抱きすくめられながら思った。

来須兄は顎に手を当てて苦笑した。

俺たちのちゃちゃに小揺るぎもしていない。

「犯行動機など問題ではないが……、いいだろう。その点も考慮しつつ、中嶋君を容疑者から除外して仮説を修正していくとしよう」

考慮しつつ修正する、って……おいおい。

「中嶋君はこのイベントに初めて参加したので、上妻博之との接点は皆無と言っていいだろう。すなわち、殺害動機も皆無なのだ。同

様に、本山純太も今年が初参加だが、彼の場合、昨年も参加した設楽松美とその友人である江藤という女性の存在がある為に、容疑者から除外できない。更に、設楽松美に至っては、昨年のイベントで何かしらの被害を受けた江藤の復讐という明確な犯行動機が存在する為に、より疑わしい容疑者と言える。よって、上妻博之の死を不注意による事故を装った視覚的錯覚による殺人と仮定した場合、設楽松美と本山純太のどちらか、もしくは両者が協力して犯行に及んだと結論付けられる」

そう結んで、来須兄は口を閉ざした。

俺は低く唸った。

昨夜一緒に騒いだ時の感想を基にして判じると、設楽と本山はどっちも簡単に人を殺すような馬鹿じゃねえ。共犯なんてそれこそあり得ねえぞ。俺には全然共感できねえ仮説だ。おい、和泉、反論しやがれ。

声なき声を視線に乗せて要求する。

和泉は僅かに首を頷かせ、傍観者の立場を改め、静かに整然と反論した。

「五十嵐さんか緒方さんの犯行、もしくはその二人の共犯という可能性は捨ててしまうのですか？ 彼女たちを容疑者から除外する理由がボクにはわかりません。その点の説明はしていただけないのでしょうか？」

「……………」

来須兄は瞬間、凍りついたように硬直した。そして、唇を引きつらせながら自嘲の笑みを浮かべた。

「五十嵐由利と緒方みやびの存在をすっかり失念していた。理詰め
の仮説に穴を作ってしまうとは、俺としたことが少々先走ってしまったようだ。先の結論を撤回させていただこう」

「うわあっ！ 真悟君の勝ちいつ！」

そう、まさに一撃必殺。

余計な問答なしで、得意げに自分の有能さを誇示する十路を一蹴

してしまった。

さすがは俺の大親友だぜ。

「ボクは何も語っていないよ。ただ疑問点を述べただけだ。キミのお兄さんの仮説は、綻びはあれども完全な間違いではなかった。より詳細な情報をプラスすることで完成される可能性が高いものだよ。いわば、彼の判定勝ちだね」

謙遜するなよ。どうせ、十路が語った仮説なんか聞くまでもなくわかってたんだろ？ でも、未完成の仮説だったから沈黙を守ってたんだろ。ちゃーんとわかってるぜ。おまえは間違いなく奴よりも頭が良い。俺が保証する。まあ、俺の太鼓判には価値なんかねえんだけど……。

「判定勝ち？ にやはは！ そんな中途半端な結果は駄目だよ。完全に犯人を特定できなきゃ、どんな優れた仮説も無意味だもんね。だから、この《勝負》はドローだよ」

美架が興奮気味に飛び跳ねながら叫んだ。

しつこいようだが、ぱんつ見えてるぞ。年頃の女なんだから、少しは恥じらえ。っていうか、部屋に戻ってスカートかズボンを着用してこい。目のやり場に困るだろ。来須兄は妹の破廉恥な格好に慣れっこなんだろうが、和泉と藤森はなんで黙ってたんだ？ 目の保養と割り切ってるのか？ それとも、何を言っても無駄と諦めてんのか？ あれに困惑しねえってんなら、おまえら三人とも変だぞ。

「引き分けか……。まあ、妥当な判定だな」

十路は妹の判定に理解を示した。

美架はなぜか自分が勝利したかのごとく得意げに鼻を高くし、兄の肩を乱打して、「百日紅の木から落ちる。河馬の皮はなげえ。小坊とフーディニの綾取り、だねっ！」と意味不明の言葉を口走った。俺は首を傾げるしかない。

猿滑りの木……？ そんな木、あるのか？ それを言うなら、《猿も木から落ちる》だよな。それに、カバの皮は長いかもしれねえが、カバじゃなくてカッパだろ。《河童の川流れ》だ。最後のは…

…何だろう？ 全く見当がつかねえぞ。フリーディニ……って何？

人間の名前か？

「なるほど、面白いね」

和泉は美架が口走った謎の呪文を理解できたのか、可笑しそうに頷いて藤森に耳打ちし、彼女に呆れ顔での溜め息を吐かせた。

「では、『勝負』は仕切り直しだな」

そう言って、来須兄はハンカチを用いて非常階段のドアを閉めた。指紋を付けない為の配慮だろう。

それに、雨が酷く降ってきやがったみてえだ。

こりゃマジで台風が直撃するかもしれねえぞ。早く下山しねえと山荘に閉じ込められちまう。さっさと帰らせてくれ。

そんな俺の声なき哀訴は、誰の心にも届かなかった。

「君たちはこれからどうする？ 朝食を摂るなら、俺たちと一緒に食堂へ行こう」

「いえ、遠慮します」

和泉と藤森は朝食を食わないらしい。さっさと自室に戻ってしまった。

実際には、来須兄妹の近くにいると頻繁に『勝負』を吹っ掛けられるから、一緒に行動を嫌ったのだろう。それは、藤森の意見が尊重されていると思われる。

俺は活力を得る為に味噌汁くらい腹に入れておこうと思い、来須兄妹に同行した。

螺旋階段を下り、食堂に入る。

食堂内には、カウンター内で暇そうにしている西脇の他に、春日野と三田村の警察官コンビがいた。

二人はカウンター席に座って味噌汁を啜っている。

「おう、おぬしら、今から朝飯かの？ わしら、朝飯抜きで駆けつけちよっから、先に食わしてもらっとるでな。うむ、旨い」

春日野は右手に持った箸をこっちに向けて断りを入れ、左手に持

ったお碗を口につけて味噌汁を流し込んだ。

三田村はおにぎりを貪り食ったから、こつちを横目で見ただけで特別なリアクションを見せなかった。

俺たちはカウンター越しに料理を受け取った。来須兄が中央のテーブルを選んで席に着いたので、俺と美架もそのテーブルに座る。

「さあ、俺たちもいただきますでしょう」

来須兄は手を合わせて《いただきます》をし、白いご飯の上に生卵を割り落として醤油を数滴垂らした。

どうやら、彼はご飯に直接生卵を割り落とす派らしい。

なら、妹の美架はどうなのだろうと思って見ていると、彼女も白いご飯の上で生卵を割りやがった。

そりゃまあ、兄妹なんだから卵かけご飯の作法も同じになっちまうんだろうけど、そんな風に作ったら、醤油の加減をしくじった場合に取り返しがなくなっちまうぞ。やっぱ、卵かけご飯はあらかじめ別の場所で生卵を割り、醤油を適量注いでよく掻き混ぜ、いい塩梅に調整してからご飯にかけるべきなのだ。いや、今は卵かけご飯の食い方なんかどうでもいいか……。

「なあ、事故の可能性は全くねえのか？」

俺はお新香を一欠片摘んでから、上妻の死について訊いてみた。

十路は味噌汁の中身を浚っていた箸を止め、なぜ飯を食っている時にそんな質問をするんだ、という顔で睨んできた。でも、無視せずに応えてくれた。

「ゼロではない。しかし、非常階段のドアが一定時間閉められていた理由が論理的に説明できない限り、事故の可能性は極めて低い」

「不慮の事故と仮定して、理に適った仮説は立たねえのか？」

「上妻が墜落死した後、非常階段のドアが何者かの手によって開閉されているのだ。その時点で理に適う仮説は成り立たない。万が一、開いていたドアを誰かが他意なく閉めた、としたところで、再びドアを開け放つ理由がない以上、理に適った仮説は成り立たない」

「誰かが何となく開けたのかもしれないよ」

「その場合、嫌でも上妻博之の凄惨な死体を視界に収めることとなる」

「気付かなかったかもしれないじゃん」

「第一発見者である西脇さんの話だと、発見時、死体には数羽の力ラスが集っていたそうだ。そんな賑やかなものに気付かない人間は、この山荘内に存在しない」

「そうか……」

俺は納得し、お新香をもう一欠片摘んだ。そして、味噌汁を一啜りする。

うん、旨い。

俺は水を飲んでから、美架に視線を移した。

「おい、天才美少女探偵の意見はないのか？ さっきは黙ったままだったじゃねえか。おまえは斬新な仮説とか持ってたねえのかよ？」

「むーぐつ、むむぐうぐつ！」

「飯を飲み込んでから喋れ」

「むぐつ！」

美架は忙しく咀嚼して口内の物を飲み込み、水をがぶ飲みして幸せ笑顔を作った。

「旅行先で食べる朝ご飯は美味しいねっ！」

この女、死体を見た直後でも料理を味わえるらしい。神経の図太さが半端じゃねえな。いや、精神回路がどうか断線してんじゃねえのか？ へらへら笑ってられる性格が羨ましいぞ。こんな軽薄者の俺でさえ、神妙な面持ちにならざるを得ないってのに。

「今は真っ白けっけのけーっ！」

手に持った箸を天井に放り投げる勢いで万歳する美架。

ほんと、いつでもどこでも誰に対してもテンション高えよな。あんまりはしゃいでると、おかしい薬をやってんじゃねえかと疑われて、警官にとっ捕まっちゃうぜ。

俺は鼻で笑った。

「天才なのに頭の中、空っぽか？」

頭上ではあつと手の平を広げてみせると、美架は頬をぷーっと膨らませてテーブルの上をぺちぺち叩いた。

「むーっ！ 中嶋君、今、私のこと心の中で馬鹿にしたでしょっ！でも、さっきは私もちゃーんと仮説を立ててたんだよっ！」

「どんな仮説だ？」

「んーでも、披露できるほどの仮説じゃなかったかなっ。私も、お兄ちゃんの立てた仮説と殆ど同じだったもん。それ以上に容疑者を絞り込むには、もっともっとたくさんの情報が必要なんだよっ。天才美少女探偵としては、お兄ちゃんと真悟君をギャフンと言わせたいけどなーっ」

「そうだな。そんじゃ、和泉のやつはどうだったんだろう。あいつ、十路さんの仮説にケチつけるだけで、自分の意見を言わなかったけど、実際は犯人をある程度特定できてたんじゃねえのかな」

「それはあり得ない」

示された疑惑を、来須兄が即座に否定した。

「彼は俺の話を聞くまで、上妻の死後、非常階段のドアが一定時間閉められていたという事実を知らなかった。つまり彼は、あの時点では事故と事件の両方の可能性を持っていたと推察できる。彼なりに幾つかの可能性を推考していただろうが、容疑者を絞り込むまでには至っていなかったに違いない」

そうだろうか。

あいつの脳味噌は並みじゃねえから想像力だけで犯人を特定しまつてるかもしれないぞ、と思ったが、無駄な言い合いをするはめになりそうなので黙っておいた。

味噌汁の最後の一啜りを口に流し込む。

「ごっ そうさん」

俺は箸を置いた。

「あれ、中嶋君、ご飯と卵、残しちゃうのかなっ？ もったいないお化けがでちゃうんだよっ。それに、お百姓さんや八百屋さんの人が可哀想でしょっ。出された料理は残さずに全部食べなきゃ駄目だ

よっ！ 西脇さんにも失礼だからねっ！ 最低限の常識をちゃん
と弁えなきゃっ！」

この場で一番常識外れな人間に叱られた。
正しい意見であるだけに不愉快だ。

おまえの破廉恥な格好は常識の範疇なのか、と聞き返したかった
が、下らない問答で気分を悪くしたくなかったから無視してやった。
「要らないんなら私が食べちゃうよーっ」

なんだ……要は、自分が食いたかったただけかよ。欲しいなら最初
からそう言えばいいんだ。

俺は水だけ確保し、ご飯と卵を食器ごと美架の前に押しやった。
大喜びで卵かけご飯を作り始める美少女。微笑ましい姿だが……。
さてさて、この先どうなることやら。

台風の影響を受けずに警察の本陣が到着して、何の問題もなく帰
宅を許されりや御の字なんだけど、来須兄の仮説を聞いてしまった後
だけに楽観視できなかった。春先の事件と同様に、和泉がすぱーん
と解決してくれりやいいんだが、あいつ、積極的に推理する気がね
えみてえだしな……。

まあいいさ。

俺は席を立ち、食堂を後にした。

【5・藤森保奈美】

最悪の報告がもたらされた。

台風の影響により、バス停から山荘に至る山道で大規模な土砂崩れが発生し、現在復旧の目途が立っていない状態だというのだ。

二次災害の危険もあるので、途中まで登ってきていた県警の捜査班は無理をせずに、一旦バス停まで撤退したらしい。しかも、暴風雨の所為でヘリも飛ばせないそうで、死体の回収すらできない有様だという。県警の捜査班は台風の通過を待つて、改めて山荘を目指すそうだ。

午前十一時四十五分現在、わたしたちは激しい雨と荒れ狂う風の所為で、山荘内に閉じ込められている。そんな中で選べる行動の選択肢は少ない。人が一人死んでいるので遊ぶなど以ての外だが、室内で大人しく絵を描く気にもなれない。昼間からお酒を飲むわけにもいかないし、布団に入って眠るのもどうかと思う。この状況下では、現実逃避の手段は限られているのだ。

室内には、部屋主であるわたしと真悟君の他に、中嶋君と設楽さんがいた。

一人だと心細い。だから、四人で他愛ない会話を交わして時間を潰している。

「雨、全然止む様子ねえよな」

中嶋君は窓辺に座椅子を移動させ、だらしく身を預けて、うんざりした顔で外の様子を眺めている。土砂崩れの報告が結構ショックだったようだ。

「台風が直撃だもの、明日の朝くらいまで天気は回復しないわよ」
お煎餅の封を切りながら設楽さんが答えると、中嶋君は窓ガラスに額をくっつけて陰鬱そうな溜め息を吐いた。

「天候が回復しても、土砂崩れで道が塞がれてちゃ帰れねえよな」

「ヘリコプターで麓まで乗せていつてくれるかもしれないわよ」

「警察はそんな親切じゃねえよ。もしヘリが飛んできて、それは死体を運び出す為であって、俺らに乗せて帰る為じゃねえよ」

「悲観的ね」

「死体と一つ屋根の下で過ごしてんだ。楽観論なんて出てこねえよ。まして、殺人事件に巻き込まれたとなりや尚更だ。殺人鬼と寝食を共にしてるんだから、悲観どころか絶望して泣き喚きてえよ」

中嶋君は頭の上で手を組み、天井を見上げて言った。彼らしく冗談めかしているけど、声音の節々に不安な心情が滲み出ている。来須兄の仮説を聞いているので、少し弱気になっているのだろう。

その反対に、設楽さんに不安を感じている様子はない。上妻の死はショックだっただろうが、山荘に閉じ込められている現在の状況に対しては、早く台風が通り過ぎればいい、程度の思いなのだろう。彼女の口調には切実さがなかった。

しかし、中嶋君の発言を聞いた設楽さんは、その言葉を疑うように顔をしかめ、卓袱台の上に身を乗り出した。

「殺人事件？ それ、どういうこと？ 上妻君は不注意の事故で死んだのでしょうか？」

「あれは殺人事件なんだとさ。なあ、和泉？ あれは事故じゃねえんだろ？」

中嶋君はぶっきらぼうに告げて、真悟君に同意を求めた。

「十路さんの証言が嘘でなければ、上妻博之の死は事故ではないよ」真悟君は穏やかに答えた。そして、さつき来須兄が語った仮説を一言一句間違わずに話して聞かせた。

「そんな……」

設楽さんは相当な衝撃を受けたようで、卓袱台に両手をついて腰を浮かせたポーズのまま硬直した。

不慮の事故だと楽観していたところに、いきなり殺人事件だと言われたのだ。現状が現状だけに誰でもショックを受ける。それに、自分が容疑者の筆頭に挙げられたこともショックだったに違いない。

彼女は気を落ち着かせるようにお茶を一口飲み、座椅子に座り直した。

「それ、警察の人は知っているの？」

「知らねえんじゃないか。知ってりゃ暢気に朝飯なんか食ってられねえもんよ」

天井を仰ぎ見たままで中嶋君が答えた。

「あの二人に話した方が良いのではないかしら。黙っていても良い結果は得られないと思うわよ。あれが殺人事件なら、今すぐにも犯人を捕まえてもらわないと」

「殺人事件である証拠は、十路さんの証言以外に何もないんだ。どうせ話しても取り合ってくれねえよ。ガキの戯言として聞き流されるか、鼻で笑われてお終いだぜ。下手すると、怒りを買っちゃまうかもしれないねえ」

中嶋君は嫌悪を口調に宿して吐き捨てた。

警察に対して悪感情を持っているらしい。きっと、過去に何か遭ったのだろう。

「十路君から話してもらえば？」

「そりゃ悪くないアイデアだけど……。あの能天気娘がくつついてたら、どれほど理に適った仮説でも胡散臭く聞こえちゃうぞ」

「そうね……」

設楽さんは眉を下げ、薄く口許を綻ばせて、短く息を吐いた。

来須美架の姿を思い浮かべると、誰でも自然と諦めの溜め息を漏らしてしまうのだ。

わたしなんか、心の中で品性を疑われるような悪罵を吐いてしまっ

「私が警察の二人に話をしてもいいけど、仮説の中で一番疑われている私が言うのもどうかと思うのよね……。話を信用してもらえても、その瞬間に犯人扱いをされては敵わないもの」

「おケツも墓穴も掘りたかねえよな」

中嶋君は下品な駄洒落を口走って、設楽さんに白い目で睨まれた。

真面目な女の子に下ネタは厳禁である。発想が音声に変換された瞬間、軽蔑されること請け合いだ。でも、彼にとっては良い教訓になっただろう。慌てて取り繕っているが、一度口から放たれた言葉は取り返せない。

「失敬。おケツは関係ねえよな」

中嶋君は頭を掻いて誤魔化そうとしたけど、設楽さんはつーんと顔を背けた。

嫌われちゃったみたいだね。

ちよつと室内の雰囲気が悪くなったので、わたしが会話の舵取りを担うことにした。

「今、他のみんなは何をしているのかな？」

「本山君ならさっき食堂でジュースを貰っていたわよ。五十嵐さんと緒方さんは軽い二日酔いだって言っていたから、きつと部屋で大人しくしているのね」

「梅本さんは？」

「事情聴取の後、西脇さんにお薬を貰っていたから、今は部屋で安静にしているのではないかしら」

わたしと真悟君は、今日、梅本の顔をマトモに見ていない。

今朝、彼は親友の無惨な姿を見て錯乱し、中嶋君と来須兄に取り押さえられて部屋に連れ戻されたそうだ。警察官の到着時に一度だけ呼び出しに応じたが、その後は布団を被って会話を拒否している状態らしい。一応、警察官の聞き取りには応じたみたいだけど、西脇さんの呼び掛けには応えず、薬を受け取って飲み込んだ以外は無反応だったそうだ。

「二人の警察官は、今、どうしてんだ？」

中嶋君が、一分前の失敗を忘却したかのような爽やか笑顔で、設楽さんに訊いた。

さすがの恋愛パンチドランカー。打たれ強さで江尻わたると並び評されているだけのことはある。並みの男の子なら萎縮して声を掛

けられないところだけど、もう彼は駄洒落ショックから立ち直っている様子だ。

設楽さんは大らかな心をもって許すようだ。

「春日野さんと三田村さんには、空き部屋の《108号室》があてがわれたそうよ」

「ただで朝飯食って、その上、ただで避暑地に宿泊かよ。結構なご身分ですな！ あいつら、どこの警察署員だ？ 東京に戻ったら、匿名で抗議の電話を掛けまくってやるぞ」

「彼らは麓の町にある交番の駐在員だそうよ。同じ交番ではないらしいけれどね」

「けっ！ 警察は下っ端でも優遇されるってわけか？ 国家公務員はずりいよな！」

「彼らは地方公務員だよ」

「……………」

真悟君の涼やかな突っ込みを受け、中嶋君はコンマ五秒ほど沈黙を強いられた。だが、ふんと鼻を一つ鳴らして、座椅子から身をずり落とし、仰向けに寝転がって大欠伸した。

「しかし、なんつう運の悪さだよ。朝っぱらから死体観賞、しかもそれが殺人事件の犠牲者で、駆けつけた警察官は頼りになりそうもねえ交番の駐在員二人だけだぜ。その上、気象庁の予想が大外れして台風は直撃するわ、山道で土砂崩れが発生して帰れねえわ、警察の応援部隊は当分来れねえわ。不幸のドミノ倒しかつてーの。このままだと不幸の世界記録を更新しちまうぞ、マジで！」

真悟君はくすつと笑った。中嶋君の言い種が可笑しかったようだ。額にかかった緩い癖っ毛を指先で払い除け、冗談に応じる。

「その記録には立ち会いたくないね」

「もう立ち会っちゃってるだろ」

「今の段階では最悪の不幸とは言えないよ。この後に新たな殺人が発生するならまだしも、この程度で最悪と評価しては、春先の事件がランク付けできない」

「そうよね」

わたしは同意した。

真悟君の言う通りである。春先の事件に比べれば、こんなのまだ序の口だ。でも、それは、事件に直接関係したわたしと真悟君の認識である。その時に殆ど関わらなかつた中嶋君は、今回が殺人事件の初体験と言えるので、感じる不幸の度合いも高いのだろう。

「その事件で、君たちは余程の目に遭つたのね」

設楽さんは、真悟君とわたしを交互に見て言った。

その興味混じりの口調からして、あの事件を全く知らないようだ。ニュースやワイドショーで大騒ぎしていたのに……。関東地方に住む者として知っているべき情報だと思う。まあ、彼女は読書好きらしいから、テレビなど見ないのかもしれない。それに、女子高生の会話において、殺人事件の話題が出るわけない。

わたしは曖昧な微笑みではぐらかす。

答えたのは中嶋君だった。

「あの時みてえな連続殺人事件でか？ 冗談じゃねえよ。台風の影響で逃げ場がねえんだぞ。ここは、まさに陸の孤島だ。こんな状況でそんなのに巻き込まれてみる。それこそ不幸の世界新記録だぞ」
「世の中にはもっと不幸な境遇に陥って苦しんでいる人間が数多く存在すると思うよ」

真悟君が穏やかに言った。

真面目な意見なのか、冗談なのか、彼の表情からは読み取れなかった。

「日本国内での話だ！ 戦場とか貧困の国は対象にしてねえ！」

「その条件だと、世界記録とは言えない」

完全にかかっていてた。

それをわかつているからか、中嶋君もムキになって応じる。

「そんじゃあ、国内新記録だ！」

不幸の国内新記録……。現在の記録保持者は誰だろう？

「記録に挑戦かい？」

「そんなのごめんだぞ！」

高らかに叫び、中嶋君は両足を振り上げて振り下ろし、大きく反動をつけて跳ねるように起き上がった。そして、座椅子を持って、冬眠明けの熊みたいなのにそのもと卓袱台の前まで来た。

「お茶、淹れてくれ」

中嶋君はそう言つて、わたしと真悟君の間に座椅子を置き、どかりとお尻を落とした。

「あ、うん。みんなも飲むでしょう？ お茶、淹れるわね」

わたしは全員分の湯飲みを用意し、緑茶のティーパックを入れてお湯を注ぎ、それぞれの前に差し出した。

「さんきゅ」

ずずずーっとお茶を啜る音。

「何にしても、これ以上、台風が過ぎるまで何事も起きなきゃいいがな……。山荘の惨劇なんて、洒落になんねえもんよ」

本当にそう願いたい。

「嵐の山荘って、推理小説によく出てくるのよね。連続殺人事件の舞台としては定番だけど、かつこのシチュエーションなのよ」

設楽さんが笑えない冗談を言った。

冗談でなければ、暴言の部類に属する発言だ。

「それはちよつと……」

わたしは控え目に咎めた。

「こんな時にごめんね。不謹慎なのは十分に承知しているわ。でも、ミステリ好きな私の胸は、自然と高鳴ってしまうのよね」

設楽さんは胸を押さえ、言い訳っぽく言つてにこつと笑った。

「美架ちゃんもミステリ好きなのかな？」

「そうだったとしても、あれは問題外だ」

「そうよね」

「確かに、彼ら兄妹の行動は目に余るものがある。他人の不幸を出汁にしておかしな《勝負》に興じるなど、正常な精神構造の持ち主とは言い難い。彼らが事件に干渉するのは勝手だが、ボクたちを巻

き込まないで欲しいものだね」

全員の意見が一致した。

来須兄妹は普通じゃない。だから極力、彼ら……否、彼女には接近しないでこつちを放っておいてくれないだろうが……。

まあ、向こうがこつちを放っておいてくれないだろうが……。

真悟君は静かに湯飲みを傾けた。

空になったと見て、わたしは世話を焼く。

「真悟君、お茶のお代わり欲しい？」

「いいや、遠慮しておくよ。お昼ご飯の前にお茶でお腹を膨らせた
くはない」

「そうそう。もうすぐ飯時だ」

お昼ご飯と聞いて、わたしの胃袋が控え目とは言えない悲鳴を上げた。

みんな、お願いだから聞かなかったことにして下さい、と心の中で祈ったけど無駄だった。

みんなの目が集まる。

羞恥心で顔が熱を帯び、急速に紅潮していくのがわかった。

「ぐうっつ、だってよ。くはは、すげえ音だったな。でも、まあ、
どんな悲惨な状況であれ、人間なら腹減って当然だぜ。それに、藤
森は朝飯食ってねえんだろ？ だから、余計に腹減っちまってんだ
ぞ」

「……………」

このまま気絶しなくなった。

でも、空腹のあまり気を失ったと誤解されたら嫌なので、しょう
がなしに意識を保ち、急流と化した血液を落ち着かせるべく俯いて
深呼吸した。

「保奈美をからかうのはそれくらいにして、食堂へ行こう」

真悟君が提案した。

笑いを堪えている点がすこぶる気に食わない。唇を尖らせて意思

表示。でも、中嶋君の攻撃から助けてくれたので許してあげよう。すると、設楽さんが何かを思い出した様子で軽く手を合わせた。

「ああ、お昼は西脇さん特製のサンドイッチが用意してあるそうよ。今、彼女は管理組合への状況報告で手が放せないみたい。だから、お昼は食堂で食べるなり部屋にテイクアウトするなり好き勝手に食べて頂戴、って言っていたわよ」

「そりゃ結構なことだな。早速テイクアウトに行ってくるぜ。それとも、食堂へ食いに行くか？ 俺はどっちでもいいぞ」

「どうする、保奈美？」

真悟君はどんな事案でも、まずわたしの意見を聞き、大抵の場合、わたしの意見を尊重してくれる。

でも、わたしよりも先に、設楽さんが答えてしまった。

「ここで食べましょうよ」

「そうね……。ここで食べようかな」

ちよつとムツとしてしまったが、設楽さんの意見に流される形で答えた。

「よっしゃ！ そうとなりや、熱いお茶ばっかだと飽きるから、昼飯を取ってくるついでに何か違う飲み物を貰ってきてやるぜ。食堂の冷蔵庫に何でも揃ってるからな。藤森は何かいい？」

「そうね……。百パーセントのオレンジジュースを頼もうかな」

「よしよし。んじゃ、和泉は？」

「保奈美と同じ物でいいよ」

「設楽さんは？」

「あ、中嶋君はここで待っていて。私が食堂へ行つて、サンドイッチと飲み物を貰ってくるわ。ついでに梅本君と本山君の様子を見たいから」

「そうか。そんじゃ、宜しく頼むぜ」

中嶋君は起こしかけた上体を座椅子の背もたれに押しつけた。

設楽さんは湯飲みと急須をお盆に寄せ、満杯になっているゴミ箱

と一緒に抱え上げて、部屋を出ていった。

お茶の後片付けとゴミの始末をしてきてくれるようだ。
親切な人である。女性の鏡だな、と思った。

設楽さんが出ていくと、中嶋君は急に軟体動物にでも変化したかのごとく身体を弛緩させ、座椅子を後ろにずらして畳の上に寝そべった。そして、和泉君を見上げた。

「おい、和泉」

「何かな？」

「おまえの意見を聞かせろよ」

「事件に対する？」

「それ以外に何があるんだよ」

「設楽松美に対するキミの奇異な言動について、ボクの意見を求めている可能性もあり得る。違うかな？」

「おいおい……」

「冗談だよ」

「……………」

真悟君は珍しくも一瞬だけ悪戯っぽい笑顔を浮かべ、転じて表情を引き締めて真剣な顔を作った。

「ボク自身は何の仮説も立てていないが、来須十路の証言が事実であれば、上妻博之は何者かに殺害されたと見て間違いない。しかし、この山荘にいた全員が容疑者だ。誰一人として確定的なアリバイを持っていない。そして、殺害方法も不定だ。なぜなら、来須十路の仮説には根本的な欠陥がある」

「欠陥……ってどんな？」

「彼の仮説は、犯人がこの山荘の構造を利用して、上妻にトイレのドアと非常階段のドアを錯誤させて墜落死させた、というものだ。しかし、実際はそうとも言い切れない。極端な話、トイレに立った上妻と廊下で遭遇した人間が、突発的な殺害衝動に駆られて無理矢理に非常階段から突き落とした、とも考えられる。その場合、犯人

が昨夜の飲み会に最後まで参加している必要はないし、上妻の眠っていた部屋場所など知る必要もない。一人で一部屋を使用している者が容疑者の条件になるわけもない。これが彼の仮説を踏まえた上でのボクの意見かな」

「おいおい、和泉、なんでそれをあいつの前で言わなかったんだ？ その欠陥を指摘してりゃ、あの《超天才名探偵》、絶対に悔し泣きしたぞ」

「彼を悔しがらせる意味はないよ。それに、ボクの意見は極論だ。それを見落としていたからと言って、披露できる仮説を持っていなかったボクに彼を批判する権利などない」

真悟君は僅かに目を細め、穏やかな微笑みを向ける。

「来須十路は間違いなく優れた知能の持ち主だよ。それは断言できる」

「天才は天才を知る、か？」

「ボクは天才ではないよ。同様に、彼も天才ではないね」

「謙遜すんな。おまえが天才じゃないってんなら、俺らがとんでもなく馬鹿ってことになっちまうだろ」

「キミは時折、ボクを基準に自己分析して、過剰に自己卑下をする。自虐嗜好を誘発する前に改めるべきだね」

「わかつちやいるけど止められねえんだよ」

中嶋君は歌うように言った。

「ボクにない良さをキミは持っている。その長所を伸ばした方が健全だ」

「おまえにない俺の長所って何だ？」

「他人から聞かされては無意味だよ」

「ちえっ！ 友達甲斐のない奴だぜ！」

中嶋君は小さく舌打ちし、拳を固めて真悟君の右太股を小突いた。否、殴った。

ぼすつと嫌な音がしたので、結構本気で拳を振るったのかもしれない。

彼は、わたしの手を借りて身を起こし、座椅子を引き寄せて座った。

真悟君は苦笑しつつ殴られた部分をさすっている。痛かったようだ。

「おい、和泉。おまえ、将来何になるつもりなんだ？ 大学に進学するのは当然として、その先はどうすんだよ」

急に中嶋君が真面目な口調を用いた。でも、まだ高校一年生なのに、将来の展望を訊くなんて変だ。そこにどんな意図があるのだろう。真悟君だって明確な進路を定めて高校生活を送っているわけではないと思うし……。

不思議そうにクラスメイトを見つめる真悟君。

どう答えようか逡巡しているようだ。

「さあ、どうだろうね。ハッキリとは決めていないよ。大学には進学する予定だけど、その後の就職先は不定だ」

「おまえは有名企業に就職するんだろうな。姫城グループとかサイバートとかよ」

「世界的総合企業と軍事産業の最大手かい？ どちらも遠慮したいね」

「真悟君は、お父さんが警察関係者だったから、警察関係のお仕事に就きたいんじゃない？」

「いや、ボクは父の後を継いで警察に就職するつもりは一切ない」
きっぱりと否定する真悟君。

その理由を訊こうとしたら、ドアをノックする音が聞こえてきた。設楽さんが戻ってきたようだ。

「はい。入って下さい」

わたしが返事をする、ドアが開いて設楽さんと五十嵐さんが入ってきた。

二人して山盛りのサンドイッチと数種類の缶ジュースを両手一杯に抱えている。五人でも食べきれるかどうか不安になる量だった。

「梅本君はぐっすり眠っていたわよ。純太君は部屋でラジオを聴い

ていたわ。上妻君のニュースと天気予報を聴くんですつて。来須兄妹は食堂でお昼を食べながら、警察の二人と何か話していたわね」

五十嵐さんは卓袱台にサンドイッチを乗せた大皿を置き、空いている座椅子に腰を降ろしながら報告してくれた。設楽さんと一緒に各部屋をまわってきたようだ。

「緒方さんはお部屋ですか？」

そう訊いてみると、五十嵐さんは疲れの中に安堵の微粒子を散りばめた笑みを見せた。

「今、シャワーを浴びているところ。ようやく上妻君の死を吹っ切る準備段階に入れるみたい。本来の笑顔が戻ってホッとしてるわ。シャワーの後でこっちに来るから、優しくしてあげてね。上妻君関係の話題はしばらく厳禁。いい？」

「はい」

「あ、私、本山君のところにお昼を持っていくから、先に食べていて」

ジュースを卓袱台の上に並べ終えた設楽さんは、数種類のサンドイッチをお皿に取り分け、炭酸飲料を二本選び、両手に抱えて部屋を出ていった。

面倒見のいい人である。きっと、部活動でも頼れる先輩なのだろう。

「さあーて、朝飯は味噌汁しか口に入れてねえからな。気合い入れて食うぞ！」

威勢の良い叫び声と共に、中嶋君はジャージの袖を捲り上げ、大皿を覆っていたラップを剥がし、一番上に乗っかっていたサンドイッチを手を取って、大口を開けて囓りついた。くちやくちやと音を立てて咀嚼しながら、グレープ風味の炭酸飲料を選んでプルトップを引き開ける。お行儀は悪いけど、実に美味しそうに食べる男の子だ。彼の為に料理を作ったあげたくなる食べっぷりだった。

そんなヤンチャ小僧らいくなクラスメイトを、まるで出来の悪い弟を見守る兄のような目で見ていた真悟君は、五十嵐さんにマッシ

ユポテトを挟んだサンドイッチを勧められると、それを受け取って口へ運んだ。

わたしも早速サンドイッチに手を伸ばし、レタスのはみ出ている角の部分を囓った。

うん、美味しい。

ハム、レタス、チーズが挟んである。カラシの効いたマヨネーズのソースがアクセントになっていて、味に深みを与えている。これなら三個と言わず、五個、六個と食べてしまえそうだ。

みんな朝ご飯を食べていなかったようで、無言のままサンドイッチを食った。

「まだ私の分、残っているかしら？」

設楽さんが二分かけずに戻ってきた。

両手にお茶のセットとゴミ箱を持っているとところを見ると、食堂まで降りて、さっき洗いに出した湯飲みと急須、それと処理をしたゴミ箱をついでに取ってきてくれたらしい。本当に気の付く人である。

余程急いだのか、彼女はちょっと息を切らせていた。

食事の邪魔にならないように、部屋の隅にゴミ箱とお茶セットを置く。

その、まるで使用前みたいに汚れていない急須を見て、わたしの胸中に罪悪感が芽生えた。

「すいません、お手数を掛けさせちゃって」

それはこの部屋の物なのだから、わたしが洗うべきであり、捨てるべきであり、取ってくるべきなのだ。

その点について詫びると、設楽さんは眼鏡のフレームに手を添えて淡く微笑み、五十嵐さんの隣に座った。

「いいのよ。気にしないで。さっきキッチンで洗ったはいいいけど、持ち帰るのを忘れていたことに気付いたから、急いで取ってきたのよ。私のうっかりミスね」

そう優しくに言つて、設楽さんは一つ目のサンドイッチを手に取った。

わたしはオレンジジュースを一口飲んでから、二つ目のサンドイッチに手を伸ばした。

中嶋君は四つ目だ……。こらこら、がつつき過ぎだよ。

「中嶋君、いくら美味しいからって、食べ過ぎは駄目よ。他のみんなの分もあるし、緒方さんの分を残しておいてあげなきゃ」

「わかつてるって」

わたしの注意に短く答えつつも、二口で四つ目を完食。全然わかつていない。

「好きに食べさせてあげなさいな。足りなくなったら、また食堂へ取りに行けばいいわ」

そう言う五十嵐さんは、あまり食が進んでいなかった。心配そうな面持ちでドアの方をチラチラと見ている。

「みやび、遅いわね……。もうとくにシャワーを浴び終えているはずだわ。どうしたのかしら……。また上妻君のことを思い出して泣いていなきゃいいのだけど……」

「様子、見てきたらどう？」

設楽さんが口許を押さえながら言った。

コーラで咀嚼物を流し込んだ中嶋君も、同意するように数回頷く。「そうそう。心配するなら行ってこりゃいいじゃんよ。おまえらの分は残しといてやるからさ」

「……昨夜も注意したと思うけど、私をおまえ呼ばわりするのは止めなさい！ でも、そうね……。ちよつと行ってくるわ」

五十嵐さんは食べかけのサンドイッチを大皿の隅に置き、若干の急ぎ足で部屋を出ていった。

ぱたんとドアが閉まる。

中嶋君はジュースを片手にドアの方を見て、皮肉っぽい表情を浮かべた。

「日頃、能天気そうにしてる奴に限って心が脆いんだよな。和久井

とか緒方とかさ。あの来須美架だつて、一皮剥きや単なる臆病者かもしれないねえよ。そう言やあ、昨夜の肝試しの時も、俺に手を繋いでくれて泣きそうな顔で哀願してきやがったんだぜ。マジで。足下がおぼつかないから、とか言い訳してたけどよ。ありや、どう考えても……」

「きやああああ！」

中嶋君の声を掻き消してしまうくらいの凄まじい悲鳴が山荘内に響き渡った。

そして、それは、最悪にして最低の殺人劇が幕を開けたことを告げる警笛でもあった。

第四章 あ行+か"犯人"【1・来須美架】

けたたましい悲鳴が遠くから聞こえてきた。

その声音の性質、音量からして、何かに躓いて転倒した際の叫び声でもなければ、愚かな男にのしかかられた際の絶叫でもない。無論、悪戯や嬌声の類でもあるまい。今朝の西脇と同様に、人の死に関わった者が発する心からの悲鳴だ。

声の主は、五十嵐由利だろう。

発声場所は……二階のどこかだ。

食堂で昼食を摂っていた私と兄は、怪訝そうに顔を見合わせているだけで駆けつけようという素振りを見せない盆暗警官二名を半ば強制的に促し、断続的に発せられる悲鳴の出所を目指して二階へと急いだ。

悲鳴の発生源は《103号室》だった。

五十嵐由利は室内の隅っこに座り込み、呻き声とも泣き声とも悲鳴ともつかない嗚咽を漏らし、小刻みに震える人差し指でドアの開け放たれたシャワー室の中を指し示し、中にある何かを引ん剥いた目で凝視していた。

室内には五十嵐の他に、梅本と緒方と西脇を除いた全員の姿がある。悲鳴を聞いて即座に駆けつけたのだろう。

「どうしたどうした、デカイ声で喚きやがって。新しい死体でも発見したってのか？」

この絶対零度の冷気で凝固したかのような重苦しい空気から何も察しなかったのか、三田村拓磨が無神経なほど快活な調子でのたまひ、部屋の中央に集まっている和泉たちの下へ歩み寄った。

「三田村さん、春日野さん、シャワー室の中を見て下さい」

「んあ？ おう……………うぐわわあああ！ 何だこりゃ！ おい、こりゃ何だ？ 誰がやった？ んう、うぐうおえええええ！」

シャワー室を覗き込むや否や、三田村は悲鳴を上げて飛び退き、腹部を押さえて激しく嘔吐した。警官にあるまじき醜態だ。この男はおよそ事件解決の役には立つまい。無駄に騒いで捜査を混乱させる道化でしかない。

それに比べれば、春日野は随分マシである。みつともなく恥を晒す同僚の介抱を設楽に任せ、シャワー室の中を覗き込み、「こりや、有無を言わさぬ殺人だでな」と独り言を呟いただけで、大袈裟な反応を見せなかったのだ。年配だけに、過去に何度も無惨な死体を見てきているのだろう。彼は一通りシャワー室の中を調べると、己の出番を待つようにじつと廊下で佇んでいる兄を手招きした。

私は兄と一緒にシャワー室の前へ移動した。

そして、中を見る。

「……………」

狭い室内で緒方みやびが蹲っていた。体育座りをして眠っている風にも見えるが、完全に息絶えていた。床一面、血塗れた。なぜか彼女は、ボロボロのドライヤーを大事そうに抱え込んでいる。

兄は死体を一瞥するなり、顎に手を当てて首を傾げ、横目で春日野を睨んだ。

「春日野さん、死体とシャワー室の中を調べても宜しいですか？ 調査結果は写真を添えた報告書という形で提出するので、調査の許可をいただきたい」

「ああ……いや、これは子供の見ていいもんじゃねえですよ……」

「死体は見慣れています。勿論、同年代の女性の全裸死体を含めてです」

「そ、そうか。頼もしい言葉だでよ。そんなら、わしらの代わりに調査してくれて構わんでよ。でも、常に、わしの立ち会ひの下だな。そこんとは守ってくれんといかんで」

自分の立ち会い、という条件を付けて春日野は承諾した。

彼は昼食までの時間、上妻博之の死が殺人である可能性を兄から丁寧に説明され、我々来須兄妹の華々しい経歴を聞かされ、その真

偽を愛知県警に電話して確認していたので、自分が事件の調査を行うよりも兄に一任した方が無難だと判断したのだろう。

しかし、それはすなわち、兄の探偵行為を制限なしで認可したも同然だった。警察の代役として好き勝手に事件を捜査して良い、と認めてしまったのだ。もはや兄は、手綱を解かれた狂い馬のごとく、冷徹なまでに容赦なく、容疑者の感情に一切配慮せず、事件の解決のみを目指して全知全能を駆使するだろう。

私はそれをサポートさせられるはめになるのだ。鬱陶しくて迷惑で面倒臭いが、愛する者の為に自らの才能を発揮できることは光栄の極みだった。

「承知しています」

兄は慇懃無礼な会釈をし、一度部屋を出た。常備しているポラロイドカメラを取ってくるのだろう。

「保奈美、中嶋君と一緒に五十嵐さんをボクたちの部屋へ連れて帰りなさい。いいね？」

死体を前にしても和泉は全く動じず、愕然として棒立ちになっている藤森に命令した。そして、しゃがみ込んだままの体勢で硬直している五十嵐を抱え上げるように立たせ、藤森に預けておいて、場違いなほど優美な微笑を作った。

その笑顔は反則的なまでに効果があり、藤森と五十嵐の動揺を和らげるだけではなく、この私の鼓動をも速める効果をもたらした。恐るべし、和泉真悟。

「うん……わかった。真悟君は？」

「ボクはここに残って調査に立ち会うよ。事件に巻き込まれてしまった以上、安穩とお昼を食べてはいられない」

「うん」

「中嶋君、保奈美と五十嵐さんを頼むよ」

「おう！ 頼まれてやるぜ」

中嶋は険しい表情で無言のまま部屋の壁を睨んでいたが、和泉から指示を受けると、親指を立ててにやりと唇を歪め、部屋の隅で連

続嘔吐する三田村を介抱していた設楽と、腰抜けの雄鶏を真似るような不格好で室内を右往左往していた本山に声を掛けた。

「設楽さん、一緒に来なよ。本山もおたおたしてねえでついて来い。部屋を出るぞ」

「ええ」

「あ、うん」

みんな素直に従った。

五名の男女が《103号室》を出ていき、入れ替わるように兄が戻ってきた。その手には愛用のカメラが握られている。

まず兄は、シャワー室の中を含めた部屋の各所を連続して撮影した。連続とは言っても、ポラロイドカメラなので一回ずつ写真が出来るのを待たねばならず、作業は遅々として進まなかった。

三十分以上をかけて一通りの撮影を終了。

次に、兄は和泉と協力して、全裸で蹲っている緒方の死体をシャワー室から運び出し、卓袱台の上に寝かせ、全身を調べ始めた。

頭天边から足の爪先まで、余す所なく観察し、写真に収めていく。

私は春日野と共に後方から二人の作業を見守った。

これは私の手伝える作業ではない。

緒方みやびは、胸部から下腹部にかけて四ヶ所の刺し傷を、そして両手に無数の切り傷を負っていた。致命傷は、左脇腹の刺し傷と思われる。鋭利な刃物によって内臓を抉られていたのだ。手の傷は、刺されまいとして抵抗した際に負ったものだろう。手の平はスタスタで、右手の親指は半ば切断されていた。

調べ終えた死体は、押入から取り出した毛布で包み、部屋の隅に置かれた。上妻の死体と同様に寝袋に入れられ、一階の倉庫に安置されるのだ。

最後に兄はシャワー室の中を丹念に調べ、写真を撮った上で、血を綺麗に洗い流した。

「よし、現場検証はひとまず終了だ」

濡れた手を緒方の所有物と思われるバスタオルで拭いつつ、兄は晴れやかに笑った。

「さて、それでは、緒方みやびがいかにして殺害されたかを推考していこう」

そう言って兄はドアの前へ移動し、ドアをノックした。

そして、現場検証から得た情報を基にしてすらすらと語り始めた。「緒方みやびは、シャワーを浴び終えて髪を乾かしていたところ、何者かの訪問を受けた。そして、ドアを開けて室内へと招き入れた直後に、刃物で刺されて深い傷を負った」

そう言いながら兄は部屋の中央へ歩み、あちこちの畳に付着している小さな血痕を指し示す。

「彼女は瀕死の傷を負いつつも、なんとか逃げ延びようとして激しく抵抗したが、ドライヤーでは対抗できない」

兄は、死体を包んだ毛布の上に置いておいたドライヤーを手に持って、私たちに見せた。

そのドライヤーは傷だらけだった。確かに、緒方はそれで抵抗したのだろう。しかし、刃物を防ぐ盾としては用をなさなかったようだ。

「次第に追い詰められ、逃げ場を失った彼女は、最後の砦としてシャワー室を選択し、籠城を試みた」

ドライヤーを持ったままシャワー室の前まで移動した兄は、シャワー室のドアを開け放ち、内鍵を指し示す。

「内鍵はさして頑丈ではない。強引に引つ張れば誰にでも破壊できる物だ。ゆえに、籠城は失敗し、緒方みやびはとどめを刺されて死亡した。そう見て間違いない」

そう話を結び、兄は手にしていたドライヤーを卓袱台の上に置いた。

「遺留品らしき物は見当たらんでよ。凶器は犯人が持ち去ったつちゆうことだでな」

春日野は、卓袱台の下やら押入の中やらを覗き込む、という無意味な作業に勤しみながら言った。一応、自分も捜査に参加しているのだ、という実感が欲しいのだろう。大人の愚かしい面子である。

兄は冷厳なる眼光で一睨みするが、警察の人間を不快にさせては捜査に支障を来す恐れがあるので、すぐに作り笑顔で応じた。

「もし凶器が発見されたとしても、犯人の指紋は出てきませんよ」「なぜかの？」

それを即座に聞き返している時点で、この男の出世は絶望的だとわかる。定年まで交番の駐在員だ。絶対に第一線の刑事にはなれない。頭の良し悪しに関係なく、まず自らの頭で答えを導き出そうと努力すべきなのだ。

「シャワー室内の残り熱から判断して、緒方みやびはつい今しがた殺害されたようです。そして、死体の損傷具合から見て、犯人は多量ではないにしても返り血を浴びているはずだ。しかし、この部屋に集まった人間は、一人として返り血を浴びておらず、シャワーを浴びた形跡もなかった。つまり、犯人は返り血対策を身に施し、手袋が何かで指紋を残さないようにして犯行に及んだのです」

兄の親切な説明を受け、春日野は薄い頭髪を掻き混ぜて低く唸った。

「とすると、犯人は西脇園子かの？ さっき、彼女だけが姿を見せなんだですよ」

「有力な容疑者の一人ではありません」

「そう言うからには、犯人の目星はついてるんかの？」

「いえ。まだ緩い仮説を幾つか立てている段階です。しかし、容疑者から除外された人間はいます」

「それは誰かの？」

「緒方みやびに関わり合いのない男性全員です。つまり、和泉君、俺、春日野さん、三田村さんの四名です」

「理由は何かの？」

また春日野は自分の頭で考えずに質問した。

きつと、自らの無能を晒して侮蔑されることを厭わない人間なのだ。私であれば、発熱するまで自分の脳味噌をフル回転させるだろう。他者より知能で劣る自分など許容不可能である。たとえば兄が比較対象であつたとしても、だ。

「緒方さんは全裸で殺害されていました。犯人が部屋を訪れた時はバスタオルに身を包んで応対したようですが、昨日今日に初めて会つた男性が相手であつた場合、そのような無防備を晒すわけがありません」

「うむ、なるほどのう……」

春日野はポケットから警察手帳を取り出して忙しく捲り返し、目的のページで指を止め、目を細めて覗き込む。

「ならば、中嶋剛志、本山純太、梅本春樹の三名が容疑者から除外されなかつた理由は何かの？」

「中嶋、本山の両名は、昨夜の飲み会において被害者と親密な関係を結んだ可能性が僅かにあります。梅本は既に被害者と面識があつたので、親密な関係を疑うことができます」

「うーむ、なるほどのう。裏を返せば、犠牲者が裸を見られても恥ずかしくないと思えた人間が容疑者というわけだで」

「その通りです」

「それ以上は容疑者を絞れんかの？」

「難しいですね。しかし、これから全員に事情聴取を行います。そこから得た情報を分析した上で容疑者を絞り込んでみせますよ」

「うむ。頼りにしとるでよ」

すると、突然、兄が顔を強張らせた。

その視線の先には、笑みを浮かべる和泉真悟の姿。まるで嘲笑するような表情で、兄を道化視する軽侮の目で、無言の批判をし、酷評している。それを察することができた。

「和泉君、異論があるのか？」

僅かに顔を紅潮させ、兄は微細に震える声で問うた。

無敗を誇る愛知の名探偵が、屈辱感に苛まれている。劣等感に心

を犯されている。信じられない。信じたくない。私が心身と共に人生すら捧げた兄を……。

兄は瞬時に心を矯正し、状態を正常値へと戻した。そして、和泉の答えを持つ。

「……………」

和泉は無言で肩を竦めた。

その表情に不遜な嘲笑は微塵もない。ただ微笑んでいるだけだ。

彼は、私たちを手招きしてシャワー室の前に呼び寄せた。

「シャワー室に何か有力な手がかりが隠されているとでも言うのか？」

「はい。これを見て下さい」

和泉は穏やかに応じ、シャワー室の中に備え付けられている姿見を指差した。

「その鏡が何だつて言うんかの？」

苛立ちを湛えた春日野の問い。

「よく見て下さい」

「……………」

私たちは顔を寄せ合つて鏡を観察した。そして、気付いた。微かに汚れている。

石鹸水かシャンプー液が薄く擦り付けられている。

文字が書かれている……のか？

ダイニングメッセージ？

「わかりましたか？」

「ああ。不明瞭だが数文字、書かれているようだな。これは……平仮名か？」

兄は目を凝らし、鏡に書かれた文字を判読しようと試みた。それを和泉が制した。

「なぜ緒方さんは死してまで後生大事にドライヤーを抱えていたのでしょうか？」

その言葉に、兄は即座に反応した。卓袱台の上に置いてあったド

ライターを取ってきて、コンセントに差し込み、電源を入れて熱風を鏡に吹きつける。

見る見るうちに浮かび上がる文字。

そこには、平仮名で《あいうえおか》と書かれていた。

【2・来須美架】

あいうえおか。

あ行＋か。

緒方は何を訴えたかったのだろう。

「あいうえおか？　どういう意味なのかの？　わけがわからんではないか」

「まだ俺にも意味は理解できないが、これがダイイングメッセージであることは間違いないようです。ほんの微かにではあるが、文字の中に血液が混入している」

そう言って苦く嘆息する兄。

「真悟君って眼鏡っ子なのに、こんな薄くて見づらい文字、よく発見できたねっ。感心しちゃうんだよっ！」

私が腕を抱え込んで褒め称えようと、和泉は眼鏡のレンズを指で弾いた。そして、唇を私の耳に近づけて声を潜めた。

「これは伊達だ。ボクは視力に難があって眼鏡を着用しているわけではないよ」

「えっ？　じゃあ、どうして……」

「理由は、奇抜な言動で道化者を演じているキミと同じだ。社会生活に適合し得ない人格を強制的に矯正する為のアイテムとして着用しているんだよ」

この男、私の人間性を見切っている？

この私が見極められたというのか？

「……な、何を言ってるのかなっ！」

「弱い自分を偽る為に、人は表層を華美に飾り立てる。しかし、自分の強さを偽る為に表層を嘘で塗り固める者もいる。後者はボクやキミだ。そして、前者はキミのお兄さんだよ」

この男、兄をも見極めている……。

「真悟君、それって……」

「恋人をバラバラに切り刻まれた過去を持つ心弱い少年が、美少女の死体を目の当たりにして、辛い記憶を呼び起こされ、錯乱するあまりに意味不明な戯言を口走っただけだ。聞き流してくれていい」
そう言って和泉は、私の頭を優しい手つきで撫でた。

「……………」

刹那、恐怖に似た何かが背筋を走った。

「和泉君、妹とイチャつくのは後にしろ。事情聴取に行くぞ」
兄の鋭い声。

「お兄さんが呼んでいるよ。さあ、ボクたちも事情聴取に同行しよう」

私たちを促して部屋を出ていく兄と春日野に、和泉は穏やかな微笑み顔で頷きかけ、いきなり私の尻を揉み込むように掴んだ。

「きゃわっ！ わわわっ！ な、なにっ？」

「保奈美の方が触り心地が良いね」

思わず本域で悲鳴を上げてしまった私の反応を見て、和泉は喉で笑いながら尻揉みを続行した。

彼の表情からは窺い知れなかったが、頻繁に抱きつかれて鬱憤が堪り、苛々していたのかもしれない。この尻撚りは、警告含みの仕返しだと思われた。

「ちよっ……何してんのっ、真悟君はっ！」

必死に動揺を押し殺して冷静さを保ち、私は和泉の体を突き放すようにして、尻を玩弄する手を振り払った。

「おや、スキンシップは嫌いなのかな？」

「観賞は自由だけど、お触りは厳禁なのっ！ ペナルティとして、過去の事件のことを話してもらっからねっ！」

「過去の事件？ どの事件について聞きたいのかな？ 春先の事件については渦海恭子の報告書を取り寄せて読んだようだし、中嶋君からも話を聞いているんだろう？」

「あうっ、バレてる？」

「いや、咄嗟にカマをかけたんだよ」

「あうーっ！ それ、反則だよっ！」

私は腰に手を当てて前屈みになり、上目遣いに睨み付けた。

穏やかに微笑む和泉。

「反則？ 可笑しいね。セクハラに対するお詫びとして、キミたちの知り得ない情報をボクが自ら話してあげようと言っているのだよ。それなのに、反則なのかな？」

「……………」

自ら過去の悲惨な体験を語ろうと言い出した和泉に、私は一瞬、《天才美少女探偵》というキャラの保全を忘れそうになった。

「ほんとにつ？」

セクハラ警告など無視して和泉に抱きつき、顔を覗き込んで確認する。

和泉は他愛ない感じに頷いた。

「ボクは嘘を吐かない。キミの知りたい情報を聞かせてあげよう。

けれど、質問は一つだけだ。何もかもを聞かせる代償として、キミのお尻は貧弱すぎる」

「あうーっ」

我の幼児体型に呪いあれ。

「それで、ご希望の事件は何か？ いや、どの犠牲者について聞きたいんだい？」

「えっと……………」

私は脳味噌をフル稼働させた。

和泉真悟に係る情報は全部知りたい。兄の為に全ての真相を聞き出したい。だが、許された質問は、たった一つだけ。

では、どれを選ぶ？

彼が関わった最初の事件と目され、諏訪原沙理という少女が犠牲となったバラバラ殺人事件についてか？

それとも、三人目の恋人と思われる梶浦京香が双子の殺人犯に惨

殺された事件についてか？

いや、この際、恋人関係は置いておいて、警察関係者の間で語り草になっている《御厨邸事件》について訊いてみようか？

これは相当に悩む選択だ……。

しかし、あえて一つを選ぶのならば、捜査資料を入手して事件の表側を知り得ている、鷹峰つばさが巻き込まれた事件だろう。

事件の真相は、表裏の情報が一体となって初めて明らかになるのだ。もし彼が故意に事実を偽ろうとしても、その事件は様々な不幸を派生させたらしいので、真実と虚実の辻褄を合わせるのは至難の業であるはずだ。

よし、決めた。

「鷹峰つばさの事件について教えて欲しいんだよっ！」

「なるほど、無難な選択だ」

拒否せず、和泉はにっこりと微笑んだ。

「二人とも何をしている！ さっさと来ないと、我々だけで事情聴取を始めてしまうぞ」

廊下から兄の苛立った声が飛んできた。

「はあーいっ」

そう返事をしておいて、和泉を睨む。

「ほらっ、怒られちゃったじゃんかっ！」

「話は事情聴取の後だね。さあ、行こう」

退室を促すように尻を軽く叩かれた。

私たちは事情聴取をする前に、緒方の死体を寝袋に詰め込んで倉庫の中へと運び入れ、上妻の詰め込まれている寝袋の隣に並べて置いた。

その作業を行ったのは役立たずの警官二名である。

そして、《103号室》の再検証と掃除はゾンビ状態の三田村に任せ、私、兄、和泉、春日野の四名で管理人室を訪問した。
トントン。

ドアをノックする。

「入りまーすう！」

「はあい。入って下さいな」

西脇の軽快な返事が聞こえてきた。

能天気ぶっている私に他人を批判する権利などないが、多少なりとも状況を考慮するべきではないかと思う。彼女は分別ある大人なのだから。

いや、そうではないか。西脇はまだ緒方の死を知らされていないし、上妻の死を事故と認識しているのだ。だから、一人で暢気に構えていられるに違いない。

兄がドアを開けた。

「あら、春日野さんと来須兄妹じゃない。それに、和泉君まで揃って、どうしたの？ さあ、入って頂戴な」

西脇は、手に持っていた報告書らしき紙切れをデスクの引き出しにしまい、笑顔の花を咲かせた。

陰のない表情だ。根っから明るい性格なのだろう。だがしかし、二日酔い状態での管理組合とのやり取りと報告書の作成で若干の疲れが見えた。

私たちはそろそろと室内に入った。

「ほらほら、気難しい顔して突っ立ってないで座りなさいな」

ソファを勧められ、私は和泉の腕を引っ張り、尻がくつつくくらの近い位置に並んで座った。

兄と春日野は立ったままである。

「お忙しいところ申し訳ないが、新たな事件が発生したので、報告と事情聴取を兼ねてここを訪れました」

そう兄に告げられると、西脇は眉をひそめ、デスクの回転椅子から腰を浮かせた。

「事件……って？ また事故なの？」

「いいや、違うですよ。殺人事件なんだで」

「殺人……って、誰が？」

「緒方みやびだだよ」

「うそつ、緒方さんが？ 冗談でしょ？」

「事実です。彼女の死体は、上妻と同様に倉庫へと運び入れておきました」

西脇に半笑いで確認され、兄は冷厳と肯定した。

そして、現在の我々がおかれている状況を簡潔に説明する。

「緒方みやびは自室で刺殺されていました。その上、今朝方に発見された上妻博之も、検証の結果、殺害されたと見て間違いありません。これは、偶然の事故や突発的殺人ではなく、何者かが周到に計画した連続殺人事件だと思われます」

「連続殺人事件？ そんな…… 報告書を書き直さなくちゃなんないじゃない……」

西脇は呆然と呟いた。

嘆く部分が間違っている。突然の報告で錯乱したか？

「ちゆうわけで、おぬしの事情聴取をしに来たんだでよ。組合への報告は後回しにして、我々の質問に答えてくれんかの」

「…… ええ、わかりました」

西脇は浮かせかけた腰を椅子に降ろし、小太りな身体を丸めるように両肘をデスクについた。人懐っこい丸顔が陰しく歪んでいる。

春日野は警察手帳を取り出すと、兄の脇腹を小突いて、事情聴取を始めるように促した。実質的な捜査は全て兄に丸投げし、結果のみを自分の手柄にするつもりなのだろう。大したお人だ。

事情聴取役を一任された兄は、右手を顎に添えてその肘を左手で支える、という定番のポーズを作り、西脇を睨み付けた。

「第一の質問です。上妻博之の死に關しての事情聴取を受けた後、貴女はどこで何をしていましたか？」

「私は…… あの後、朝食の後片付けをして昼食の準備をしたわ。そして、警察のお二人に部屋を用意して…… それからは、この管理入室ですと組合の人間と話していたわよ。一度も部屋を出ていないし、その間は誰もここを訪れなかったわね」

「それを証明できますか？」

「ええ、簡単よ。キッチンにいた時は警察のお二人がずっと一緒だったし、お二人を部屋に案内した後のことは、組合に電話してみれば一発で証明できるから」

西脇は黒電話を指し示して、自信満々に言い切った。

自分のアリバイを完璧に証明できる用意があるのだろう。

結構なことだ。容疑者は少なければ少ないほど犯人を絞り込みやすくなるのだから。

「そうですか」

なぜかアリバイの真偽を確認せず、兄は次の質問に移った。

「第二の質問です。キッチンから刃物が紛失していませんでしたか？」

「刃物？ いえ、何もなくなっていないと思うわよ。まあ、後で調べてみるけど……」

心許なげに言う西脇。

「そうですか。その確認については、早急にお願いします。それでは、第三の質問です。上妻博之もしくは緒方みやびに恨みを持つ者に心当たりはありますか？」

「ないわね」

過去のイベントを思い起こそうとするような姿を少しだけ見せ、

西脇は簡単に答えた。

「それならば、最後の質問です。《あいうえおか》という平仮名の六文字に心当たりはありませんか？」

「え？ なに？ もう一度言って頂戴な」

西脇は眉を寄せて聞き返した。

「あいうえおか、です。《あ行》の五文字に、《か》の一文字を加えた平仮名六文字です。その意味がわかりますか？」

「あいうえおか？ 何それ？ 何かの呪文？ おまじない？ そう
いうの私、ちんぷんかんぷんなのよね」

「そうですか。わからなければいいです」

兄は、顎から手を離して、質問を終了させた。

「お忙しいところをお邪魔だとして申し訳ありません。それでは失礼します」

礼儀は正しいが、形だけのお詫び。

事件に取り組んでいる時の兄は、相手の心情に殆ど配慮しない冷徹な謎解きマシーンと化すのだ。

「次は和泉君の部屋だ」

踵を返す兄に従い、私と和泉も立ち上がる。

春日野もそれに倣おうとし、何かを思い出したように西脇を振り返った。

「あーそうそう、西脇さん。この山荘で発生した事故が実は殺人事件で、しかも二人目の犠牲者が出てしまったことを長野県警に訂正して報告して欲しいんだですよ。いいかの？」

「いいですよ」

西脇は快く承って、黒電話に手を掛け、受話器を外して耳に当てた。

だが。

「あれ……？」

西脇は怪訝な声を上げ、ボタンを忙しくプッシュする。

カチカチ。

カチカチッ。

カチカチガチガチガチッ！

電話を乱暴に叩く音。

「あれ、おかしいな……」

その不審な声を聞き咎め、廊下に出かかっていた兄が戻ってきた。
「西脇さん、どうしました？」

「なんか、電話、壊れちゃったみたい。受話器から通話音が聞こえないどころか、ツーともカーとも反応しないのよ」

「……壊れた？ つい今しがた使用していたのでしょうか？」

「あ、いえ、それは……」

西脇は苦渋の表情で口ごもった。

「組合の人と話をしていたのではないのですか？　それが証明できないとなると、貴女の証言を疑わざるを得ませんよ」

「……………」

唇を強く噛み締める西脇園子。

「どうやら、先程の証言に偽りがあつたようだ。」

「組合の人と話をしていなかったのですか？　本当のことを仰って下さい」

「……組合への報告は十分くらいで済んだわよ。その後は、報告書の作成をしていたわ。でも、この部屋から一步も出てないし、誰も来なかったのは本当よ！」

西脇は、声量と眼力で押し切るように言った。

「それを証明してくれる人間がいなかったので、先程は嘘を吐いたのですね？」

「ええ……ごめんなさい」

兄は鼻から荒く息を吹き、西脇を険しい眼光で刺した。

しかし、叱責せずに、電話の状態を確かめている和泉に近寄った。
「電話機自体に何か細工されたのか？」

「いえ。外の電話線が断線しているようです。およそ、暴風雨の影響で断線してしまったか、もしくは緒方みやびを殺害する過程で犯人が切断したかのどちらかでしょう」

「和泉君、直せるか？」

「犯人の仕業であれば、電話線は修復不可能な状態でしょう。暴風雨が原因であれば、修復できる可能性もありますが、専門の知識を持たないボクには無理ですね」

「そうか。西脇さんは直せますか？」

「そんな器用なことできないわよ」

「わしらも無理だよ」

誰も盆暗警官には期待していない。

「そうですね。そうになると、二階にいる連中の中に専門的な技術を

持っている者がいるとは到底思えないから、俺たちは外部との連絡手段を完全に失ったことになるな……」

完全な無表情と深刻な口調とは裏腹に、兄の内心は感動と興奮に沸き立っている状態だろう。これは、探偵行為でしか達成感を得られない兄にとつて願ってもない展開なのだ。上妻の死を軽めの朝食と喻えるならば、緒方が殺害された後の展開は、垂涎してしまうほどの豪華ディナーが用意されていたようなものである。

無論、私にとっては迷惑極まりない展開なのだが……。兄の為に嬉々として叫ばねばなるまい。

「これで、完全に陸の孤島だねっ！」

電話線を辿って窓から外の様子を眺めている和泉の背中に抱きつき、無神経な歓声を上げてみせた。

「こらこら、お嬢ちゃん、冗談言ってる場合じゃねえだよ。むしろ、救助の見込めない山荘の中で殺人犯と一緒に一夜を明かさんといかんのだで」

「下手すると、皆殺しかなっ？」

「縁起でもねえだよ」

春日野は細目を吊り上げて吐き捨てたが、私の戯言に応じられる余裕がまだあるようだ。

回転椅子に手を掛けて起立と着席を無意味に繰り返す西脇とは大違いだった。

「最悪の事態を回避する為にも、早い段階で犯人を特定しなければならぬ。さあ、事情聴取をしに行こう」

「おぬしは冷静だで、頼もしいぞい」

「そうでもありません。リアルタイムで殺人事件に遭遇するのは初めてなので、若干気分が昂揚しています」

「おいおい、十路君、それじゃ話が違うでよ。君は幾つもの難事件を解決した名探偵でないのかの？ 愛知県警が嘘を吐いたんかの？」

「それは事実です。しかし、殺人事件に巻き込まれた経験はありません」

「殺人事件を初体験だねっ！ きゃっ、美架ちゃん恥ずかしいっ！」
おふざけはともかく、我々兄妹が解決してきた事件は、全ての事件の捜査に行き詰まった県警の刑事が持ち込んだものであり、どれ一つとして身内に関わるものではなく、我々の身に危険が生じるものではなかった。それゆえに、精神的に追い詰められた経験はない。警察権力の傘に守られながら、事件解決の責務も課されず、推理のみに明け暮れるだけで良かったのだ。いわば、謎解き遊びの延長線上に事件の捜査があったわけである。

しかし、今回は違う。

まさに、今、我々は現在進行形で凶悪な連続殺人事件に巻き込まれている。謎解き狂いの名探偵が昂揚感に満たされるのも無理ないだろう。実際、冷静に対処できているのは、私と和泉だけと言っていい。

「真悟君は何度目かなっ？ 七度目っ？」

「いいや、ボクはじゅ……」

「ねえ、ちよっと、私はどうすればいいの？ 殺人事件と聞かされちゃ、怖くて一人じゃられないじゃないの」

西脇が会話の終了を待ちきれずに口を挟んだ。そして、回転椅子を後ろの壁にぶつける勢いで押し退け、デスクを迂回して兄に詰め寄った。

「心細いのであれば、一緒に二階へ行きますか？ その辺は好きになさって下さい」

兄は素っ気なく答えた。

鼻白む西脇。

私たちは管理人室を出て、まず食堂へ移動した。

【3・来須美架】

私たちは食堂へと移動した。

緒方みやびの刺殺に用いられた凶器がキッチンの備品だったか否かを確かめる為である。

キッチンに入った西脇は、私たちを食堂の中央で待たせておいて十分ほど丹念に調べた。そして、何種類もの刃物が収められているナイフホルダーを持ってきて見せた。

果物ナイフから刺身包丁まで一通り揃っている。

「キッチンの刃物はここに全部揃ってるわね。何もなくなっていないわよ」

「そうになると、凶器は犯人によって持ち込まれたことになるでな。さつそく全員の持ち物検査をしなけりゃならんでよ」

勇んで叫ぶ盆暗警官。

言われずとも、兄は死者を含む全員の荷物検査を行うだろうし、同時に各部屋を調べ尽くすだろう。

「倉庫に保管されている登山道具の中に、人間を殺傷できる物はありましたか？」

和泉が訊ねた。

良い質問である。

我々は登山道具に疎いので、その中に人間を刺殺できる鋭利な刃状の物がないかを専門家に訊いてみる必要があるのだ。西脇にどの程度の知識が備わっているかはわからないが……。

「あるけど、全部埃を被ってるわよ」

「調べてみましょう」

和泉の提案に従い、私たちは食堂を出て再び倉庫に入った。

入り口から見て正面の壁際に横たえられた二つの寝袋。

その中身は高校生の死体だ。ちゃんとビニールシートで包まれているので異臭は気にならないが、肌で感じる空気の悪さは死体安置

所の比ではない。恐怖体験豊富な鈍感人間でもなければ、十秒として留まってられる雰囲気ではなかった。

西脇は一步倉庫に踏み込んで、鼻と口を手の平で覆い、回れ右をした。

春日野は入るのを躊躇した。

兄と和泉は抵抗感を微塵も感じさせない面持ちで、トイレにでも入る気軽さで奥へと入っていった。

私も彼らの後に続く。

倉庫の奥は埃と蜘蛛の巣だらけであり、足下は一面灰色だった。まるで誰にも蹂躪されていない冬のゲレンデだ。

「ここに保管されていた登山道具が凶器として使用された形跡はありませんね。西脇さんの仰られた通り、どれも埃を被っている」

「それどころか、最近倉庫の奥に人間が入っていないようだ。床一面が埃まみれだ」

「登山道具も持ち出されていないとなれば、凶器は犯人の持ち込んだ物が使用されたと断定していいでしょうね」

「そうだな。つまり、緒方みやびは計画的に殺害されたということになる」

「そうですね」

和泉と兄は頷き合った。

見解が一致したようだ。

無論、私も同意見である。

上妻殺しと緒方殺しは、同一人物の犯行である可能性が極めて高い。

私たちは倉庫を後にし、螺旋階段を上がって二階へと移動し、和泉と藤森が使用している《107号室》を訪れた。

和泉が律儀にノックをしてからドアを開けると、中から女のすすり泣く声が漏れてきた。

幼なじみを惨殺された五十嵐が悲嘆に暮れているのだろう。

部屋には、布団の上でうつ伏せになって泣いている五十嵐、その枕元に正座して彼女を介抱している藤森、そんな二人を遠巻きに眺めるだけの中嶋と本山の男二人、その四名しかいなかった。

部屋の中央で存在感を示す卓袱台の周りには誰もいない。

自室で安静にしている梅本はともかく、三田村と設楽の姿がないのはどうしてだろう。何かの理由で《101号室》か《108号室》へと移動したのだろうか。

その点を兄が問い質した。

「設楽さんと三田村さんの姿が見えないが、どうしたんだ？」

「三田村さんは《103号室》の掃除をした後、しばらくこの部屋にいたけどよ、五十嵐さんの泣き声が耳障りだ、とか言って自分の部屋に戻っちまったぜ」

窓際に座椅子を移動させて座っている中嶋が陰気な低音声で答えた。そこに昨夜の弾けっぷりは見る影もない。

「設楽さんは？」

「三田村さんにゲロの後始末とか《103号室》の掃除を手伝わされてたから、今も一緒にいるんじゃないかな」

「そうか。単独行動をしているのでなければ問題ない。梅本君の様子はどうだ？」

「さあな。俺は今朝の騒ぎで奴を取り押さえて部屋に押し込めたつきり一度も会ってねえから知らねえぞ。本山は知ってるか？」

訊かれた本山は、陰鬱な表情で彩られた顔を左右に振った。

「お薬を飲ませてるから、梅本君は眠っていると思うわよ」

西脇が答えた。

「精神安定剤ですか？」

「睡眠薬よ。効き目が強いから、夕方くらいまでは目を覚まさないでしょうね」

「そうですか。本当に眠っているのであれば問題ないが……。後で様子を見てこよう」

「私が見て来てあげようか？」

西脇が申し出ると、兄は手の平を向けて待ったをかけた。

「誰が犯人かわからない現状での単独行動は危険です。部屋で待機
していて下さい」

「んじゃあ、私が真悟君と一緒にラブラブなデートって感じで様子
を見に行くっ！」

私は万歳して元気良く叫び、和泉の腕を抱え込んで藤森に対して
ピース。

憤慨して立ち上がりかける藤森。

だが、私が兄に頭をはたかれると、溜飲を下げたのか正座をし直
した。

「和泉君は俺と共に事情聴取をしなければならない。おまえもだ、
美架」

「ちえーっ」

「それでは、まず、中嶋君から事情聴取をしよう。すまないが廊下
に出てくれ」

「廊下で？ 部屋中でやりやいいじゃんよ。俺は他人に聞かれて
困ることなんてねえし」

「そういう問題ではない。もしもこの中に犯人がいる場合、君の話
に倣って証言を偽る可能性がある。いや、犯人でなくとも、アリバ
イがない者がつつい保身の為に話を合わせてしまう可能性もある
のだ。それに、俺たちが廊下を監視することで、第三の殺人を防ぐ
効果も見込めるだろう」

兄が廊下に出て手招きすると、中嶋は仕方なさそうに座椅子から
身を起こし、のそのそと部屋を出ていった。

春日野が後に続く。

私と和泉も廊下に出て、ドアを閉めた。

廊下に出ると、中嶋は嫌そうに促した。

「何でも訊いてくれや」

「宜しい。第一の質問だ。君は我々兄妹と一緒に朝食を摂った後、

どこで誰と何時頃まで何をしていた？」

「朝飯を食った後か……」

中嶋は壁に背中をつけて腕組みをし、斜め四十五度に首を傾けた。「あの後、俺は二階に上がってすぐ、本山の部屋から出てきた設楽さんに、暇だったら和泉たちの部屋で楽しくお喋りでもしようぜ、って声を掛けたんだ。それで、彼女がオッケーしてくれたから、この《107号室》を訪問したんだよ。それから、五十嵐さんの悲鳴を聞くまでずっと和泉たちと話をした。その間は、部屋から出てねえよ」

「ふむ。二階に上がってすぐ、という表現に若干の自己保身を感じるが……まあいいだろう。第二の質問だ。その間、《107号室》に出入りした人間はいたか？」

「勿論、いたに決まってる。設楽さんが昼飯を取りに食堂へと降りていったし、サンドイッチを持って戻ってきた時には五十嵐さんが一緒だった。それで、すぐに、設楽さんが本山の分を届けるとか言って部屋を出ていったっけな。まあ、すぐに戻ってきたけどよ。その後、五十嵐さんが緒方さん呼びに行って、死体発見ってことになったわけさ」

「設楽さんが食堂に行くと言って部屋を出てから、五十嵐さんを伴って戻ってくるまでの正確な所要時間はわかるか？」

「そんなのわかんねえよ」

「和泉君は？」

訊かれて、和泉は肩を竦めた。

「いいえ、残念ながら。時計を気にしていませんでした。十数分程度だとは思いますが、正確にはわかりかねます」

「そうか。それならば、設楽さんが本山君の部屋に昼食を届けると言って部屋を出てから、戻ってくるまでの所要時間はわかるか？」

「二分くらいだと思うぜ。なあ、和泉？」

「そうだね。彼女はごくごく短い時間で戻ってきた」

「そうか。それでは、緒方さんと親密な関係にあると言える人間に

心当たりはあるか？」

「そりや上妻さんだろ」

「他には？ 本山君や梅本君はどうだ？」

「本山は俺と同じで、設楽さん狙いだ。梅本さんは……女に嫌われ
てるから問題外だと思うぜ」

「そうか。それでは最後の質問だ。《あいうえおか》という平仮名
の六文字に心当たりはあるか？」

「はあ？ あいうえおか？ 何だそりや？」

「ダイイングメッセージだよっ！」

死に際に緒方がシャワー室の中にある鏡に残した文字であること
を私が教えると、中嶋は嫌悪に近い表情を浮かべて舌打ちした。

「そんなもんを俺に訊いてどうするよ。和泉に解かせりゃいいじゃ
ねえか。和泉、おまえの得意分野だろ」

「……………」

今は和泉の見解を引き出す時ではない。

中嶋がメッセージの意味を知っているか、もしくは解けるかどう
かを問うているのだ。

だからこそ、和泉は微笑んで肩を竦めるだけだ。

「わからないか？」

「俺にわかるわけねえよ」

「宜しい。君への事情聴取は終わりだ。部屋に戻って、本山君の番
だと告げてくれ」

「おう」

最後の質問が小さくない苛立ちを誘発したのか、中嶋は不愉快な
表情で部屋に入ってしまった。

それと入れ替わるように、本山が廊下に出てきた。

「僕は人殺しなんかじゃないよ！」

ドアが閉まるなり、本山は悲鳴じみた声で叫んだ。

童顔は真っ青に染まり、唇は戦慄き、どうにか直立しているが手
足は震え、拳を握り締めて泣きそうな目で兄を睨んでいる。まるで

叱られた子犬だ。演技をしている風には見えない。昨夜から感じていたが、この少年は一般の男子高校生と比較して心が酷く弱い。脆弱だ。吹けば飛び、殴れば吹っ飛ぶ。殺人を犯しても罪悪感に苛まれて自殺する。そういうタイプの人間だ。

しかし、兄は弱者相手にも手加減をしない。

「君が殺人犯であるか否かを判断するのは、全員の証言を聞いてからだ。今、君が必死に訴えたところで判断の材料にはならない」

「そうだよ。最終判断を下すのは我々警察だでな」

春日野が相槌を打った。

「そんな……」

本山は情けない溜め息を吐いた。

「それでは第一の質問だ。事情聴取の後、君はどこで何をしていた？」

「自分の部屋でラジオを聴いてましたよ。上妻さんのことがニュースで流れると思ったから」

「その間、一度も部屋を出なかったのか？」

「ううん、一回だけ食堂に行ってジュースを貰ってきましたよ。その際に設楽先輩と廊下で会って、少しだけ話をしましたね。事故とは言え、警察に関わっちゃったことは学校に報告しなきゃならないと思ったから。だから、同じ学校の設楽先輩に相談してたんですよ。でも、電話は西脇さんが使ってるだろうから、報告は昼過ぎにすればいいってことになって、一緒にジュースを貰いに行っただす」

「なるほど、学校に報告か……。君は真面目な生徒なんだな」

兄はニヒルに笑み、話の続きを促す。

「ジュースを部屋に持ち帰った後は？」

「僕は、五十嵐さんの悲鳴が聞こえてくるまで、ずっとラジオを聴いてましたよ」

「設楽さんはどれくらい君の部屋に留まっていたんだ？」

「ほんの少しだけです。設楽先輩はジュースを運び終わると、すぐ

に部屋を出ていっちゃいましたから」

「君が自室でラジオを聴いていたことを証明してくれる者はいないんだな？」

「一度、設楽先輩と五十嵐さんが僕の様子を見に来ました。そして五十嵐さんの悲鳴を聞く少し前に、設楽先輩がサンドイッチとジュースを持ってきてくれましたよ」

「その瞬間だけか？ 他には？」

「それは……いないけど……。でも、ラジオの内容をちゃんと覚えてるから……」

「今それを確認する術が俺たちにはない以上、証言を信じるわけにはいかない」

「そんな……」

自分のアリバイが皆無であると指摘され、本山は絶句した。大きな瞳に涙が盛り上がってくる。

大抵の人間はその様子を見て同情するのだろうが、私は全く心を動かされなかった。

無論、兄も。

和泉に至っては、実験動物を観察する冷酷な研究者の目で彼の表情を見ていた。

「それでは第二の質問だ。自室に籠もってラジオを聴いている間、部屋のドアは閉じていたか？」

それは良い質問である。

「え？ そんなの当然、閉じてましたよ」

自分が矛盾を生じさせているとも気付かず、本山は簡単に答えた。兄の笑みが凄味を増す。

「この山荘は防音がしっかりなされている。ドアがしっかりと閉まっていれば、室外で発生した多少の物音はドアに阻まれて室内には届かない。それは理解しているか？」

「……うん」

「君は五十嵐さんの悲鳴を聞いたんだな？」

「うん。凄い悲鳴だったから……」

「緒方さんの悲鳴は聞かなかったのに？」

「……………」

本山は言葉を失った。

「二人は同じ部屋で悲鳴を上げたのだぞ」

「それは……、緒方さんが悲鳴を上げなかったのかもしれないし……」

「犯人に襲われた時、緒方みやびは激しく抵抗したようだ。その際、助けを呼ばなかったとは到底思えない」

「……………」

泣き顔で黙る本山。

すると、和泉が穏やかに口を挟んだ。

「緒方さんの悲鳴が聞こえずに五十嵐さんの悲鳴だけが聞こえた理由は単純です。緒方さんが襲われた時は、『103号室』のドアが犯人によって閉められていたのです。そして、五十嵐さんが親友の死体を発見した時には、ドアが開いていた。そう考えれば、本山君の証言も納得できるではありませんか？」

私もその意見に賛成である。

「なるほど、和泉君の意見は正しい。しかし、それを証明できなければ意味はないぞ」

兄は横目で和泉を一瞥して言った。

和泉は、眼鏡の奥にかぎろぐ目を僅かに細め、薄い笑みを浮かべた。

「五十嵐さんの悲鳴を聞いて『103号室』に駆けつけた時、ドアは開いていましたよ。それに、ボクたちの『107号室』は『103号室』の真正面です。しかも自室のドアは閉まっていました。その条件で、五十嵐さんの悲鳴だけしか聞こえなかったのです」
なるほど。

より事件現場に近い位置にいた和泉たちが五十嵐の悲鳴しか聞かなかったのであれば、彼らより条件の悪い本山が緒方の悲鳴を耳に

できる道理がない。

本山は矛盾が解消されてホッと吐息し、援護してくれた和泉に感謝の泣き笑いを向けた。

兄は軽く頷いただけで、次の質問に移った。

「それでは第三の質問だ。《あいうえおか》という平仮名六文字に心当たりはあるか？」

「？」

少年の反応は鈍かった。

きょんとしている。

質問の意味すら理解できていない様子だ。

「わからないか？」

「うん……」

兄は顎に手を添えて三秒ほど思索し、本山に対する事情聴取を終了した。

【4・藤森保奈美】

本山君の事情聴取が終わったようだ。

彼は室内に戻るなり、卓袱台の前に座って、いつ淹れたかも定かではない冷めたお茶の入った湯飲みを鷺掴みにし、豪快に呷った。ごくごくと喉が鳴る。目がうるうる。手はふるふる。顔中が尋常でない量の汗で濡れ光り、前髪が額にへばりついていていた。物凄く動揺している。

過酷な事情聴取だったようだ。いったい何を質問されたのだろうか？ わたしの時は優しく尋問して欲しいものである。いや、それよりも、そのお茶、わたしの飲みかけでなければいいのだけど……。きつと次の事情聴取は、わたしの番だ。

そう思い、五十嵐さんの介抱を西脇さんに一時任せ、廊下に出ようとしたが、来須兄妹と春日野、そして真悟君まで部屋に入ってきた。

「さて、次は五十嵐さんだ。非常にプライベートな質問もするから、中嶋君と西脇さんは廊下に出ていて欲しい」

「おう。仕方ねえな」

憔悴しきって会話もままならない五十嵐さんを廊下に連れ出すのは不可能なので、彼女を除く事情聴取に関係ない人間を外に出そうというのだろう。

それを中嶋君は理解し、ごねずに部屋を出ていった。

西脇さんも従った。

わたしも部屋を出ていこうとしたのだけど、真悟君に止められた。「キミは出ていなくていいよ」

「そうだな。君は五十嵐さんの傍で精神的支えになってあげて欲しい。俺と和泉君は尋問する側なので威圧するばかりだ。まして美架は、彼女の心を支えるどころか支柱をへし折りかねない」

「ぶーっ！」

ブーイングする美架。五十嵐さんの心情など欠片ほども気遣わない騒々しさ。現状を把握しているとは到底思えない陽気さ。その言動からは、周囲の人間に対する配慮が一切窺えなかった。能天気な性格が、相手にどれほど深刻な影響を及ぼしているのかを理解しているのだろうか？ 理解しているわけないか……。

わたしは、五十嵐さんの枕元に腰を落ち着けた。

彼女が薄く瞼を開き、わたしの手を探って掴もうとしたので、安心させるように強く握り締めた。こんな状況では、誰でも心の支えが必要なのだ。気丈な彼女が病人のように伏せてしまふのだから、相当にシヨックだったのだろう。

きつと、緒方さんは単なる親友というだけでなく、幼なじみというだけでもなく、可愛い後輩というだけでもなく、一人の人間として掛け替えのない存在だったに違いない。

しかし、片翼はもがれた。今、彼女は羽ばたくことができない。だから、その代替翼としてわたしが選ばれたわけだ。できるだけ彼女の心を安らげるように上手く羽ばたきたいが、緒方さんの代わりは難しいような気が……。もしかしたら、キャラクター的には美架の方が適任なのではないか、と思っていたりする。いや、そんなわけない。今は、喧騒よりも安静が肝要なのだ。

ちなみに、わたしの支えは、言うまでもなく真悟君である。

「それでは事情聴取を始めよう。いいかな、五十嵐さん？」

「いいわ、何でも訊いて……。そして、みやびを殺した奴を見つけ出して。そいつを私がズタズタに引き裂いてやるわ！」

五十嵐さんは、戦慄く声で、齒軋り混じりに宣言した。

悲しみが怒りに転じて、更に憎悪へと昇華したようだ。良い兆候である。でも、わたしの手を犯人に見立てて、思いつき握り潰すのは止めて欲しい。

「その責任を自分で負う覚悟があるのなら、思うがまま復讐を果たせばいい」

そう素っ気なく言って、来須兄は事情聴取を開始した。

「第一の質問だ。今朝、事情聴取を終えた後、君はどこで誰と何をしていた？」

「上妻君の話を訊かれた後、みやびが泣き詰めだったから、部屋でずっと慰めてたわ。それに、私たち、二人とも二日酔いで体調最悪だったもの。部屋から出る気力なんてなかったわよ。でも、お昼になって、みやびが少し落ち着いた様子でお腹が空いたって言い出したから、あの子にシャワーを浴びさせておいて、その間に食堂へ行って軽い物を貰ってこようと思ったの。部屋を出たら設楽さんが梅本君の部屋の前に立ってたわ。食堂へ食べ物を取りに行くついでに彼の様子を見に来たそうよ。どうせお昼を食べるなら、みんなと一緒にの方が美味しいし、みやびも気が紛れると思ったから、私は一度部屋に戻って、シャワーを浴び終えたら《107号室》に来なさいてあの子に伝えたのよ。その時は、みやびはまだ生きてたの！死んでなかったの！あの子、はい、っていつもみたいにお気楽な感じで返事して……それで、それで……」

「五十嵐さん、落ち着いて話をして下さい」

感情を高ぶらせて喚く五十嵐さんを、真悟君が優しい声で宥めた。その効果は絶大だ。来須兄では、こうはいくまい。彼ら二人の声は同系統の清涼感を宿しているけど、傲慢で威圧的な声室の来須兄とは違い、真悟君の声には相手の心に静穏と平安を与える優しさが込められているのだ。

五十嵐さんは唇を噛んで、溢れ出す涙を腕で隠すようにし、しばらく小刻みな呼吸を繰り返していたが、真悟君に優しく促されると、腕をどかして僅かに微笑み、話を再開した。

「……私は、設楽さんと一緒に梅本君が眠っているのを確認して、純太君の部屋を少し覗いてから、食堂に下りたわ。二人でキッチンに入って、ジュースを選んだり、お茶の道具を洗ったり、ゴミ箱のゴミを捨てに行ったり、色々してからサンドイッチとジュースを二人で《107号室》に運んだのよ。その部分は知ってるでしょ？

十路君たち、警察の二人と食堂で話をしていたもの」

「そうなんかの？　わしはてんで気付かんかったでよ。十路君は気付いとったんかの？」

「勿論。五十嵐さんと設楽さんがキッチンで作業をしていたことは覚えています。約十分間……いや、二十分くらいだったか。上妻博之の死について夢中で解説していたので注視していなかったな。不覚にも記憶が定かではない。どうだ、美架？」

「設楽さんがゴミ出しとかしてたみたいだから、きっと二十分くらいだよーっ」

記憶力に自信があるのか、美架は明快に答えた。

でも、笑顔を作ってはいけないと思う。

「だそうだ。話を続けてくれ」

「……部屋に行つてすぐ、設楽さんはサンドイッチとジュースを持って純太君の部屋に行つたわ。そして、彼女が戻つてきて、少し喋つて、みやびがなかなか姿を見せないから様子を見に行つたら……、そしたら……そしたら……」

そこまですなとか話し終えると、五十嵐さんは再び顔を隠して、しゃくり上げ始めた。

来須兄は顎に手を添え、それを逆の手で支えるポーズを作つて、一つ頷いた。

「よくわかつた。それでは次に、その証言について質問していくが、いいかな？」

「いいわ」

震える声。

でも、五十嵐さんはハッキリと返事をした。

「宜しい。まずは、部屋から出る際、ドアに鍵を掛けたかどうかだ。施錠したか？」

「当然だわ。みやびがシャワーを浴びていたのよ。男の子が無断で入ってきたら大変なもの。ちゃんと鍵を掛けて出たわよ」

「そうか。それならば次は、本山君の部屋を訪問した時のことだ。彼は何をしていた？」

「ラジオを聴いていたわ。上妻君が死んだこととか天気予報を聴いてるって言ってた」

「どこか不審な点はなかったかな？」

「何も……」

「そこに何分くらい留まった？」

「ちよつと言葉を交わした程度だもの、ほんの二、三分のことよ」

「そうか。それでは次に、キッチンでの行動を詳しく聞かせてくれ。君たちは何度か食堂を出入りしただろう？　なぜだ？」

「それは、設楽さんが外のゴミ置き場までゴミを捨てに行ってたのよ。その間、私はお茶道具を洗ったり、サンドイッチを取り分けたりしていたわ」

「何度も出入りする必要があったとは思えないが？」

「外、大雨でしょ？　だから、遠いゴミ置き場へ行くには合羽が必要だったんだけど、合羽は死体と一緒に倉庫の中に置いてあるって三田村さんが言ったから……。設楽さんが、一人で倉庫に入るのは嫌だから一緒に来て欲しい、って私を呼びに来たのよ」

「なるほど。しかし、そうであったなら、俺か春日野さんたちに声を掛ければ、嫌な思いをせずに済んだのだ」

「何を言ってるのかしら。あの時、十路君たち、上妻君のことを真剣に話し合ってたでしょ。ゴミ出しを手伝って、なんて声を掛けられる雰囲気じゃなかったわ」

「そうか。それは済まないことをした。謝罪しよう。それでは、本山君の部屋へ食事を届けに行った設楽さんは、どれくらいで戻ってきた？」

「一分か二分くらいよ」

「なるほど、よくわかった。第二の質問に移ろう。上妻博之に恨みを持つ人間に心当たりはあるか？」

「ないわよ。そんな人間がいたら、すぐに犯人だってバレちゃうじゃないの！」

下らない質問をするなとばかりに、五十嵐さんは声を荒らげた。

しかし、急にトーンダウンして掛け布団を捲り、体を起こした。
そして、怯えたような目で来須兄を見上げた。

「江藤さんなら……上妻君のことを恨んでるかもしれないわ」

「江藤？ 昨年イベントに参加して、何かしらの被害に遭ったという？」

「そう、江藤小枝子さんよ……」

「江藤さんが上妻博之に対してどのような恨みをいだいていると思われるのですか？」

真悟君が訊くと、一瞬、五十嵐さんは言いにくそうに上下の唇を擦り合わせた。

でも、黙っているわけにはいかないと判断したようだ。昨年のイベントで行われた飲み会終了後の乱行を、震える声で話し始めた。

「最終日の飲み会が終わった後、酔っ払った江藤さんを私たちが部屋まで運んだんだけど、その時、設楽さんが私たちの見てる前で眠っている彼女の服を脱がせたの。みやびが面白がって手伝って、私も乗せられて脱がしたわ。そして、みんなで悪戯しちゃって……」

……そんな空気になってたのよ。途中で彼女が目覚まして暴れたけど、設楽さんが彼女の手を押さえてキスして、みやびが胸を揉んで、私が両足を抱え上げて……。彼女の、その、あの……。あの……。と、とにかく、それを見てた上妻君が凄く興奮した顔で私たちを押し退けて、彼女にのしかかってレイプしたの。その時点で彼女は抵抗を諦めたのか、気絶したみたいに目を閉じて動かなくな……。みやびは怖くなったみたいで部屋を飛び出していったわ。その後、遅れて部屋に入ってきた梅本君も加わって……。彼女は彼ら二人に何度も犯されたみたい。それからどうなったのかは覚えてないけど……。でも、私たち、酔っ払ってたから……。それに、元はと言えば、設楽さんが彼女の服を脱がさなけりゃ、あんなことにはならなかったわよ」

最後に全ての責任を設楽さんになすりつけるような発言をして、五十嵐さんは黙った。

なんとも酷い話である。

酔い潰れるほどのお酒を飲んだ江藤さんの自業自得ではあるが、無防備な姿を晒している彼女をみんなで辱めるなど正気ではない。いや、きつと、みんな正気ではなかったのだろう。お酒は人間から正常な判断力を奪う、という悲惨な例だ。

しかし、そんな危険なイベントに参加していたとは……。

驚きを通り越して憤りを覚えた。

弘美、帰ったらとつちめてやるから！

五十嵐さんの話を聞いた来須兄は、低く唸った。

「集団強姦か……。十分な犯行動機になり得る事件だな」

「で、でも、江藤さんは去年、二度目の参加だと言ってたから、そういう危険のあるイベントってことは理解していたはずよ。それに、彼女は今回不参加でしょ！ 彼女はこの山荘に来ていないのよ！ どうやって復讐したって言うの？ この台風の中、山荘の近くに彼女が潜んでるって言うの？ だいたい江藤さんが復讐してるなら、真っ先に狙われるのは設楽さんでしょ！」

叫んで否定する五十嵐さん。

わたしもそう思う。

「そうだろうな。しかし、全てはまだ単なる憶測に過ぎない」

そう言って、来須兄は皮肉っぽく笑んだ。

「あえて誰とは特定しませんが、設楽さんと本山君の他にも、江藤さんに近い人間が参加者に混じっている可能性も考えられます」

真悟君が指摘した。

「西脇さんを疑っているのか？」

「いえ。人物を特定しての発言ではありません。戯言の部類です。聞き流して下さい」

「……………」

来須兄は胡乱そうに真悟君を睨み、数秒間思案してから、視線の先を五十嵐さんへと戻した。

「次の質問だ。緒方みやびに恨みを持つ者はいるか？ 江藤という女性を除外してだ」

「いるわけないわよ、あの子を恨む人間なんて！ そんな奴、鬼畜か悪魔の類だわ！」

血を吐くような叫び。

もう少し相手の感情に配慮して言葉を選べば事情聴取もはかどると思うのだけど、来須兄には心に傷を負った女の子を気遣う優しさが欠けているので、負の感情ばかりを引き出してしまっている。

真悟君なら、もっと上手く質問するだろうに……。

探偵役を交代するべきだな、と思った。

「それでは第三の……最後の質問だ。平仮名で『あいうえおか』という六文字に見覚え、または聞き覚えはないか？」

来須兄が訊くと、五十嵐さんは負の感情を霧散させて、ぽかーんと口を開いた。

わたしも、質問の意味が理解できずに呆然としてしまった。

あいうえおか……って何？

室内に一瞬の空白が生じる。

「何ですって？ あいうえおか……って何のことかしら？」

「緒方みやびが死に際に残したメッセージだ。およそ、犯人の手がかりが示されているのだろう。何か知っていたら教えて欲しい」

ダイイングメッセージと聞かされ、五十嵐さんは唇に指を差し込んで前歯で噛んだ。そして、眉間のしわを深くした。

わたしも考えてみたけど即時中断。

真悟君に解けない謎が、わたしに解けるわけない。

「……わからないわ。でも、これ、きつと何かの暗号よ。凝った言葉遊びよ。あの子、その手の問答が大好きだったから。メッセージの中に犯人の情報を込めたに違いないわ！」

勢い込んで叫ぶ五十嵐さん。

「十路君、わからないの？ 昨日、天才とか言ってたけど、あれは口だけ？」

「……メッセージを解く鍵さえわかれば即座に犯人を特定してみせる」

来須兄は渋い顔で、苦々しく言った。

「今、考え中でえーすう！」

この能天気娘は論外だ。

五十嵐さんも彼女を相手にしていない。視線すら交えない。存在の許せなさを意識した瞬間に、害意が暴走して、ボコボコに殴つてしまふそうだからだろう。その気持ちは痛いほど理解できる。

「事情聴取は以上だ。協力に感謝する」

来須兄は形ばかりのお詫びを残して部屋を出ていった。

【5・藤森保奈美】

来須兄が部屋を出ていった。

美架がそれに続き、真悟君もドアへと向かう……が、彼はくるつと振り返った。

「五十嵐さん、一つだけボクから質問をしても宜しいでしょうか？」

柔らかな微笑みを向けられると、五十嵐さんは自然な感じで微笑み返した。

「いいわよ。何でも訊いて」

「昨年、江藤小枝子の集団強姦に関わった人間は誰ですか？」

優しいな微笑み顔から放たれたストレートな質問に、五十嵐さんは顔を強張らせた。でも、質問には答えた。

「それは……設楽さんと私とみやびと……上妻君と梅本君の五人よ。それ以外にはいなかったわ」

「梅本さんが遅れて加わったのですね？」

「そうよ」

「なるほど、貴女の仰った通り、緒方さんは頭の良い女性だったようですね」

「そうよ。あの子は私と同じで勉強はできなかったけど、私と違って頭の回転は速かったわ。でも、それが何か……？」

「いえ、ありがとう、五十嵐さん」

真悟君は笑みを深め、優雅に一礼して部屋を出ていった。

それと入れ替わりに中嶋君と西脇さんが入ってくる。

「西脇さん、少しの間だけ、わたしの代わりに五十嵐さんを見ていてあげて下さい。中嶋君もお願い」

「いいけど、どうしたの？」

「ちよつと」

わたしは笑顔を振り撒いて部屋を出ようとし、中嶋君の野卑な声を背中に受けた。

「しょんべんか？」

正解だけど、無視して廊下に出る。

「真悟君、待つて！」

隣の部屋へ向かう三人に呼び掛ける。

三人とも振り返った。

「真悟君、ちよつと、こつちに来て」

手招きして恋人だけを呼ぶ。

真悟君は首を傾げたが、来須兄妹と春日野をその場に待たせておいて、呼び掛けに応じてくれた。

「どうしたのかな？」

「あの……トイレ、一緒に行つて欲しいんだけど……。事情聴取が終わるまで待つた方がいいかな？ わたし、お昼前からずっと我慢してたから切羽詰まつてるの」

「構わないよ。生理的欲求を我慢するのは身体に良くない」

真悟君は気安く応じ、《108号室》の前で彼を待つている三人にしばらくの待機を求めて、わたしの手を引いてトイレに連れていってくれた。

手は繋いでくれなくてもいいのだけど、嬉しいから振りほどかない。

なんだか、一人でトイレに行けない小さな子供になった気分だ。

「ねえ、真悟君。さっきの質問でどういう意味なの？」

廊下を歩きながら訊いてみた。

真悟君らしくなく直接的な表現で五十嵐さんの心を傷つける質問をしたくらいだから、あの答えは事件を解く鍵になるものなのかもしれない。

「緒方さんが残したダイニングメッセージの話は聞いていただろう？」

「うん。わたしには解読不可能だろうけど……。平仮名で《あいうえおか》でしよう？」

「そう。その謎を解く鍵を教わったんだよ」

真悟君はにっこりと頬笑んだ。

「え？ それじゃ、真悟君、その《あいいうえおか》の謎が解けたの？」

「ああ」

目映い笑顔で応えられ、わたしはノックダウン。

心が夢世界を浮遊し、数秒後に無事着地。

その間だけ生理的欲求を忘却した。

「その答え、教えて欲しいな」

「今はまだ教えられない」

「どうして？」

「その人物が犯人とは限らないし、犯人の仕掛けた罠かもしれない」

「罠ってことはないと思うわよ。真悟君しか謎を解いていないもの」

「そうだね。罠であれば、来須十路が解ける程度の謎にするだろうね」

「でも、教えてくれないの？」

「キミは良い意味で正直な人間だからね。犯人を知る前と知った後では、その人物への対応が百八十度変わってしまうだろう」

「それは……そうかも……」

「さあ、トイレに行っておいで」

真悟君が女子トイレのドアを開いて言った。

わたしは急ぎ足で個室に駆け込み、下腹部でずしーんと存在を主張していたものを解き放った。

ホッと安堵の息を吐く。

しかし、ゆっくりしてはいられない。長居すると変な誤解を招いてしまう。

真悟君には何をどう誤解されても訂正すればいいだけだが、美架に誤解されると取り返しがつかない。彼女は、わたしをからかうことに使命感を持っている可能性が高いのだ。下手をすると、小学生まがいのお下劣な渾名をつけられかねない。

なので、さつさと個室を出て手をすすぎ、ハンカチで手を拭いながら廊下に出た。

「ヒントは、緒方さんがレイプ現場から逃げ出した後に遅れて梅本さんがレイプに加わったということと、江藤さんが今年のイベントに参加していないということだよ。もし答えを知りたければ、美架ちゃんにヒントを教えてあげるといいよ。彼女はお兄さんよりも頭が良いから、速やかに解答を導き出してくれるはずだ」

廊下を引き返す最中、真悟君がそつと耳打ちしてくれた。

でも、意味不明。

うーん、わたしのやわい脳味噌じゃ解読不可能だ。

けれど、あのお馬鹿な能天気娘に助けを借りるのも嫌だった。

「保奈美ちゃん、おしっこ我慢し過ぎると膀胱炎になっちゃうよつ。殺人犯が怖くてもトイレは行かなきゃ駄目つ。でも、こそこそしなるところは感心できちゃうかなつ。普通、美少女つておしっこかうんちとか隠れてするものでしょつ？ 私はちゃんとしてるもんねーつ。んっ？ あ、そうかつ、保奈美ちゃんは自分のことを美少女だと認識してないんだっけつ？ そんなことはないよねっ？ 鏡に映る自分の顔が他の女の子よりも際立って可愛いことくらいわかるもんねっ」

「……………」

案の定、顔を合わせるや否や、美架にからかわれた。

もしトイレで大をしていようものなら、何を言われたことやら……

…。想像しただけで怖気を震ってしまふ。それと同時に激怒。さり気なく真悟君の腕にしがみついている彼女の姿に意識が向いたから、すぐさま彼から離れるように、睨んで警告する。

返ってきたのは、「べえっ」という声と突き出された舌。

明確な拒否と、わたしに対する挑発。

誰か、あの舌をちょんぎって下さい……。

「美架、遊んでいる場合ではないぞ」

「はあーいつ」

十路に叱られ、素直な返事をする美架。

お兄さんにだけは従順なふりをしているが、それは上辺だけだ。ほら、また隠れて小悪魔な笑顔をこっちに向けた。また後でからかうぞ、という意味表明だろう。本当に困った子だ。どうせ叱るのなら、言葉だけじゃなく、二、三発ぶん殴って欲しい。

廊下には来須兄妹と春日野の他に、設楽さんが立っていた。

わたしがトイレに入っている間に呼び出されたようだ。

「さて、設楽さんに対する事情聴取を始めよう。いいかな？」

「ええ。何でも答えるわよ」

設楽さんは後ろで手を組み合わせ、壁にもたれかかった。

「第一の質問だ。今朝、春日野さんの事情聴取を受けた後、どこで誰と何をしていた？」

「事情聴取が終わった後、一階の階段下で本山君と会って、少しお話をしたわね。死亡事故——その時はまだ事故だと思っていたのよ——について学校に報告した方がいいかどうかをね。結局、報告しなかったけど……。そして、彼がジューズを貰いに来たと言うから、運ぶのを手伝ってあげたの」

「その時、なぜ君は一階にいたんだ？」

「彼女は食堂で事情聴取を受けたんだでよ」

春日野が警察手帳をぴらぴらと捲り返しながら答えた。

頷く来須十路。

「そうですか。その後は？」

「本山君の部屋を出たら偶然、中嶋君が下から上がってきて、和泉君たちの部屋と一緒に喋りしようって誘ってきたから、一人で過ごすよりも気晴らしになるかなと思って応じたの。それからお昼まで彼らと一緒にだったわね」

「その間、部屋を出なかったのか？」

「いいえ。早めにお昼を食べようという話になったから、私が代表

して全員分のお昼ご飯を食堂まで取りに行つたのよ」

「なぜ君が？」

「ついでに梅本君と本山君の様子を見てこようと思つたの」

「そうか。それでは、『107号室』を出てから戻ってくるまでの行動を詳しく話してくれ」

「ええ。私が部屋を出て『104号室』のドアをノックしようとしたら、偶然、五十嵐さんが廊下に出てきたの。彼女も食事を取りに食堂へ行くつて言うから、和泉君たちの部屋と一緒に食べましようつて誘つたわ。彼女は誘いに快く応じてくれて、ごく短い間部屋に戻つていたわ。それから、二人で梅本君と本山君の部屋をそれぞれ窺つてから、一階に下りたのよ。キッチンに入ってから、二人で手分けしてサンドイッチとジュースを用意したり、お茶道具の洗浄をしてもらっている間にゴミ箱の中身を捨てに外まで行つていたりしたわね。それを終えてから、サンドイッチとジュースを持って『107号室』に戻つたの」

「五十嵐さんが自室へ戻つて、昼食の件を緒方みやびに報告し、再び廊下に姿を現すまでの時間はどれくらいだった？」

「一分もかからなかつたと思うわよ」

「その時、緒方みやびは生きていたか？」

設楽さんはその質問の意味を理解し、顔をしかめて相手を睨んだ。そして、首を左右に振つた。

勿論、緒方さんが死んでいたという意味ではない。

「わからないわ。私、その時、廊下で待つていたから、彼女の顔を見えていないし、声も聞いていないもの」

「部屋から出てきた五十嵐さんは何かを持っていたか？」

「いいえ、手ぶらだつたわよ」

「五十嵐さんは部屋を出る際、ドアの鍵を掛けたか？」

「ええ」

「そうか。それでは次だ。梅本君と本山君の部屋を訪れた際、彼らは何をしていた？」

「梅本君は毛布に包まって眠っていたわよ。呼び掛けても返事をしなかったから、そつとしておいたの。本山君はラジオを聴いていたわ。朝からずつと聴き詰めだったみたい」

「そうか」

来須兄は顎から手を離し、一つ頷いた。

「それでは、君がキッチンに入ってから行動について質問していく。いいかな？」

「ええ」

「ああ、その前に訊いておこう。なぜ君はゴミ箱やお茶の道具を持っていたのだ？」

その質問に、設楽さんは微少な苦み混じりの微笑みを作った。

「ゴミが溜まつてるゴミ箱とか使えばなしの急須を見てしまうと、苛々して片付けたくなってしまうのよ。あれは和泉君たちの部屋の物だったけど、誰も片付けようとしなから我慢できなくて、食堂へ行くついでだから私が片付けてしまおうと思ったの」

それは、わたしの仕事である……。でも、決してわたしはズボラな性格ではない。ゴミ箱にはまだ余裕があったし、急須もお茶を淹れて間もなかったはずだ。あの程度で洗っていたら、何度も何度も部屋とキッチンを往復しなければならないだろう。

ちよつと言いつくばく聞こえるかもしれないけど……。

「なるほど。性格的な行動だな」

来須兄は納得して大きく頷き、特徴のある腕の組み方をした。

「君たちは、キッチンで作業をしながら、何度か食堂を出入りしていた。その時の様子を、食堂で話していた俺たちは確認している。なぜ食堂を何度も出入りしていたのだ？」

「ゴミを外のゴミ置き場まで捨てに行っていたのよ。何度も行ったり来たりしたのは、外が大雨で合羽が必要だったけど、合羽が置いてあるのは倉庫だったから、ちよつと一人で踏み込む勇気がなくて……五十嵐さんについて来てもらったの」

「ゴミ置き場は山荘から遠いのか？」

「ええ。少し山を下ったところよ。往復で五分くらいかな。ああ、そうよね。君たちは今回が初参加だから、ゴミ置き場の場所なんか知らないわよね」

「普通は、ポリバケツなどに一定量のゴミが溜まるのを待ってから捨てに行くものではないのか？」

「普通はね。でも、今は夏でしょう？ 生ゴミだけは、すぐに悪臭を放つから、頻繁にゴミ出しするべきよ。現に、西脇さんも朝ご飯を作った後、ゴミを出していたわ」

「そうか」

来須兄は顎に手を当てて、髭剃り跡を確認するかのように、左右に指を滑らせた。

しばらくの間、そのポーズを保つ。

どうも、それが思考する時の癖らしい。

「それでは、昼食を持って《107号室》に戻ってから五十嵐さんの悲鳴を聞くまでの、君の行動を聞かせてくれ」

「私は部屋に戻ってすぐ、サンドイッチとジュースを持って本山君の部屋を訪れたの。彼にお昼を渡して、すぐ部屋に戻ろうと思ったら、キッチンにお茶道具とゴミ箱を置きっぱなしだったことを思い出して、慌てて取りに向かったわ。そして、部屋に戻って、みんなでお昼を食べていたの。でも、緒方さんがなかなか姿を見せなくて五十嵐さんが様子を見に行ったらあんなことに……」

「部屋を出てから戻ってくるまでに要した時間はどれくらいだった？」

「二分か三分くらいかな……」

「そうか。それでは第二の質問だ。上妻博之もしくは緒方みやびに恨みを持つ者に心当たりはないか？」

「心当たりはないわよ」

「君と同じ学校の江藤小枝子という女性が恨みを持っているのではないのか？」

「！」

設楽さんの顔から一気に血の気が引いた。

ざざーっという血流の音が聞こえてきそうな急変だった。

彼女は表情の変化を見られまいとするかのように俯き、呼吸を停止させるように押し黙った。

「昨年、彼女に何があった？」

「……………」

「五十嵐さんからある程度話を聞いてはいるが、もう少し詳しい話を教えて欲しい」

「話せないわよ、絶対に！ 五十嵐さんから聞いたのなら、それで十分でしょう？ たぶん聞いた通りに違いがないから。それに、私、物凄く酔っ払っていたから、途中からの記憶が全くないのよ。私は、昨年のイベントについては何も言わない。いいえ、何も言えない。そう約束したのよ」

「そうか……。それならば仕方ないな」

来須兄は眼光を険しくしたが、無理に聞き出そうとはせず、小さな溜め息を一つ吐いて次の質問に移った。

「第三の質問だ。これは訊くまでもないことかもしれないが、今回のイベントに江藤小枝子に参加しなかった理由は何だ？」

「わからない」

俯いたまま、設楽さんは短く答えた。

「わからない？ 昨年のイベント後、彼女と仲違いしたからか？」

「違うわよ！ そんなじゃないわ！ 昨年ここから帰った後も私たちは親友のままだった。私の所為でレイプされたんだから、当然喧嘩になったけど……。でも、小枝子は許してくれたのよ。仕方ないよね、って。餓えた狼の前で可愛い子羊が眠ってたら絶対に食べられちゃうよね、って。実際、私が翌朝に謝るまで、どうしてレイプされたのか彼女は殆ど覚えていなかったのよ！」

悲しさと辛さと後悔の念を叩きつけるように、設楽さんはヒステリックな声で叫んだ。

来須兄はそんな姿を目にしても氣遣う素振りを見せず、次の質問

を投げ掛けた。

「今年のイベントには誘わなかったのか？」

「彼女は……、小枝子は今年のイベントの後、引越したの。転校したのよ。だから、今どこで何をしているかは、私にはわからないわ」

「それは、本山君も知っていることか？」

「ええ、当然よ。同じ陸上部の部員だし、あの二人、結構仲良かったから」

「ほう……仲がね。よくわかった。それでは最後の質問だ。《あいうえおか》という平仮名六文字が何を意味しているかわかるか？」

「……いいえ、何なの、それ？」

「緒方みやびが残したダイニングメッセージだ」

設楽さんはダイニングメッセージという言葉に反応し、一瞬びくつと顔を上げかけたが、誰とも目を合わせずに俯いてしまった。

「わからない」

「そうか。それならば、以上で君への事情聴取は終了だ。この《108号室》に戻るなり、《107号室》へ行くなり、自由にしてくれ。だが、単独行動だけは避けるように心掛けて欲しい。いいな？」

「ええ」

設楽さんは俯いたまま僅かに頭を頷かせた。

そして、警官とはいえ三田村を一人にしない方がいい、という真悟君の意見を受け容れて、《108号室》に入っていた。

【6・藤森保奈美】

最後の事情聴取をする為に梅本の部屋をノックしようとしていた来須十路を、わたしは控え目に呼び止めた。

「あの……待って下さい。わたしの事情聴取は……しないんですか？」

怖ず怖ずと訊いてみた。

もし来須兄がわたしに対する事情聴取を忘れていた場合、後で美架に咎められる危険があるのだ。

緒方さんの死体が発見されてからずっと硬い表情を維持していた来須兄が、微妙に頬を和ませた。

「ああ、不必要だ。君は和泉君と片時も離れずにいたのだろう？」

「はい、そうですけど……」

「それならば、君から話を聞くよりも和泉君に訊いた方が正確な情報を得られるだろう。そうではないかな？」

「はあ、そうですね……」

確かに真悟君の記憶は正確無比だろうけど、わたしの記憶力を侮るような言い方をしなくてもいいと思う。

「にひひっ。つまり、保奈美ちゃんも真悟君ほど信用されてないんだよっ」

それは仕方がない。

わたしには探偵としての能力が皆無なのだ。今更その点をからかわれても怒りは覚ええない。

頭に来るのは、来須妹のふざけた表情だった。

でも、無視する。彼女が飽きるまで相手にしない。

わたしの反応を窺うように、美架はにやけ顔を近づけてきたが、こっちから何も言い返さないと見るや、「ちえっ」と舌打ちし、つまらなそうに床を蹴って離れていった。

しつこくからかわれずに済んだようだ。

来須兄がドアをノックした。

コンコン。

しばらく待つ。

返事はない。

「駄目だよ、お兄ちゃん。梅本君、寝てるらしいから、もっと激しく叩かなくちゃっ！」

来須妹が強めにノックした。

ドンドン、ドンドン！

梅本は今朝方に事情聴取を受けた後、睡眠薬を貰って今までずっと眠っていたのだから、事情聴取をする意味はないと思った。

でも、余計な意見は口内に留めておく。口は災いの元だ。迂闊な発言をして、美架に馬鹿にされたくない。

「あれーっ。おつかしーなあつ。全然返事がないよっ。そんなに強力な睡眠薬を飲んでるのかなっ？」

「鍵は掛けてないはずだで、入ってみりゃいいんだでよ」

「よし、様子を見てみよう」

手の平をドアにバンバン打ちつけて叫ぶ美架を制し、来須兄はドアのノブに手を掛けて捻って引いた。

ドアが大きく開かれるとひんやりした空気が畳の香りと共に流れ出てきて、わたしたちを包んだ。

冷房の温度設定がかなり低い。

梅本は暑がりなのだろうか。

室内はしんと静まり返っていた。

部屋の中央に敷かれた布団に、廊下に後頭部を向けて梅本が横たわっており、掛け布団で肩までを覆っている。

変だ。

寒いのなら冷房の温度設定を高くすればいいし、暑いなら掛け布団を被らなければいいのだ。

まあ、親友を失ったショックで布団を被らずにはいられない状態だったのかもしれない。

「梅本君、入らせてもらったぞ」

来須兄が一声掛けた。

ぐっすり眠っているようで返事がない。それどころか、鼾すら聞こえてこない。夢も見ずに眠っているようだ。

起こしては悪いので、わたしたちは断りなく室内へと踏み込んだ。
「血の臭いがするね」

真悟君が入室するなり呟いた。

血の臭い？

わたしには畳の青臭い匂いしか感じないけど……、真悟君は感じたのだろうか。

いや、それよりも、なぜここで血の臭いが？

わたしと春日野は目を合わせた。

「保奈美、こっちに来なさい」

突然、真悟君が厳しい調子でわたしを呼んだ。珍しくも命令口調だ。

ほんの微かな反抗心が芽生えたが、それを見透かされたようで、この手に掴まりなさい、という風に手を差し伸べられた。優しい微笑みが添えられていたので、抵抗感なく手を掴むことができた。

真悟君は手を繋ぐと、わたしをぐっと引き寄せて抱き締めた。

急に人肌の温もりが恋しくなったのだろうか？　こんな状況なのに？　いや、こんな状況だからか？　彼の心情がわからない。でも、嬉しい。

しかし、実際、わたしが抱き寄せられた理由は、真悟君の心情とは全く無関係だった。

「梅本君、すまないが起きて欲しいんだ」

そんな声が続いて、掛け布団を捲る衣擦れの音が聞こえ、そして……。

「ぬうつ、こりゃ……酷いんだよ」

「うわっ、ひどいねーっ！　ざくざくの滅多刺しだよーっ！」

春日野の呻き声に同調する美架の悲鳴じみた叫び。けれど、どこか面白がっているような声音だった。

「梅本君も死亡か……。絞殺後に上半身を何度も刺されたようだな」
十路の溜め息混じりの独り言。

彼らの言葉から梅本の状態を認識した。

にわかに心臓の鼓動がペースアップ。寒くないのに体が震え、悲しくないのに涙が溢れてきた。

わたしは呼吸を整えながら真悟君の顔を見上げた。

「上妻さんほどではないが、あまり見栄えの良い死体ではないね。
キミは心の準備なしに見ない方がいい」

「うん……」

「このまま部屋を出ているかい？」

「ううん、大丈夫……。じゃないけど、真悟君と一緒にいさせて」

「構わないよ。心の準備はできたかな？」

「ううん、もうちょっと」

わたしは答えて、自分から真悟君にぎゅっと抱きついた。

彼の肩に頬を当てて心の正常化を図る。すると、背中とお尻をゆつくりと撫でられた。なぜお尻を撫でるのだろっ、と小さな疑問を覚える。わたしが感情的になると、彼はよくお尻を触るのだ。しかも、愛撫する感じに、いやらしく。その行為で落ち着きを取り戻せるわたしもわたしだが……。

お尻を這う手の動きを感じながらそんなことを考えていると、いつも通り、いつの間にか落ち着いていた。

わたしは顔を上げた。

真悟君は完全な無表情で死体の方を見ていたけど、わたしの視線に気付いて穏やかな微笑みを向けてくれた。薄情なほどに冷静沈着な男の子である。いや、本人がよく言うように、無情なのだろう。

「ありがとう。もう平気だよ」

わたしは体を離し、平気な自分をアピールする為に一瞬だけ笑顔

を作った。

お尻から手を離れた真悟君は、気丈なわたしを褒めるように頭を撫で、額に軽いくちづけをしてくれた。

更に心が軽くなった。

「和泉君、もういいか？」

「はい」

真悟君が呼ばれ、布団の前へ離れていってしまった。

わたしは振り返って、それを視界に収めた。

梅本は布団の上で死んでいた。白地のＴシャツには小さな牡丹の花が咲いたように赤黒い血が広がり、首には青黒い痣が見える。殺害されてからかなり時間が経過しているらしく、血は完全に固まっていた。

来須兄は、いつの間にかポラロイドカメラを手にしていて、室内の至る所を撮影していた。

わたしが心の安静を図っている間に、自分の部屋から取ってきたようだ。

梅本の死体は、真悟君と来須兄の手によって仰向けにされ、服を脱がされ、胸の傷や首についた痣が晒され、あらゆる角度から撮影された。

ジーンズが脱がされた時点で、わたしは目を背けている。

「あれっ、保奈美ちゃん、見ないの？ 真悟君以外の男の子の裸を見るチャンスだよ。梅本君のお道具は真悟君のと比べて大きい……」
「ったあっ！ 痛いよっ、お兄ちゃん！ 暴力反対っ！ 体罰厳禁っ！ 妹イジメ断固阻止っ！ あうっ！ 二度もぶったっ！ お母さんにもぶたれたことないのにっ！ もう怒ったぞっ！ こうなったら、保奈美ちゃんと《愛妹を甘やかしましょう組合》を作って、《愚兄賢妹》のスローガンを掲げながら、山荘中の廊下を大行進してやるんだからっ！」

下品なからかいでわたしを赤面させて小悪魔な心を満足させようとした美架は、来須兄に無言の体罰で叱られると、がおおっと怪獣

のように激昂し、わあつとわざとらしい泣き声を上げてこっちに駆け寄ってきた。

そして、わたしの手を掴んで廊下へと引っぱり出した。

「ちよつと美架ちゃん……」

「保奈美ちゃんと一緒にいても真悟君の役には立てないよつ。むしろ今は邪魔になっちゃうと思うなつ。真悟君は絶対に言葉にはしないだろうけどねつ。それでも、裸の死体を見に、部屋に戻るっ？」
そう先制攻撃され、わたしは真悟君と一緒にいたい、という言葉葉を封じ込められてしまった。

この子、性格悪すぎ。自分だって役に立ってないくせに……。

むかむかと怒りのボルテージが急上昇。

しかし、ふつと先程の真悟君の台詞を思い出し、感情のスイッチを意識して切り替えた。

「ねえ、美架ちゃん、わたしから一つ質問してもいいかな？」

「んっ？ いいけど、何かなつ？ 保奈美ちゃんが私に質問なんてドキドキしちゃうよつ。あつ、もしかして、お兄ちゃんに恋人がいるかどうか、知りたいのかなつ？ いくら超天才名探偵なお兄ちゃんが魅力的でも、浮気は良くないんだよっ」

わたしが来須兄を？ そんなわけない。この子、何をどう解釈してその結論に至ったのやら……。天井知らずのテンションと、突飛な想像力の賜物だろうか？ ちよつとは自分自身を制御して欲しいものである。

「緒方さんが残したメッセージを解くヒントを教えてあげるから、その答えを考えて欲しいんだよ。どう、聞きたくない？」

「えっ、ヒントっ？」

「そう。犯人を特定する鍵だよ」

吃驚眼の美架に言う。

その刹那、来須美架の表情が激変した。

緩みきった顔が引き締まり、お茶だけ調子かなりを潜め、戯けた雰囲気が消え去って、冷徹……というより冷酷な表情が顔を飾った。それは、瞬く間に別種の仮面が顔を覆ったかのような、衝撃的な急変だった。

美架は想像外の握力でわたしの腕を掴み、愛嬌の欠片もない鋭いだけの眼光で睨んできた。

物凄く荒んだ目だった。

「ヒント？ 頭悪いくせに、この私にヒントを教えるだと？ 面白いね、保奈美ちゃん。特別に聞いてあげるから言ってみなよ」

さっきまでと口調が全然違う。男の子のような乱暴な言葉遣い。まるで別人が喋っているみたいだ。その声には、明確な嘲りと侮りが込められていた。

二重人格？ 馬鹿のふりをしていただけ？

「どうした、藤森保奈美。素の私を目の当たりにして吃驚しているのか？」

「美架ちゃん、貴女、その喋り方……」

「ふう……頭の悪い女だ。これが素の私だと言っただろう。その一言で理解しなよ。これが本来の来須美架なんだ。わかったか？ 理解したなら、さっさとヒントとやらを話せ。兄や和泉が出てきたら、馬鹿のふりをしなければならならんだろう。さあ！」

脇腹を強めに小突かれた。

痛い……。

「……………」

声が出なかった。

えも言えぬ恐怖が背筋を伝い、声帯の機能を急停止させてしまったようだ。

今、わたしの目の前に立っているのは、数秒前まではっちゃんけた女の子ではない。

生意気な小娘でもない。

来須兄のように不遜で傲慢な自信家でもない。

わたしには上手く表現できないけど、今の彼女は物凄く高圧的だ。まるで強烈なマイナスエネルギーを全身から放出しているみたいに……。

「ちっ、使えない女だ」

美架は小さく舌を鳴らし、わたしの手首を捻った。

骨を折ろうとするかのように容赦がない。

関節がみしみし軋む音。

「痛い……放して……」

「さつさと答えろ、と私はさつきからお願しているんだよ、保奈美ちゃん」

「言う！ 言うから放して！」

「先にヒントを教えなよ。そしたら、手を放してあげる」

「江藤さんのレイプに関わった人は、梅本さんと上妻さんと設楽さんと五十嵐さんと緒方さんの五人なの！　そして、梅本さんは緒方さんがレイプ現場から逃げ出した後に遅れてレイプに加わったって！　あと、江藤さんが今年のイベントに参加してないって！　それを教えれば、美架ちゃんならメッセージを解けるって真悟君が言ったから！」

わたしがヒントを絶叫すると、美架は捻り上げていた手首を解放してくれた。

「声のボリリュームを落としなよ、保奈美ちゃん。叫びを聞いて、和泉が様子を見に来たら厄介だろ。しかし、なるほど、和泉の推理がそれならば、ダイイングメッセージが解けたことも納得できるな」
感情のない笑みを見せ、美架は視線を何も無い壁に据えた。そして、眉根を寄せ、人差し指と中指を揃えて額に添えた。その幼顔が異様な真剣味を帯びる。

脳味噌をフル回転させてダイイングメッセージを解読しているのだろう。

声を掛けるのが憚られる空気を醸し出していた。

三、四分が経過しただろうか。

美架が顔を上げてにっと笑んだ。

「ああ、そうか。なるほどなるほど。江藤を襲った五人。逃げた緒方と遅れて参加した梅本。江藤は今年のイベントに不参加。そして、鏡に描かれたダイイングメッセージ。なるほど……。緒方みやびは、私よりも脳の瞬発力が高かったようだ。素晴らしく下らないクイズだが、愚かしいほど面白い。犯人に襲われながら、あの《あいうえおか》のメッセージを考え出した彼女の頭脳に敬意を表さねばならないな」

「と、解けたの？」

「勿論だ。保奈美ちゃんの示したヒントを得て解けなければ、私は《天才美少女探偵》という愛すべき蔑称を返上しなければならぬだろう」

「誰が犯人なの？」

「それは……保奈美ちゃんは知らない方が良いのではないかな？
和泉も教えてくれなかったのだろうか？」

「うん……」

「保奈美ちゃんは演技が下手だからね」

美架は嘲笑うように喉を鳴らし、背伸びをして目線の高さをわたしと同じにした。

「ヒントを覚えてくれたことには感謝しよう。しかし、だからと言ってイジメは止めないよ。保奈美ちゃんは、和泉の知られざる過去を暴く為の重要なフアクターだからね。ちくちくと絶え間なく攻撃して、彼のあらゆる情報を引き出させてもらうよ」

ぺこつと頭を下げるも、美架はダーティな感じに唇を歪め、わたしの胸に指先を突き立てて宣言した。

やっぱり、今までのからかいは故意だったのだ。悪意からのイジメではないにしても、真悟君の情報を得る為に恋人であるわたしをイジメている。でも、なぜわたしを攻撃することで彼の情報を得ら

れるのかは不明だ。

それに……。

「どうして真悟君の情報を……？」

「兄の望みだ。和泉真悟という存在に対して、私は一切興味を持っていない。ただ兄の命ずるまま保奈美ちゃんをイジメて遊び、兄の望む情報を収集するのみ。理由を知りたければ、兄に直接質問するんだな」

つまり、美架は理由も知らずにわたしをイジメているわけだ。

滅茶苦茶である。

真悟君の何を知りたいのかわからないけど、イジメられる身にもなって欲しい。

でも、その彼女の言葉を鵜呑みにしてはいけない。来須兄に質問し、恥を掻く危険性もあるのだ。

この子、本当に信用できないから……。

不意に、がちゃっとドアノブの回転する音がした。

現場検証が終了したのだろう。

「ちっ、もう調べ終えたのか」

鋭く舌打ちし、美架は顔を背けた。

そして、ぶつぶつと何かを呟く。

その間、約二秒。

再び顔を上げた時、彼女の表情は陽気な笑顔で飾られていた。

「保奈美ちゃん、一応、釘を刺しとくけど、私のこと、みんなには内緒だよ。特に、お兄ちゃんと真悟君には絶対に秘密っ！ わかっているよねっ？」

「うん……」

能天気そうな笑顔を向けられたが、本性を見せつけられた後だけに、恐怖しか感じない。

わたしは顔かざるを得なかった。

ドアが開き、春日野を先頭にしてみんなが廊下に出てきた。
わたしは真悟君の下に駆け寄り、何も言わずに抱きついた。腰に
手をまわし、ぎゅっと体を密着させる。

来須美架の二面性を目の当たりにしたショックは、言葉で表現で
きるほど小さくなかった。それに、来須兄の意味不明な企て……。
誰が犯人なのかわからない不安。犯人を教えてもらえなかった不満。
それに対して沸き出す不信任感。

わたしは混乱している。

頭の中がぐしゃぐしゃ。

だから、肌で直接感じられる、心から信頼できる確かなものが欲
しかった。

「どうしたの、保奈美？」

そっと抱き締められ、お尻を撫でられた。
額に触れる唇。

「うっん、何でもないの……」

「キミが怯えているんだ、何でもなくはないよ。だが、キミがそう
言うのであれば、余計な詮索はしないでおう」

微妙な動きを見せるお尻の上の手。

「キミの心を苛むものは理解している。それを早急に片付けてしま
おう。全てボクに任せておくといいよ。いいね、保奈美？」

「うん」

わたしは安堵の吐息を零した。

そう、この温もりだけが、この声だけが、この言葉だけが、絶対
的に信頼できるものである。それを再認識し、幸せ気分で心も晴れ
やかになった。

すると、来須妹が媚びを含んだ甘え声を放ちながら真悟君に抱き
つき、彼を強引に屈ませ、位置の下がった耳に唇をくっつけて小声
で囁いた。

「真悟くん、私、犯人が誰かわかつちやっただよつ。凄いで
しょつ？ 偉いっ？ 偉いよねつ？ それもこれも真悟君のヒント

のお陰だよっ！」

「キミは天才なんだろう？ ヒントなしでもすぐに解けたのではないかな」

「にへへっ。天才美少女探偵だもんねっ！」

褒められて照れ笑いを浮かべる美架。さっきの荒んだ眼光が嘘のように、両目が活き活きと輝いている。演技をしているようには見えない。

きつと、わたしの目が節穴なのだろう。

【7・藤森保奈美】

現場検証の後、山荘内にいる全員が呼び集められ、春日野の口から梅本の死が発表された。

中嶋君は激しく舌打ちして、大きく口を開いて何かを叫びかけたけど、真悟君が何か囁きかけると、不機嫌な面持ちながらも大人しく口を閉ざした。

西脇さんと設楽さんは、驚きを示したものの騒ぎ立てたりせず、静かに事実を噛み締めている。

五十嵐さんは小さな悲鳴を發してへたり込み、両手で顔を覆ってすすり泣き始めた。

本山君と三田村は大騒ぎした。特に三田村は、本来はみんなを落ち着かせる為に冷静な対応をしなければならない立場なのに、訳のわからない卑語を怒鳴り散らし、壁や床を蹴って殴って大暴れした。本山君は相次ぐ殺人の發生に絶望し、自暴自棄になって、来須兄に羽交い締められるまで、三田村の真似をするように周囲の物を破壊してまわった。

みんなのリアクションは以上だ。

全員がそれぞれ最低限必要な日用品を持って食堂へと移動した。

これ以上の犠牲者を出さない為に、春日野の方針に従い、犯人が特定されるか下山できる状況に至るまで全員一緒に食堂で過ごすことになったのだ。

その決定については誰からも文句が出なかった。

全員が食堂に集合した後、春日野の立ち会いの下で、来須兄の手によって全客室の調査と全員の荷物検査が行われた。

しかし、犯人の特定に繋がるような物は何も発見できなかったようだ。

その間、キッチンでは西脇さんと設楽さんが協力して夕食の準備をしていた。

こっそりした物は厳しい、という五十嵐さんと本山君の要望を考慮して、喉越しのいい素麺と和え物、冷製スープ、サラダ等を作ってくれた。

捜査を終えて食堂に戻ってくるなり、来須十路は中央のテーブルに陣取り、真悟君を呼び寄せた。

「これまでに得た事件の情報を整理したい」
「構いませんよ」

真悟君が来須兄と向かい合う位置の椅子に腰掛けたので、わたしはその隣に座った。

「夕食はどうするの？ 用意できてるわよ。食べながら話をしたらどう？」

キッチンから顔を覗かせた西脇さんが大声で訊いた。

「食事は少々待って下さい。飯を食べながらの会話は気が散るし、腹が膨れれば思考も鈍ります。夕食は後ほどということでお願います」

「そう……」

それは来須兄の都合だ、と西脇さんは思ったのだろう。ちょっと不愉快げに眉を寄せた。でも、文句を言わずにキッチンから出てきて、カウンター席の一番隅っこに座った。

来須妹はカウンターに直接お尻を乗せて、両足をぶらぶらさせている。シャツがずり上がって可愛らしい下着が見えてしまっているが、真正面に座っているのはわたしと真悟君だけなので、誰も注意せず、彼も見咎めなかった。当の本人は全くの無頓着である。

五十嵐さんと設楽さんは最初中央のテーブルに座って何かを話し合っていたけど、来須兄が強引に移動を命じた為、文句たらたらでカラオケ機材の前に位置する席に移り、仲良く並んで座り、こっちの様子を見ている。

中嶋君は来須兄の横に座り、テーブルに突っ伏すように両手で頬杖をつき、不機嫌さを満面に表して、みんなの顔を順に睨んでいる。本山君と三田村は、部屋の隅っこで肩を寄せ合ってじっとしている……。捜査状況や来須兄の推理などに興味はない様子だ。彼らが望んでいるのは帰宅である。いや、彼らだけではなく、この場に居る全員が山道の復旧と警察の救助を切望しているのだろう。勿論、わたしも、である。

来須十路は椅子にふんぞり返り、足を組み、顎に手を添える不遜ポーズを作った。

「それでは、まず、これを見てくれ」

そう言っただけで来須兄は、透明なビニール袋に入れられた果物ナイフらしき物をテーブルの上に置いた。

そのナイフは、柄の部分以外が血で汚れていた。

どう見ても殺人に用いられた凶器だ。

さっきの荷物検査時に発見した物だろう。

「これは、緒方みやび及び梅本春樹の殺害に用いられたと思われる凶器だ。荷物検査の際に、ある人物の部屋からタオルに包まれた状態で発見された」

「おい、マジかよ！　ぜってー、そいつが犯人だぞ！　誰だ、それ？」

中嶋君が叫ぶ。

来須兄はにやりと笑い、食堂の隅っこで蹲っている本山純太を指差した。

「本山君の部屋からだ」

「！」

全員の視線が一ヶ所に集中する。

本山君は当然のごとく狼狽し、勢い良く立ち上がって、滑稽なダンスを踊った。

「ぼ、僕、違う！　僕はそんなの知らないよっ！　僕は犯人なんかじゃない！」

大声で喚いた本山君は、両手を左右に振り、涙目で自らの潔白を訴える。

「僕は……今年初めてこのイベントに参加したんだよ！ 設楽先輩以外とは本当に初対面なんだ！ そんな僕が犯人なわけないじゃないか！」

「落ち着け、本山君。誰も君が犯人だとは言っていない。単に、君の部屋から凶器が発見された、と発表したただけだ」

「でも……」

「いいから、座るんだ」

来須兄に強い調子で命令されると、本山君はその場で蹲り、頂垂れるように膝を抱えた。

「宜しい。それでは次に、梅本春樹殺害に対する俺の見解を聞かせよう」

そう言つて来須兄は、食堂内の雰囲気にも更なる緊張感を持たせた。「梅本春樹が確実に生きていたのは、春日野さんたちの事情聴取を受け終え、西脇さんに睡眠薬を与えられた時までだ。殺害された明確な時刻を割り出すことはできないが、緒方みやびが殺害される前に彼は既に殺害されていたと見ていいだろう」

「十路君、ちよつと待ちなさいな。お昼の時、私と設楽さんが眠つてる梅本君の姿を確認してるのよ」

五十嵐さんが遠くから口を挟んだ。

自分の認識と来須兄の見解が食い違っていることにショックを受け、思わず声に出してしまったのだらう。

「室内に入つて、掛け布団を剥ぎ取り、彼の状態を確認したのか？」

「それは……廊下から声を掛けたただだから……。そんな乱暴なこととはしなかったわよ。起こしちゃ可哀想だと思つたし……」

「そう、それが犯人の狙いだ。掛け布団で血塗れの体を覆い隠し、窓の方を向かせることで、一見すると眠っているように見せ、少しでも死体の発見を遅らせようとしたのだ。俺たちも最初は、梅本君は寝ているものと思つた。そう見えた。だから、君たちが見間違っ

のも無理ない」

「そんな……」

五十嵐さんと設楽さんは顔を見合わせた。

「すると、そこに疑問が生じる。なぜ犯人はそんな手間を掛けたのか、だ。これは、上妻君殺害についても言えることだが、犯人は死体の発見を意図的に遅らせている。反対に、緒方みやびを殺害した際には何も工作を施さず、ほぼ犯行直後に発見させているのだ。この違いは何を意味しているのだろうか……」

「はいはいっ！ 犯人のアリバイ工作だと思いまーすっ！」

美架が挙手して意見した。

「いや、違う」

「えっ、違うのっ？」

即座に否定され、吃驚眼の美架。

「上妻君、梅本君……この二人の死は、いつ発見されても犯人の利にはならない。なぜならば、緒方みやびの惨殺死体が発見されるまで、俺たち兄妹と和泉君以外の人間は、上妻君の死を事故死と思い込んでいた。誰一人として殺人事件とは疑っておらず、それぞれが自由気儘に山荘内で行動していたのだ。そうだろう？ 一人で管理入室に籠もっていた西脇さん然り、朝食後に一人で食堂を出ていった中嶋君然り、単独で山荘の外へとゴミ出しに行った設楽さん然り、シャワーを浴びていた緒方さんを残して部屋を出た五十嵐さんも然り。誰もが平気で単独行動をしていたのさ。つまり、誰にでも犯行が可能であり、どの件においてもアリバイなど不必要だった」

「じゃあ、どうしてかなっ？ 犯人が無駄な努力をして自己満足に浸ってたって言うのかなっ？ もしそうだったら、犯人は馬鹿だよねっ！」

「そうではないぞ、美架。逆なのさ」

来須兄はニヒルな笑みを妹に向けた。

「逆う？」

「そう、逆だ。上妻君を殺害した後、非常階段のドアを一時的に施

錠したのは、確かに犯人のアリバイ工作だろう。だが、梅本君を生きているように偽装した理由は、殺害に用いる凶器を使い回す為なのだ」

「あっ、そうかつ！ 天才美少女探偵来須美架、理解しましたっ！」

「さすがは俺の妹。和泉君はどうだ？ この程度は既に理解していたか？」

「さて、どうでしょうね。どうであれ、ボクの理解度など確認する必要はありませんよ。貴方は全員が理解できるように話を進めるべきでしょう」

「そうだな」

来須兄は薄笑いを浮かべ、視線の先に設楽さんと五十嵐さんを捉えた。

「簡単に説明すると、梅本春樹の死が発覚すれば、即刻、荷物検査が行われるのは必定。そうなれば、凶器を一度処分しなければならぬ。そして、荷物検査の後、緒方みやびを殺害する為の凶器を調達しなければならぬ。更にその後、もう一度凶器を処分する、という手間とリスクを考えれば、犯人は自らが持ち込んだ凶器を有効に使い回さざるを得なかったわけだ。ゆえに犯人は、梅本君の様子を見に来た者に、彼が睡眠薬の効果によって熟睡している状態だと思込ませるべく、掛け布団を被せて窓の方を向かせるという偽装を施したのだ。そして、その役割を偶然に、五十嵐さんと設楽さんが担ってしまった」

「私たち、犯人に騙されたってこと？」

設楽さんが不愉快そうに訊いた。

「そうだ。新たな殺人が起こって事情聴取をすることにもならない限り、誰かが一度でも梅本君の熟睡を誤認して報告しさえすれば、緒方みやびの死体が発見されるまでは、彼の眠りを妨げようとする者はいない」

「……………」

唇を噛む設楽さん。

五十嵐さんは怖い顔で爪を齧っている。

「つまり、どういうことだ？　そこから何がわかる？　犯人を特定できるって言ってるのか？　俺には全然わかんねえぞ」

中嶋君が頼杖をついたままの姿勢で不機嫌そうに叫んだ。

わたしも中嶋君と同じだ。来須兄の解説を理解できていない。それがどういう結論を導き出すのかわからない。

来須兄は、理解力のないわたしたちを嘆くように、大袈裟な動作で肩を竦め、テーブルの上に置かれているナイフを指し示した。

「わからないのか？　この凶器は、まず梅本君の殺害に用いられ、次に緒方さんの殺害に用いられ、最終的には本山純太の宿泊部屋にて発見されたのだぞ。それが意味することは何だ？」

「本山が犯人ってことか？　そう言えば、本山って上妻殺しの最有力容疑者だったよな」

疑惑の目を本山君に向ける中嶋君。

「ちょ……待つ……ぼ、僕はそんな……」

憤慨して喚き出そうと身構える本山君を、美架が元氣な声で制した。

「中嶋君の安直な考えを聞いて怒っちゃ駄目だよつ、本山君っ！」

「俺は安直な男じゃねえぞ。じゃあ、何を意味してた？　言ってみろよ、美架」

「犯人が本山君に全ての罪をなすりつけようとした、ってことでーすっ！」

来須妹は万歳をして叫んだ。

「その通りだ」

首肯する来須兄。

「そんな……酷いよ……」

絶望感に苛まれた本山君は、みんなの視線から逃れるように半泣き顔を膝に埋めた。

「でも、それじゃ、犯人は誰なんだ？」

中嶋君は頼杖を外し、目をギラつかせ、身を乗り出して訊いた。

全員の視線が来須十路に集中する。

「まだ言えない。言う場面ではない。俺は今、事件の見解を述べているのだ。推理を披露しているわけではない」

来須兄はもったいぶるように言った。

肩透かしを食わされ、中嶋君が盛大にずっこけた。

わたしも拍子抜けしてしまった。

全員の口から同種の溜め息が漏れた。

「不満でもあるのか？ 俺の推理を披露し、事件の真相を暴き立て、犯人の名前を告げて欲しいのか？」

「当たり前でしょ！ 今がどういう時かわからないの？ 私たちの気持ちかわからないの？ 今、殺人鬼と同じ空間で同じ空気を吸っているのよ！ そんなの我慢できる？ 三人を……みやびを殺した犯人と一緒にいるのよ！ それを我慢しろって言うの？ 私たちは一秒でも早く犯人を特定して欲しいわけ。見解とかを長々と聞かされるより、拘束された犯人の姿を見て安心したいの！ わかるでしょ？」

五十嵐さんがヒステリックに叫んだ。

設楽さんは隣で頷いている。

「無論、それくらい理解している。しかし、来須兄妹が推理を披露するには、それなりの下準備が必要なのだ……が、宜しい。準備は今この時点をもって整ったことにしよう」

低い声で宣言する十路。

「それでは速やかに儀式を行うとしよう」

「儀式？ 何だ、そりゃ？」

中嶋君が怪訝な顔で訊いた。

それを無視し、来須兄はふっと鼻から息を吹き、徐に立ち上がった。

そして、妹を傍らに呼び寄せ、兄妹仲良く並んだ。

二人は鋭い眼差しで睨んだ。

真悟君を。

「今度は我々来須兄妹として、和泉真悟、君に勝負を申し入れよう」
「どっちが真相に近い仮説を立てて犯人を自白に追い込むか、《勝負》だよっ！」

来須十路は厳かに、来須美架は元気良く楽しそうに、真悟君を指差して挑戦状を叩きつけた。

「不謹慎ではあるが面白い。その勝負、受けて立ちましょう」

真悟君は朗らかな微笑みを浮かべ、しかし全くの無感情な目を来須兄妹へ向け、簡単に承諾した。

【8・来須美架】

推理勝負の開始が遅らされた。

なぜかと言えば、和泉が自分の過去の情報を、私に話して聞かせる為の時間を要求したからである。昼間の約束を誠実に果たすつもりらしい。この状況に至っては、もう真相解明だけに集中し、約束など知らぬ存ぜぬを押し通しても良かったのだ。そうなくても、私は文句を吐けなかっただろう。そんな口約束を真面目に守ろうとするなど……意外に律儀な男である。

私と和泉は二人きりで食堂を出た。

そして、管理人室へと移動した。

内密な話らしいので、兄も藤森も同行を許されなかった。

「保奈美ちゃんが心配そうな顔をしてたよ。浮気するんじゃないか、って不安になったんじゃないかな。ちゃんと理由を教えてあげれば良かったんだよ。それか、一緒に連れてきちゃえば良かったんだよ。あつ、それとも、真悟君てば、私と二人きりでラブラブなボディトークしたかったのかな？」

ドアが閉まる音と共に私は飛びかかる勢いで和泉に抱きつき、からかうように言った。

和泉は僅かに微笑んで、後ろ手でドアの鍵を掛けた。

施錠した？

なぜ鍵を掛ける必要がある？

そう不審に思っていると、腰を抱かれ、引き寄せられ、耳にくちづけされた。

「そうだね。ラブラブかどうかはキミの受け取り次第だが、ここでの会話を保奈美に聞かせるわけにはいかない」

そう耳元で囁くなり、和泉は私を突き飛ばした。酷く乱暴に、全く容赦せずに、一切の手加減なしで。

私は無様に床を転がって滑り、ソファに背中をしたたかぶつけた。
一瞬、息が詰まった。

しかし、背中の痛みよりも、冷静だと思っていた人間から受けた突然の暴力が酷くショックだった。

「痛い……。真悟君はっ、いきなり何すんのっ！ 痛いじゃんかった！」

私は辛うじてキャラを守り、腰をさすりながら怒鳴りつけた。

和泉は声を上げて笑った。可笑しそうに。楽しそうに。だが、その目は全く笑っていないかった。

「ははは、不可思議な台詞を吐くね」

「何が可笑しいのっ！ こんな可愛い女の子に酷いことしてっ、なんで笑うのっ？ 変だよっ、真悟君はっ！」

「変？ 変だろうか？ ボクは、恋人を苛む害虫を駆除して、爽快感に浸っているに過ぎないのだが」

「あっ……。それは……。っ……」

笑顔が引きつるのを自覚した。

それでも、なんとか笑みを保ち、媚びと無邪気さで誤魔化そうと試みた。

が……。

「あと、その戯け調子を直ちに改めるべきだね。その媚態はボクに対して何の役にも立たない。馬鹿のふりは無意味だ」

「馬鹿のふりなんて……」

「していない？ 嘘は許さないよ」

「……………」

冷酷な目で警告され、私は擬態を改めた。バレていることを無理に隠そうとする人間の足掻きほどみつともないものはない。時には諦めが事態を好転させるのだ。

「私をどうするつもりだ！」

私は、下着も露わな横座りの格好で、自棄っぱちになって叫んだ。
「おや、威勢が良いのは両面同じなんだね」

「悪いか！」

「悪くはないよ。キミの本性は、美しく可憐だ。そして、夢げでもある。観賞するに値するよ」

「ふざけているのか！」

「キミたち兄妹ほどふざけてはいない」

和泉は冷然と笑い、眼鏡の奥に輝く切れ長の目を細めた。

そして、真上から見下ろし、人差し指で私の額を突つつく。

「さて、約束を果たす前に聞いておかなければならないことがあるよね。昨日から今に至るまでの保奈美に対する加虐を、キミはどう正当化するのかな？」

「それは……」

「ボクは鬼だが、人間の言葉を聞き、理解する知能を所有しているつもりだ。弁解があるのならば聞こう」

「……………」

弁解できるわけがない。

藤森をイジめる理由は、和泉の情報を引き出す為の布石として、喧嘩沙汰になるギリギリの線を攻めて、彼女の心を不安定にしようとしていたのだ。全ては兄の命令であり、兄の探偵欲を満たす為の言動である。だが、それを言い訳にすれば、兄の計画がご破算になるだろう。

「弁解できないのかな？」

「……………」

ふてくされ顔を作って唇を引き結んで答えないでいると、和泉は私の前で片膝をつき、髪の毛を鷲掴みにした。そのまま引っ張り上げて、私を無理矢理に立たせようとする。

「くっ、痛いよ！ 止めてよ！」

完全に立ち上がった後も更に髪を上へと引っ張られ、私は爪先立ちになって悲鳴を上げた。

「痛い？ そう、痛いだろうね。でも、痛くて当然だ。キミを意識的に痛めつけているのだからね。昼間、保奈美も腕を捻られて悲鳴

を上げ、放して欲しいと哀願したのだろうか？　しかし、キミは放さなかった」

「くっ……痛い、いた、い……。ふ、藤森から聞いたのか？」

「いや、何も聞いてはいないよ。しかし、あの時、保奈美は酷く怯えていたからね。彼女の手首についた痣を見れば、誰でも簡単に推察できる」

「うっ……許して……」

「なぜ？　キミは不当に保奈美をイジメて楽しんだ。しかし、ボクは正当な理由でキミを痛めつけて遊んでいる。さて、どちらが間違っていると思う？」

「謝る！　謝ります！　藤森にちゃんと謝るから！　だから、放してよ！」

「一度味わった恐怖は、謝罪などで拭い去ることはできない。キミは頭の良い女の子なのだから、それくらいわかりそうなものだよ。しかし、まあ、許してあげよう。墓穴の上で下手糞なダンスを踊っている道化者は、いたぶるより観賞している方が楽しめるだろうかね」

和泉は、につこりと頬笑んで言い、髪の毛を引っ張り上げるのを止めてくれた。

私は安堵の吐息を零した。

膝に力が入らず、情けなくもその場にへたり込んでしまう。涙が頬を伝って落ちていく。

そんな私の目の前を、抜けたか切れたかした幾本もの髪の毛が舞い落ちていった。

「保奈美をからかうのは構わない。それをいちいち咎め立てたりはしない。だが、暴力は許さないよ。わかったかな？」

頭に手を乗せられ、優しい感じに撫でられながら、幼児に言い聞かせるような口調で確認された。

私は即座に首を上下させた。

「わ、わかった」

「わかればいいんだよ。さて、それでは本題に入ろうか」

和泉はそう言って私の脇の下に手を差し込み、抱きかかえるようにして立ち上がらせ、足や尻、シャツについた埃を払ってから、ソファに座らせてくれた。そして、乱れた髪が整えられ、捲れ上がったシャツの裾が直され、頬に残る涙の後を拭われた。

だが、尻や内股を触られても恐怖の所為で文句を言えなかった。

一度味わった恐怖はそうそう払拭できるものではないことを、身をもって体験した。

「鷹峰つばさが巻き込まれた事件について聞きたいんだっただね？」

「う、うん……」

返事の声が震えてしまう。

本当は、もう情報なんか要らなかった。

すぐにでも兄のいる食堂へ戻りたかった。

「いいだろう」

和泉は頷き、私の前で屈み込み、真正面から見つめてきた。

「事件の発端は、当時ボクの恋人だった鷹峰由羽が、元クラスメイトの男性に命を狙われたことだった。つばさの姉である由羽についての説明は、今更必要ないよね？」

「うん。それに、その事件なら、渦海警部の報告書を読んだから、ある程度知っている」

鷹峰由羽の通っていた高校の元クラスメイトが凶悪な殺人鬼と化して憧れのマドンナたちを襲った、という連続殺人事件だ。

犠牲者は三名。

いずれもマドンナと称されるだけあって容姿端麗な女であり、由羽の元クラスメイトだった。

報告書によると、渦海恭子が事件を担当し、和泉が犯人の逮捕に貢献したそうだ。

「それならば、少し話を端折っていいこう。ボクは由羽を危険因子から守るべく、彼女の両親や恭子さんにすら秘密にして、自宅の地下

室に匿った。そして、その間に事件の解決を図った。そのお陰もあり、狙われていた元クラスメイトの三名は軒並み命を落としたが、由羽は無事に事件を乗り切ることができたよ。しかし、事件解決直後、ある問題が生じてしまったんだ。元クラスメイトの女性三名を殺害した犯人が、逮捕された元クラスメイトの男性ではなく、このボクであることを見事に推察してしまたんだよ」

一瞬、我が耳を疑った。

「え？」

思わず聞き返してしまった。

「わざとらしく驚かなくてもいい。ここだけの話、由羽の元クラスメイト三名を殺害したのはボクだ」

今、確かに、和泉は、自分が殺人を犯したと告白した。そう私に告げた。

でも、なぜ？ そんなに正直に話していいのか？ ここだけの話とか言っているが、私が兄に報告し、兄が警察に掛け合って事件を再捜査させれば、和泉は間違いなく十三階段を上がることになる。それを承知で喋っているのか？ 私が大人しく口を噤んでいる、とたかを括つての発言なのか？ そうだとしたら致命的である。私も兄も犯罪者に対して極端に厳しいのだ。情は一切示さない。

和泉は、自分の軽率な発言に気付いていないのか、慌てる様子もなく話を続ける。

「犠牲者の中に、由羽の親友が含まれていた点が大きな誤算だった。彼女は警察に真相を明らかにし、ボクに罪を償わせようとした。善意からの行動だったのだろうが……。涙ながらに叱責されたボクは、彼女をそのまま自宅の地下室に監禁した。殺害するのは容易だったが、死体の処理に苦慮するだろうから、彼女を切り刻んで遊びたいと訴える心を必死に宥めたよ。世間は誘拐事件として騒ぎ、ボクはつばさの要請に応じて由羽の捜査を手伝った。無論、ポーズとしての捜査だ。その事件は解決を見ずに迷宮入りするはずだった。しかし、こともあるうちに、つばさが偶然、ボクの自宅を訪れた時に、地

下室を発見してしまったのだ。仕方がないので、彼女も監禁したよ。それから二ヶ月して彼女たちの両親が自殺し、その三ヶ月後に由羽が地下室からの脱走を図った。隠し持っていた鉄柱でボクを殴ってね。勿論、成功しなかった。彼女は確固たる動機と相応の覚悟と苦渋の決意をもってボクを裏切ったのだが、残念ながら戦闘能力に差がありすぎたよ。ボクは、鷹峰妹の眼前で鷹峰姉を綺麗に切り刻み、解体を楽しみ、十分な時間を費やして遊んだ。その過程で、彼女が妊娠していたことに気付いたんだけど……後の祭りだったね。自分の子供を宿した子宮を切り開いたんだ。あれは最悪の経験だったよ。ボクには、《鬼面紳士》の嗜好は理解できないな。ふふふ……」

和泉は心底可笑しそうに笑った。心を犯しそうに笑った。

この男は狂っている……。
完全におかしい。

しかも、それを自覚している節がある。

「姉の温かな亡骸にまみれながら心身を穢されたつばさは、精神崩壊を起こしてボクの意のままに動く人形と化した。由羽の肉片を始末したのは、実の妹であるつばさなんだよ。可笑しいだろう？　だから、彼女に口止めは必要なかった。その理由は……、いまだにボクには理解できないな。もし機会があれば、彼女に直接訊くといい。これが、《鷹峰姉妹誘拐殺人事件》の裏事情だ」

「……………」

正気の沙汰ではなかった。

今、現在、私たちが遭遇している殺人事件の犯人など可愛いものである。

なにしろ、和泉には殺人を犯す明確な動機がない。いや、およそ、綺麗な女を解体する行為に愉悦を覚えるのだろう。それを堪能する為に殺人を犯す快樂殺人者の類だ。そんな危険人物を、殺人鬼を、野放しにしてはおけない。

「もし私が警察に掛け合ったら……」

「無意味だ。被害者である鷹峰つばさがボクの犯行を完全に否定す

るだろうからね」

「そんな……」

「それに、キミたち兄妹の話とボクの話、警察はどちらを信じるだろうか？」

「くっ……」

口惜しいが、私の証言に信憑性はない。

己の意志で自らの世間体を貶めているのだ。

和泉は、警察のエリート官僚だった父を持ち、警察関係者から絶大な信頼を寄せられている。

私は単なる道化者、兄の付属物でしかない。

そんな二人を比較できるわけがなかった。

「それを見越して話したのか？」

「ボクは負ける戦を仕掛けない」

和泉は喉で笑って眼鏡を外した。

擬態を剥いだ。

その瞬間、彼は人ではなくなった。

人でなし。殺人鬼。

そして、私の目を見た。

じっと。

じーっと。

瞳の奥のそのまた奥の更に奥底を覗くように。

目力のみで口止めするように。

私は竦み、怯え、忌み、恐れた。

手足が悴み、体が震え、齒が上手く噛み合わない。自然と涙が溢れてくるなんて、いつ以来だろう。

「おや、泣いているのかい？ ボクを恐れているのかな？ だが、恐れなくていい。ボクは基本的に害虫を無視する性質なんだ。冗談ではなく、駄洒落でもなく、真剣な話だよ。しかし、この世で唯一、ボクの愛する者を傷つけようとする害虫は見過ごせない。ボクの本性を暴かれることで彼女が悲しむのであれば、その危険因子を根絶

するしかない。その意味がわかるよね、美架ちゃん？」

「う、うん……」

「ボクの過去を嗅ぎ回るなら、それ相応の覚悟を決めることだ。見詰め合う程度で心が挫けてしまうようでは、ボクに十三階段を上がらせる偉業は達せられない。わかるね？」

「うん……」

「お兄さんにさり気なくヒントを与えて、ダイイングメッセージを解かせてあげた？」

「うん……」

「推理勝負が楽しみだね」

「……」

「みんなの前に戻ったら、普段の戯けたキミをちゃんと演じるんだよ。いいね？」

「うん……」

「良い子だ」

和泉はにつこりと頬笑んで、私の唇にそつとくちづけをした。

それは、輪姦被害に遭って以来、唇を兄以外に許した初めての瞬間だった。

第五章 来須兄妹の自虐推理 【1・藤森保奈美】

午後五時三十分。

来須妹と真悟君が数分間の話し合いを終えて食堂に戻ってきた。そして、全員が中央のテーブルに集められた。

来須兄妹がカウンター側の席に座り、わたしと真悟君と中嶋君が真向かいの席に並んで座った。

わたしから見て右側の席には設楽さんと本山君と五十嵐さんが、左側の席には西脇さんと春日野と三田村がそれぞれ座った。

これから犯人の名が明かされるとして、全員が少し緊張しているようだ。

「お兄ちゃん、みんながお待ちかねだよ。犯人が誰だか知りたくてウズウズしてるみたいだね。我慢の限界かな。《勝負》、そろそろ始めれば？」

「ああ、そうだな」

妹に促された来須兄は、椅子から立ち上がって両手を広げ、全員が注目しているかどうかを確認するように一同を見回した。

「さあ、それでは、来須兄妹と和泉君の推理勝負を始めることにしよう」

高らかに宣言された。

ぱちぱちぱち、と拍手をしたのは美架だけだった。

「先に俺たち兄妹が推理を披露する。いいかな、和泉君？」

「どうぞ、ご自由に」

「俺たちが犯人を特定し、その人物が罪を認めた場合、君の出番はなくなってしまうのだぞ」

「それならそれで構いません」

穏やかに微笑む真悟君。

「そうか」

来須兄は頷いて椅子に腰掛け、ふんぞり返って足を組んだ。そし

て、顎に手を添えるポーズを作る。

「さて、それでは俺の推理を披露しよう。そして、犯人に罪を認めさせてみせよう」

そう言うのと、来須兄は顎先に当てていた手を外し、人差し指を立てて、ある人物を指し示した。

みんなの視線がそこに集中する。

「上妻博之、梅本春樹、緒方みやびの三名を殺害した犯人は……君だ」

来須十路は厳かに告げた。

食堂内が無音のどよめきに包まれた。

指差された人物。それは……。

設楽松美だった。

「私……が犯人？ 十路君、それ、本気で言っているのかしら？」

設楽さんは一瞬両目を見開いて驚きを露わにしたものの、すぐに冗談ばい笑みで口許を飾り付けて聞き返した。

「無論、本気だ」

「おい、何馬鹿なことを言ってるんだ！」

中嶋君が憤慨して腰を浮かせ、テーブルを壊すくらい力強く拳を打ちつけた。しかし、来須兄はおろか設楽さんにも無視され、すぐと腰を降ろす。

「何か決定的な証拠があるのかしら？」

設楽さんは薄笑いを浮かべて訊いた。

「物的な証拠は何もない。だが、山荘内の人間全員のあらゆる情報を踏まえた結果、導き出された答えだ」

「いきなり決めつけられても、《はい、私が犯人です》なんて認められないわよ」

「当然だろうな」

「それなら、ちゃんと説明して欲しいわね」

「すると。君が犯人であることを論理的に解説してゆくつもりだ。そして、その上で反論するなり、弁解するなり、悪足掻きするなり、泣くなり喚くなりするがいい」

「聞かせてもらいましょうか」

設楽さんは自分の胸を抱き締めるように腕組みし、真っ直ぐに来須兄を睨み付けた。

「宜しい」

にやりとニヒルに笑って、来須兄は再び右手を顎に添えた。

「それでは、今回の連続殺人事件を解説していくとしよう。いいかな？」

誰からもストップの声は上がらなかった。

「宜しい。まずは、今朝方に起こった上妻博之の墜落死についてだが、この件に関しては昼間に解説した通りなので、今更話すことは何もない。単独犯であった場合の容疑者は、本山純太、設楽松美、中嶋剛志、梅本春樹の四名だ。そして、複数犯であった場合は、その四名に緒方みやびと五十嵐由利を加えた六名が容疑者となる。緒方さんと梅本君の二人は死亡したが、容疑が晴れたわけではないので、一応名前を連ねておく。これに、上妻君がトイレに立った際に偶然出くわした人間に突き落とされた可能性もある、という和泉君の意見を取り入れて推考すると、誰にでも犯行が可能だったことになるから、犯人を特定する材料にはなり得ない。ゆえに、この件は警察に任せようと思う」

来須兄はみんなの反応を確かめるように、一度話を切ってぐるりと見回した。

「次に、梅本春樹の死についてだが、これも昼間に解説した通り、誰にでも犯行は可能だった。単独犯と仮定した場合、多少容疑者を絞り込むことができるが、複数犯と仮定すると全員が容疑者になってしまう」

「ってことは、みやびの時だけは違っって言いたいわけ？」

五十嵐さんは、犯人だと告げられた設楽さんを、本山君越しに睨

み付けながら訊いた。

「その通りだが、口を挟まないで欲しいな」

「……悪かったわよ。続きを話して」

「宜しい。緒方みやびが殺害されたと思われる時刻、すなわち五十嵐さんが《103号室》を出てから彼女の死体を発見するまでの短い時間に、山荘内を移動していた人間は少ない。《107号室》にいた和泉真悟、中嶋剛志、藤森保奈美の三名は、五十嵐さんの悲鳴を聞くまで部屋から出ていない。同様に、食堂にいた俺たち兄妹と警察官のお二人も悲鳴を聞くまでそこから動かなかった。今挙げた七名は容疑者から外してもいいだろう。すると、残された人間は、西脇園子、五十嵐由利、本山純太、設楽松美の四名だけだ。そこまでは容易に理解できるだろう？ 宜しい。その中で真っ先に疑われる人物は、緒方さんと言葉を交わした最後の人間である五十嵐由利だ。彼女は緒方さんにシャワーを浴びさせておいて、その間に食堂へ行つて昼食を取つてしようとしたそうだが、その時、実際に緒方さんが生存していたかどうかは不明だ。可愛い後輩を惨殺しておいて、何食わぬ顔で食堂へ向かおうとしたのかもしれない」

「ちよつと、ふざけないで！ 私がみやびを刺し殺したつて言うの？ 冗談じゃないわ！ あんた、何様のつもりで……」

「喚くな！」

その一喝で五十嵐さんを黙らせ、来須兄は解説を続ける。

「その時、廊下で偶然に出会った設楽さんは、緒方さんの声を聞いていないと証言している。つまり、五十嵐さんは立派な容疑者だ。しかし、ここで問題にしなければならないのは、緒方さんを刺殺せしめた凶器の行方である。犯行現場に残されていなかった以上、その間、犯人は血塗れの凶器を隠し持つて移動していたと見ていい。その時、廊下に出てきた五十嵐さんは何も持つていなかった、と設楽さんが証言している。そして、彼女の服装からして、この果物ナイフを隠し持つて移動することなど不可能だろう。いや、その際は持ち出しておらず、緒方さんの様子を見ると言つて部屋に戻った時

に持ち出し、どこかに隠した、とも考えられるが、五十嵐さんが《107号室》を出てから悲鳴を上げるまでの時間を踏まえると、まず不可能だろう。何より、明確な犯行動機がない。ゆえに、五十嵐由利は容疑者のリストから除外された」

「当然ね」

五十嵐さんは当然のような顔をしているが、ほっと一安心したことは隠せない。彼女は肩の力を抜いて椅子の背もたれに寄りかかった。

「次に疑わしい人物は本山純太だが、彼に緒方みやびを殺害することとは不可能だったと断言できる。なぜならば、五十嵐さんが部屋を出たところを見計らって殺人の準備をし、五十嵐さんと設楽さんの訪問に應對しておいて、二人が一階に下りるのを確認してから《103号室》を訪問し、緒方さんを手際良く刺殺して部屋に戻り、その直後に昼食を持って部屋を訪れた設楽さんに平然と應對しなければならなかったのだ。やってできないことはないが、偶然性に頼った行き当たりばったりの犯行になってしまう。しかし、それはあり得ない。犯人は返り血を浴びない工夫をしなければならなかったし、凶器も処分しなければならなかったのだ。彼にそんな時間的余裕はなかった。設楽さんとの共犯であれば犯行は可能だが、凶器のナイフが彼の部屋から発見された時点で二人が共犯である可能性はなくなった。それに、何よりも、裸同然だった緒方さんが、恋人でもない彼に無防備を晒してドアを開けるなど常識的に考えてあり得ないゆえに、本山君は容疑者のリストから除外された」

来須兄は僅かに口を歪ませて言った。

心に重くのしかかっていた負荷を吹き払うように、本山君はふっと大きく息を吐いて額の汗を拭った。

「本山君と同様に、一人で管理人室に籠もって組合への電話報告をし、組合に提出する報告書を書いていた、という西脇園子も早い段階で容疑者から除外された。その理由は単純だ。一階の管理人室に籠もっていた彼女には、緒方さんと五十嵐さんが別々に行動してい

たことを知る術がなく、まして、タイミングを計って犯行に及ぶことなど不可能だったのだ。何よりも、彼女にはイベント参加者三名を殺害する明確な動機がない。ゆえに、西脇さんは容疑者のリストから除外された」

自分も容疑者から外されると、西脇さんは茶目つ気たつぷりな笑みを浮かべ、エプロンの前をぱんと叩いた。

来須兄は左右の足を組み替え、顎に添えていた手を再び設楽さんに向けて指し示した。

「さあ、残されたのはただ一人、設楽松美、君だ」

「ええ、そうね。でも、最後まで容疑者のリストに名前が残ったから犯人だ、なんて言ったら笑うわよ。そんな馬鹿げた推理、到底受け容れられないもの」

設楽さんの目つきは尋常でなく鋭い。しかし、艶やかに微笑んで挑発的発言をする。

来須兄は余裕の笑みで応えた。

「当然だ。俺は天才であって愚者ではない。理由もなく君を犯人呼ばわりする愚かさとは無縁だ。今から君の犯行を解説してゆくから、安心して聞いていればいい」

「拝聴しましょう」

「宜しい。前もって言うておくが、設楽松美には明確な犯行動機がある。それが何であるかは後で本人の口から直接聞くとしよう。俺は彼女がいかにして緒方みやびを殺害したのかを解説していこうと思う」

一転して、来須兄の眼光が獲物を狙う猛禽のごとく険しくなった。「設楽さんは朝方行われた事情聴取の後、本山君としばし言葉を交わし、彼の部屋にジューズを運ぶ手伝いをした。そして、彼がラジオに夢中になっているのを確認して《104号室》を訪れ、梅本君を絞殺した。その後、中嶋君の誘いに乗って和泉君と藤森さんのいる《107号室》を訪れていた設楽さんは、昼時になり彼らが食堂へ向かおうとすると、本山君と梅本君の様子を見るついでに自分が

昼食のサンドイッチを取ってくると言って部屋を出た。およそ、緒方さんか五十嵐さんのどちらかを殺害する為だろう。彼女の計画では、どちらかを食堂に誘うふりをして二人を引き離し、部屋に残った方を殺害する予定だったに違いない。だが、幸運にも、五十嵐さんが自ら廊下に出てきてくれたので、誘い出す手間が省かれた。設楽さんは五十嵐さんを食堂へと誘い、梅本君と本山君の部屋を訪れてから食堂へ下りた。その時も既に梅本君は絶命していたが、廊下からは彼が熟睡しているようにしか見えなかった。設楽さんは食堂に入ると、キッチンでの作業を五十嵐さんに任せ、自分はゴミ捨てに行つてくると言って食堂を出ていった。設楽さんは、緒方さんを殺害する時間と自分のアリバイを確保する為に、『107号室』からお茶道具のセットとゴミ箱を持ってきていたのだ。そして、殺人を実行した。まず、倉庫に置かれている合羽を取る際に、死体が怖いという理由で五十嵐さんに同行を願い、ゴミ捨てに向かう自分を印象付けた。しかし、外には向かわず、二階の自室に戻って持参した凶器を持ち出し、返り血対策として合羽を纏い、『103号室』を訪れて緒方みやびを惨殺した」

来須兄はテーブル上に置かれたビニール袋の中の果物ナイフに視線を落とし、ダーティな感じに唇の端を歪ませてから、五十嵐さんと設楽さんを交互に見た。

五十嵐さんは右手の指に歯を立てて、横目で設楽さんを睨んでいる。

設楽さんはその視線から逃れる為か、姿勢良く座っていながらも、眠るように瞼を閉ざしていた。

「緒方さんを首尾良く殺害した後、設楽さんは合羽に付いた返り血をシャワーで洗い流し、急いで『103号室』を訪れて、既に死んでいる梅本君を滅多刺しにした。なぜ発見される危険を冒してまで息絶えた者を刺しに行ったのかは……俺にはわからない。犯行動機から生じる感情的な行動だったのかもしれない。その後、設楽さんは自室に戻り、凶器をひとまず隠し、ゴミ捨て場まで行ってきた

かのように見せる為に、ゴミ箱を自室の物と交換した。そして、合羽を倉庫に返してから食堂に戻ったのだ。あとは、五十嵐さんを手伝い、彼女と共に《107号室》へと昼食を運ぶだけだった。しかし、その後、本山君の部屋にサンドイッチを持っていくついでに、キッチンに置き忘れたお茶道具とゴミ箱を取りに向かわなければならなかった。この手間は予定外だったに違いない。なぜなら、あまり時間をかけると、苦労して作ったアリバイが意味をなさなくなってしまうからだ。それゆえ、設楽さんは《107号室》からキッチンまでを駆け足で往復したのだろうな。ああいや、走るのは得意だろうから、さほど苦労しなかったのかな。それを素早く終えてしまえば、もう、あとは、和泉君たちとサンドイッチを食べながら、五十嵐さんが親友の死体を発見して大騒ぎするのを待つだけだった。死体が発見された後、凶器を本山君の部屋に隠すのは容易だっただろう。食堂に呼び集められるまでの間、彼女は三田村さんと二人きりで《108号室》にいたのだからな。トイレと偽れば、怪しまれずに単独行動ができる。どうですか、三田村さん？」

「ああ、確かに彼女は一回だけ便所に行った。俺と一緒に行って行ってやるうかつて訊いたけど、恥ずかしいから一人で行くって言って部屋を出ていったんだ」

三田村はしきりと貧乏揺すりをしながら答えた。落ち着きのない人である。殺人鬼と同席しているのだから不安なのはわかるが、周囲に悪影響を及ぼすような仕種は止めて欲しい。

来須兄は「さあ、どうだ」と言わんばかりに、瞼を下ろしたまま眠ってしまったかのように身動き一つ見せない設楽さんを見据えた。

【2・藤森保奈美】

来須十路は容疑者を見据える。

「これが設楽松美を犯人と仮定した上での、俺の仮説だ。きちんと理に適っていると思うが、どうだろう？」

「……証拠はあるの？」

設楽さんは伏し目がちに瞼を開き、井戸の底から響いてくるような低く静かな声を発した。

彼女に追い詰められている感じはない。勝利の角笛を吹き鳴らさんと待ち構えている来須兄にも、落ち着いた対応をしている。

「和泉君の部屋のゴミが、なぜか君の部屋のゴミ箱から発見された。君が出したと思われるゴミと混ざって、だ。それは、君がゴミ置き場まで行かなかった、という証拠になると思うぞ。それ以外の物的証拠はないが、君以外の誰も緒方さんを殺害することができなかった以上、その証拠をもって犯人と断定するしかない」

「それで私が納得して、潔く罪を認めると思っているのかしら？」

「納得して欲しいと真剣に願っている」

「そうしないと、自分の優秀さが証明されないからかしら？ 超天才名探偵だものね。でも、私、君の下らない自尊心を満足させる為人殺しにされたくないのよ」

毒混じりの嘲笑を浮かべて、設楽さんは言い放った。

この人、見かけによらず怖い性格をしているらしい。

来須妹と同様に、今まで猫を被っていたようだ。

小馬鹿にされても来須兄は憤激せず、ふっと鼻で笑い飛ばした。
「緒方さんが殺害された後、シャワー室の鏡に残されていたダイイングメッセージの話をしただろう？ 覚えているか？」

来須兄が薄笑いを浮かべて訊くと、設楽さんは可笑しそうに頷いた。

「ええ、覚えているわよ。平仮名で『あいうえおか』でしょう？」

それが何か？ 緒方さんが死に際に残したメッセージも、解けなければ意味不明の落書きよ」

「ああ、そうだな。誰にも解けなければ、ただの落書きだ」

「……解けたの？」

数秒間の静寂を発生させてから、設楽さんはゆっくりと透明感のある声で訊いた。

「無論だ。来須兄妹に解けない謎はない」

来須十路は傲慢一步手前の自信に満ちた笑顔を見せ、大きく上下させた。

「さっずがお兄ちゃん！ 超天才名探偵の称号は伊達じゃないねっ！」

万歳三唱しながら、美架が陽気に叫んだ。

来須兄にあの謎が解けたのは、真悟君のヒントを間接的に聞いたからだ、と思っただけと黙っておいた。

「あのダイイングメッセージを解くには、ある情報が不可欠だ。それは人名であり、昨年のイベントに参加した数名の名前であり、ある悲劇の関係者でもある」

「悲劇？ 何だそりゃ。今回の事件と何か関係があるのか？」

中嶋君が当たり前のことを訊いた。

「あるからこそ、メッセージを解く鍵になり得るのだ」

「関係者って誰なの？」

悲劇と聞かされた西脇さんは、怪訝そうに顔をしかめる。

「昨年も管理人を担っていたそうなので、黙っていらなかったのだらう。」

「今日殺害された上妻博之、梅本春樹、緒方みやびの三名に加え、五十嵐由利、設楽松美、そして今年参加していない江藤小枝子の六名です。しかし、ある理由から、梅本君を思考から除外します」

「その六人、何をしたの？」

「それは俺の口からは言えません。後ほど設楽さんから聞いて下さい」

「おい、もったいぶらねえで解説しろよ」

中嶋君がせつついた。

「宜しい。それでは、君たちにもわかりやすく解説していこう。まず、上妻君、梅本君、緒方さん、五十嵐さん、設楽さん、江藤さんの六名を《あいいうえおか》の順番に並べてみて欲しい。どうか、中嶋君？」

「えーっと……上妻、五十嵐、梅本、江藤、緒方……ん？ 設楽さんだけ仲間はずれだぞ。どうすんだ？」

「そう、彼女は法則の中にいない。それゆえに除外する」

「除外？ そう言えば、梅本さんも除外するんだっけな？」

「いかにも」

「そうすつと……何だ？ 何がどうなるって言うんだ？」

頭を抱える中嶋君。

わたしには何となくわかってきた。

「中嶋君、わかんないの？ ここまで盛大にヒントを大盤振る舞いされてなのに、見当つかないのかな？」

美架がからかった。

「うつせーな、貧乳娘！ わかんねえもんはわかんねえんだよ」

「あつ、貧乳は酷いんだよっ！」

「ケツなし娘」

「私、お尻あるもんっ！」

「ケツも乳もペツタンコだろ」

「可愛いからいいのっ！」

「色気ゼロだから、ロリコン野郎狙いか？」

「ひいっつ、鬼だあっ！」

「事実だろ」

「あつっ」

ダイイングメッセージから完全に脱線した話をしている二人を尻目に、来須兄は小さく溜め息を吐いてから解説を再開した。

「上妻、五十嵐、江藤、緒方を平仮名に変換してみるといい。あが

つま、いがらし、えとう、おがた。つまり、《あ》が《つま》、《い》が《らし》、《え》と《う》、《お》が《た》だ。それをダイイングメッセージに当てはめるのだ。すると、どうなるか」

「《え》と《う》は、どうやって当てはめるの？ 《あ》と《い》と《お》は、《つま》と《らし》と《た》になるけど……」

困惑する五十嵐さん。

「江藤さんは今回のイベントに参加していないでしょう？ だから、《え》と《う》の文字は除外するんですよ」

真悟君が助け船を出した。

「そっか……。ってことは、《つまらしたか》になるわね。つまらしたか……。って何？ どういう意味なの？ それに、《か》は変えなくていいの？」

「勿論、変えるとも。ダイイングメッセージが《鏡》に書き残されていた点を考慮すればわかるだろう」

「あ、そっか！ 《か》が《み》ね。ってことは……。《つまらしたみ》？ あ！ 文字を並べ替えると《したらまつみ》になるわ！」

五十嵐さんが歓声を上げた。

「そう。ダイイングメッセージの解答は《したらまつみ》だ。つまり、《設楽松美》だ。緒方さんは殺害される間際、犯人の名前を暗号に変換し、五十嵐さんが解いてくれると信じて書き残したのだ」

「なんつう凝った暗号だよ……。こんなの普通、ヒント貰っても解けねえぞ。俺の頭じゃ一生かかっても無理だ」

中嶋君が髪の毛をくしゃくしゃに掻き回しながら、敗北宣言をした。

「そうよね。あの子だったら……。死にそうって時にこんなややこしいクイズを作るなんて……。そんな余裕があるなら、逃げる努力をすれば良かったのよ……」

五十嵐さんは涙で目を輝かせながら、苦み成分の混じった笑みを浮かべた。

「十路君、君は間違いなく名探偵だよ」

「ほんと、すげえな、おまえ」

殆ど設立たずだった警官の二人が来須兄の頭脳を褒め称えた。

来須十路は称賛の声を浴びると、にやりとシニカルな笑みを作った。

「さあ、設楽さん、何か言いたいことがあるか？ 弁解するのであれば聞こう」

「そんなのこじつけよ！ あれは確かに緒方さんの残したメッセージでしょうけど、他の解釈もできるに違いないわ！」

今まで余裕を保っていた設楽さんが、清楚な美少女というイメージをかなぐり捨てて顔を引き歪め、椅子を蹴って立ち上がり、視線で射殺するくらいの眼光で来須兄を睨み、髪の毛を振り乱して絶叫した。

食堂内がしーんと静まり返る。

「うわあつ、悪足掻きしちゃったよつ。堂々と罪を認めれば、後で惨めな思いをしなくて済むのにねーっ」

囁き声とは言い難い美架の嘲りが室内に響き渡った。

彼女は設楽さんに無言で睨まれ、ぺろつと舌を出して首を竦めた。
「それならば、君が知恵を絞って他の解釈とやらを示してくれ。それこそが正解であると判断されれば、俺は素直に過ちを認めて君に謝罪しよう」

来須兄は勝ち誇った顔に若干の哀れみを宿して言った。

「……………」

設楽さんは言い返さなかった。

「このひとでなし！」

五十嵐さんが、隣の本山君を押し退けるようにして、設楽さんに掴みかかった。

二人は髪の毛を引っ張り合い、拳で殴り合い、小学生紛いの悪罵をぶつけ合った。

その争いの中で、設楽さんの眼鏡が吹っ飛んでいき、トイレの前

に落ちる。

しかし、すぐに中嶋君と真悟君が止めに入り、どちらも大きな怪我を負う前に引き離された。

突き飛ばされた本山君は、派手な音を響かせて後方に転倒したけど、どこも怪我をしなかったようだ。

「どうして、設楽さん？ どうして、みやびたちを殺したの？」

中嶋君にカラオケ機材の前まで引きずられていった五十嵐さんが、怒鳴り声で叫んだ。涙と負の感情で顔がぐしゃぐしゃだ。

真悟君にトイレの前まで連れていかれた設楽さんは、乱れた髪を撫でつけつつ、彼に眼鏡を拾い上げてもらったことにだけ声に出して礼を述べたが、五十嵐さんの問い掛けには応えなかった。

「犯行動機を聞かせてもらえないか？」

十路が訊いた。

「……………」

沈黙で答える設楽さん。

「仕方がない。あとは警察に任せることにしよう。犯人を特定して全員の安全を確保する、という俺の役目は終わった。春日野さん、三田村さん、あとのことはお任せしますので、宜しく願います」「うむ、任してもらうでよ。ほんと、君は良くやってくれたで、感謝せんといかんもん」

春日野はそう言っただけで席を立つと、来須兄の功を労うように肩を数回叩いた。

三田村は犯人が特定された途端に息を吹き返し、今日一日味わわれた恐怖を怒りに変えて設楽さんに歩み寄り、腰にぶら下げた手錠を取り出して、彼女の左腕と自分の右腕にガチャツとはめた。

「さて、首尾良く犯人が拘束されたので、もう命の危険はない。ゆつくりと夕食を楽しもう。西脇さん、食事の準備をお願いします」

「了解！」

「うわあい！ 勝利の晩餐だねっ！ 私、お腹ぺっこぺこだよーっ

！
┐

美架がお腹を押さえて軽快な歓声を上げた。

【3・藤森保奈美】

食堂を満たしていた緊張感が消滅した。

親友を失った五十嵐さんや、敬慕していた先輩が犯人だった本山君は、そう簡単に感情を切り替えてリラックスすることなどできないだろうけど、被害者と加害者に直接的関係を持っていない者は、恐怖心を安堵の吐息と共に体外へ放出し、夕食が用意されるのを待った。

わたしと真悟君は一度自室に戻って気分転換のシャワーを浴び、ちよつとイチヤイチヤしてから食堂に戻った。

五十嵐さんもどこかの部屋でシャワーを浴びてきたようだ。ブラウスにジーンズだった服装が、格子模様のワンピースになっていた。中嶋君は食前酒をちびちびと飲みながら、「今夜も飲みまくってやるぞ」という独り言を繰り返している。

本山君は、死の恐怖とあらぬ容疑から解放された反動で、ぐったりとテーブルに突っ伏していて、ぴくりとも動かない。恋心をいだいていた設楽さんが犯人だったショックは、彼にとって相当に大きなものなのだろう。

来須兄は春日野と何やら話し合っている。きっと、山道が通行可能になるまで設楽さんをどう扱うか、相談しているのだろう。

来須妹は両手を飛行機の翼のように広げ、シャツの裾をひらひらと靡かせて下着をチラつかせつつ、「きーん」と叫びながら食堂内を所狭しと駆け回っている。周囲の迷惑などお構いなしだ。五十嵐さんや本山君に対する配慮がなっていない。でも、誰も注意せず、全員で無視を決め込んだ。

設楽さんは、カラオケ機材の前に位置するテーブルに、三田村と並んで座らされている。彼女は完全な無表情でテーブルの一点を見つめ続け、周囲で美架が騒いでも微動だにしなかった。

「さ、みんな、準備ができたわよ。カウンターまで料理を取りに来て下さいな」

西脇さんの呼び掛けに応じて、わたしたちはカウンターに向かった。

夕食のメニューは、温かい素麺と山菜の和え物、冷製スープ、和風サラダの四品である。

「美味しそうですね。ボクは和食に目がないので、山菜の和え物をお代わりしてしまうかもしれません。西脇さんのお手製ですか？」

真悟君が料理を乗せたお盆を受け取りつつ訊いた。

西脇さんは笑顔で頷いた。

「そう。和え物は私の得意料理の一つよ。スープとサラダは昼間、設楽さんに手伝ってもらったけど、まあ、全部、私の味付けね」

「それは素晴らしい」

わたしたちは中央のテーブルに陣取った。ささやかな希望としては真悟君と二人きりで食べたかったのだけど、来須兄妹が断りもなく相席できて、わたしの幸せ気分を台無しにしてくれた。でも、邪魔だから他のテーブルへ行け、とは言えないので我慢する……。

許せなかったのは、美架が真悟君の隣に座り、十路がわたしの隣に座ったことだが、それは真悟君と向かい合う席に座ったわたしのミスなので、文句は言えなかった。

「いっただつきまあすう！」

美架の元気な声を合図に夕食を食べ始めた。

「設楽さんが犯行を認めてくれさえすれば真に一件落着なのだが、なかなかどうして、外見に反して強情な女性だな」

来須兄はスープを啜りながら言った。

「あれくらい気が強くなきゃ、あんな殺人は犯せないよつ。それが、元々の大人しい性格を歪ませるくらいのマイナス要因に犯されたかだねっ」

美架はそう言って、大口を開けてサラダを掻き込み、もぐもぐと

咀嚼する。食欲旺盛だ。事件の影響を一切受けていない。きっと、肉料理も生ものもへっちゃらなのだろう。強靱な精神力の持ち主というよりは、心のダメージ計測装置が故障している可能性が高い。「考えるまでもなく、去年のレイプ事件がマイナス要素の発生源だな」

「江藤さんがレイプされた仕返しだねっ？」

「それしか俺たちには思い当たる動機がない。完全な情報不足だ。しかし、事件は解決したのだから、今更動機など知る意味はない。あとは全て警察の仕事だ」

「そうだねっ！」

そうだろうか。

わたしはそんな風に簡単には割り切れない。短い間とはいえ、同じ宿泊施設で一夜を共に過ごした仲間が三人も殺害されたのだ。一緒に肝試しや飲み会などのレクリエーションもした仲である。だから、わたしは事件に巻き込まれた人間としてだけでなく、設楽さんの犯行動機を知っておきたい気持ちがあった。

「あれを見る。設楽さんは平然と素麺を食べているぞ。動揺している様子がない。反省する素振りもない。罪の意識すら感じさせない態度を保っている。およそ、余程の覚悟を決めて今回のイベントに参加したのだろうな」

「でも、捕まる覚悟はしてなかったんじゃないかなっ。色々偽装工作してたし、悪足掻きもしちゃってたしさっ！」

わたしは来須兄妹の会話を聞きながら、素麺を啜り込んだ。

うん、美味しい。

心持ち薄味だけど、七味唐辛子の風味がアクセントになっているから、物足りなさを感じない。

「さて、和泉君、そろそろ一連の事件に対する君の見解を聞かせてくれないか？」

来須十路はスープを飲み干すと、お行儀悪く箸の先で真悟君を指して要求した。

真悟君は山菜の和え物を摘む箸を止めて、穏やかに微笑んだ。

「意見など何もありません。犯人は設楽松美です。そして、貴方の立てた仮説とボクの持っている仮説は非常に酷似しています。ここで披露する意味はありませんよ」

「それでは、今回の《勝負》は俺たち兄妹の勝ちだと認めるんだな？」

来須十路は緩む口許を右手の平で覆い隠すようにして、真悟君の口から敗北宣言を聞こうと身を乗り出した。

「申し訳なく思いますが、現段階ではまだ敗北宣言はできかねます。しかし、事件の展開上、ボクの方が劣勢であることは周知の事実ですな」

真悟君は丁寧にお辞儀してみせた。
物凄く慇懃無礼だ。

来須兄が顔を引きつらせる気持ちも理解できなくない。

「どの段階に至れば、己が敗北を素直に認めるのだ？」

苛立ち含みの口調で来須兄が訊くと、真悟君は明快に答えた。

「貴方が設楽さんに罪を認めさせたなら、その瞬間に膝を屈して頭を垂れ、ボクの力が貴方に及ばなかった無念を言葉に換えて、誠心誠意、敗北を宣言すると約束しましょう」

「二言はないな？」

「ボクが約束を違えたことなどありませんが、保奈美に対する愛情にかけて誓いますよ」

「宜しい」

真悟君は絶対に約束を破らない。

少なくとも、わたしとの約束を破ったことはない。

つまり、それくらいわたしを愛している？

ちよつと照れた。いや、かなり照れた。

「ひゅーひゅー！ 妬けるよっ、保奈美ちゃん！ 役満縛りで愛されちゃってるねっ！」

意味不明だが、からかわれていることに間違いはない。

わたしは紅潮する顔を隠すように俯き、無言のまま素麺を啜った。

「あれっ、真悟君、どこ行くのっ？ まだ素麺がだいぶ残ってるよっ！ それに、保奈美ちゃんも食べてる途中だしっ。途中退場はお行儀悪いんだよっ！」

山菜の和え物を食べ終えた真悟君がすっと席を立つのを見て、美架は釣られるように立ち上がり、叱責するように叫んだ。

完全に自分自身の非常識さを棚上げしている。

「トイレだよ。一緒に来たいの？」

「あ……ううん、行つてらっしゃいっ……」

さすがの来須妹もトイレまでついて行く非常識さは持っていないらしい。大人しく腰を降ろして、スーパの器を抱え上げた。

真悟君は一度わたしの横に来て何か囁いたけど、美架のブーイングが煩くて上手く聞き取れなかった。

「何？ 真悟君、もう一度言つて。外野が煩くて聞こえなかったの」「はいはい！ 煩い外野でえーすっ！」

自覚している小悪魔。

真悟君は苦笑を残してトイレへと行ってしまった。

本当にこの小娘は……。

「美架ちゃん、いい加減にしないと、わたしもそのうちに怒るわよ」きゅっと睨んで威嚇する。

「お尻ぺんぺんするのかなっ？」

「あまりふざけると酷いわよ。お尻が倍くらい腫れ上がるまで叩くから」

「どうせなら、おっぱいを叩いてCカップにして欲しいかなっ。せめて保奈美ちゃんくらいの大きさにねっ」

「……………」

わたしはDカップです、という叫びを飲み込んで食事に集中する。お馬鹿娘を相手に、ムキになってはいけない。余計にからかわれ、心にかすり傷をたくさん負うはめになるだけだ。心を落ち着ける為

にも冷たいスープを飲んで……ん？

気付くと、スープの入った食器が空っぽになっていた。

あれ……サラダもない？ おかしいな……。

どうやら、我知らず食べてしまったらしい。事件のショックは温かいシャワーと共に流れてしまったと思っていたのに、まだ少し動揺しているようだ。

わたしはいつの間にか夕食を完食していた。その割に、お腹の中は不満を訴えている……。

トイレから戻った真悟君は、素麺を食べ終わると、わたしの食器も一緒にカウンターまで運んでくれた。

時を同じくして、他のみんなも食事を終えたようだ。

中嶋君は食器をカウンターに運ぶと、わたしたちに夜の予定を訊いてきた。

「おまえら、この後どうすんだ？」

「部屋に戻ってお酒を飲もうかと思っているよ。キミも一緒にどうかな？」

「おう、悪くねえな」

わたしたちは数本のお酒を持って自室に戻った。本山君と五十嵐さんも誘ったけど、とてもじゃないがお酒を飲む気にはなれないと言って断られた。

本山君は自室でラジオを聴くそうだ。

五十嵐さんは自室が血塗れで使えないので、設楽さんの部屋に移り、当の設楽さんは《108号室》に強制移動させられて春日野と三田村の監視の下で朝まで過ごすことになった。

部屋に戻る途中、真悟君は中嶋君を連れてトイレへと入り、しばらく出てこなかった。

何をしていたかと言えば、せっかく食べた夕食を全て吐かせていたそうだ。

「なんで吐かなきゃなんねえんだよ。喉の奥まで指突っ込みやがって。強引な奴だな。お陰で気分が悪くなって来やがったぞ。それに、空きっ腹に酒はやバイんじゃねえのか？ 胃袋に潰瘍ができちまつたらどうすんだよ。慰謝料ぶん取るぞ」

「ぎゃいぎゃいと文句を吐き散らかす中嶋君を宥めながら『107号室』へと連れ込む。」

三人で卓袱台を円く囲むように座った。

早速、わたしは三人分のグラスを用意し、数個ずつ氷を入れ、それぞれの前に差し出した。

でも、お酒は注がない。適量を注ぐ自信がなかったからだ。

中嶋君はキッチンから持ってきた焼酎をどくどくと手加減なしに注ぎ、グラスをお酒の原液で満たした。かなりきつそうだ。わたしの飲める飲み物ではない。

真悟君はコニヤックというお酒をグラス半分まで注ぎ、マドラーで攪拌した。

わたしは真悟君と同じお酒を、物凄くうすく作ってもらった。

「さーと。まずは、事件が無事に解決したことを祝って乾杯だな」五十嵐さんや本山君が聞いたら激怒するような暴言を、中嶋君はグラスを目の高さに掲げて陽気にのたまった。

「無事ではないよ。三名もの犠牲者を出しているんだ。軽率な発言は慎むべきだろう」

すかさず、真悟君が咎めた。

「あ、そっか……。そうだな。もとい。俺たち三人の無事を祝して乾杯だな」

「死者に対して冥福を祈ろう」

「おう」

グラスを軽く触れ合わせ、乾杯。

わたしは静かに二人の会話を聞くことにした。

「しかし、設楽さんが殺人犯だったなんて……。俺、露ほども

疑ってなかったぞ」

中嶋君はグラスに口をつけて焼酎をずーっと啜ってから、やりきれない思いを吐き出すように嘆息した。

気に入っていた女の子が殺人犯だったのだ。そのショックは小さくないのだろう。もし真悟君が設楽さんのように残酷な殺人を犯したら、わたしはショックのあまり一生立ち直れないかもしれない。

「こんな山奥まで来て、殺人鬼と同じ宿に泊まって、仲良く酒なんか飲んだりして、俺ら、いったい何やってんだろうな……」

「美術部の合宿だと思っていただけ？」

「ふざける。笑えねえぞ」

「もし明日、雨が上がっていたら、山荘を出て写生でもするかい？」

「ふざけすぎだろ。そんなところ見られてみる。五十嵐さんにぶち殺されちまうぞ」

「そうだろうね」

「……なあ、和泉」

「何かな？」

「おまえ、いつ頃からわかってたんだ？」

「何について？」

「設楽さんが犯人ってことをだ」

「ダイイングメッセージを発見した時だよ」

「そんなに早く？」

「鏡の文字には血が混じっていて、鏡を曇らせると指紋がくつきりと浮かび上がったんだ。その指紋を調べた結果、緒方みやびのものと一致した。つまり、あれを書き残した人物は緒方みやびである、と断定していいだろう。あとはメッセージを解くだけだった」

「解くだけ……って、おい。そう簡単に解けねえだろ、あれは！」

「そうかな。昨夜、今年のイベントで設楽さんと江藤さんが被害を受けたという話を五十嵐さんから聞いていたからね。『あいうえおか』の文字を見て、上妻、五十嵐、梅本、江藤、緒方、鏡と当てはめないわけにはいかなかった」

「おいおい……」

中嶋君は眉をひそめて、指で額を押した。

「唯一、梅本さんの名前をどう処理するか悩んだけど、五十嵐さんと設楽さんの証言を聞いて解消できたよ」

「おいおい、マジかよ……。おまえ、やっぱり普通じゃねえよ」

驚く気力もないという風に、中嶋君は呆れ気味に呟いた。

「あの名探偵が得々と喋ってたことなんて、とつくの昔にわかってたってわけか……」

中嶋君はなぜか辛そうに吐息する。

「うつつ、気持ち悪いぞ……。たかが焼酎の一、二杯で酔ったみてえだ。おかしいな……。やっぱ、空きつ腹に酒が堪えたか？」

グラスを卓袱台の上に投げ出すように手放し、中嶋君は胸を押さえて座椅子に身を横たえた。

真悟君は座椅子の傍らに膝をつき、中嶋君の顔を覗き込んだ。

「大丈夫かい？」

「……なんか、すんげー頭が重いぞ。んで、身体がだるいつていうか、背中を引っ張られてる感じがするつていうか……。朦朧としてるつていうか、眠いつていうか……。何だこりゃ。飯に毒でも盛られてたんか？」

中嶋君は頭痛を堪えるように額を押さえ、苦しそうに呻いた。

「それは、梅本さんが服用したという強力な睡眠薬の効果だね。それが大量に、スープとサラダのどちらか、もしくは両方に混入されていたのではないかな」

「おまえらは……平気なのか？」

「ボクは殺人犯が手を加えた料理に挑戦する勇気など持ち合わせていない。西脇さんには申し訳なかったけど、犯人が調理を手伝ったと判明した時点でスープとサラダを口に入れるつもりはなかったから、速やかにトイレへと流させてもらった」

ああ、そうか。真悟君が途中でトイレに立った時に、わたしの分も一緒に捨ててきてくれたんだ。彼が食事中に席を立つなんて変だ

と思ったが、そういう理由があったわけだ。彼に感謝である。

「そういうことは前もって伝えといてくれよな……。友達甲斐がねえぞ」

「ボクが注意しようとした時には、既にキミはスープを飲み干していた」

「ちっ！ 旨そうだったから仕方ねえじゃんよ。くそっ、最悪の気分だぜ……。このままご臨終なんてことにはならねえだろうな？」

虚ろな目でわたしたちを見て、中嶋君は彼らしくない弱々しい声で言った。犯人が捕まったとはいえ、同じ部屋の下で過ごし、しかも自分が完全な無防備状態になってしまふことに不安を覚えているのだろう。

しかし、その心配は無用だ。設楽さんは警察の二人に身柄を拘束され、常に監視されているので、自由行動などできない状態なのだ。たとえ睡眠薬で全員を眠らせたとしても、これ以上の殺人は犯せないだろう。

「朝までボクたちが一緒にについているから安心だよ。健やかな目覚めを保証しよう。キミは心配せずに思う存分眠るといい」

「そっか……」

真悟君の頼もしい言葉を聞いた中嶋君は、にっと精彩のない笑顔を作り、ぐたーっと身体力を抜いて瞼を閉ざした。

間を置かずに寝息が聞こえてきた。

「さて、ボクは《108号室》へ行つて、春日野さんたちの様子を見てこよう。キミは部屋で待っているといい」

「えっ、どうして？ わたしも一緒に行くわよ。怖いもの」

真悟君が立ち上がったので、わたしも慌てて腰を浮かせ、彼の手を掴む。

「武装した設楽さんに襲われる危険性が高いから駄目だ。キミはここで中嶋君の様子を看ながら、ボクの帰りを待っていていなさい」

優しいけど命令口調。

両肩を押さえられ、強制的に座椅子に座らされた。
でも、わたしなりに抵抗してみる。

「設楽さんなら手錠を掛けられているし、警察官が二人も監視してるんだから、何もできないわよ。そうでしょう？」

「春日野さんと三田村さんも夕食を平らげていた。中嶋君と同じく、今頃は熟睡していると見て間違いない」

「そんな……。じゃあ、手錠は？」

「三田村さんの服を探れば、容易に鍵を発見できると思うよ。同時に、彼らから拳銃を拝借している可能性もある。だから、キミを連れていくわけにはいかない」

「拳銃……」

わたしは同行を断念した。

でも……。

「それなら、真悟君も行っちゃ駄目だよ」

当然、止めなければならぬ。

しかし、真悟君は他愛なく笑った。

「ボクは平気だ」

「どうして？ 銃だよ。鉄砲だよ。撃たれたら死んじゃうのよ」

「ボクは、銃口から真っ直ぐ飛んでくる鉛の玉に当たるほど鈍感ではないよ。心配は無用だ。素人が相手であれば尚更ね」

なぜ自信たっぷりと言い切れるのかわからない。でも、真悟君の運動神経は折り紙付きだ。もしかしたら、銃弾より速く動けるのかもしれない。いや、そんな人間がいるわけないか……。

「ボクが部屋を出たら、キミはドアを施錠してチェーンを掛けて、ボクが戻ってくるまで決して誰も部屋に入れないこと。たとえ誰かが廊下で助けを求めても、ドアを開けて様子を見ようなどと思っ

はいけない。いいね、保奈美？」

「はい」

「良い子だ。すぐ戻る」

ちゅっ、というくちづけを残して、真悟君は部屋を出ていった。

【4・来須美架】

幾重もの大きな影が私の体の上で何度も踊る。真つ黒い翼を広げ、大きな槍を振り翳し、私を突き刺しながら断続的に雄叫びを上げる。その都度、私は泣き叫び、許しを乞う。逃げ出したいが、両手を拘束され、肩を押さえつけられ、足を抱えられている所為で身体が動かない。悲鳴は誰にも届かない。どこにも届かない。闇は全てを飲み込む。願望も希望も、過去も未来も、精神も肉体も、神も仏も何もかもを失った。残されたものは死だ。

死にたい。

今すぐ死んでしまいたい。

これは……夢？

意識が緩やかなカーブを描いて暗闇を抜け、光ある世界へと辿り着いた。

長い旅路だった。

酷く辛い想いが胸の内を圧迫して涙腺を刺激するが、涙を流す動機を理解するにはあまりにも虚ろな旅だったので、意識して暗闇の記憶を心の奥底へと封じ込める。

夢など見たくない。

特に、幼い頃の自分が登場する夢は最悪だ。

あの時の夢をみるくらいなら、殺人鬼になぶり殺しにされた方がマシなのだ。

照明の光が瞼を通して意識を鮮明にした。

いつの間に眠ってしまったのだらう。夕食後、私と兄は自室に戻って事件を再検討し、結論に過ちがなかったかを確認していて……。それで、どうした？

頭が重い。脳味噌が鉛に変化してしまったようだ。
何も考えられない。何も考えたくない。
現在の状況を認識できていない。
畳の上に突っ伏して眠っていたようだ。
どうして兄は起こしてくれなかったのだろうか。
和泉から得た貴重な情報を報告しようと思ったのに……。

起きなければ……。

私は、接着剤で貼り付けられたかのように閉じて開かない瞼を無理からに引っぱり上げ、畳にうつ伏せ状態の体を起こそうとしたが、脳の命令が上手く手足に伝わらず、無様に横転した。
緩慢な動作でもがく。

「あら、お目覚めかしら、名探偵の妹さん」

嘲笑含みの声が鼓膜を震わせた。

癪に障る声だ。

誰だろう。

兄ではない。

女の声だ。

でも、五十嵐ではない。

西脇とも違う。

これは……犯罪者の声だ。設楽松美の声だ。

しかし、おかしい。なぜ、この部屋に彼女がいるのだろう。犯罪者は《108号室》で盆暗警官の監視を受けているはずなのに……。単独行動など許可されるわけがない。聴覚の錯誤か？ 酷い頭痛で思考が鈍っている。

私は再度、身を起こそうともがいた。

「起きたいのかしら？」

声と共に体が反転し、仰向けにされた。
視界に、天井と設楽松美の姿が入った。

「起こしてあげるから、大人しくなさい」

脇の下に手を差し込まれて抱え上げられ、そのまま頭上方向へ引
つ張られ、座椅子に座らされた。

だが、上半身のバランスを保てない。卓袱台に突っ伏す形になっ
てしまう。

「お早いお目覚めだけど、まだ完全には動けないようね。ふふつ、
可哀想に」

設楽は可笑しそうに頬を緩め、腰を屈めて私の顔を覗き込んだ。

「お喋りはできるかしら？」

「な……なぜ貴様が……自由を得て……。ここで何を……している
？」

「あら、君、いつもと喋り方が違うじゃない。馬鹿みたいに陽気な
声を出していたのに。あれは演技だったの？ 天然のふり？」

「質問に……答えろ」

「あらら、そんな怖い声も出せるのね。驚いたわ。ふふつ。いいわ
よ。どうして私が行動の自由を得ているのか、教えてあげる」

設楽は目元を綻ばせ、一度視界から消えた。

シャワー室の前辺りで何かを動かす音。それに続く足音。そして、
卓袱台の上に何か硬い物が幾つか置かれた。

「見てみなさい」

促され、私は卓袱台にへばりつくようにして、目の前に置かれた
物を見た。

「！」

手の平サイズの黒光りする拳銃が二丁と、記憶に新しい血染めの
果物ナイフが一振り。

「これは……。貴様、まさか……」

「そうよ。さすが《天才美少女探偵》を自称するだけあって、察し
がいいわね。これは、春日野さんと三田村さんが所持していた物よ。
それをちよつと拝借しているの。でも、安心しなさい。私、銃なん
て扱えないから。銃殺はしないであげる。その代わり、緒方さんた

ちみたいに、このナイフでぶすぶすつと刺し殺してあげるわね」

「冗談では……ない……」

私は腕に力を込めてなんとか立ち上がろうと努力する。頭が持ち上がり、胸が卓袱台を離れ、腰が浮く。だがしかし、肘に加えていた力が急に拡散して関節が挫け、したたか顔を卓袱台に打ちつけてしまった。

「あら、逃げたいのかしら？　でも、睡眠薬が効いていてまだ力が入らないでしょう？」

「くっ、睡眠薬だと……。まさか梅本の飲んだ……」

「そうよ。どれくらい効果がある薬かわからなかったから、ありつたけの量をスープに混ぜただけ、かなりの即効性があって尚かつ副作用も酷いみたいね」

睡眠薬入りのスープを飲んだ副作用で手足が麻痺しているのか。

私はスープを半分以上残したのに、それでもこれほどの効果が……。

「あの盆暗警官を……。どうした？　ふ、二人とも……。殺したのか？」

「盆暗？　ふふふっ、春日野さんと三田村さんのことかしら？　当然、刺し殺したわよ。このナイフでぶすぶすつとね」

「殺人鬼め！」

「殺人鬼？　私、そんな恐ろしいものではないわよ。ただ復讐がしたいだけ」

「えと……。江藤小枝子の……。代理で事件を……。起こしたのか？」

「代理？　ええ、そうね。その通りよ。でも、今はもうそれだけの理由ではないわ。私自身の為でもあるの。私、警察に捕まりたくないもの。可哀想だけど、みんなには死んでもらうわね」

設楽は私の頬を撫でながら言った。

正気ではない。理性ある者の行動ではない。この状況でたった一人生き残って、警察に何と弁解するつもりなのだ？　山荘に火を放って、何もかもを灰と化し、自分に都合の良い理屈を捏ねて言い逃れるつもりか？　それとも、追い詰められて自棄になったか？

頭の悪い犯罪者の考えは理解できない。

しかし、むざむざ殺されるつもりはない。最後の瞬間まで諦めずに悪足掻きをし、格好悪く抵抗し、必死になって生き延びる努力をする。

こんな時に兄は何をしているのだろう。睡眠薬の効果でまだ眠っているのか？ あの時のように颯爽と、地獄に勝る悪夢の世界から助け出して欲しいものだ。

私は再度、両肘を立てて踏ん張り、体を起こそうと全身全霊の力を集約した。

「あら、頑張るわね。でも、まだ睡眠薬の副作用で身体は動かないはずよ。無理をしないで、大人しく刺し殺されなさい。本山君やお兄さんのように。ふふふふふつ」

「な、何だと？」

私は自分の耳の機能を疑った。

聞き間違いかと思った。

聞き間違いだと思った。

聞き間違いであるべきだった。

聞き間違いであって欲しかった。

あの兄が死んだ？

兄が殺された？

本山も？

なぜ？

自分が捕まりたくないから？

そんな下らない理由で？

嘘だ。

嘘だ。

嘘だ。

私は愚か者のように聞き返す。

「兄を……殺した、だと？」

「ええ、そうよ。君のお兄さん、《超天才名探偵》だったかしら？

その来須十路なら、シャワー室の前で血塗れになって転がっているわよ。見てみなさい。ふふふつ。可笑しいわね。あんなに格好良く事件を解決してみせたのに、ほんの数十分後には、捕まえたはずの犯人に刺し殺されているんですもの。うふふつ、ふふつ、ふふふつ」

堪えきれない笑いの衝動を喉で響かせ、設楽は血塗れのナイフで私の頬を叩いた。

生温かくて粘り気のある血の感触。鼻を突く血臭。目に映る鮮やかな深紅の血。

だけど、凶器を見せられても信じられない。この目で兄の死を確認するまでは。

私は死ぬ気で上半身を起こし、シャワー室の前に目をやった。

「そんな……。そんなことが……」

兄は……。来須十路は死んでいた。両手両足を綺麗に伸ばし、瞼を閉ざし、口を半開きにして、まるで眠っているかのような姿で横たわっていた。しかし、完全に息絶えていた。胸の肉が弾け、肋骨の一部が露出している。眠って無防備を晒す兄のシャツをはだけて、心臓を執拗に抉ったようだ。その損傷の具合から見て、設楽のいっていた殺意の程が窺えた。

「ね？　ちゃんと死んでいるでしょう？　ああなったら名探偵も終わりよね。でも、そう考えると、少し残念かな。十路君の名推理を二度と聞けないんですもの。ふふつ、うふふふふふふふ」

「貴様、許さないから……。兄を……。私の兄を……。こ、ころ……。絶対に、絶対に、絶対に許さない……。この恨みは……。必ず……。晴らしてみせ……」

薬の所為か、憤怒の所為か、悲哀の所為か、憎悪の所為か、声が震えて上手く言葉を紡ぐことができない。罵りの言葉を発せられない。

悔しい。口惜しい。

涙が溢れ、頬を伝い、顎から滴り落ち、卓袱台を濡らす。

設楽はくすくすと笑った。

「いいわよ。君の恨み辛みは、あの世で聞いてあげるわ。何十年後になるか定かではないけれど、先に行って待っていないさい。十路君も待っていると思うから、寂しくないでしょう？」

「この！」

私は、バネ仕掛けの人形のごとく、ひっくり返った蛙のごとく、俊敏なバツタのごとく、ありったけの力を振り絞って跳ね起きた。起きたつもりだった。

いや、実際に体は起き上がった。ちゃんと二本足で立った。一瞬だけ。

次の瞬間には、情けなくも膝が砕けて、尻から崩れ落ち、その場で座り込んでしまった。

ぱちぱちぱち。

私の無意味な努力に対する拍手。

絶対的優位に立っているからこそその余裕。

そこが付け入る隙なのだが……、いかんせん身体が言うことを聞いてくれない。

「さあ、もう十分に足掻いたでしょう？ 潔く覚悟を決めなさい。だいたい君、悪足掻きをすると後で惨めな思いをする、って私に忠告したでしょう？ ああ、そうか、殺されたら後はないものね。だから、足掻いてしまうのね？ ふふっ、ごめんなさい」

低レベルの嫌味を言われた。

「！」

この私が怒りのあまり歯軋りをしている。しかも、哀しいことに、歯軋りすら上手くできていない。ただ泣きじゃくるだけで、意味ある行動を起こせない。

全開で無駄な努力をし尽くし、時間稼ぎをして数分間延命した。できる限りにおいて頑張った。

この状況を逆転する術がないかと必死になって頭の中身を回転させたが、薬物で汚染された脳味噌など使い物にならず、良い知恵は

浮かばなかった。

それに、最愛の兄が死んだ今、私が生き続ける意味はない。もう馬鹿のふりをする必要はない。もう兄の名を成さしめる必要もない。半壊した心も、成長不良の愛らしい肉体も、愚とは無縁の脳味噌も、全部が意義を失った。

もう十分か……。

私は全てを諦め、しかし最後に痛烈な捨て台詞を吐き散らかして、嘲笑しながら殺されてやろうと思い、大きく息を吸い込んで下っ腹に力を溜めた。

「貴様の成した犯罪は――」
コンコン。

私が言葉を発すると同時に、部屋のドアがノックされた。

誰だ？

思わず殺人鬼と顔を見合わせる。
「仲間がいたのか？」

そうであるなら、こんな無茶をしても警察に対して幾らでも弁解の仕様はある。共犯者と上手く口裏を合わせれば、どうとでも言い逃れできるのだ。

しかし、設楽は答えなかった。それどころか、驚愕の表情を浮かべて、廊下に立つ人間を見通そうとでもいうようにドアを凝視している。

彼女にとっても想定外の訪問者なのだ。

それはつまり、私にとっての救いの主と言えるだろう。

コンコン。

再度のノック音。

私は声帯の限界を極めるくらいの悲鳴を上げて助けを求めようと

大きく口を開いたが、それをいち早く察知した設楽に口を塞がれ、首筋にナイフを当てられ、声を封じられた。

「いつもの君らしく、アホっぽい声で返事をして、相手が誰か確認しなさい」

「誰が貴様の言うことなど……」

「首筋を掻き切るわよ！」

「くっ……」

どうにかしてこの状況を伝えられないだろうか。

設楽に気付かれず、廊下にいる人間にだけわかる合図……。

コンコン。

三度目のノック音。

「さあ、言われた通りに応えなさい」

駄目だ……。

良案が何も浮かんでこない。

「どうしたの、早く返事をしなさい！」

設楽の苛立ちが刃物の先から伝わってくる。

くそっ。

「はあい、誰かなっ？」

首に刃が食い込んだので、仕方なく返事をして誰何した。

返事はなかった。

しかし。

不意に、ガギンツという背筋が冷える金属音が鳴り、ドアノブが手前側に抜け落ちた。

何だ、何が起こった、と思う間もない。

音なくドアが開き、男が一人部屋に入ってきた。

和泉真悟だった。

「真に失礼ながら、勝手に入らせていただきました。とは言っても、部屋の主は両者とも口を封じられていますね。おや、これはこれは何とも手際の悪い殺人だ。殺し方が実に醜い。その仕業から美学が感じられません」

部屋に入ってくるなり、和泉は兄の亡骸を一瞥して呟いた。兄の死を悼む様子はない。私と設楽の状態を見ても、その端正な顔には朗らかな笑みが湛えられている。

「春日野さんと三田村さん、そして本山君も同様に殺害されていますが、五十嵐さんと西脇さんは気持ち良さそうに眠っていましたよ。しかし、これでは本末転倒だと思いませんか、設楽さん？ 復讐計画の腰を折られた憤りの程は理解できますが、本来真っ先に殺害して然るべき五十嵐さんを安眠させておくなど、怠惰の極みと罵られても文句を言えないところですよ」

「き、君に言われなくても、後で念入りに切り刻む予定よ！」

設楽は大声で叫んだ。感情的になっている。普段と変わらない穏やかさで会話をする和泉に調子を狂わされているようだ。

「ああ、貴女は好物を後に取っておく性質なのですね。納得しました。ボクごときが口を挟む必要はありません」

「そ、そうよ！ 君は出しゃばらないで大人しく部屋で寝ていなさい！ 余裕ぶって見せているけど、睡眠薬の効果で立っているのもやっとなんでしょう？」

「いいえ。申し訳なく思いますが、ボクと保奈美は睡眠薬が混入されていたと思われるスープとサラダを一切口にしていますので、体調は良好ですよ」

「な、なぜよ！」

「貴女が手を加えた料理には、毒物が混入されている危険がありました」

「そんな……」

愕然とする設楽。

「しかし、とんだ計算違いですよ」

和泉はシャワー室の前から私へと視線を移した。そして、笑みを深める。

「ゆつくりと山荘内の各部屋を見回って来たというのに、まだ来須美架は生きている。いったい何をして遊んでいたのですか？ 弱者

をいたぶって悦に入っていたのですか？ 時間をかけるにも程がありますよ。これでは、さすがのボクも彼女を助けざるを得ません」この男、今後邪魔な存在になるであろう私たち兄妹を見殺しにするつもりで、わざと最後にこの部屋を訪れたのだ。

「何を言っているの、和泉君？ この子を助けるつもり？ このナイフが見えないのかしら？ おかしなまねをしたら、この可愛らしい人質の首筋から血が噴き出すわよ！」

「構いません。できるものなら切って見せて下さい」

和泉は朗らかに笑って答えた。

「脅しじゃないわよ！」

「承知しています。どうぞ、遠慮せずに彼女の頸動脈を断って下さい」

「こ、後悔なさい！」

設楽はナイフを持つ手に力を込めた。

こんな形で死ぬ？

この私が、こんな惨めな死に方を？

「——っ！」

設楽が何かを叫んだ。

そして、凶器が首筋を滑る感覚。

その瞬間に備えて固く目を閉ざし、奥歯を食い縛る。

しかし、一向に痛みは生じない。

首筋に当てられていた刃の感触が失われ、設楽の気配も遠のいた。

ドンという衝撃音。

切られなかった？ 殺されずに済んだ？ どうして？

私は薄目を開けて状況を確認する。

設楽は窓ガラスに背中を預け、腕を押さえつつ苦痛の表情を浮かべ、鬼の形相で和泉を睨んでいた。凶器を所持していない。

和泉は変わらない微笑み顔。その左手には血塗れの果物ナイフが

握られていた。

「ほら、できなかったでしょう？」

「……………っ！」

「貴女はナイフの扱いが全くなっていない。見るからに素人です。それではボクに対抗できるわけがない。他に扱い慣れている武器はないのですか？ あるのなら、直ちに装備して下さい。それとも、このナイフを返して欲しいのですか？」

余裕の台詞。

「何を言っている、和泉！ 余裕ぶつてないで、早くその女の身柄を拘束しろ！ 自棄になられたら厄介だ！」

声帯を酷使して忠告したが、和泉は無視して、ナイフにべつとりと付着している血を兄のシャツで拭った。

彼の視線が完全に設楽から逸れる。

当然のごとく生じる隙。

わざと隙を作った？

だが、その隙は致命的だった。

それを見るなり、設楽は窓際からダイブするように身を投げ出し、卓袱台に体当たりしながら、より危険な凶器を掴もうと手を伸ばした。

卓袱台の上には二丁の拳銃が！

お互いの立場を逆転させることのできるアイテムだ。

奪われれば万事休す。

「和泉、拳銃を奴に取らせるな！」

私はそう叫びながら、卓袱台の上に置かれている危険な飛び道具に向けて横っ飛びした。我ながら、どこから力が沸き出しているのだろう、と不思議に思っくらの瞬発力を発揮した。リーチの差、お互いの距離、運動能力、その全てを考慮して計算すると、私の手の方が僅かに早く届くと確信した。

私の勝ちだ！

しかし。

横からシャツの襟首を掴まれて、後方へと引きずり倒されてしまった。後少して拳銃に届いたのに……。私の手は何もない空間を虚しく掴まされた。

私を止めたのは、言わずと知れた和泉真悟である。

彼はこともあるうに、拳銃を取りに走らず、設楽を止めず、殺人犯と敵対する側に立っている私の行動を妨害したのだ。しかも、笑顔で。

抗議しようとして口を開いたが、何の言葉も発せられなかった。

細く短い溜め息の死骸がこぼれ落ちただけだった。

当然、設楽は右手と左手に一丁ずつ、合計二丁の拳銃を装備した。最悪の展開だった。

「ふふつ。何のつもりかは理解できないけれど、美架ちゃんの邪魔をしてくれてありがとう、和泉君。お陰で強力な火器を装備することができたわ。うふつ、これで形勢逆転ね」

設楽は余裕ある笑みを取り戻した。

和泉はそれを無視して私を見た。

「美架ちゃん、睡眠薬の効果が切れて動けるようになったのかな？ 動けるのであれば、部屋の隅に寄っていなさい」

「……うん」

私は大人しく従った。

和泉真悟はこの展開を楽しんでいる。より危険な対決を求めて、設楽松美という殺人犯に強力な武器を与えたのだ。銃に対する恐怖心など微塵も窺えない。ナイフと銃というお互いの武器の性能差も気にしていない。死を厭わない。いや、死ぬなどと思っていない。この対決は、彼にとって面白半分の火遊び程度でしかないのだ。そういう認識。私はそれを理解した。

「さあ、二人とも観念なさい！」

設楽はそう叫んで、銃口を和泉に向けた。勝利を確信した為か、声が酷く上擦っている。

和泉は嘲笑に近い苦笑を漏らした。

「やれやれ、貴女がここまで愚かだったとは。正直、失望を禁じ得ませんよ」

「減らず口を叩くのは止めなさい！ 口を閉じて覚悟を決めるのよ！」

「減らず口ではなく忠告です。貴女の行動には、先程の失敗が全く活かされていません。即座に発砲するならまだしも、この期に及んで威嚇するとは……。呆れを通り越して、哀れに思えてきました」

「黙りなさい！」

設楽は声量で威嚇しようとしたのか、つんざくような絶叫を室内に響かせた。激怒するあまり銃を握る手が震えている。眼鏡の奥にかぎろぐ目が、飽和する殺意で充血していた。

「取るに足らない人殺し風情にしては良い目をしていますね。害意の総量が理性を遥かに凌駕していると見える」

和泉はナイフを逆手に握り直した。

「本来であれば、自分と相手の戦闘能力にどれほどの差があるのかを見極められない愚か者など、酷く醜く無様に切り刻まれて当然なのです。貴女の覚悟と決意に敬意を表し、先制攻撃をするチャンスを与えましょう。どうぞ、先に銃を発砲して下さい」

そう言つて和泉はにっこりと頬笑んだ。

完全におかしい。

設楽も十分に正気を逸脱しているが、この和泉真悟という男は狂気すら逸している。

マトモではない。

「死んで後悔しなさい！」

設楽は、叫びざまに拳銃の引き金を引いた。
パン！

銃声。

テレビドラマの銃声とは違い、変にチープな破裂音だ。私が過去に一度だけ耳にした発砲音と同じだった。しかし、至近距離だった為、音量は段違いに大きかった。

「大抵の場合、一発目は空砲ですよ」

和泉の冷静な指摘。

設楽は顔を紅潮させ、再度発砲した。
パン！

二度目の銃声。

ほんの二、三メートルしか離れていない場所から狙い撃ちされたのに、和泉は倒れなかった。平気な顔をして立っていた。若干、体を開き、ナイフを持つ左手を突き出し、半歩ほど下がってはいたが、銃弾でダメージを負った様子はなかった。

あの距離で銃弾を回避した？ いや、そうではなく……。

和泉はナイフの刃を眼鏡の前に近づけて苦笑した。
ナイフの刃先が欠けていたのだ。

「刃こぼれしてしまいましたね。所詮は廉価製品ということですか」
「和泉、貴様……銃弾をナイフで弾いてかわしたのか？」

私が確認すると、和泉は微笑んで首肯した。

「その通りだよ。動態視力と瞬発力と殺人能力の三つが噛み合えば、この程度の芸当は造作なくできる」

その表情は至って穏やかだった。和泉は、人間離れた自分の能力を誇っていない。単に自分のできることをやってみせただけ、という顔だ。

「そんな……。そんな馬鹿なことが……」

超人的戦闘能力を見せつけられ、開いた口が塞がらない様子の設楽。

私も啞然呆然だ。

「両方の拳銃を合わせると、残りの銃弾は九発です。さて、どうしますか？ 全て撃ち尽くすまでボク的能力を試してみますか？」

「……その欠けたナイフでは、次の弾は防げて、その次は防げないわよ！」

「承知しています。その際には、ボクが愛用している得物を使用します」

和泉はそう言うと、シャツのボタンを上から二つ外し、肌着の下から飾り物を取り出した。

手の平よりも大きな十字架のペンダントだ。

逆しまの十字架……。

「これは十字架の形をしたペーパーナイフです。しかし、切れ味の鋭さは日本刀を凌駕します。銃弾で刃こぼれする心配などないので、心置きなく遊ぶことができますよ。ただ、勢い余って銃弾もろとも貴女の手足を斬り落としてしまうかもしれません、その際にはすぐさまバラバラに解体してあげますよ」

「……………」

「さあ、選択して下さい。銃を乱射してボクが何者であるかを知るか、銃を捨てて殺人の罪を償うか、二つに一つです」

「……………」

設楽松美は震える手で二丁の拳銃を同時に和泉へ向けた。

そして、両方の引き金に左右の人差し指をそれぞれ掛けた。

「それが答えですか？」

「死になさい！」

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン！

空砲を含めると全十発。

安っぽい連続花火のような音が山荘内に反響した。

第六章 頼もしい翼 【1・藤森保奈美】

七月二十四日、木曜日。

わたしは、今日一日を丸々自室でダラダラと消費することで、『ホテル美岳』で起こった連続殺人事件に対する気持ちの整理をつけ、あらゆるマイナス感情に見切りをつけようと思い、ベッドに寝転がった。

真っ白い天井を見上げつつ、事件後の出来事を思い返す。

昨日は大変な一日だった。

無論、一昨日に起こった連続殺人事件より大変な出来事などなかったのだけど……。

夜が明けると台風の直撃が嘘だったかのように天気が回復し、警察がヘリコプターで山荘までやってきて設楽さんを逮捕した。昼過ぎには、土砂崩れの現場に重機が投入されて山道が復旧し、生き残った全員が長野県警の刑事さんに先導されて山を下りた。そして、警察署に到着してからは、途中に何度か休憩を挟みながら、夜まで事情聴取を受けさせられたのである。

帰宅の許可が出たのは午後七時過ぎ。

わたしは当然のように真悟君と一緒にパトカーで送ってもらったのだけど、ゆっくりできたのはパトカーの中だけであり、家に着いた途端に心配性の両親が抱きつかんばかりに駆け寄ってきて事件の話を根掘り葉掘り……。妹は妹で、真悟君が帰ろうとするのを強引に引き止めてイチチャイチャする始末……。不届き者を怒鳴り散らしてお尻を蹴飛ばし、彼を送り出してから家族会議。議題は、『二度目の殺人事件とわたし』だ。結局、疲労の限界を訴えて家族会議を強制終了させることができたのは、午前零時だった。

しかし、今思い返しても背筋が凍りつくような事件だった。

生き残ったメンバーは、わたしと真悟君、中嶋君、西脇さん、五十嵐さん、来須妹の六名。

たったの六名だ。

イベントに参加した人間の半数が殺害されてしまったのだ。しかも、わたしたちを守る役目を担っていたはずの警察官二名も犠牲者の仲間入りをしてしまい、あのふてぶてしいまでに自信満々だった来須兄まで惨殺されてしまった。そんな地獄から、よく無事に帰宅できたものである。

全て真悟君のお陰だ。百万回以上のお礼を述べても足りないくらいに感謝している。

あの後……わたしと中嶋君を残して真悟君が《107号室》を出ていった後、《102号室》で何が起こったのかはわからない。訊いても、はぐらかされてしまう。刑事さんの話だと、拳銃を乱射する設楽さんを、彼が素手で取り押さえたそうだ。確かにあの後、何発かの銃声を聞いた。あれは設楽さんが拳銃を発砲した音だったのだろう。でも、日本国内で通常起こり得ない事態に直面していたにもかかわらず、彼は散歩帰りのような爽やか笑顔で、設楽さんを連れて部屋に戻ってきたのだ……。本当に凄い男の子である。

設楽さんの犯行動機は、いまだに不明だ。

翌日、中嶋君と五十嵐さんが幾度となく詰問したけど、彼女は口を噤んだまま何も語ろうとしなかった。

警察の取り調べでも芳しい答えをしていないそうである。

中嶋君は睡眠薬の眠りから目を覚ますと、山道が復旧するまでの間、五十嵐さんとタッグを組んで設楽さんを断罪し続けた。そして山道の復旧後、山荘から警察署へ移動する間は、真悟君を相手に、自分たちの運のなさを嘆いていた。帰宅後はまだ会っていない。会うのは夏休み明けになるだろう。でも、その時には、わたしも彼も事件の話をしないだろうし、もし事件の話題になっても意識して会

話に参加しないと思う。

西脇さんは事件明けの起き抜けに、設楽さんを一発ひっぱたいで終わり。その後は、笑顔でみんなの朝食を作ってくれた。肝っ玉の大きな人なので、立ち直りが早いのだ。本人は、来年も従業員としてイベントに参加したいと言っていたが、管理組合と山荘の持ち主の意向により、『ホテル美岳』は取り壊しになるそうである。

来須妹は、警察のヘリコプターで来須十路の遺体が他の遺体と一緒に回収、運搬されるまで、ずっと縋り付いて泣きじゃくっていた。そして、兄の遺体を送り出してからは、食堂の隅っこで蹲ったまま虚ろな目で床を見つめ続け、心配して慰めの言葉を掛ける西脇さんや五十嵐さんにぼそぼそと小声で答えていた。あのこぼれ落ちそうなくらい満面に輝いていた無邪気な笑顔は跡形もなく失われた。肉親を殺されたのだから当然だろう。兄を失った彼女は、もう馬鹿のふりをしなかった。でも、あの破廉恥な服装だけは、刑事さんに何度注意されても、改めようとしなかった。彼女との別れ際、「不当なからかいによって色々と不愉快な思いをさせたことを謝罪する。保奈美ちゃん、悪かった。許して欲しい」と頭を下げて謝ってくれたにはちよつと吃驚だった。それに、真悟君に対しては、「お兄ちゃんのやり残したことは、私が絶対に後を継ぐからねっ！ 覚悟しててよっ！」と少しだけ戯け調子を取り戻して宣言し、彼を苦笑させていた。

五十嵐さんとは別れ際に連絡先を交換し、後日に再会する約束を交わした。一緒に緒方さんたちのお墓参りをするのだ。特筆すべきは、中嶋君との関係である。彼女は心のケアを中嶋君との会話に求め、彼は見事それに応えた。だから、二人は良い感じだったし、帰りのパトカーも一緒だった。

本山君は首吊り状態で発見されたそうである。どうやら設楽さんは、彼を自殺に見せかけて殺害し、江藤さんの復讐代行者として全ての罪を被せ、自分は悲劇のヒロインを演じるつもりだったらしい。その為だけに彼をイベントに誘ったのだとしたら、本当に酷い話だ

……。

警察官二名がどんな風に殺害されたのかは知らない。真悟君の助言もあって、その現場を見ていないのだ。二人の死体を確認した中嶋君の話だと、設楽さんの異常さが十二分に発揮されて見れたものじゃなかった、そうである。来須兄の遺体も酷い有様だったけど、きつとあれ以上だったのだろう……。

わたしはベッドから身を起こし、小さく溜め息を吐いた。

事件を思い切るどころか、思い返してしまっている。これでは全くの逆効果だ。一人で部屋に籠もって物思いに耽るのは良い案じゃないな、と今更ながらに気付いた。

弘美とどこかへ遊びに出かければ気も紛れるのだろうけど、彼女は家族と旅行中なので不在だ。真悟君は今日一日、警察の実況見分に立ち会うことを求められているそうで、朝から長野だ。中嶋君と遊ぶ習慣はないので思考の外。他の友達を誘うのもどうかと思うし……。

さて、どうしよう。

思い悩んでいても仕方がないので、わたしはベッドを出た。時計を見て、現在の時刻を確認する。

午前十一時十一分。

一並びだ。

ラッキー……なのか？

わたしはこういう偶然を幸運とは思わない性格である。でも、占いは信じる方である。

今日のラッキーカラーは何色だろう、青かな、などと予想しながらカーテンを開け、窓を全開にして新鮮な空気を室内に入れる。そして、両手を頭上にぐーっと伸ばして大きく深呼吸をした。

目の前の道路を軽トラックが走っていく。

「……………」

排気ガスの嫌な臭いが鼻を突いたような気がして、思わず窓を閉

めてしまった。

夏の厳しい暑さもシャットアウト。

長野の高原は空気が冷たくて美味しかったなあ、と改めて実感。
同時に空腹も実感。

わたしはパジャマのまま自室を出た。

我が家は静寂に満たされていた。

階段を下りてリビングを覗くが誰もいない。キッチンも無人だ。
お財布とバッグがないので、母親は買い物にでも出かけているのだ
ろう。妹は学校のプールで涼んでいる頃だ。仕方がないので、一人
寂しく朝食兼昼食を摂ることにした。

昨日は殆ど何も食べていなかったたので、リッチなメニューで胃袋
と心を和ませようと思い、冷蔵庫を開ける。

まあ、素敵！ 豊富な食材が調理される時を今や遅しと待ってい
るではありませんか。

特に、マグロの赤身がわたしの心を鷲掴みにして放さない。

自然と伸びる手。

だが、取り出す寸前で躊躇した。

無断で食べると、夕食のグレードを落とされるかもしれない。

母親は娘の摘み食いなんかで怒る人ではないが、この食材選びの
結果が後の食卓に悪影響を及ぼす可能性は大だ。

それは困る。

二分ほど逡巡した後、リッチなメニューを断念。

食パンを焼いてバタートーストを作り、生野菜とハムを刻んでサ
ラダを作り、固形コンソメとキャベツでスープを作った。

典型的な朝食だ。

ダイニングテーブルに一人座ってトーストを齧る。

美味しい……けど寂しい。

会話する相手が欲しい。

気を紛らわせるBGMが必要だ。

でも、テレビを見る気はない。絶対に事件のニュースが流れるからだ。

何かビデオでも見ながら食べようか、と考えていると、来客を告げるチャイムが鳴った。

ピンポン。

「はい！」

大声で応えつつ、玄関へと走りかけて急ブレーキ。

自分の格好に気付く。

さすがにパジャマでの応対はマズイ。

年頃の女の子としてはしたないだろうし、相手が男の人だったら恥ずかしすぎる。

ピンポン。

二度目のチャイム。

「はい！ ちょっと待っていて下さい！」

そう応えつつも相手を確認してから対応を考えようと思い、玄関へと走ってドアスコープから外を覗き見た。

鷹峰つばさが立っていた。

なぜ我が家に鷹峰つばさが？

そう疑問に感じつつ鍵を解除する。

相手が鷹峰さんならパジャマ姿を見られても恥ずかしくない。

まあ、学校の先輩が相手だからパジャマでの応対は失礼のだけど、唐突な訪問なので容赦してもらいたい。

わたしはドアを開けた。

むっと押し寄せる熱気。

「こんにちは、藤森さん」

夏の暑さを無視するような涼やかな微笑みを美貌に湛え、鷹峰つばさは小さく会釈した。

「こんにちは、鷹峰先輩。えっと……どうしたんですか？ うちに

来るなんて珍しいですね。とりあえず、中に入って下さい」

「こつちも会釈を返し、家の中に招き入れる。」

「お邪魔します」

鷹峰さんは靴を脱いでスリッパを履くと、わたしの姿を見てくすつと小さく笑った。

「素敵な格好ね。今まで眠っていたの？」

「あ、はい。さっき起きたばかりで……。こんな格好ですいません」
「パジャマで構わないわよ。ここは貴女のお家なんですもの。どんな格好で過ごしていようと貴女の自由だわ」

鷹峰つばさという女性は、基本的に真悟君以外の人間に興味を示さない。

たぶん、わたしが全裸で応対しても派手なりアクションを見せなかっただろう。

ちなみに、本日の彼女は、純白の長袖にダークブルーのロングスカートといういでたちである。

わたしは鷹峰さんをリビングへと通しておいて、キッチンに入つて飲み物を用意した。

「今、一人寂しく朝ご飯を食べていたところなんですよ。一緒にどうですか？」

オレンジジュースをテーブルに置きながら訊くと、鷹峰さんは薄く微笑んできっぱりと断った。

「いいえ、ご厚意はありがたく頂戴するけれど、お昼を食べてから来たので遠慮するわ。貴女は気にせず食べて頂戴」

「はい。そうさせてもらいます」

わたしはキッチンから食べかけの食事を運んできて、向かいのソファに座った。

「それで、あの……。ご用件は？ 真悟君の家と間違えたんじゃないですよ？」

「ふふふ。それはあり得ないわ」

下らない冗談だから無視されるかとも思ったが、鷹峰さんは笑ってくれた。

彼女と真悟君は同じマンションに住んでいて、しかもお隣さんなのだ。

「今日、貴女のお家を訪問した理由は、真悟君の代理としてよ」

「代理、ですか？」

「そう。貴女が自力で山荘での殺人事件を思い切ることができるのであれば私の助けなんて必要ないでしょうけど、貴女はそんなに器用な人間ではないそうだから、真悟君に頼まれて来たのよ。今は、誰でもいいからお話をする相手が欲しいでしょう？」

「はい、そうですね。話し相手がいると気が紛れると思います。一人だと事件のことをあれこれと思い出しちゃって……。弘美がいれば余計なことを考える暇なんかないんですけど、あの子、今いないですから」

「和久井さんは家族旅行中ですってね」

その言葉を聞き、わたしは内心で驚きポーズを作った。

鷹峰さんが弘美の動向を知り得ているなんて意外だったのだ。

「はい、そうです。でも、そんな情報、なんで知ってるんですか？」

あ、もしかして、真悟君から聞いたんですか？」

「いいえ。和久井さん本人から直接聞いたのよ。昨日、電話で」

「え、弘美から？」

「ええ。昼過ぎだったかしら。貴女たちが山荘で殺人事件に巻き込まれたことをニュースで知ったのでしょね。物凄く慌てた感じで電話を掛けてきたわ。私自身、何も知らなかったから答えようがなかったけれど、恭子さんをお願いして長野県警の知り合いから事件のことを聞いてもらって、貴女たちの無事を伝えたのよ。そのついでに彼女のことを少し聞いたの。和久井さん、お父様を嫌っているそうね」

「そうなんです。あの子の家、色々な問題を抱えているから……」

「貴女はどうなのかしら？」

「わたしですか？ わたしは家族の誰も嫌ってませんよ。みんな仲良しです。喧嘩はするけど次の日には持ち越さないし、問題が発生したら即座に家族会議ですから」

「素敵ね。私は家族と良い別れ方をしなかったから、貴女が少し羨ましいわ」

鷹峰さんは目を伏して、淡い笑みを口の端に刻んで、呟くように言った。

「鷹峰先輩って一人暮らしですよ。ご家族はどうされたんですか？」

「つばさでいいわよ。あと、恥ずかしいから、先輩と呼ぶのも止めて欲しいわ」

鷹峰さん……つばさんは優しげに言った。

「私の家族はもういないのよ。真悟君から聞かされていなかったの？」

「あ………すいません、無神経な質問して……。つばさんのこと、真悟君、何も話してくれないから……」

「きつと、自分の関わった過去の事件全て、貴女には知って欲しくないのよ。だから、と言うのはおかしいけど、気にしないでいいわよ。もう私も気にしていないもの」

つばさんは温かい笑みを見せ、真つ白な長髪を手で撫でつける。しかし、気にしていないと言いながらも話題を変更した。

「私がまだ部の選択をしていないことは知っていますでしょう？」

「え、そうなんですか？ 知りませんでした。転校してきてから結構経ってるから、てつきりどこかの部に所属してるものと思ってました。つばさん、演劇部とか映画研究部とかから誘われてるんじゃないですか？」

両部ともヒロイン問題で苦勞しているらしく、美少女と評判になった新入生は軒並み勧誘されたそうだ。わたしもしつくく誘われた女生徒の一人である。

つばさんは小さく苦笑して勧誘を認めた。

「そうね。そういう話もあるけれど、実は、美術部に入らないかと誘われているのよ」

え？ 美術部に？

そんなの初耳である。

いったい誰がそんな迷惑行為を……。

「誰にですか？」

「美術部部長の中嶋君よ。部長として、部員の減少を憂慮しているみたいね」

あの軽薄男、わたしや真悟君に相談もせず余計なまねをして！

「でも、昨日、和久井さんに相談してみたら、強く反対されたわ。私が入部すると、部員の結束が弱まってしまうそうよ。貴女の気持ちを一番に考えての言葉でしょうね」

さすが怖いものなしの大親友だ。言にくいことをズバズバと口にしてしまう欠点が見事に発揮されている。しかし、わたしが傷つかないように憎まれ役を買って出てくれたのだろうから、ここは大感謝しておこう。

「それで、当事者である貴女の意見を聞きたいの。私が入部して迷惑ではないかどうか」

断然に迷惑である。わたしと真悟君の關係に一滴でも水を差すような横槍は入れないで欲しい。

でも、つばさんの部決めに口出しする権利などわたしにはない。「迷惑だなんて思いませんよ……」

紡ぎ出された言葉は、内心の思いとは真逆のものだった。

恋敵が相手でも強く出られない。きっぱりとはねつけられない。そういう性格なのだから仕方がない。

つばさんは慈悲深い眼差しでじーっと見つめてきた。

「本当にいいの？ 私は常に真悟君と同じ場所にいたいし、同じことをしていたい。喋ってもらえなくても、顔を見ているだけで十分

に幸せを感じられる。たとえ貴女が一緒でもね。だから、私は遠慮なんてしないわ。それでもいいのかしら？」

「……………」

いいわけがなかった。

「真悟君は何て言ってるんですか？」

「彼に意見を求める意味はないわよ。貴女の意見を尊重する、と言うに決まっているもの。だから、私も貴女の意見を重んじるわ」

「わたし、真悟君のことが好きだから……………」

「それが答えなのかしら？　好きだから、私には真悟君に近づいて欲しくない？」

「それもあるけど…………、つばささんとも仲良くしたいですから…………」
本心である。

つばささんは、くすくすと控え目な笑いを零した。

「貴女は博愛主義者なの？」

「わかりません……………」

「そう」

会話が途切れた。

わたしは静かに食事を続ける。

サラダ、スープ共に美味しい。我ながら上出来だ。

「今日は、これから何か予定が入っているのかしら？」

唐突に訊かれた。

わたしは首を左右に振った。

「予定なんて何もないですよ。でも、それがいい……………」

「何もないなら、私のお買い物に付き合ってくれないかしら。私たちが真悟君抜きでお出かけするなんて、何だか可笑しいでしょう？

きつと楽しめると思うわ」

恋敵と馴れ合い？

楽しいわけがない。

「嫌なのかしら？」

挑発的な物言い……と感じた。

カチンと来た。

だから、拒絶しなかった。

「いいえ、望むところですよ！」

わたしは威勢良く応じて、睡眠薬の入っていないスープの最後の一口を啜った。

不意に思った。

どうして真悟君は料理に毒物が混入されていることを推察していたのに、スープとサラダを食べてはいけない、と全員に警告しなかったのだろうか？

まさか、わざと……。

いや、そんなわけではない。

下らない疑惑を打ち捨てて、わたしは手を合わせて「ごちそうさま」をした。

【2・中嶋剛志】

八月二日、土曜日。

午後二時半くらい。

俺はだらだらと河川敷を歩いている。

右手には、食いかけのアイスバー。

左手には、汗ばんだ右手。

左隣には、五十嵐由利。

俺たちは肩を並べて歩いている。

「あーあ、あぢいよなあ……」

夏空でぎらぎらと輝く太陽を見上げてぼやく。

どう考えても悪意の塊だ。人間を干涸らびさせようと、日毎に暑さを増していると思えねえ。マジで温暖化現象とやらが深刻化してきてんのか？　じゃなけりや、こんな狂った暑さにやらねえぞ。あと三日もすりや、不快指数が五百パーセントをオーバーして、我慢の限界もぶち破っちまう。五十嵐が一緒じゃなけりや、最寄りの喫茶店で涼んでるとこだ。

俺と五十嵐由利の関係は、いわゆる恋人同士……ではない。悲しいかな、仲良しこよしの友達の関係だ。手を繋いでお散歩する程度の間柄。お子ちゃまのお飯事よりも低レベル。セックスどころか、手以外の体に触れたことさえない。

本山純太と緒方みやびの葬式に出席させられたり、毎日デート（気晴らしの買い物）に付き合わされたり、こうしてクソ暑い中を無意味に歩かされたり……。そんなこんなで、事件後の俺に自由な時間は殆どなかった。俺の夏休み有効活用計画は大崩壊だ。このままじゃ、原付の購入日が来年にズレ込んでしまうぞ。

その代わりと言っちゃなんだがキスの一つもさせてくれ、と我が儘女に訴えたいが、そんな度胸はねえ。嫌われるのは勘弁である。

それに、こういう曖昧な関係も案外悪くねえな、と思い始めている今日この頃。少なくとも、超お嬢様の恋人気分を味わうことはできる。

「剛志君、アイス、一口頂戴」

この女、昨日から俺のことを名前で呼ぶようになった。理由はわからねえ。

嫌じゃないけど、ちよつと尻がむず痒い。

「おまえはすんげー金持ちなんだから、自分の分は自分で買えよな」俺はこの女を《おまえ》呼ばわりする。山荘にいる時は許されなかった呼称だが、今は咎められない。それだけ好意を寄せられているってわけだ。

「一口だけ欲しいのよ!」

「しょーがねえなあ……」

五十円のアイスバーを口許に差し出すと、五十嵐は俺の歯形がついている部分を躊躇せずに嚙った。

山荘での飲み会の際にも思ったが、この女はジュースの回し飲みとか他人の食べかけを摘むとかが平気な人間のようなうだ。お嬢様のくせに潔癖性じゃないなんて意外である。まあ、それは俺の偏見だが。

俺はちよつとだけ事件の話題を持ち出した。

「設楽のやつ、警察の尋問に完全黙秘してて、犯行動機すら話さねえらしいな」

「どうでもいいわよ、そんなの。犯行動機がわかってても、設楽さんが反省しても、死んでしまった人は生き返らないもの」

「そうだよな」

それで事件に関しての話は終了。

逮捕後、設楽松美は言葉を忘却してしまったらしく、今現在もだんまりを継続中らしい。

世間的には、もう《ホテル美岳》で起こった連続殺人事件は遠い

過去の出来事になり、ワイドショーや週刊誌でも殆ど扱われなくなつた。

俺たちも好き好んで話題には出さないだろう。

「私、今日はお財布を持ってきてないから、そのつもりでいなさい」
突然の警告。

冗談を真顔でほざくのは厳禁だし、寝言を歩きながら言うのも厳罰の対象だ。

何より、度を越した金持ちが貧乏人の小せがれにたかつてどうすんだよ……。

「マジで？」

「本当よ。今日は手ぶら。昨日見せたお気に入りのバッグを持ってきていないでしょ？」

五十嵐は何も持っていない左手を見せて、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「帰りのタクシー代も持っていないわ」

「全部、俺が払うのか？」

「君、お金持ってきてないの？」

「あと二千円くらいかな……」

「ちよつと！ 女の子とのデートで千円札しか持ってないなんてどういうつもりなの？ 夜のお食事代とかホテル代とか私に払わせるつもりだったの？ 冗談じゃないわよ！」

「ホテル代って……おいおい。これって恋人ちつくなデートなのか？ っていうか、俺たちって恋人な関係なのか？」

つい訊いてしまった。

物凄く怖い顔で睨まれた。

「……ふざけてるの？」

「ふざけてねえよ」

「なら、君、どういうつもりで私とお付き合いしてるの？ ことの成り行きで仕方なくなの？ それとも、みやびのことで同情してる

の？ まさかとは思うけど、嫌々なんてことはないでしょうね？」

「そりゃまあ、同情してるさ。緒方さんの無惨な姿は一生忘れらんねえだろうからな。でも、同情心だけじゃねえぞ。それに、仕方なく女と付き合うほど俺はモテモテじゃねえ。おまえみてえな大富豪のお嬢様とお手手繫いでランランランなんて、夢の延長かと思うくらいさ。マジで嫌だったら、居留守を使つてるところだぞ」

「お金が目当てだったりする？」

「そんなわけねえ。そんな下司な野郎は、すぐに下心を見透かされて捨てられるのが落ちだろ。俺は馬鹿だけど下司野郎じゃねえよ」
「そうよね。君、なけなしのお金をはたいてお昼ご飯をご馳走してくれるような見栄っ張りなものね。ちよつと馬鹿かな、とか心の中で笑っちゃったわ」

この女、わかつてて《上てんぶら定食》を注文しやがったのか。しかも、半分くらい残しやがって……。小悪魔じゃなくて悪女だ。ちつとは貧乏人の懷事情に配慮してくれ。

五十嵐はとんでもない金持ちの家の娘である。父親が《姫城グループ》の関連企業で重役をしているそうだ。だから、馬鹿でかい家で暮らしてるし、庭に馬鹿でかいプールが備わってるし、幾つかの別荘も持っている。それはもう絵に描いたようなお嬢様と言つていい。貧乏人の小せがれでしかない俺から見りや羨ましい限りだが、緒方みやびは更に数ランク上の金持ちだったらしい。なにせ、彼女の葬式に、あの姫城一族の本家当主が参列していたのだから……。

「そんなんじゃ、純太君のお墓参りに行けないじゃない……」

お嬢様の勝手な呟き。

俺の心には意味不明の罪悪感。

「悪かったよ……。次からは親の財布から万札をありったけぶん盗ってくる」

「もういいわ……。君にそんなことさせられないもの。お金は私が払うわよ」

「ほんとに金、持ってきてるのか？」

「手ぶらだつて言つたでしょ!」

目がちよつと怒っている。

だけど、そういうキツイ表情が似合う女だ。

「じゃあ、どうすんだ?」

「今すぐ銀行に行くのよ。そして、どこかでお茶を飲みながら少し涼んで、それからお墓参りに行くの。いいわね?」

「承知しました、お嬢様」

「さあ、行くわよ。ついて来なさい!」

「ラジャっ!」

美架ばりの戯けっぷりで敬礼して見せると、五十嵐はぷつと吹き出し、しかし目を潤ませて俺の頬をひっぱたいた。

ぺちつと小気味良い音が鳴り、軽い衝撃を感じた。

ビンタもどきだ。痛みは全然ない。

「なんだよ、酷えな。痛えじゃんかよ」

「君がいけないのよ」

「なんでだよ。ちよつとふざけたただけだろ」

「みやびみたいなことするから……」

「ああ……そっか、悪い……」

俺は来須美架の真似をしたつもりだったが、そう言えば同じベクトル上に緒方みやびもいたっけな。忘れてた。美架が強烈なキャラの持ち主だっただけに、俺にとって緒方は印象の薄い女だったのだ。でっかくミスっちまったな。

「これからは気を付けるよ」

詫びつつ歩みを促すと、五十嵐は慌てた風に腕を組んできた。

「違うの。それでいいのよ。みやびと似てるから、私はこうして君と歩いてるんだもの」

「おふざけオツケーか?」

「じゃんじゃんふざけちゃって」

「ラジャっ!」

俺が敬礼すると、五十嵐は笑顔を作って返礼した。

懸命に悲しみを乗り越えようとしてるのだろう。その心の支えとして俺は役者不足かもしれないけど、手助けするくらいならできると思っから、選ばれたからには俺らしいやり方で彼女を楽しませるだけだ。

「さあ、行きましょ」

「ホテルに？」

「今すぐ？ 昼間からしたいの？ まあ、私は構わないわよ」

「え、マジで？」

「白岐学園に近いホテルは駄目だけど、郊外なら生徒指導の先生に見つかる心配ないから、ちよつと遠出ね」

「ホテルでカラオケする、とかいうオチはなしにしてくれよ」

「セックスしたいんでしょ？ わかってるわよ。私も結構乗り気よ。現実逃避にはもってこいだもの」

なんか、すんげえ積極的な女である。それに、綺麗な顔したお嬢様の口からセックスっていう言葉が飛び出すのは、何とも変な感じだ。それで幻滅するような俺じゃねえが。

「おいおい、昼間っからってのはマズインじゃねえのか？ 墓参りに行くわけだし」

「あら、剛志君たら、自分で言い出したくせに怖じ気づいちゃったの？」

「純情な高校一年生をからかうなよ」

「純情なの？」

「俺は口先ばっかで、実際に女と付き合ったことなんてねえもんよ」
「嘘よ。信じられないわ……」

疑惑の目で睨まれた。

俺の吐き出す言葉に説得力はゼロ。悲しいけれど知人全員の共通認識らしい。五十嵐も大多数に漏れず信用してくれないみたいだ。まあ、それが俺の性だから仕方ねえか……。

しかし、一転して五十嵐は大笑い。

「あはは、正直者は馬鹿にされちゃうわよ。それが女の子相手じゃ

尚更ね」

胃の辺りを押さえての大爆笑。

「それじゃ、君、童貞君なの？」

「だったら悪いかな？」

「悪いわけないわよ。まだ十五歳だものね」

「そう言うおまえはどうなんだ？」

「残念ながら」

「……………」

「がっかりした？」

「…………いや、いい女つてのは、高校生にもなりや一回は誰かと付き合ってるもんだろ。俺は女に幻想をいだいてねえんだ。おまえが過去に誰と何をしてようと文句は言わねえよ」

「割り切ってるのね」

「現実を知ってるんだよ」

「現実を知るのはいいことだわ」

一頻り俺をからかっておいて、五十嵐は少女っぽくない淫靡な笑みを浮かべた。

「お墓参りは明日に延期ね」

うひょー、とのぼせ上がる俺。

経験値の低い男って単純だよな。

死んだ奴らには申し訳ねえけど、まずは生きてる俺たちが楽しみなきや。

「んじゃ、参りますか、お嬢様」

「喜んで」

この先どうなるかはわかんねえけど、俺らの未来に幸あれ。
そう願って一歩ずつ二人三脚していくしかねえよ。

終章 遺志を継ぐ者

八月五日、火曜日。

兄の亡骸と共に愛知の実家へと戻ってはや二週間。葬式と通夜には参加したが、それ以外の行事を欠席して、私は自室に閉じこもっている。

兄の死後、世界はセピア色に褪せてしまった。

もはや私の喜びは過去の思い出に浸りながら設楽松美という殺人犯を憎悪することだけであり、現世に愉悦の要素を見出すことはできなかった。

当然、余生を楽しむ予定もない。

自室の隅で蹲り、なんら関心のないテレビ番組の映像を網膜に映して脳味噌に微弱な刺激を与えつつ、部屋に運ばれてくる食事を無意識に摂り、我知らずトイレと風呂を使い、身体の欲するままに眠る、という現代人らしくない生活をしている。

両親は心配してくれているようだが、同時に諦めているようでもある。それだけ私にとって兄は必要不可欠な存在だったのだ、と理解しているのだろう。

世間の関心は既にホテル美岳で起こった連続殺人事件からサッカーのワールドカップへと移り、ニュース番組で事件の情報が報じられることもなくなった。

時折、私の部屋を訪れて慰めと励ましの言葉を掛けてくれる両親や兄の友人、大して仲良くないクラスメイトたち、愛知県警の面々、カウンセラーの女医……。その誰も彼もが迷惑千万である。彼らは口々に、過去の思い出に囚われるのを止める、死んだ人間に固執するな、これから楽しい出来事がたくさん待っているのだから一度の悲嘆で人生を捨てるようなまねは止める、偏屈なガキみたいに現実

逃避するな、おまえ以外にも家族を失って悲しんでいる人間は世界に五万といふんだぞ、兄の死をプラスに考えなさい、という責め句を耳障りの良い柔らかなニュアンスで大合唱する。彼らの認識では、悪いのは殺人犯ではなく、犯罪被害者の私らしい。残りの数十年という人生を少しでも楽しむ為には兄の死を悲しんではいけない、と忠告しているのかもしれない。もし、それが正解であるなら、私は生き続けたくない。

どうして私はあの山荘から生還してしまったのだろう。なぜ生き延びようと抵抗したのだろう。こんな思いをするくらいなら死んでいた方が楽だったに違いないのだ。

私は、兄を殺害した設楽松美よりも、私自身を恨む。選択肢を選び損ねた自分を呪う。そうまで生に執着する意味などどこにも見当たらないのに……。

警察関係者の知り合いから伝え聞いた話だが、設楽松美はまだまだ黙秘を貫いているらしい。しかし、彼女が殺人を犯した動機は解明されつつあるそうだ。なぜならば、江藤小枝子の遺体が、某樹海にて発見されたからである。

司法解剖の結果、彼女の死因は首吊りによる自殺と判明。

死後数ヶ月が経過しており、しかも妊娠八ヶ月目だったらしい。

ゆえに警察は、昨年のイベントでの強姦を苦にして自殺したのではなく、妊娠を苦にしての自殺と見ているそうだ。

彼女の両手首には幾筋もの惑い傷が刻まれていたというから、妊娠を自覚した時に家族や知人に打ち明けられず、一人で産婦人科を訪れる勇気もなく、転校してしまったので頼れる友人もおらず、何の対処もできず、何の処置も施せないままに墮胎不可能な段階まで胎児を育んでしまったのだ、と想像できる。

それを設楽がどのような形で知り、なぜ復讐の代理役を請け負うことになったのかは想像しなくておく。それは、本人の口から聞く以外に知る術はないのだ。

しかし、どのような理由があれども彼女の犯行が正当化されるわ

けもない。最終的に、本山純太に罪をなすりつけようとした姑息さ、卑劣さ、陰険さは極刑に値するだろう。

そして、江藤の子宮内で短い生涯を終えた胎児の父親だが……。梅本か上妻のどちらかであるのは間違いないが、それはDNA鑑定の結果を待たないと判明しないし、どうせ胎児の父親が特定されたところで誰も喜ばないに違いない。

コンコン。

不意にドアがノックされた。

「美架ちゃん、お電話ですよーっ」

この保母さんみたいな声音を用いる女は母だ。

私が馬鹿女を演じるにあたって参考にした人物である。

「美架ちゃん、聞こえてますかあ？」

男に媚びるような口調は止めて欲しい。

山荘で何もできなかった自分の無能を再度、思い出してしまっただ。

「今出ていく」

私は短く答え、廊下に出た。

狭い廊下には、急に老け込んだ母が両手を揉み絞り、心配そうな面持ちで立っていた。

「美架ちゃん、お部屋に閉じこもるのは止めて頂戴な。お母さん、心配で心配で……」

それを無視して玄関へ向かい、保留中の受話器を取り、耳に当てた。

「もしもし、美架です」

「こんにちは、美架ちゃん」

その声の主は……。

「和泉！」

「元気かな？」

「元気であるわけがない！」

「そうだろうね。言葉の選択を誤ったようだ。それでは言い直そう。キミは、今現在も傷心中なのかな？」

「……切るぞ！」

「構わないよ。しかし、一つだけ質問に答えて欲しい」

「質問？ 何だ、言ってみろ！」

「美架ちゃん、そんな乱暴な言い方は相手の人に失礼ですよ」

背後から母に言葉遣いの悪さを咎められたが、無視した。

「キミは、お兄さんの遺志を継いでボクの関わった過去の事件を再調査する意思はあるのかな？」

「！」

その質問の意味を理解した瞬間、脳味噌のどこかで何かのスイッチが入った。

それと同時に、手足の毛細血管に多量の血液が流れ込み、無彩色の世界が急激に色付き始めた。

「言われるまでもない！」

「それならば、塞ぎ込んでいる暇はないね」

「……………」

その台詞の意図は何だ？

「……どういふつもりだ？ 私を励ましているのか？」

「それ以外の意味はないよ」

「……理由がわからない」

「自殺でもされたら面白くない。キミを助けた意味がなくなってしまう。そうではないかな？」

「私は自殺などしない！」

「それならば、ボクに切り刻まれる為に元気を出して欲しい。そして、いつか、お互いの存在を賭けて《勝負》をしよう」

「望むところだ！」

「良い返事だ。しかし、まだ硬いな。キミは、かつての戯け調子を取り戻すべきだよ。それがキミらしさであり、キミの強さなのだからね」

「ほざけ！ 絶対に十三階段を上らせてやるから、首を洗って待つてろ！」

「ああ。再会の日を心待ちにしているよ」
通話が切られた。

受話器を戻す。

そして、高ぶる気持ちを抑えるように大きく数回深呼吸をした。

「美架ちゃん、相手の男の人、だあれ？ 何のお話をしていたの？」
母の問いを無視して玄関の天井を見上げる。

そうだ。

そうだった。

たった一つだけ私には生き続ける理由があつた……。

兄の遺志を継いで、和泉真悟が解決してきたあらゆる事件の真の真相を暴き立て、彼の正体を白日の下に晒し、兄の墓前で完全敗北宣言をさせた上で十三階段を上らせるのだ。

私は背後で心配そうに見守っている母を振り返り、意図的に笑顔を作ってみせた。

「お母さん、お願いがあるんだよっ」

私は以前の戯け口調を用いた。

母は吃驚眼で硬直したけど、すぐに満面の笑顔で応えた。

「何かな、美架ちゃん？ 遠慮しないで言ってごらんなさいな。お母さん、どんなことだって叶えてあげちゃうわよ」

「じゃあ、遠慮なく言っちゃうけど、来年の三月に中学校を卒業したら、東京に行ってもいいかな？ 私、どうしても東京の高校に行きたいんだよっ！」

母の体に抱きつき、胸に顔を埋めるようにしてお願いした。

「……………」

刹那の沈黙。

そして、破顔。

「いいわよ。でも、最終的に決定するのは、お父さんと相談してからだからね。いい？」

「うんっ！ お母さん大好きっ！」

「はいはい。ようやくいつもの元気な美架ちゃんに戻ってくれたわね。お母さん嬉しいわ。それじゃあ、ご飯を食べちゃいなさいな。もう何日も食べてないでしょ？」

「はいっ！」

私は万歳して元気一杯に叫んだ。

母とハイタッチ。

世界の半分が喪失し、片翼をもがれ、ポジティブな未来を絶望し、将来の選択肢を強制的に選定されても、なすべき目標が定まれば現実から逃避する意味はない。擬態する動機が生まれれば、どのような感情であろうと制御して、無邪気な笑顔を装ってみせる。

和泉真悟は生命を賭けての《勝負》を希望して私を助けた。

その恩に報いるべく、私は負の感情を葬り去り、今日からひたすら受験勉強に専念し、あの殺人鬼と同じ高校に入学し、周囲の人間と親しくし、油断させておいて情報収集に励み、いつか必ず《勝負》を挑んで完全勝利をし、兄の待つ所へと送ってやろう。

生命の恩は仇で返す。

それが私なりの礼だ。

それが私の生きる糧だ。

それだけが……。

《END》

終章 遺志を継ぐ者（後書き）

以上をもって本作は完結です。でも、これは全七話中の二話目なので、物語が完結してしまっただけではありません。第七話の最終章までお付き合いいただけると幸いです。

引き続き、第三話『首吊りサントの遺言』を読んで、尚且つ楽しんでいただけたら無上の喜びです。
それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7149g/>

来須兄妹の自虐推理

2010年10月8日13時46分発行